

みずたれ
水垂遺跡 長岡京左京六・七条三坊

京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 17 冊

1998

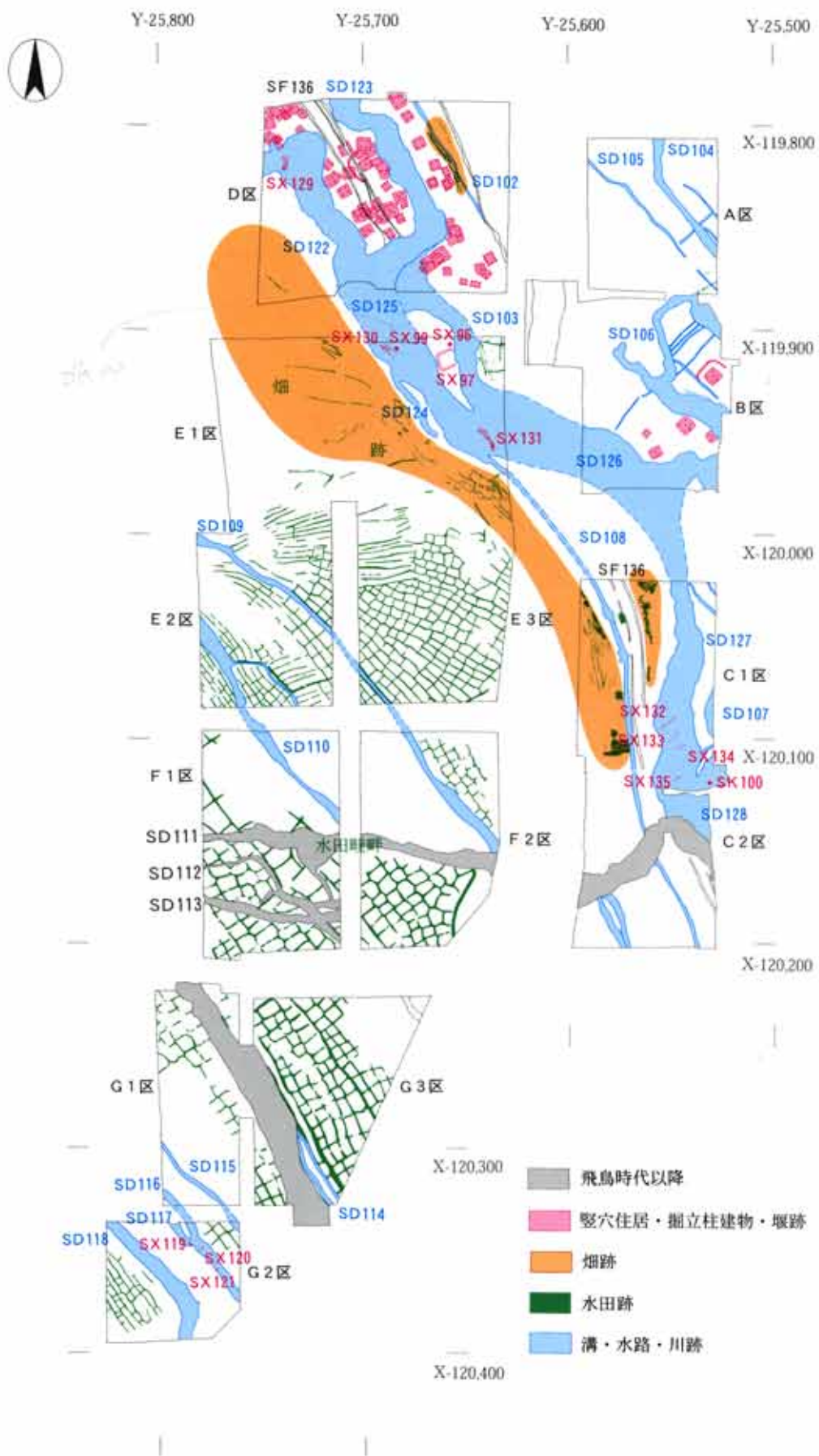
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



一括遺物



祭祀遺物



遺構配置図



遺構配置図

序

平成元年、京都市清掃局は市内伏見区淀水垂町に所在するゴミ処分地の拡張を計画し、北に隣接する樋爪町にまたがる地に建設することになりました。同地は長岡京左京六・七条三坊の地に該当しますので、京都市埋蔵文化財調査センターの指導にもとづき、市清掃局は予定地の発掘調査を実施することになり、財団法人京都市埋蔵文化財研究所に調査を依頼されました。

当研究所は市清掃局と依頼契約を結び、平成2年4月に試掘調査に着手し、同年7月から本調査を開始しました。そしてその後5年4箇月に及ぶ長期の間調査を継続し、平成7年11月末に終了することができました。

調査地は、市内伏見区の西南部に位置しています。すなわち、伏見区淀水垂町の西北部とその北に隣接する樋爪町の西部にまたがる13haの広い面積を占めています。西は長岡京市域に境し、東は西南方向に流れる桂川に近く所在していて、川向かいには横大路、納所の町になります。各年度の調査概要につきましては既に当研究所が毎年刊行しています年報『調査概要』に収録・報告していますが、それらとは別に調査の全期間を通しての経過と成果の全容を明らかにすることを目的に本調査報告書を刊行することに致しました。本書の構成は、本文が5章からなり調査を担当した調査員がそれぞれ分担協力して執筆しており、図版では写真、実測図を多数収録し遺跡の全貌を紹介しています。

発掘調査は、A～Hの各調査区を設定して実施しました。古墳時代の遺構は、3世紀後半から4世紀初頭の古墳時代初期から始まり、7世紀初頭の同時代の終末まで継続します。それを7期に区分して集落の変遷を跡付けています。そこには87棟の竪穴住居・掘立柱建物、墓、そして水田を検証し、多数の土器や木製品も出土しました。続いて長岡京期には掘立柱建物や土器類が出土しており、そして平安時代とその後の中・近世までの各時代の変化の様相を明らかにしています。

年度を重ねる長期間の調査でありましたが、幸い無事に終えることができました。この間、遺跡の所在する水垂・樋爪の両町の市民の方々には多大のご迷惑をおかけしましたが、他面では種々のご協力を賜りました。ここにあらためて厚くお礼申し上げます。

また、文末になりましたが、調査の間、そして本報告書の執筆作成に際しまして、ご指導、ご協力を賜りました多くの関係各位に深く感謝、ならびにお礼申し上げます。

平成10年1月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所長 川上 貢

例 言

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が長岡京跡・水垂遺跡において平成2年(1990)から平成7年(1995)にかけて実施した発掘調査の報告書である。
- 2 図中の方位・座標値は、平面直角座標系VIによる。ただし、単位(m)を省略している。標高はT.P.(東京湾平均海面高度)による。座標および標高は、京都市遺跡測量基準点を使用した。
- 3 本書で使用した地図は、京都市建設土木局発行の地形図(1:2,500)「羽束師」・「淀」、国土地理院発行の地形図(1:25,000)「京都南西部」・「淀」を調整して使用した。
- 4 本文中の遺構表示記号は、奈良国立文化財研究所の用例を一部調整して使用した。
SA: 柵、SB: 掘立柱建物、SD: 溝・河川、SE: 井戸、SF: 道路、SG: 池、SH: 竪穴柱居、SK: 土壙、SL: 水田畦畔、SX: 墓・堰・橋・木樋
- 5 遺構番号は、縄文・弥生・古墳時代は1～150、長岡京期とそれ以降の遺構は201～297の番号を付した。
- 6 遺物番号は、図版の土器、木器、石器、その他の遺物、挿図の順に付した。
- 7 本書で使用した層名は、農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』に準じた。

目 次

第1章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	1
3 報告書作成の経緯	5
第2章 位置と環境	
1 地理的環境	7
2 歴史的環境	7
3 既往の調査	11
第3章 遺 跡	
1 遺跡の層序と概要	16
2 縄文・弥生時代の遺構	17
3 古墳時代の遺構	19
4 長岡京期の遺構	36
5 平安時代の遺構	48
6 鎌倉・室町時代の遺構	51
第4章 遺 物	
1 遺物の概要	52
2 縄文・弥生時代の遺物	53
3 古墳時代の遺物	54
4 長岡京期の遺物	76
5 平安・鎌倉時代の遺物	89
第5章 まとめ	
1 縄文・弥生時代	95
2 古墳時代	95
3 長岡京期	100
4 平安時代以降	112

付 章 自然科学分析	115
附表 古墳時代遺物観察表	121
英文要旨	141

図 版 目 次

卷首図版 1	遺物（古墳時代） 一括遺物
卷首図版 2	遺物（長岡京期） 祭祀遺物
卷首図版 3	遺跡（古墳時代） 遺構配置図
卷首図版 4	遺跡（長岡京期） 遺構配置図
図版 1	遺跡（古墳時代） D区遺構平面図 1
図版 2	遺跡（古墳時代） D区遺構平面図 2
図版 3	遺跡（古墳時代） D区遺構平面図 3
図版 4	遺跡（古墳時代） D区遺構平面図 4
図版 5	遺跡（古墳時代） B区遺構平面図
図版 6	遺跡（古墳時代） E・F区遺構平面図
図版 7	遺跡（古墳時代） G区遺構平面図
図版 8	遺跡（古墳時代） SH24・9 実測図
図版 9	遺跡（古墳時代） SH8・20・15・19・12・27 実測図
図版 10	遺跡（古墳時代） SH26・28・29・36・34・35 実測図
図版 11	遺跡（古墳時代） SH40・60・58・49・39・43・61 実測図
図版 12	遺跡（古墳時代） SH71・72・74・76・79・78 実測図
図版 13	遺跡（古墳時代） SB13・83・89・75・84・92 実測図
図版 14	遺跡（古墳時代） 1 SX97 実測図 2 SK100 実測図 3 SX96 実測図
図版 15	遺跡（長岡京期） 1 左京六条三坊五町遺構平面図 2 東三坊坊間西小路と六条条間南小路の交差点遺構平面図
図版 16	遺跡（長岡京期） 1 左京六条三坊三町遺構平面図 2 左京六条三坊四町北西部遺構平面図
図版 17	遺跡（長岡京期） 左京六条三坊四町南西部遺構平面図
図版 18	遺跡（長岡京期） 左京七条三坊一町遺構平面図
図版 19	遺跡（長岡京期） 東二坊大路と七条条間小路の交差点遺構平面図
図版 20	遺跡（長岡京期） SB226・224 実測図

- 図版 21 遺跡（長岡京期） SB230・237 実測図
- 図版 22 遺跡（長岡京期） SB241・242・244・245 実測図
- 図版 23 遺跡（長岡京期） SX286、SE260・265・268・259・263・266 実測図
- 図版 24 遺跡（長岡京期） SK283・282、SX279・278・280、SK271、SX276・277 実測図
- 図版 25 遺跡（鎌倉時代） SG294、SX295・296、SD297 実測図
- 図版 26 遺跡（鎌倉時代） SX296 実測図
- 図版 27 遺物（弥生時代） 弥生土器実測図
- 図版 28 遺物（弥生時代） 石器実測図
- 図版 29 遺物（古墳時代） SH11・14・17・18、SB13 出土土器実測図
- 図版 30 遺物（古墳時代） SH12・15・20～24・26・27・29 出土土器実測図
- 図版 31 遺物（古墳時代） SH33～37・39・45・49～51・56 出土土器実測図
- 図版 32 遺物（古墳時代） SH71～74 出土土器実測図
- 図版 33 遺物（古墳時代） SH76・78～80・82、SE95 出土土器実測図
- 図版 34 遺物（古墳時代） SD98 出土土器実測図 1
- 図版 35 遺物（古墳時代） SD98 出土土器実測図 2
- 図版 36 遺物（古墳時代） SD98 出土土器実測図 3
- 図版 37 遺物（古墳時代） SD98 出土土器実測図 4
- 図版 38 遺物（古墳時代） SD98 出土土器実測図 5
- 図版 39 遺物（古墳時代） SD98 出土土器・土製品実測図 6
- 図版 40 遺物（古墳時代） SD101 出土土器実測図 1
- 図版 41 遺物（古墳時代） SD101 出土土器実測図 2
- 図版 42 遺物（古墳時代） SD122 出土土器実測図 1
- 図版 43 遺物（古墳時代） SD122 出土土器実測図 2
- 図版 44 遺物（古墳時代） SD122 出土土器実測図 3
- 図版 45 遺物（古墳時代） SD102・122・123 出土土器実測図
- 図版 46 遺物（古墳時代） SD123 出土土器・土製品実測図 1
- 図版 47 遺物（古墳時代） SD123 出土土器実測図 2
- 図版 48 遺物（古墳時代） SD124・125、SK99 出土土器実測図
- 図版 49 遺物（古墳時代） SD103・108・111・116・117、SX96、水田上面砂層出土土器実測図
- 図版 50 遺物（古墳時代） SD127・128、SK100 出土土器実測図
- 図版 51 遺物（古墳時代） 木器（容器）実測図
- 図版 52 遺物（古墳時代） 木器（農具）実測図 1
- 図版 53 遺物（古墳時代） 木器（農具）実測図 2
- 図版 54 遺物（古墳時代） 木器（紡織具、服飾具、馬具、漁撈具）実測図
- 図版 55 遺物（古墳時代） 木器（工具、雑具、用途不明）実測図

- 図版 56 遺物（古墳時代） 木器（建築部材）実測図
- 図版 57 遺物（古墳時代） 木器（雑具、用途不明）実測図
- 図版 58 遺物（古墳時代） 金属器・石器・土製品実測図
- 図版 59 遺物（古墳時代） 石器（砥石）実測図
- 図版 60 遺物（長岡京期） SD285 出土土器実測図 1
- 図版 61 遺物（長岡京期） SD285 出土土器実測図 2
- 図版 62 遺物（長岡京期） SX279、その他の遺構出土土器実測図
- 図版 63 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器実測図 1
- 図版 64 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器実測図 2
- 図版 65 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器実測図 3
- 図版 66 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器実測図 4
- 図版 67 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器実測図 5
- 図版 68 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器・祭祀具実測図
- 図版 69 遺物（長岡京期） 墨書土器・線刻土器実測図
- 図版 70 遺物（長岡京期） 木器（祭祀具）実測図
- 図版 71 遺物（長岡京期） 木器（容器、漁撈具、紡織具、雑具、用途不明）実測図
- 図版 72 遺物（長岡京期） 木器（服飾具、容器、雑具、用途不明）実測図
- 図版 73 遺物（長岡京期） 木器（容器）実測図
- 図版 74 遺物（長岡京期・平安時代） 錢貨拓影
- 図版 75 遺物（平安時代・鎌倉時代） 土器・瓦実測図、拓影
- 図版 76 遺跡 長岡京城航空写真
- 図版 77 遺跡（古墳時代） 全景
- 図版 78 遺跡（古墳時代） 1 D区全景（南東から）
2 E区全景（東から）
- 図版 79 遺跡（古墳時代） 1 B区全景（南から）
2 F区全景（南西から）
- 図版 80 遺跡（古墳時代） 1 C区全景（北から）
2 G区全景（西から）
- 図版 81 遺跡（古墳時代） 1 D区中央台地・建物群（北から）
2 D区北西部・建物群（南東から）
- 図版 82 遺跡（古墳時代） 1 SH19（北東から）
2 SH24（北西から）
- 図版 83 遺跡（古墳時代） 1 SH15（南東から）
2 SH79（南から）
- 図版 84 遺跡（古墳時代） 1 SH8（北西から）

- 2 SH9 (南東から)
3 SH12 (北西から)
4 SH20 (北西から)
5 SH27 (南東から)
6 SH28・36 (北から)
7 SH29 (南東から)
8 SH26 (北から)
- 図版 85 遺跡 (古墳時代) 1 SH34 (南東から)
2 SH35 (南東から)
3 SH37 (南東から)
4 SH39 (北西から)
5 SH43 (北西から)
6 SH40 (北西から)
7 SH60 (南から)
8 SH61 (北西から)
- 図版 86 遺跡 (古墳時代) 1 SH49 (南東から)
2 SH58 (南から)
3 SH71 (西から)
4 SH74 (北西から)
5 SH76 (北西から)
6 SH78 (南から)
7 SH80 (北西から)
8 SH72 (南東から)
- 図版 87 遺跡 (古墳時代) 1 SB13 (南西から)
2 SB75 (北西から)
3 SB83 (南東から)
4 SB84 (北西から)
5 SB85 (南東から)
6 SB89 (北西から)
7 SB90 (北西から)
8 SB92 (東から)
- 図版 88 遺跡 (古墳時代) 1 SX96・97 (北東から)
2 SX96 (東から)
- 図版 89 遺跡 (古墳時代) 1 SD98 (東から)
2 SK100 (西から)

- 3 SE95 (北西から)
- 図版 90 遺跡 (古墳時代) 1 SX131 (北から)
2 SX131 基部 (南西から)
- 図版 91 遺跡 (古墳時代) 1 SX129 (北から)
2 SX130 (北から)
3 SX132 ~ 134 (北西から)
4 SX119・120 (北西から)
- 図版 92 遺跡 (古墳時代) 1 F2 区・SL150 (北東から)
2 E2 区・新旧水田畦畔 (西から)
3 F2 区・水田足跡 (西から)
4 E1 区・小穴群 (北から)
- 図版 93 遺跡 (長岡京期) 全景
- 図版 94 遺跡 (長岡京期) 1 E1 区全景 (北から)
2 E2 区全景 (北から)
- 図版 95 遺跡 (長岡京期) 1 F1 区全景 (南から)
2 G1 区全景 (北から)
- 図版 96 遺跡 (長岡京期) 1 SB216 ~ 218 (西から)
2 SB219・220 (北から)
- 図版 97 遺跡 (長岡京期) 1 東三坊坊間西小路と六条条間南小路の交差点 (北から)
2 左京六条三坊五町全景 (北から)
- 図版 98 遺跡 (長岡京期) 1 左京六条三坊四町全景 (西から)
2 左京六条三坊四町・建物群 1 (北から)
- 図版 99 遺跡 (長岡京期) 1 左京六条三坊四町・建物群 2 (北から)
2 左京六条三坊四町・建物群 3 (北から)
- 図版 100 遺跡 (長岡京期) 1 SB231・232 (西から)
2 SB226 (北から)
- 図版 101 遺跡 (長岡京期) 1 左京七条三坊一町・建物群 1 (東から)
2 左京七条三坊一町・建物群 2 (北から)
- 図版 102 遺跡 (長岡京期) 1 SX286 (南西から)
2 SX287 (北東から)
- 図版 103 遺跡 (長岡京期) 1 SD285 祭祀具出土状況 1 (南東から)
2 SD285 祭祀具出土状況 2 (北西から)
- 図版 104 遺跡 (長岡京期) 1 SE266 (北から)
2 SE266 断ち割り (北から)
3 SE263 (北から)

- 4 SE263 断ち割り (北から)
- 図版 105 遺跡 (長岡京期) 1 SE268 (東から)
2 SE261 (南から)
3 SE260 (東から)
4 SE265 (北から)
- 図版 106 遺跡 (長岡京期) 1 SX278 (北西から)
2 SX278 (上蓋をはずした状態) (北西から)
3 SX280 (北西から)
4 SX276 (北西から)
- 図版 107 遺跡 (長岡京期) 1 SX279 (北から)
2 SK282 (北西から)
3 SK283 (北から)
4 SK271 (西から)
- 図版 108 遺跡 (平安時代) 1 9 トレンチ・平安時代水田 (坪境) (東から)
2 5 トレンチ・SD290 (北から)
- 図版 109 遺跡 (鎌倉時代) 1 SG294 (北西から)
2 SX296 (東から)
- 図版 110 遺物 (縄文時代・弥生時代) 1 縄文土器
2 弥生土器
- 図版 111 遺物 (弥生時代) 弥生土器
- 図版 112 遺物 (古墳時代) SB13、SH14 出土土器
- 図版 113 遺物 (古墳時代) SH12・15・20 出土土器
- 図版 114 遺物 (古墳時代) SH11・17・18 出土土器
- 図版 115 遺物 (古墳時代) SH22～24・27 出土土器
- 図版 116 遺物 (古墳時代) SH35～37・45・56 出土土器
- 図版 117 遺物 (古墳時代) SH71・72・74 出土土器
- 図版 118 遺物 (古墳時代) SH76・78～80・82 出土土器
- 図版 119 遺物 (古墳時代) SD98 出土土器 1
- 図版 120 遺物 (古墳時代) SD98 出土土器 2
- 図版 121 遺物 (古墳時代) SD98 出土土器 3
- 図版 122 遺物 (古墳時代) SD98 出土土器 4
- 図版 123 遺物 (古墳時代) SD98 出土土器 5
- 図版 124 遺物 (古墳時代) SD98 出土土器 6
- 図版 125 遺物 (古墳時代) SD98 出土土器・土製品 7
- 図版 126 遺物 (古墳時代) SD101 出土土器 1

- 図版 127 遺物（古墳時代） SD101 出土土器 2
- 図版 128 遺物（古墳時代） SD101 出土土器 3
- 図版 129 遺物（古墳時代） SD122 出土土器 1
- 図版 130 遺物（古墳時代） SD122 出土土器 2
- 図版 131 遺物（古墳時代） SD122 出土土器 3
- 図版 132 遺物（古墳時代） SD122 出土土器 4
- 図版 133 遺物（古墳時代） SD123 出土土器
- 図版 134 遺物（古墳時代） SD123・125 出土土器
- 図版 135 遺物（古墳時代） SK99、SD124・125 出土土器
- 図版 136 遺物（古墳時代） SD103・108・111・116、水田上面砂層出土土器
- 図版 137 遺物（古墳時代） SD127・128 出土土器
- 図版 138 遺物（古墳時代） SD128、SK100 出土土器
- 図版 139 遺物（古墳時代） 木器（容器）
- 図版 140 遺物（古墳時代） 木器（農具）
- 図版 141 遺物（古墳時代） 木器（農具）
- 図版 142 遺物（古墳時代） 木器（紡織具、服飾具、漁撈具、馬具）
- 図版 143 遺物（古墳時代） 木器（工具、雑具、用途不明）
- 図版 144 遺物（古墳時代） 木器（建築部材）
- 図版 145 遺物（古墳時代） 木器（用途不明）
- 図版 146 遺物（長岡京期） SD285 出土土器 1
- 図版 147 遺物（長岡京期） SD285 出土土器 2
- 図版 148 遺物（長岡京期） SD285 出土土器 3
- 図版 149 遺物（長岡京期） SX279、その他の遺構出土土器
- 図版 150 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器 1
- 図版 151 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器 2
- 図版 152 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器 3
- 図版 153 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器 4
- 図版 154 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器 5
- 図版 155 遺物（長岡京期） SD285 出土人面土器・祭祀具
- 図版 156 遺物（長岡京期） 墨書土器、線刻土器
- 図版 157 遺物（長岡京期） 木器（祭祀具）
- 図版 158 遺物（長岡京期） 木器（木簡、工具、容器、紡織具、漁撈具、雑具）
- 図版 159 遺物（長岡京期） 木器（服飾具、容器、雑具）
- 図版 160 遺物（長岡京期） 木器（容器）
- 図版 161 遺物（長岡京期・平安時代） 銭貨

- 図版 162 遺物（平安時代・鎌倉時代） 土器
- 図版 163 遺物（弥生・古墳時代） 1 石器
2 石器・土製品
- 図版 164 遺物（古墳時代） 1 砥石 1
2 砥石 2
- 図版 165 遺物（古墳時代・長岡京期・鎌倉時代） 1 金属器・石器（古墳時代）
2 金属器・石器（長岡京期・鎌倉時代）

挿 図 目 次

図 1	試掘トレンチと遺跡推定範囲	2
図 2	調査区配置図	3
図 3	調査地と主要都城位置図	7
図 4	長岡京と主要遺跡位置図	9
図 5	周辺調査位置図	12
図 6	東西大路・小路の配置関係図	13
図 7	土層模式図（Y=-25,750 ライン）	16
図 8	縄文・弥生時代遺構平面図	18
図 9	SH79 カマド断面図	29
図 10	SD125 土層断面図（E1 区北壁断面）	33
図 11	SD285 土層断面図	47
図 12	SD285 祭祀具出土分布図	47
図 13	小溝群分布図	49
図 14	平安時代遺構平面図	50
図 15	縄文土器実測図	53
図 16	漆紙文書	84
図 17	木簡実測図	85
図 18	金属器・石器実測図（長岡京期）	89
図 19	木器実測図（平安時代）	92
図 20	丸木舟実測図	92
図 21	鉄鍬実測図	93
図 22	集落変遷図・1 期	96
図 23	集落変遷図・2 期	97
図 24	集落変遷図・3 期	97
図 25	集落変遷図・4 期	97

図 26	集落変遷図・5期	98
図 27	集落変遷図・6期	98
図 28	集落変遷図・7期	99
図 29	左京六条三坊三町遺構配置図	104
図 30	左京六条三坊四町遺構配置図	104
図 31	左京六条三坊四町南西宅地遺構変遷図	105
図 32	左京六条三坊五町遺構配置図	106
図 33	左京七条三坊一町遺構配置図	106
図 34	人面土器法量分布図	109
図 35	F区水田試料採集位置図	115
図 36	F1区南壁イネのプラント・オパール検出状況	115
図 37	E1区小穴群試料採集位置図	116
図 38	D区小穴群試料採集位置図	116
図 39	E1区小穴群花粉組成図	117
図 40	D区小溝群花粉組成図	118

表 目 次

表 1	調査面積一覧表	3
表 2	年度別調査地一覧表	4
表 3	長岡京期掘立柱建物一覧表	37
表 4	地区別出土遺物数	52
表 5	水垂遺跡出土土師器分類表	56
表 6	古墳時代遺構別木器出土表	71
表 7	SD285 出土土器一覧表	77
表 8	道路遺構座標値一覧表	101
表 9	東二坊大路座標値一覧表	102
表 10	左京六条三坊四町南西宅地遺構変遷表	105
表 11	人面土器一覧表	109
表 12	祭祀具一覧表	111
表 13	F区（古墳時代水田面）プラント・オパール分析結果	119
表 14	F1区（南壁）プラント・オパール分析結果	119
表 15	D区（長岡京廃絶直後）プラント・オパール分析結果	120
表 16	E1区（古墳時代）プラント・オパール分析結果	120

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

平成元年（1989）、京都市伏見区淀水垂町および淀樋爪町地内の水田地に京都市清掃局による水垂埋立処分地拡張工事が計画された。一帯は長岡京跡の左京六・七条三坊にあたることから、京都市埋蔵文化財調査センターは発掘調査を京都市清掃局に指導し、その敷地約13haを対象とした埋蔵文化財の発掘調査を財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

敷地はこれまで市内で実施した発掘調査の対象面積としては最大のもので、また近辺には調査例が少なく、どのような状況で遺跡が埋没しているか不明な部分があった。こうしたことから、京都市清掃局・京都市埋蔵文化財調査センター・当研究所の三者による協議を重ね、平成2年4月より試掘調査を実施すると共に、その結果を基に全体計画も並行して作成した。

さらに、大規模調査を実施するための進入路や付帯設備などを一から用意しなければならず、このための初年度工事計画地を対象とした発掘調査の準備に、試掘調査の内容をみながら着手した。こうして7月には、対象地南端部のG1区の掘削作業から発掘調査を開始した。

2 調査経過

試掘調査（図1） 調査地付近一帯は水田として利用され、条里地割が良好に残り109m毎に水路や農道で区画されている。調査対象地は南北約550m、東西約250mである。現地表面の標高は、北端で10.7m、南端で約10mである。この敷地にほぼ一定間隔に53箇所の試掘トレンチを設定し、遺構の重複関係や埋没深度を調査した。その結果、平安時代、長岡京期、古墳時代の遺跡の重複関係を明らかにした。また、平安時代では条里制水田跡がほぼ全域に広がること、長岡京期では条坊側溝を数箇所を確認できたが南東部分は湿地となること、古墳時代では敷地北西部に微高地とこれに伴う遺物包含層が分布し、さらに南半の低地には水田が存在することを確認した。各遺構面の埋没深度は、現地表面の高低差と同じように北から南へ低くなり、堆積土も厚くなることも判明した。

調査方針 試掘結果から、長岡京期および古墳時代の遺跡については発掘調査を全域で実施することを決めた。平安時代の条里制水田跡については現地表面にそのまま坪境が踏襲されているため、全面的な調査とはせず一部不明となっている坪境や交点を対象とした調査を実施した。この坪境や交点は本調査区の中に含まれる地点や現農道あるいは水路に重なる箇所が多い。このため、本調査に先行したものと、五間堀川に重なる部分などは迂回水路が完成した後に補足調査として実施したものがあ

調査区設定（図2） 調査対象地は南北に長く、中央南北には五間堀川が流れ、東西には農道2本が通っていた。この分断に合わせて調査区を設定し、北東隅をA区とし南西隅をG区とし

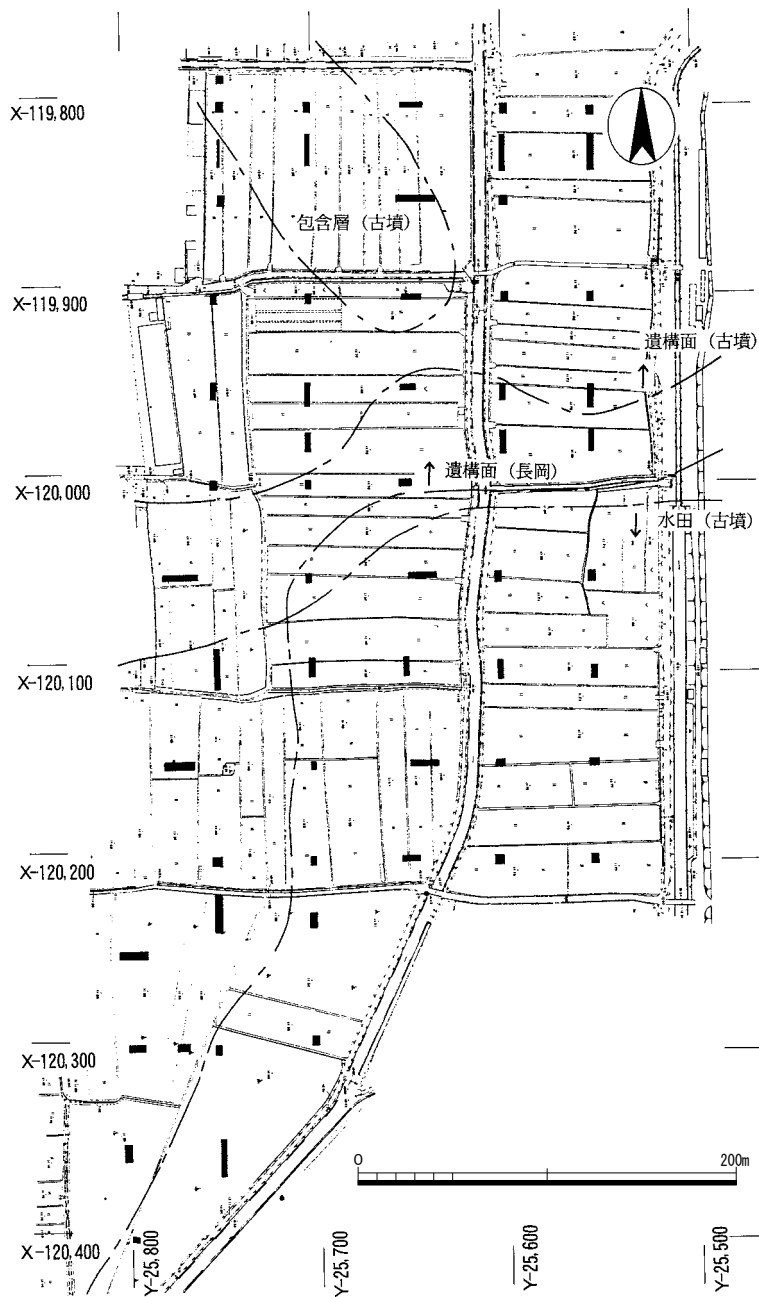


図1 試掘トレンチと遺跡推定範囲 (1:4,000)

た。各調査区の中は、遺構の展開状況や進入路および管理上のことも考慮して約5,000㎡前後の調査地に分け枝番号を付け調査を実施した。ただし、長岡京期や古墳時代の遺構が連続して展開する箇所については調査する面積を増した。これらの一連の調査とは別に処分地拡張に関連して樋爪町地内に揚水機場の増設工事が行われることとなり、これをH区とした。調査順は、原則として工事予定地順に合わせた。各区で実施した調査面積は表1に示した通りである。

遺構実測 面積が広大なため、長岡京期と古墳時代の遺構面の全体実測についてはヘリコプターによる写真測量を採用した。1/40をベース図として作成できる仕様内容とし、これを基に1/200・1/500・1/1,000の各縮小図を作成した。基準

点設置に関しては研究所で実施し、他の作業については「(株)かんこう」に依頼した。その他の細部遺構実測などについては従来通り手作業とした。

写真撮影 一つの調査区の写真撮影には、大型クレーンに撮影装置をつり下げ撮影する方法とヘリコプターによる写真測量時に上空から撮影する方法とを併用した。その他については通常のローリングタワーを用いた撮影を実施した。

施設準備 一帯は水田地として利用されていたため、大型機械の導入路や電気・水道の施設がなく、試掘調査期間と並行してこれらの施設を準備した。川に橋を架け進入道路を設けた。また試掘の結果、周辺からの湧水が激しいことがわかり、調査区周辺に暗渠を掘りこの中を碎石で埋



図2 調査区配置図 (1:6,000)

めた。暗渠末にはマンホールを設置し、大型ポンプで常時水を調査区外へ排出した。電気関係では、キューピクルを設置し大容量の電力確保にあたった。さらに、各調査区の掘削機械には大型で傾斜掘削が可能なチルト方式のバックホーを採用し、調査区の壁の傾斜を安定した形で確保し、軟弱な堆積土に対処した。

調査担当者 調査は、調査第4係を主に実施することとし、測量基準点設置・写真撮影は資料係の職員があたった。各年度の参加職員は以下の通りである。

年度	所長	調査課長	担当者		
平成2年度	杉山信三	永田信一	長宗繁一	木下保明	上村和直
			吉崎伸	北原四男	上田栄治
			太田吉男	布川豊治	出口勲

調査区名	面積 (㎡)
A区	5,159
B区	7,289
C1区	7,176
C2区	7,162
D区	12,176
E1区	11,131
E2区	7,060
E3区	8,586
F1区	7,707
F2区	7,099
G1区	5,043
G2区	5,285
G3区	7,934
H区	667
補足	3,194
合計	102,669

表1 調査面積一覧表

西大條哲 南 孝雄 木下秀一 小寺末之

平成3年度 杉山信三 永田信一 長宗繁一 木下保明 上村和直 吉崎 伸 北原四男
 上田栄治 太田吉男 出口 勲 西大條哲 木下秀一
 小寺末之

平成4年度 杉山信三 永田信一 長宗繁一 木下保明 上村和直 吉崎 伸 北原四男
 上田栄治 太田吉男 西大條哲 近藤知子 木下秀一
 小寺末之

平成5年度 杉山信三 永田信一 長宗繁一 吉崎 伸 上村和直 木下保明 北原四男
 太田吉男 出口 勲 西大條哲 木下秀一 小寺末之

平成6年度 川上 貢 鈴木久男 長宗繁一 加納敬二 木下保明 上村和直 吉崎 伸
 北原四男 太田吉男 出口 勲 西大條哲 木下秀一
 小寺末之

平成7年度 川上 貢 鈴木久男 長宗繁一 吉崎 伸 上村和直 木下保明 北原四男
 上田栄治 太田吉男 出口 勲 西大條哲 木下秀一
 小寺末之

測量基準点設置 辻 純一 宮原健吾

写真撮影 村井伸也 幸明綾子

調査経過 各年度で実施した調査区は表2で示した通りである。以下各年度毎の経過を述べる。

平成2年度(1990) 4月より試掘調査を開始し、7月より対象地南西隅のG区の発掘調査を開始した。G1区では調査開始早々長岡京期の河川から多量の祭祀具が出土し、大きな成果をあげることができた。また東二坊大路や七条条間小路さらに橋などを検出した。この成果を公表するために、第1回現地説明会(9月29日)、を開催した。下層からはG区全体で古墳時代の水田を検出した。

平成3年度(1991) G区で検出した古墳時代の水田の続きがF区にも広がり、30,000㎡以上に及ぶことがわかった。また水田区画に規格性がうかがえることなどもわかり、第2回現地説明会(11月9日)を開催した。こうした古墳時代の遺構の発見から、この遺跡を「水垂遺跡」と名付けた。長岡京期ではE2区で建物や井戸を検出し、当調査地最初の宅地の発見となった。この成果を公表するために、第3回現地説明会(2月29日)を開催した。

平成年度	調査回数	調査対象区
2年度	左京第251次	試掘調査・G区(古墳・長岡京)・平安時代水田調査
3年度	左京第270次	F1区(古墳・長岡京)・F2区(古墳・長岡京)・E2区(長岡京)・E3区(長岡京)
4年度	左京第288次	E2区(古墳)・E3区(古墳)・E1区(古墳・長岡京)・D区(長岡京)
5年度	左京第306次	E1区(古墳補足)・D区(弥生・古墳)・A区(弥生～長岡京)
6年度	左京第339次	C1区(古墳・長岡京～中世)・C2区(古墳・長岡京～中世)・補足調査・H区
7年度	左京第364次	B区(古墳・長岡京～中世)・補足調査

表2 年度別調査地一覧表

平成4年度(1992) E区の南半にも古墳時代の水田を検出したが、徐々に地形は高くなり、水田として利用できない一帯には畑が広がっていることが明らかとなった。また堰が築かれた河川や方形周溝墓1基も検出した。堰には、柱などの建築部材が転用されていた。長岡京期では、E1区で六条大路と東三坊坊間西小路、さらに六条大路の北側で建物多数を検出した。この成果を公表するために、第4回現地説明会(1月24日)を開催した。敷地北西隅のD区で、長岡京期の調査を実施した。D区は敷地の中でも最も高い場所であり、ここで六条条間南小路と東三坊坊間西小路の交差点などを検出した。

平成5年度(1993) D区で古墳時代の集落を発見した。大きな河川に囲まれた高台で、掘立柱建物や竪穴住居を合わせて約80棟検出した。河川や溝などからは土器や木器が多量に出土した。これらの成果を公表するために、第5回現地説明会(10月9日)を開催した。この発見で集落・墓・水田をセットで検出することができ、水垂遺跡のほぼ全体像をつかむことができた。調査は一部敷地東半部にも移り、A区の調査を実施した。

平成6年度(1994) C区の調査では、古墳時代の河川や畑、平安時代の河川、鎌倉時代の池状遺構を検出した。この池にはこれにつながる木樋を検出し、丸木舟が転用されていた。また、敷地南方で実施したH区では、桂川に接する地点にもかかわらず微高地があり、6世紀前半頃の竪穴住居を検出した。D区から南東にのびる微高地がB・C区を経てH区まで達していると考えられた。

平成7年度(1995) 最後のB区の調査と平安時代坪境などの補足調査を実施し、11月で全調査を終了した。B区では古墳時代の建物5棟を検出した。補足調査では、五間堀川の中で平安時代の条里制水田の坪境を調査した。11月3・4日には、地元の樋爪町および水垂町自治会館の2会場で出土遺物や写真パネルの展示、スライドを用いた説明会を開催し合わせてパンフレット^{註1}を発刊して、調査の終了を報告し締めくくりとした。

3 報告書作成の経緯

調査は6年間にわたり、当初予想した以上の成果をあげることができた。その成果をまとめた正報告書の作成をすみやかに行うこととなり、調査終了後ただちに整理に着手、平成8年度末には報告書としての編集作業に入った。

報告書の作成には、以下の職員で分担した。

整理作業 図面・出土遺物の整理には現場担当者を中心として以下の者が担当した。

長宗繁一 吉崎 伸 上村和直 木下保明 加納敬二 永田宗秀 南 孝雄
会下和宏 北原四男 上田栄治 太田吉男 出口 勲 西大條哲 木下秀一
小寺末之 鈴木廣司 鎌田泰知 真喜志悦子

原稿執筆 以下の分担で執筆にあたった。

長宗繁一 第1・2章

木下保明 第3章-1・3 第4章-1・3-(1)・(2) 第5章-2

上村和直 第3章-4 第4章-4-(1)～(3) 第5章-3

加納敬二 第4章-5-(1)

吉崎 伸 第3章-2・5・6 第4章-2・5-(1) 第5章-1・4 付章

太田吉男 付章

出口 勲 第4章-3-(3) -4-(4) -5-(2)

西大條哲 第4章-3-(4) -4-(5) -5-(3)

モンペティ恭代 英文要約

編集作業 鈴木久男 永田信一が全体を指導し、長宗繁一 上村和直 吉崎 伸 出口 勲 西大條哲の協議を経て、木下保明が主として編集にあたった。

保存処理 金属器・木器などの保存処理には以下の者があたった。

岡田文男 ト田健司 大槻明義 出口 勲

復原作業 土器復原および彩色には以下の者があたった。

村上 勉 出水みゆき 中村享子

写真撮影 遺構・遺物の写真撮影、プリントなど写真関係には以下の者があたった。

村井伸也 幸明綾子

分析・処理 その他、古墳時代水田跡のプラント・オパール分析や環境分析については有限会社古環境研究所、同じく古墳時代の河川から多量に出土した木器の保存処理については株式会社吉田生物研究所に依頼した。

調査中および報告書作成にあたっては以下の個人・機関よりご指導、ご助言を頂いた。記して感謝申し上げたい。

足利健亮 稲田孝司 岩本次郎 植村善博 奥田 尚 小野健吉 笠谷和比古 金子裕之
金田章裕 木原克司 京嶋 覚 工楽善通 寒川 旭 島田敏男 清水みき 千田 稔
高瀬要一 都出比呂志 中塚 良 中山修一 西山良平 橋本義則 服部昌之 松井 章
松木 哲 松村 博 山田良三 山中 章 米田敏幸（敬称略、アイウエオ順）

大山崎町教育委員会 （財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

（財）長岡京市埋蔵文化財センター （財）向日市埋蔵文化財センター

註

1 『長岡京跡と水垂遺跡のようす』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年

第2章 位置と環境

1 地理的環境

調査地は、京都市域でも南端に近い京都市伏見区淀樋爪町と淀水垂町の一部に位置している。現在の行政区分での淀の区域は、桂川を挟んでまたがっており、樋爪町・水垂町は桂川右岸に位置し、区域の中でも北西端にあたり、北は伏見区羽束師古川町、西は長岡京市となる。淀の南方あたりで京都盆地を流れる桂川と宇治川さらに木津川の3大河川は合流し、淀川となり大阪湾へと流れ込む。いわば東西南北に行き交う交通の要衝となっている。

調査地の位置する京都市の南西城および向日市・長岡京市・大山崎町が位置する桂川右岸は、西を標高200～400m前後の西山山地で限られ、これより派生する丘陵が東方へのび、段丘や扇状地そして後背湿地を経て桂川となっている。この後背湿地には、数本の河川が西山山地より北西から南東に向かって流れ込んでいるが、中でも小畑川の氾濫による影響は大きく、京都市羽束師一帯から調査地の付近まで広範囲に扇状地を形成している。古墳時代には羽束師付近を東へ流れていたものが、現在は長岡京市を南下している。

後背湿地の標高は10m台で、大きくは西から東、北から南へ緩やかに傾斜し広大な水田地帯を形成している。調査地近辺の標高は10m前後で、桂川に近い後背湿地の中でも最も低い地域となっている。調査地の東方一帯は、「巨椋池」と呼ばれた湖沼が近代まで広がっていた。

2 歴史的環境

京都盆地の北西部、桂川が嵐山から南東に流れ湾曲しながら南下し大山崎に至る西方一帯のうち、北部の葛野郡を除く地域は、山背国乙訓郡の地にあたる（以下、乙訓地域と呼ぶ）。

この乙訓地域には、旧石器時代以降の遺跡が数多く営まれている。以下、本報告書に関係する乙訓地域の遺跡を中心に、その概要を述べる。

弥生時代 調査地の西方に前期の雲宮遺跡が位置している。この遺跡では、多くの遺物とともに

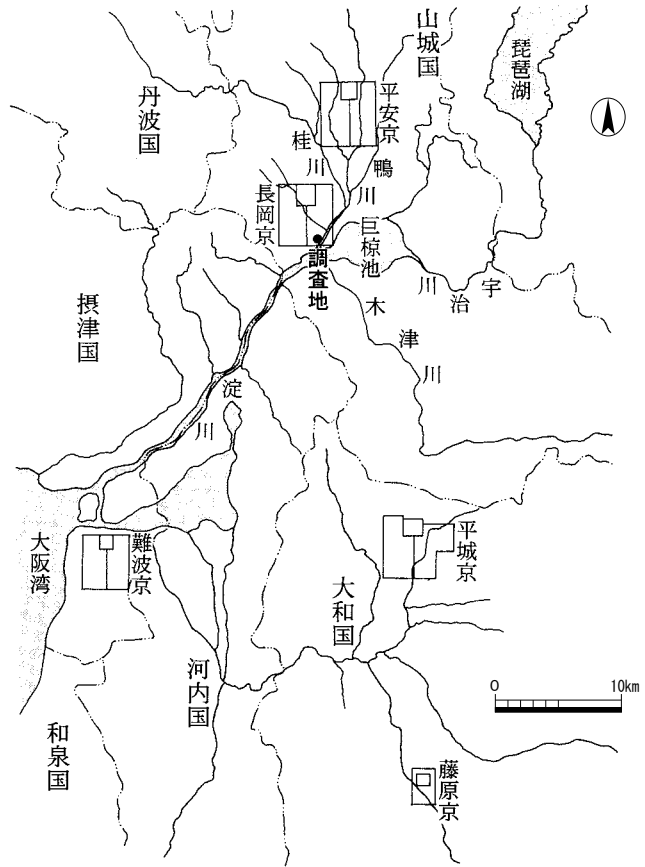


図3 調査地と主要都城位置図 (1:600,000)

に環濠と思われる溝が一部検出され、今後、環濠内の調査が注目される。

雲宮遺跡の西には乙訓地域の中期の拠点集落とみられる神足遺跡が位置し、多くの調査が実施され多数の住居・墓などが検出されている。この他の中期の遺跡としては、上久世遺跡・中久世遺跡・大藪遺跡、環濠や水田を検出した東土川遺跡、杭と板で護岸した水路や水田が検出された森本遺跡、銅鐸の鋳型が出土した鶏冠井遺跡、環濠で囲まれることが判明した長法寺遺跡がある。

後期になると、低地や高燥地にかかわらず、中期から続く遺跡以外にも、羽束師遺跡、中海道遺跡、鴨田遺跡、今里遺跡、馬場遺跡などの遺跡が乙訓地域全域に点在するようになる。いずれも桂川に流れ込む中小河川に沿って点在する。

古墳時代 乙訓地域の古墳時代の遺跡には、集落・墓・水田などがあり、古墳時代を通じて各所に点在している。京都盆地南西部の中心的地域であったことがうかがえる。特に向日丘陵に存在する前期の大型前方後円墳は、山城北部を代表するものである。地域全体をみると、西部の丘陵地域に古墳の築造が目立ち、これより東側の桂川にかけて集落・方形周溝墓・水田が営まれている。集落は、桂川に流れ込む中小河川に沿った中流域の微高地上に顕著にみられるが、調査が及んでいない桂川右岸に広がる水田地帯では、今後新たな遺跡が発見される可能性は非常に高い。

地域西部の丘陵には、古墳時代を通じて前方後円墳・前方後方墳・円墳が継続して築かれる。最も早く築かれた古墳は、向日丘陵に築かれた元稻荷古墳（前方後方墳、全長 94m）である。続いて同じ丘陵に連なって、五塚原古墳（前方後円墳、全長 94m）、寺戸大塚（前方後円墳、全長 98m）、妙見山古墳（前方後円墳、全長 120m）が 4 世紀代に連続して築かれている。これらとは別に、4 世紀から 5 世紀にかけて築かれた長法寺南原古墳（前方後方墳、全長 62m）、今里車塚古墳（前方後円墳、全長 48m 以上）、恵解山古墳（前方後円墳、全長 120m）が点在する。こうした地域の大型古墳も 5 世紀後半以降には築かれず、5 世紀後半から 6 世紀にかけては、物集女車塚古墳（前方後円墳、全長 45m）や稲荷塚古墳（前方後円墳、全長 45m）などの中型古墳が築かれる。これらのうち、最も低い標高に築かれたのが、乙訓最大級の前方後円墳である恵解山古墳であり、調査地の南西約 1.5Km に位置する。

古墳時代の集落は、弥生時代の集落を踏襲しながらも、増加および拡大がみられる。4 世紀の遺跡としては、鴨田遺跡、集落と方形周溝墓が検出された馬場遺跡、開田城ノ内遺跡、雲宮遺跡、大藪遺跡、羽束師遺跡などがある。5 世紀の集落は、4 世紀のものが継続するが、今里遺跡では拡大傾向にある。大藪遺跡・羽束師遺跡も継続する。6 世紀になり、集落数が顕著に増加する。大藪遺跡、鴨田遺跡、馬場遺跡、今里遺跡、開田城ノ内遺跡、友岡遺跡、下植野南遺跡などがある。

今里遺跡は、6 世紀になり最も拡大し、多くの竪穴住居や掘立柱建物が検出される。この遺跡は、飛鳥時代や奈良時代まで続き、中心には乙訓寺が造営される。下植野南遺跡は、桂川に近接した標高 10m 強の微高地に位置し、多くの竪穴住居や掘立柱建物が検出される。この遺跡は、一部弥生時代に始まり平安時代前期まで続くことが調査で明らかとなり、乙訓地域の最南端に位置し、しかも桂川に接する遺跡として注目される。両遺跡とも大規模な掘立柱建物群が検出されて



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-------------------|-----------|
| 1 雲宮遺跡 | 2 神足遺跡 | 3 上久世遺跡 | 4 中久世遺跡 | 5 大藪遺跡 |
| 6 東土川遺跡 | 7 森本遺跡 | 8 鶏冠井遺跡 | 9 長法寺遺跡 | 10 羽束師遺跡 |
| 11 中海道遺跡 | 12 鴨田遺跡 | 13 今里遺跡 | 14 馬場遺跡 | 15 元稻荷古墳 |
| 16 五塚原古墳 | 17 寺戸大塚 | 18 妙見山古墳 | 19 長法寺南原古墳 | 20 今里車塚古墳 |
| 21 恵解山古墳 | 22 物集女車塚古墳 | 23 稻荷塚古墳 | 24 開田城ノ内遺跡 | 25 友岡遺跡 |
| 26 下植野南遺跡 | 27 上里遺跡 | 28 宝菩提院廃寺 | 29 乙訓寺跡 | 30 靱岡廃寺 |
| 31 羽束師神社 | 32 更ノ町遺跡 | 33 長岡宮下層遺跡 | 34 神田古道跡 | 35 川原寺跡 |
| 36 大藪遺跡 | 37 西山田遺跡 | 38 棚次遺跡 | (■は祭祀具が大量に出土した地点) | |

図4 長岡京と主要遺跡位置図 (1:50,000)

いる。

低地に立地する羽東師遺跡では、微高地に集落、その周辺のより低い場所では水路とともに水田が広い範囲で検出される。北西から南東へ傾斜する地形に合わせて大畦畔を築き、この中を小区画に区切っている。

こうした遺跡の他に、乙訓には『日本書紀』継体天皇十二年の記事として「弟国宮」の伝承がある。この「弟国」の文字資料としては、時代は下がるが藤原京出土木簡の中に「弟国評」と記されたものや、長岡京市域の上里遺跡から奈良時代の須恵器に墨書されたものが出土している。

飛鳥・白鳳時代 この時代、乙訓地域にも寺院の造営が開始されるが、すべて西山丘陵地帯に位置し、調査地の位置する低地での造営はみられない。向日市域の宝菩提院廃寺、長岡京市域の乙訓寺・鞆岡廃寺などの氏族寺院が知られる。伽藍については乙訓寺の調査で堂宇が検出されている以外は明らかではない。

乙訓郡には『和名類聚抄』によれば「大江、石作、石川、物集、長岡、長井、鞆岡、山崎、訓世、羽東、榎本」の11郷が記載されているが、調査地が位置する淀の郷名は明らかでない。また、郡衙の位置についても、確定をみるに至っていない。乙訓寺付近の長岡京市今里あたりとする説があり、近辺で古墳時代から奈良時代の掘立柱建物群が多数検出される。これに対して、向日市鶏冠井町の長岡宮下層の調査でも同様な遺構群が検出され、もう一つの有力な郡衙候補地として浮かび土がってきている。

奈良時代 遺跡としては、長岡京市域の乙訓園とみられる更ノ町遺跡、乙訓寺の位置する今里遺跡、向日市域の長岡宮下層遺跡、大山崎町の下植野南遺跡などがある。また大山崎周辺には駅や山崎院などが置かれた。さらに古道としては、長岡京市域に神田古道があり、斜行する古山陰道の復原と関連して注目されている。

調査地の北東約1kmに位置する「波都賀志（はつかし）神」[『続日本紀』大宝元年(701)四月三日条]が、正倉院文書「東大寺奴婢帳」[天平勝宝元年(749)十一月三日付]の「羽東里」と共に史料にみえる。『延喜式』大社の高御産日神社であり、現在も羽東師神社として近隣三村の氏神となっている。羽東師神社の周辺の調査で集落・水田を検出している。水田は、東西方向の条里坪境畦畔を検出し、条里制の地割りが奈良時代から現在まで踏襲されていることがわかった。

長岡京期 都が平城京からこの地に遷るのは、延暦3年(784)である。桓武天皇は、平城京の旧勢力からの脱却を願い、長岡京の建設を進めたがわずか10年で造営を中止し、延暦13年(794)には平安京の造営へと移る。

宮は京城の北方中央に張り出す向日丘陵に置き、南に広がる平野部に京城を設定している。東および南は桂川で、西は西山山地の丘陵で区切られている。延暦4年(785)には大極殿や内裏が完成し、次々と諸施設が造営された。引き続き、造営は継続され、延暦10年(791)の平城宮諸門の移築や出土木簡の内容からもこのことをうかがうことができる。

既往の調査では、左・右京にかかわらず条坊や宅地が各所で確認されている。南北の条坊については、北限と推定される北京極以北のもの、南は七条大路付近まで確認されているが、以南

では建物の検出例はあるが、側溝などは検出されていない。東西の条坊では、両京極大路の明確な検出はないが、東端の町で建物などが検出されている。宅地は、4町にまたがる規模のものから、1町や1/2町、さらに1/32町の宅地も確認されている。

京城のようすをみると、宮城の東方街区一帯には、大規模な宅地や役所に関係するとみられる機関が置かれていたことが、遺構や出土した木簡などの遺物から明らかとなってきた。また、造営資材や物資の集積が河川を利用し行われたことが、川の検出とそこから出土した多量の木簡から判明した。

寺院については、長岡寺や川原寺の記事がみえるが、長岡寺についてはどの寺院が該当するものか明らかではない。川原寺については、四条大路と東二坊大路の交差する付近に「川原寺」を冠する小字がある。付近の調査では、大衆院に関係するとみられる竈屋の遺構を検出したが、明確な伽藍を示す建物遺構は検出していない。

都城の祭祀遺跡としては、京の北東に大藪遺跡、西南に西山田遺跡があり、いずれも河川から多くの人面土器などの遺物が出土している。

平安時代以降 平安京へ都が移った以後の乙訓地域は、中世を含めて「平安京」の近郊という地理的条件から、政治的にも経済的にも「平安京」の影響を強く受ける地域であった。調査地周辺の状況をみると、『日本後紀』延暦23年(804)条には、「興等津」がみえ、水上交通の要衝であったことがうかがえる。平安時代には、樋爪・水垂は京より南に下る道筋にあたり、史料に登場している。また、調査地のすぐ西を南西方向に斜めに通る久我躰もこの頃造られており、京と西国を結ぶ重要な街道であった。前述した大山崎付近には、河陽離宮その後には山城国府が置かれた。調査地近辺の遺跡としては、平安時代の水田である棚次遺跡が北方に位置している。

中世には、東寺領の久世荘や久我家の久我荘をはじめとして、貴族や社寺の荘園が散在し、樋爪や水垂にもこうした所領が設置された。室町時代には『九条家文書』中の乙訓郡小塩荘条里図などから、調査地は水田として管理されていたことがわかる。

3 既往の調査

長岡京の調査 長岡京のこれまでの調査は、平成8年(1996)12月現在で宮城338次、左京城393次、右京城557次に達している。京城は、向日市・長岡京市・大山崎町・京都市にまたがっており、現在は財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター・財団法人向日市埋蔵文化財センター・財団法人長岡京市埋蔵文化財センター・大山崎町教育委員会・財団法人京都市埋蔵文化財研究所が主となって調査を実施している。毎月開かれる長岡京連絡協議会で調査成果の報告を行い、相互に情報を交換している。

ここでは調査地周辺の遺跡や既往の調査成果を要約する。また、これまでの長岡京条坊関連遺構の調査成果から、当報告書での条坊呼称についてその扱いを示しておきたい。

周辺の調査(図5) 京都市域の調査としては北方約400mで実施した左京第38B・113・233次調査の3例のみで、他は西方の長岡京市域で調査が実施されている。

京都市域の 38B 次では、古墳時代から平安時代にかけて流れた河川を検出している。^{註3} 113・233 次では、五条大路の推定地であったがその痕跡はなく、平安時代と古墳時代後期の水田を検出している。平安時代のものは、東西・南北方向の区画畦畔を、古墳時代のものは、北西から南東に向く主軸畦畔を持つ小区画水田を検出した。

長岡京市域では、20 例近い調査と名神高速道路拡幅に伴う一連の調査が実施されている。調査地すぐ北側に位置する左京六条三坊二町では、左京第^{註5} 28・84・87・295 次調査がある。28 次では平安時代の洪水砂によって埋没した水田を検出し、坪内の区画畦畔や多数の足跡がみつきり棚次遺跡と命名された。87 次では、東二坊大路両側溝が検出され、295 次では掘立柱建物や井戸、さらに南北方向に並ぶ耕作に伴う小溝群を検出している。調査地の西方では、左京第^{註9} 18・35・^{註11} 53・^{註12} 115・^{註13} 210・^{註14} 216・^{註15} 229・^{註16} 230 次調査などが実施されている。このうち、調査地西側の左京六条二坊十四町南西部で実施された 210 次では、六条大路の両側溝や建物・井戸が検出されている。側溝心々距離は 24.5m で、側溝の幅は 1.9m、深さは 0.6m である。下層では、雲宮遺跡に伴う弥生時代の遺物の出土がみられると共に、古墳時代の土器などが出土している。この西方約 80m の地点の 230 次では、東二坊坊間東小路が検出され、側溝心々間距離が 9.5m であった。さらに西方の 216 次は、名神高速道路の拡幅に伴う調査で、雲宮遺跡の集落を取り囲むとみられる円弧状

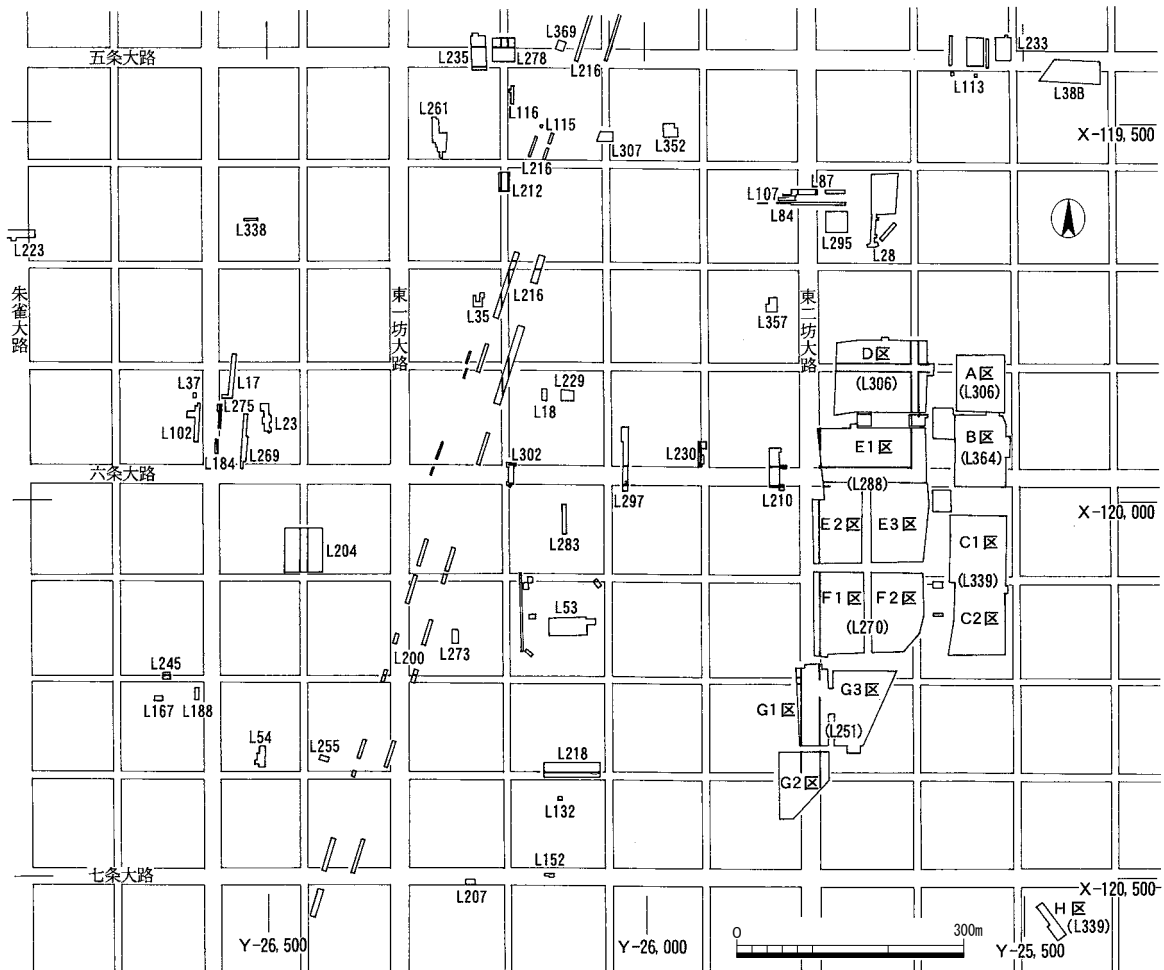


図5 周辺調査位置図 (Lは左京の略、数字は調査次数) (1:10,000)

を呈した濠を検出している。濠からは多くの弥生時代前期の遺物が出土している。集落本体は、この地点を西限として東西に細長い楕円形の区域に濠が巡っているものとみられ、東限は調査地のすぐ西側付近まで達しているものと思われる。

調査地の北西約500mの左京^{註17}・235次調査では、北で西に30度振れる傾きを持つ奈良時代の古道（神田古道）が検出されている。幅6mの路面と西側には幅2mの側溝が掘られ、轍も数条検出されている。

条坊呼称（図6） 長岡京条坊呼称については、既往の調査結果から南北路については従来の呼称で問題はないものの、東西路については現行の推定大路が小路の規模で検出され、逆に条間小路が大路規模で検出される。このため、宮に取り付く東西路は2町毎に大路を設定していること、さらに現行二条大路が小路規模であることなどから、現行の呼称を2町北に移動させる案が出てきた。言い換え

れば、平安京の大路小路と同じ配置関係にあることがわかった。こうしたことから、当調査開始前後に新呼称の提唱^{註19}がなされたが、長岡京城の調査が複数の行政機関や調査機関で行われている

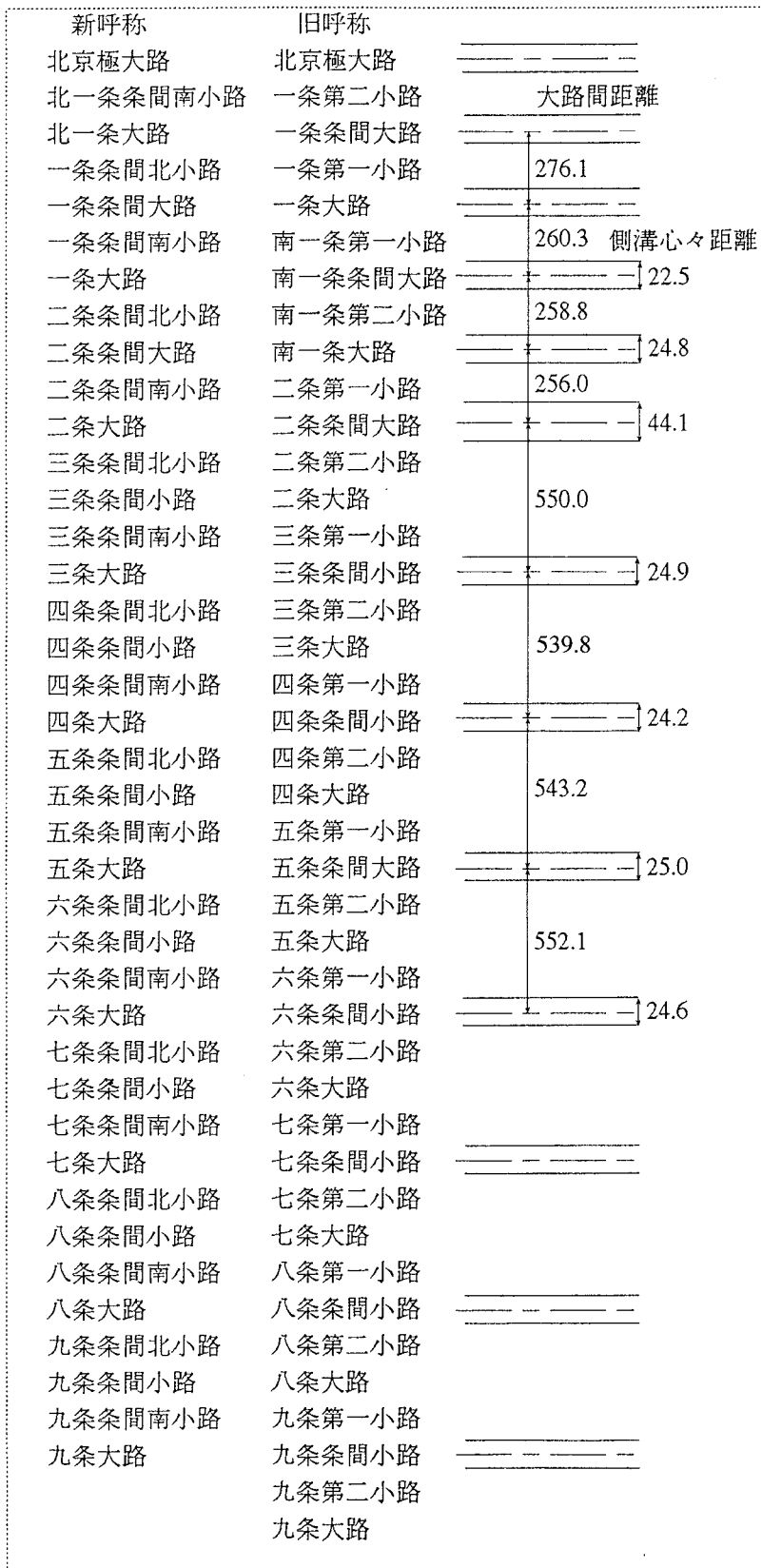


図6 東西大路・小路の配置関係図

ため、早急には意見の一致をみることができず、とりあえず旧来のものを継続し、新呼称併記の現実的対応がなされている現況にある。

本報告書では、旧条坊呼称のままでは検出した大路を小路と呼ばなければならないことなどの混乱を避けるため、新旧対称図を示し本文中では新呼称に準拠し表すこととした。しかし、この新呼称も変更を必要とする問題を含んでおり、解決しなければならない諸課題^{註20}が存在する。

なお、図4に示した長岡京の条坊復原は、新呼称に準拠し表記したが、北京極大路は小路規模しかなくさらに北方にも条坊が展開していること、二条大路がそのまま宮域の南限を画する大路ではないことなどを勘案し作成したものである。

註

- 1 地形分類については、『長岡京市史』資料編 - 付図2 長岡京市域地形分類図を参照とした。
- 2 執筆にあたっては、各調査機関発刊の関連調査報告や以下の文献を主に参照した。
向日市史編さん委員会『向日市史』上巻向日市 1983年
長岡京市史編さん委員会『長岡京市史』本文編 - 長岡京市役所 1996年
長岡京市史編さん委員会『長岡京市史』資料編 - 長岡京市役所 1991年
京都市『京都の歴史1 平安の新京』学藝書林 1970年
京都市『史料京都の歴史』第16巻伏見区 平凡社 1991年
『京都市の地名』日本歴史地名大系第27巻 平凡社 1979年
西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年
- 3 長宗繁一・鈴木廣司「左京五条三坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1984年
- 4 鈴木廣司「長岡京左京五条三坊」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5 戸原和人・國下多美樹・百瀬ちどり「長岡京跡左京第28次(7ANMTG 地区)調査概要 - 左京 五条三坊四町・棚次遺跡・久我畷 -」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1985年
- 6 小田桐淳「長岡京跡左京第84・87次(7ANMTG-2・3 地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和57年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1983年
- 7 小田桐淳「長岡京跡左京第87次(7ANMTG-2・3 地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1984年
- 8 中島皆夫「長岡京跡左京第295次(7ANMTG-3 地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成4年度』財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1994年
- 9 戸原和人「長岡京跡左京第18次(7ANMTD 地区)調査概要 - 左京六条二坊七町・雲宮遺跡」『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会 1980年
- 10 久保哲正「長岡京跡左京第35次(7ANMMO 地区)調査概要 - 左京六条二坊一町・雲宮遺跡 -」『長岡京

- 市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1985年
- 11 奥村清一郎・戸原和人・百瀬ちどり・中塚 良「長岡京跡左京第53次(7ANMSB地区)調査概要-左京五条二坊五・十二町・下八ノ坪遺跡・久我畷-」『長岡京市文化財調査報告書』第14冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1985年
 - 12 三好博喜「長岡京跡左京第115次発掘調査概要(7ANMKK地区)」『京都府遺跡調査概報』第15冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985年
 - 13 小田桐淳「左京第210次(7ANMOB地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1990年
 - 14 戸原和人・竹井治雄・三好博喜「長岡京跡左京第216次、左京第343次調査発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第40冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990年
戸原和人「長岡京跡左京第216・241・242、右京第349・357次発掘調査概要(2)長岡京跡左京第216次、雲宮遺跡」『京都府遺跡調査概報』第47冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992年
 - 15 中島皆夫「左京第229次(7ANMTD-3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1991年
 - 16 小田桐淳「左京第230次(7ANMJN地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1991年
 - 17 山本輝雄「左京第116次(7ANMKD地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和59年度 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1985年
 - 18 中島皆夫「左京第235次(7ANLRB-2地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1991年
 - 19 山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号 考古学研究会 1992年
 - 20 検出した条坊遺構を、規則性を持った条坊制として説明できるまでには至っていないこと、宮城南限および北限が確定されておらず、二条大路の設定にも関連した問題を残していること、などがあげられる。

第3章 遺跡

1 遺跡の層序と概要

(1) 遺跡の層序

調査地は、全体に北西から南東に緩やかに傾斜している。調査区の北西部は、標高がやや高く氾濫原に形成された微高地であろうと思われる。南西部は低地となる。基本層序は、上から第1層：現代耕土・床土、第2層：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂泥、第3層：黄灰色(2.5Y6/1)泥砂、第4層：黄褐色(2.5Y5/3)砂泥、第5層：灰色(5Y5/1)砂泥、第6層：黄褐色(2.5Y5/4)砂泥である。第5層は平安時代の耕作土、第6層上面で長岡京期の遺構面となる。第6層以下は、調査区の北半では古墳時代の遺構面・地山：暗褐色(10YR3/3)砂泥となり、建物・小穴群など

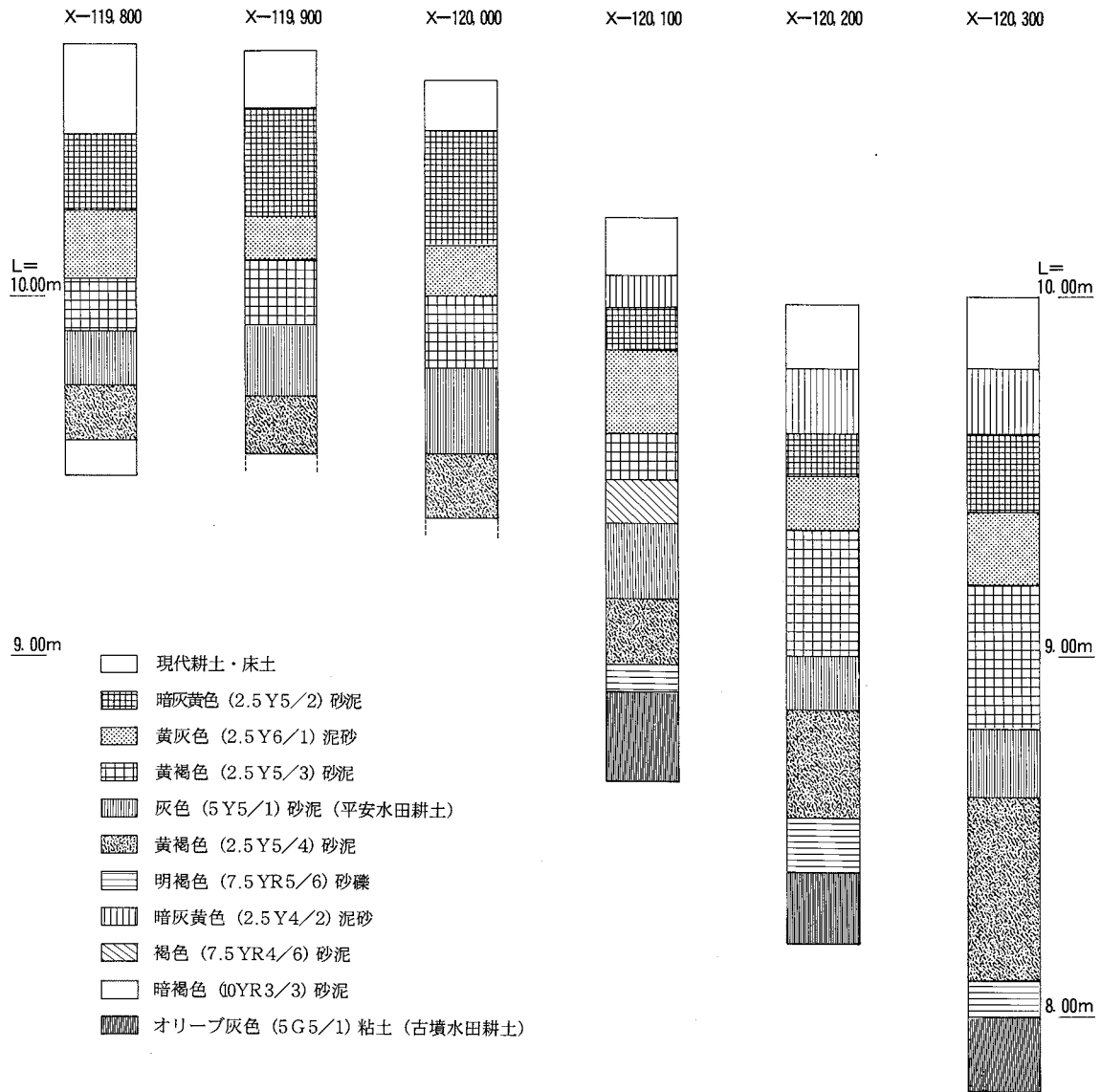


図7 土層模式図 (Y=-25,750 ライン)

が営まれる。調査区の南半では古墳時代の耕作土：オリブ灰色 (5G5/1) 粘土が広がっている。古墳時代の耕作土の下に地山：黒色 (7.5Y1/2) 粘土が堆積している。また、水田の上面には洪水で運ばれた明褐色 (7.5YR5/6) 砂礫が堆積している。

弥生時代の遺構は、古墳時代の遺構と同一面で形成される。縄文時代の河川は、部分的な調査や断ち割りによる断面の観察に止まったため、成立面を特定することはできなかった。第5層より上の各層は、中世から近世の水田の耕土層で、調査区の南半では耕土層の数が北半より多くなる。

(2) 遺跡の概要

今回の調査では、縄文時代から室町時代までの各時代の遺構を検出した。このうち、大きな成果があったのは古墳時代と長岡京期である。

古墳時代の遺構検出面は標高 7.8～9.5m である。調査地の北西隅が微高地で居住区となり、竪穴住居 72 棟、掘立柱建物 15 棟、井戸 2 基を検出した。微高地の南側に沿って河川が流れる。河川に近接した居住区側で土器棺墓・方形周溝墓各 1 基、高杯を埋納した土壇を 2 基検出した。調査地の中央から南西部に至る低湿地に新旧 2 面の水田が営まれ、水田の灌漑用の水路とみられる溝も検出した。河川、溝の中には水量調節のための堰が設けられる。水田と河川の間のやや高い所に耕作に関係すると思われる小穴群がある。この集落はほぼ古墳時代を通じて営まれており、乙訓地域での集落の形態・変遷をうかがい知る良好な資料となった。

長岡京期の遺構検出面は標高 8.0～10.0m である。当該期の地表面は一部を除き残っておらず、ほとんどの遺構は同一面で検出した。長岡京期の遺構も北西の微高地と調査区の西辺に集中している。調査区の西辺に沿って東二坊大路を検出した。東二坊大路以東の条坊道路は北西の微高地上のみで検出した。建物も微高地と七条条間北小路以北の東二坊大路に沿った地点のみで検出した。また、東二坊大路と七条条間小路の交差点を北西から南東に河川が横切っている。この河川から人面墨描土器、土馬、人形などの多量の祭祀具が出土した。検出した主な遺構には、道路 5 条・建物 31 棟・柵 7 条・溝 4 条・井戸 12 基・土壇 8 基・墓 7 基・河川 1 条・橋 2 基・堰 2 箇所などがある。

その他、平安時代の小溝群、条里制水田・溝・畦畔、鎌倉・室町時代の池状遺構、木樋などを検出した。

2 縄文・弥生時代の遺構

(1) 縄文時代の遺構 (図 8)

縄文時代の遺構としては G3 区で SD1 を確認している。この河川は幅約 50.0m、深さ 2.0m 以上で大きく蛇行しながら北西から南東方向へ流れていると推測できる。検出面の標高は 7.8m 前後である。埋土は砂礫層と腐植土層の互層で、直径 30cm 前後の流木が多量に混入している。

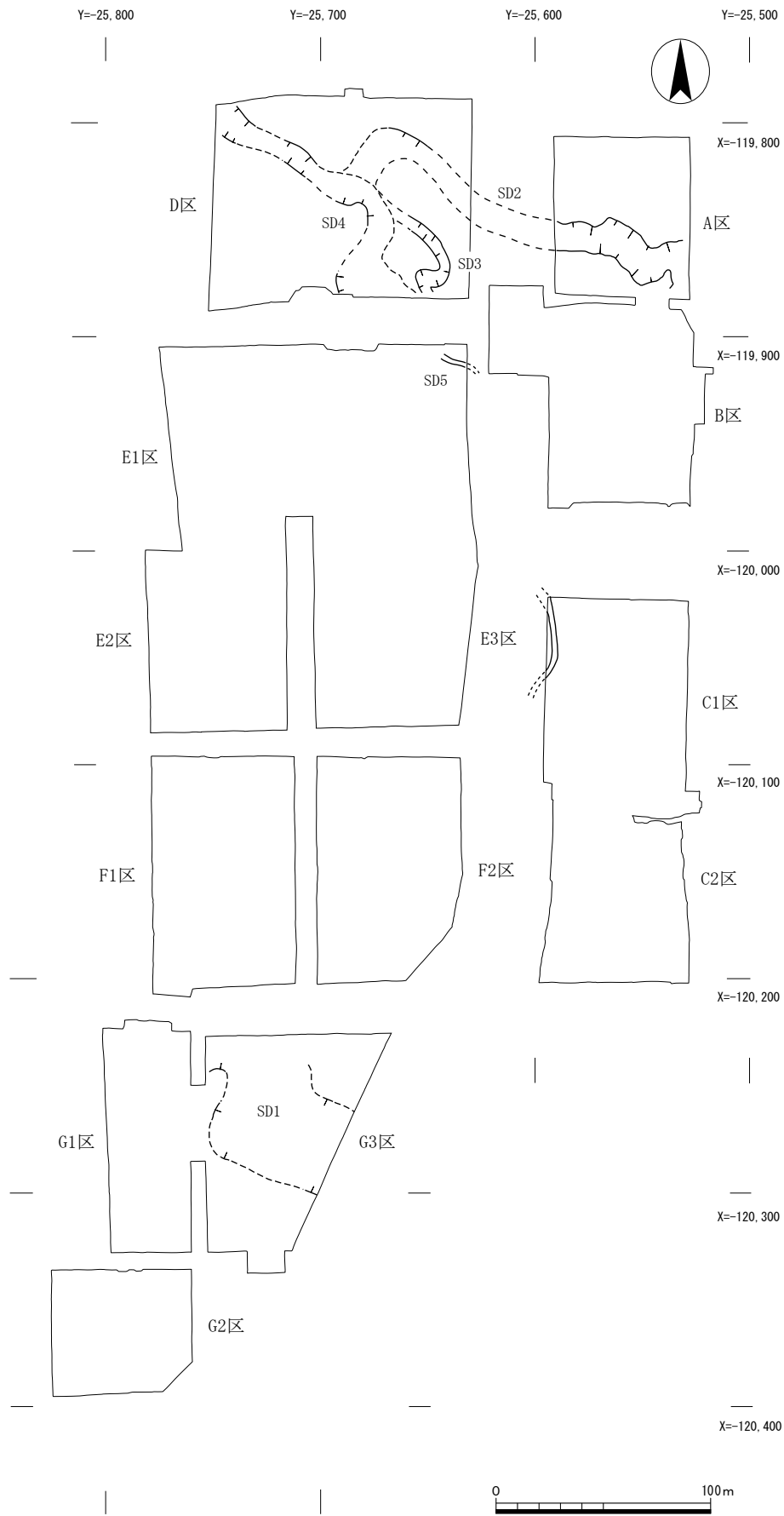


図8 縄文・弥生時代遺構平面図(1:3,000)

ここからは縄文土器が少量出土している。

(2) 弥生時代の遺構(図8)

弥生時代の遺構としては、D区からA区にかけて河川や溝を検出した。SD2は幅約10.0m、深さ約2.0mで蛇行しながら北西から南東方向に流れている。また、埋土は主に砂礫と腐植土の互層で下層ほど礫の目が粗い。ここからは縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物が出土した。SD3は、SD2からの分流と考えられ大きく蛇行しながら南東流する。幅約5.0m、深さ約1.5mで、埋土もよくにかよっている。同様に縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物を包含している。SD4は幅約10.0m、深さ約2.0mで、北西部から大きく湾曲しながら南流している。埋土は主に砂礫と砂層の互層で、弥生時代後期の遺物を包含しているが、D区の中ほどまではSD2の川道と重複していると考えられ、弥生時代前期の遺物も多い。これらの検出面の標高は9.0m前後である。

E1区北東部ではSD5を検出した。断面V字形(幅約1.0m、深さ0.6m)である。C1区の西端ではSD6を検出している。断面U字形(幅約1.0m、深さ0.3～0.5m)で、緩く湾曲しながら北西から南東方向に流れる。埋土は暗オリーブ灰色(5GY4/1)粘土で下部に砂礫や炭化物を含んでおり、弥生時代後期の遺物が出土した。

3 古墳時代の遺構

(1) 竪穴住居

SH7(図版1) D区の北西隅で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH52・71・76に切られている。N-42°-Wの傾きを持ち、幅3.7m×3.5m、床面積13.0㎡である。四壁に断面U字形(幅0.1～0.15m、深さ0.05m)の壁溝が巡る。主柱穴はない。

SH8(図版1・9・84) D区の北西隅で検出した不整円形の竪穴住居である。径約5.0m、床面積約19.6㎡である。床面の中央で、掘形が二段になる円形(径0.8m、深さ0.4～0.6m)の土壌を検出した。土壌の壁は焼成を受け、埋土に焼土と炭化物を含む。掘形が円形(径0.15～0.35m、深さ0.15～0.35m)の主柱穴が同心円上にほぼ等間に6箇所設けられている。壁沿いには断面U字形(幅0.1～0.2m、深さ0.05m)の壁溝が巡る。この建物は火災にあっており、床面のやや上に垂木材ではないかと思われる炭化材が放射線状に堆積していた。

SH9(図版1・8・84) SD122とSD123に囲まれたD区の中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SB83に切られている。N-35°-Wの傾きを持ち、幅5.3m×3.5m、床面積18.6㎡である。中央に掘形が不整円形(幅0.65m×0.7m以上、深さ0.15m)の地床炉、南東辺中央に掘形が矩形(幅0.7m×0.6m、深さ0.35m)で二段になる貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の周囲には、径0.01～0.02m大の小石が敷き詰められている。四壁沿いには断面U字形(幅0.15～0.25m・深さ約0.1m)の壁溝が巡る。貯蔵穴のある箇所を除く四周に、地山を削り出した低いベッド状の施設(幅0.7～1.0m・高さ約0.07m)がある。掘形が円形(径0.35～0.5m、深さ0.35～0.45m)の主柱穴

が4本、ベッド状遺構の上から掘り込まれている。南東辺中央部の外側に、掘形三段の矩形（幅2.4m×1.3m・深さ0.5m）の土壌が付属している。また、南西辺を中心に建物をほぼ半周する断面逆台形（幅0.4m～1.3m、深さ0.3～0.4m）の周溝が巡る。周溝と建物の間は約4.0mである。

SH10(図版3) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。N-30°-Wの傾きを持ち、幅5.0m×6.2m、床面積31.0㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.5～0.6m、深さ0.35～0.5m）である。中央に掘形が円形（径0.6m、深さ0.09m）の地床炉があり、南東隅を除く壁沿いに断面U字形（幅約0.2m、深さ0.08m）の壁溝が巡る。

SH11(図版3) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH26・SB84に切られる。また、SH20の拡張前の建物である。N-22°-Wの傾きを持ち、幅5.8m×5.9m、床面積34.2㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.35～0.4m、深さ0.2～0.5m）である。南東辺中央に掘形が円形（径1.8m、深さ0.15m）の貯蔵穴を持つ。壁溝・炉はない。

SH12(図版3・9・84) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH28・36・56・58に切られる。N-22°-Wの傾きを持ち、幅4.85m×5.3m、床面積25.7㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径約0.4m、深さ0.2～0.4m）である。中央やや西寄りに、掘形が円形（径0.6m、深さ0.1m）の地床炉があり、四壁沿いに断面U字形（幅0.1～0.25m、深さ0.07m）の壁溝が巡る。

SH14(図版4) D区南東隅で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH43に切られる。N-12°-Wの傾きを持ち、幅4.8m×6.1m、床面積29.3㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.5m、深さ0.3～0.4m）である。中央に掘形が円形（径0.4m、深さ0.05m）の地床炉がある。南東辺中央に隅丸方形（一辺0.9m、深さ0.3m）の貯蔵穴を持ち、周囲に一部小礫が敷かれた痕跡が認められた。四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.25m、深さ0.06m）の壁溝が巡る。

SH15(図版4・9・83) D区南東隅で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH46に切れ、SH17を切る。N-55°-Wの傾きを持ち、幅4.9m×5.0m、床面積24.5㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.35～0.4m、深さ0.2～0.3m）である。中央に掘形が楕円形（幅0.45m×0.6m、深さ0.15m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が隅丸方形（幅1.1m×0.8m、深さ0.5m）の貯蔵穴を持ち、周囲に一部小礫が敷かれた痕跡が認められた。また、東隅で掘形が隅丸方形（幅0.9m×0.8m、深さ0.3m）の土壌が検出された。北辺を除く壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.25m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH16(図版4) D区の北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH48・62、SB90に切られる。N-30°-Wの傾きを持ち、幅3.5m×3.5m、床面積は12.3㎡である。支柱穴・地床炉・貯蔵穴・壁溝はない。

SH17(図版4) D区南東隅で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH15・42・45・46に切られる。N-25°-Wの傾きを持ち、幅7.6m×7.6m、床面積57.8㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.4～0.5m、深さ0.2～0.3m）である。中央に掘形が円形（径1.0m、深さ0.2m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形（幅0.8m×0.6m、深さ0.4m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.3m、深さ0.1m）の壁溝が巡る。

SH18(図版4) D区南東隅で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH29～31、SB88に切られる。N-13°-Wの傾きを持ち、幅6.0m×6.7m、床面積40.2㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形(径0.4～0.5m、深さ0.1～0.2m)である。中央に掘形が円形(径0.7m、深さ0.2m)の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形(幅1.35m×1.15m、深さ0.25m)の貯蔵穴を持ち、周囲に一部小礫が敷かれた痕跡が認められた。壁溝はない。

SH19(図版1・9・82) D区の北西隅で検出した円形の竪穴住居である。径約6.0m、床面積28.3㎡である。SH8・32・37に切られる。床面で、掘形が円形(径0.2～0.6m、深さ0.25～0.5m)の小穴を約30箇所検出したが、どれが支柱穴になるか不明である。中央に、掘形が二段になる楕円形(幅1.3m×0.9m、深さ0.6m)の土壌を検出した。壁沿いには断面U字形(幅0.15～0.3m、深さ約0.05m)の壁溝が巡る。

SH20(図版3・9・84) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH26に切られ、SH11が拡張した建物である。N-22°-Wの傾きを持ち、幅6.3m×6.5m、床面積41.0㎡である。支柱穴は北半の2箇所のみで、掘形は円形(径0.4m、深さ0.2～0.45m)である。中央に掘形が円形(径0.6m、深さ0.1m)の地床炉がある。南東辺中央に掘形が矩形(幅0.6m×0.8m、深さ0.1m)の貯蔵穴を持ち、周囲には小礫が敷かれている。四壁沿いに断面U字形(0.15～0.2m、深さ0.05m)の壁溝が巡る。

SH21(図版5) B区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。N-26°-Wの傾きを持ち、幅5.5m×5.7m、床面積31.4㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形(径0.25～0.4m、深さ0.45～0.6m)である。中央に掘形が円形(径0.8m、深さ0.15m)の地床炉がある。南東辺中央に掘形が矩形(幅0.9m×0.8m、深さ0.2m)の貯蔵穴を持ち、両側には小礫が敷かれている。周溝は検出しなかった。床面の上や埋土に炭化木・焼土が比較的多く出土しており、この建物は火災にあっていると思われる。

SH22(図版5) B区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SD106に北隅を切られる。N-44°-Wの傾きを持ち、幅7.4m×7.6m、床面積56.2㎡である。支柱穴の掘形は円形(径0.35～0.45m、深さ0.35～0.65m)で、北隅以外の支柱穴に掘り替えが認められる。中央の地床炉は建て替え後も動かず、掘形が円形(径0.5m、深さ0.2m)である。南東辺中央の貯蔵穴は建て替えに伴い造り替えられている。建て替え前のものは掘形が楕円形(幅1.2m×1.05m、深さ0.35m)、建て替え後のものは掘形が隅丸方形(径1.1m、深さ0.25m)である。貯蔵穴の周辺には小礫を敷く。貯蔵穴のある箇所を除く四周に、地山を削り出した低いベッド状の施設(幅0.8～1.0m、高さ0.1m)がある。床面の上や埋土に炭化木・灰が比較的多く出土しており、火災にあったと思われる。四壁沿いに断面U字形(幅0.1～0.2m、深さ0.05m)の壁溝が巡る。

SH23(図版5) B区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SD106に北東辺を切られる。N-35°-Wの傾きを持ち、幅5.4m×3.4m以上、床面積18.4㎡以上である。支柱穴は4本で、床面の四隅に設けられ、掘形は円形(径0.35～0.4m、深さ0.4～0.5m)である。中央に掘形が円形(径0.8m、深さ0.1m)の地床炉がある。南東辺中央に掘形が隅丸方形(幅1.05m×0.75m、

深さ 0.25m) の貯蔵穴を持ち、周囲に一部小礫が敷かれた痕跡が認められる。貯蔵穴のある箇所を除く四周に、地山を削り出した低いベッド状の施設(幅 0.9～1.05m、高さ 0.1m)がある。ベッド状遺構と床面は造り替えられた痕跡が認められる。四壁沿いに断面 U 字形(幅 0.15～0.2m、深さ 0.05m)の壁溝が巡る。床面の上や埋土に炭化木・灰が比較的多く出土しており、火災にあったと思われる。

SH24(図版 5・8・82) B 区で検出した隅丸方形の竪穴住居である。N-46°-W の傾きを持ち、幅 7.1m × 7.4m、床面積 52.5 m²である。支柱穴は 4 本であるがいずれも掘り替えが認められ、掘形は円形(径 0.25～0.4m、深さ 0.7～0.8m)である。中央に掘形が円形(径 0.7m、深さ 0.1m)の地床炉、南東辺中央に掘形が二段になる隅丸方形(幅 1.35m × 1.3m、深さ 0.4m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面 U 字形(幅 0.15～0.25m、深さ約 0.1m)の壁溝が巡る。貯蔵穴のある箇所を除く四周に、地山を削り出した低いベッド状の施設(幅 0.75～1.15m、高さ 0.06～0.08m)がある。また、北西辺を中心に建物をほぼ半周する、断面逆台形(幅 0.2～0.6m、深さ 0.2～0.3m)の周溝が巡る。周溝と建物の間は 2.6～3.1m である。

SH26(図版 3・10・84) D 区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SB84 に切られ、SH11・20 を切る。N-22°-W の傾きを持ち、幅 4.1m × 3.5m、床面積 14.4 m²である。支柱穴はない。中央に掘形が隅丸方形(幅 0.45m × 0.6m、深さ 0.15m)の地床炉がある。南東辺中央に掘形が隅丸方形(幅 0.5m × 0.6m、深さ 0.1m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面 U 字形(幅 0.1～0.15m、深さ 0.1m)の壁溝が巡る。

SH27(図版 3・9・84) D 区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。N-15°-W の傾きを持ち、幅 6.0m × 5.5m、床面積 33.0 m²である。支柱穴は 4 本で、掘形は円形(径 0.45～0.55m、深さ 0.45m～0.55m)である。中央に掘形が円形(径 0.6m、深さ 0.1m)の地床炉がある。四周に、地山を削り出した低いベッド状の施設(幅 0.9～1.0m、高さ 0.06～0.15m)がある。ベッド状遺構を切って南東辺中央に掘形が円形(径 0.7m、深さ 0.35m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面 U 字形(幅 0.15～0.25m、深さ 0.1m)の壁溝が巡る。

SH28(図版 3・10・84) D 区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH12 を切り、SH36・40 に切られる。N-16°-W の傾きを持ち、幅 6.0m × 5.3m、床面積 31.8 m²である。支柱穴は 4 本であるが、西南辺に沿う 2 箇所の支柱穴は掘り替えられている。掘形は円形(径 0.3～0.6m、深さ 0.3～0.5m)である。中央に掘形が円形(径 0.35m、深さ 0.05m)の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形(幅 0.6m × 0.8m、深さ 0.3m)の貯蔵穴を持つ。一部削平されているが、四壁沿いに断面 U 字形(幅 0.2～0.3m、深さ 0.1～0.15m)の壁溝が巡る。

SH29(図版 4・10・84) D 区南東部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。SH18・30・31 を切り、SB88 に切られる。N-22°-W の傾きを持ち、幅 4.9m × 4.8m、床面積 23.5 m²である。支柱穴・地床炉・貯蔵穴・壁溝は検出しなかった。

SH30(図版 4) D 区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH18・31 を切り、SH29・60 に切られる。N-8°-W の傾きを持ち、幅 5.0m × 5.1m、床面積 25.5 m²である。主

柱穴は4本で、掘形は円形（径0.2～0.4m、深さ0.05～0.1m）である。地床炉・貯蔵穴・壁溝はない。

SH31(図版4) D区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH18を切り、SH29・30・60に切られる。N-22°-Wの傾きを持ち、幅5.3m×5.7m、床面積30.2㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.35～0.45m、深さ0.1m）である。四壁沿いに断面U字形（幅0.1～0.2m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。地床炉・貯蔵穴はない。

SH32(図版1) D区北西部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH19・37を切り、SB75に切られる。N-36°-Wの傾きを持ち、幅3.7m×3.6m以上、床面積13.3㎡以上である。検出した支柱穴は3本で、掘形は円形（径0.45m、深さ0.2～0.45m）である。中央に掘形が楕円形（幅0.55m×0.4m、深さ0.1m）の地床炉がある。東隅に掘形が楕円形（幅0.35m×0.7m、深さ0.5m）の貯蔵穴を持つ。壁沿いに断面U字形（幅0.2～0.25m、深さ0.07m）の壁溝が巡る。

SH33(図版1) D区北西部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH64・66を切り、SB77に切られる。N-66°-Wの傾きを持ち、幅5.4m×4.5m、床面積24.3㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.35～0.45m、深さ0.15～0.4m）である。中央やや北東寄りに掘形が円形（径0.4m、深さ0.05m）の地床炉がある。南西辺中央やや壁から離れて掘形が円形（径0.45m、深さ0.25m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.15m、深さ0.1m）の壁溝が巡る。

SH34(図版3・10・85) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH54・55に切られる。N-63°-Wの傾きを持ち、幅4.8m×5.0m、床面積24.0㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.5m、深さ0.6～0.7m）である。中央に掘形が円形（径0.8m、深さ0.1m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形（幅0.75m×0.7m、深さ0.15m）の貯蔵穴を持つ。壁溝はない。床面の上や埋土に炭・灰・焼土が比較的多く出土しており、火災にあったと思われる。

SH35(図版3・10・85) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。N-28°-Wの傾きを持ち、幅5.1m×5.9m、床面積30.1㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.5～0.6m、深さ0.5～0.6m）である。中央に掘形が楕円形（幅0.65m×0.5m、深さ0.1m）の地床炉がある。北西辺中央に掘形が隅丸方形（一辺0.7m、深さ0.25m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.15m～0.3m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH36(図版3・10・84) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH12・28を切り、SB85に切られる。N-16°-Wの傾きを持ち、幅6.5m×6.2m、床面積40.3㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.35～0.45m、深さ0.25～0.5m）である。中央に掘形が楕円形（幅0.9m×0.75m、深さ0.1m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形（幅0.9m×0.8m、深さ0.6m）の貯蔵穴を持ち、周囲に一部小礫が敷かれた痕跡が認められる。四壁沿いには断面U字形（幅0.2～0.3m、深さ0.1m）の壁溝が巡る。貯蔵穴のある箇所を除く四周に、地山を削り出した低いベッド状の施設（幅0.7m～1.2m、高さ0.05m）がある。

SH37(図版1・85) D区北西部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH19を切り、SH32・52・76、SB75に切られる。N-66°-Wの傾きを持ち、幅4.3m×4.7m、床面積20.2㎡である。主

柱穴は4本で、掘形は円形（径0.25～0.5m、深さ0.2～0.4m）である。中央に掘形が楕円形（幅0.65m×0.55m、深さ0.25m）の地床炉がある。南隅に掘形が円形（径0.55m、深さ0.45m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.1～0.25m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH38(図版3) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SD123、SH49・50に切られる。N-26°-Wの傾きを持ち、幅5.4m×5.5m以上、床面積29.7㎡以上である。主柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.5m、深さ0.4～0.5m）である。中央に掘形が楕円形（幅0.7m×0.5m、深さ0.15m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が円形（径0.8m、深さ0.2m）の貯蔵穴を持ち、周囲に一部小礫が敷かれた痕跡が認められる。四壁沿いには断面U字形（幅0.15～0.25m、深さ0.1m）の壁溝が巡る。

SH39(図版1・11・85) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SD123、SH72・78に切られる。N-26°-Wの傾きを持ち、幅5.6m×5.5m、床面積30.8㎡である。主柱穴は4本であるが、一度掘り替えられている。主柱穴は掘形が円形（径0.3～0.45m、深さ0.2～0.7m）である。中央に掘形が円形（径0.5m、深さ0.15m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形（幅1.1m×0.9m、深さ0.25m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.3m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH40(図版3・11・85) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH28・41を切り、SH56・SE95に切られる。N-23°-Wの傾きを持ち、幅4.8m×4.7m、床面積22.6㎡である。主柱穴は3本検出し、掘形は円形（径0.25～0.45m、深さ0.25～0.45m）である。中央に掘形が円形（径0.7m、深さ0.05m）の地床炉がある。南東辺中央の壁から若干離れた所に掘形が隅丸方形（一辺0.65m、深さ0.25m）の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴がある部分を除いて、四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.25m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH41(図版3) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH40・56に切られる。N-11°-Wの傾きを持ち、幅4.2m×3.7m、床面積15.5㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形（径0.25～0.3m、深さ0.2～0.25m）である。南東辺中央に掘形が隅丸方形（一辺1.1m、深さ0.2m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.2m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH42(図版4) D区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH17・45・46を切る。N-38°-Wの傾きを持ち、幅5.1m×5.7m、床面積29.1㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形（径0.4m、深さ0.2～0.8m）である。四壁沿いに断面U字形（幅0.1～0.25m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH43(図版4・11・85) D区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH14を切る。N-48°-Wの傾きを持ち、幅4.8m×4.9m、床面積23.5㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形（径0.35～0.4m、深さ0.2～0.5m）である。中央に掘形が円形（径0.55m、深さ0.1m）の地床炉、南東辺中央に掘形が円形（径0.6m、深さ0.1m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.25m、深さ0.1m）の壁溝が巡る。

SH44(図版4) D区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH63に切られる。N-18°-W

の傾きを持ち、幅 4.5m × 4.4m、床面積 19.8 m²である。支柱穴は 4 本で、掘形は円形（径 0.4 ~ 0.45m、深さ 0.3 ~ 0.55m）である。四壁沿いに断面 U 字形（幅 0.2m、深さ 0.05m）の壁溝が巡る。

SH45(図版 4) D 区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH17 を切り、SH42 に切られる。N-32°-W の傾きを持ち、幅 7.3m × 7.3m、床面積 53.3 m²である。支柱穴は 4 本で、掘形は円形（径 0.45 ~ 0.55m、深さ 0.15 ~ 0.3m）である。中央に掘形が円形（径 0.7m、深さ 0.45m）の地床炉がある。炉の周りに径 0.2 ~ 0.3m、深さ 0.05m の小穴が 6 箇所放射線状に並んでいるが、性格は不明である。南東辺中央に掘形が隅丸方形（幅 1.5m × 1.3m、深さ 0.4m）の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴のある箇所を除く四周に、地山を削り出した低いベッド状の施設（幅 0.6 ~ 1.1m、高さ 0.1m）がある。四壁沿いには断面 U 字形（幅 0.15 ~ 0.25m、深さ 0.1m）の壁溝が巡る。

SH46(図版 4) D 区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH15・17 を切り、SH42 に切られる。N-25°-W の傾きを持ち、幅 4.4m × 4.4m、床面積 19.4 m²である。支柱穴は 4 本で、掘形は円形（径 0.4 ~ 0.45m、深さ 0.15 ~ 0.2m）である。四壁沿いには断面 U 字形（幅 0.15 ~ 0.25m、深さ約 0.1m）の壁溝が巡る。

SH47(図版 4) D 区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。N-5°-W の傾きを持ち、幅 4.4m × 4.3m、床面積 18.9 m²である。東壁の中央に掘形が楕円形（幅 0.5m × 0.3m、深さ 0.1m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いには断面 U 字形（幅 0.1 ~ 0.2m、深さ 0.05m）の壁溝が巡る。支柱穴はない。

SH48(図版 4) D 区北東部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。SH16 を切り、SB90 に切られる。N-30°-W の傾きを持ち、幅 4.3m × 3.7m、床面積 15.9 m²である。支柱穴は 4 本で、掘形は円形（径 0.3 ~ 0.4m、深さ 0.25 ~ 0.55m）である。南東辺中央に掘形が楕円形（幅 0.9m × 0.6m、深さ 0.1m）の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の周囲に小礫が敷かれる。炉・周溝はない。

SH49(図版 3・11・86) D 区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH38 を切る。N-26°-W の傾きを持ち、幅 4.4m × 3.5m、床面積 15.4 m²である。中央に掘形が楕円形（幅 0.6m × 0.4m、深さ 0.05m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が隅丸方形（幅 0.6m × 0.5m、深さ 0.3m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いには断面 U 字形（幅 0.15 ~ 0.25m、深さ 0.1m）の壁溝が巡る。支柱穴はない。床面に炭が堆積しており、火災にあったと思われる。

SH50(図版 3) D 区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH38 を切る。N-1°-W の傾きを持ち、幅 4.2m × 3.5m、床面積 14.7 m²である。中央に掘形が円形（径 0.3m、深さ 0.15m）の地床炉がある。南辺中央に貯蔵穴を持つ。貯蔵穴は造り替えられている。最初の貯蔵穴は二段の掘形を持ち、一段目の掘形は矩形（幅 0.9m × 0.7m、深さ 0.05m）で、二段目の掘形は西寄りに掘られ、掘形が矩形（幅 0.6m × 0.4m、深さ 0.6m）である。造り替えられた貯蔵穴は掘形が楕円形（幅 0.6m × 0.35m、深さ 0.4m）である。南辺を除く壁沿いに、断面 U 字形（幅 0.1 ~ 0.2m、深さ 0.1m）の壁溝が巡る。支柱穴はない。

SH51(図版 1) D 区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SD122 に切られる。

N-48°-Wの傾きを持ち、幅5.0m×4.5m、床面積22.5㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.5m、深さ0.25～0.35m）である。中央やや南東寄りに掘形が矩形（幅0.7m×1.1m、深さ0.15m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形（幅0.7m×0.55m、深さ0.15m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.25m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH52(図版1) D区北西部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。SH7・37を切り、SH76、SB75に切られる。N-42°-Wの傾きを持ち、幅4.5m×4.7m、床面積21.2㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.35～0.6m、深さ0.15～0.45m）である。炉・貯蔵穴・壁溝はない。

SH53(図版1) D区北西部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。N-48°-Wの傾きを持ち、幅3.3m×3.3m、床面積10.9㎡である。中央に掘形が円形（径0.3mで数センチ凹んだ）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が楕円形（幅0.7m×0.55m、深さ0.15m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形（幅0.1～0.2m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。支柱穴はない。

SH54(図版3) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH34を切る。西半は削平を受ける。N-33°-Wの傾きを持ち、幅4.5m×3.8m以上、床面積17.1㎡以上である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.4m、深さ0.3～0.45m）である。南東辺中央に掘形が円形（径1.0m、深さ0.3m）の貯蔵穴を持つ。壁沿いに断面U字形（幅0.1m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH55(図版3) D区中央部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。SH34を切る。SH54の拡張住居である。西半は削平を受ける。N-33°-Wの傾きを持ち、幅6.5m×5.3m以上、床面積34.5㎡以上である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.4m、深さ0.5～0.7m）である。壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.3m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH56(図版3) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH12・40・41を切り、SH84に切られる。N-27°-Wの傾きを持ち、幅4.5m×5.1m、床面積23.0㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.35m、深さ0.15～0.4m）である。東隅に掘形が楕円形（幅0.35m×0.6m、深さ0.25m）の貯蔵穴がある。四壁沿いに断面U字形（幅0.15～0.25m、深さ0.05m）の壁溝が巡る。

SH57(図版3) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。N-30°-Wの傾きを持ち、幅5.0m×4.3m以上、床面積21.5㎡以上である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.5m、深さ0.15～0.5m）である。南隅の支柱穴の内側に、掘形が二段になる円形（径0.8m、深さ0.7m）の貯蔵穴がある。北西壁と北東壁の約1/2に、断面U字形（幅0.15～0.2m、深さ0.05m）の壁溝が残る。

SH58(図版3・11・86) D区中央部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH12を切る。N-19°-Wの傾きを持ち、幅2.7m×2.7m、床面積7.3㎡以上である。壁溝などの内部施設はない。

SH59(図版4) D区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH44の拡張住居で、SH63に切られる。N-27°-Wの傾きを持ち、幅5.7m×5.5m、床面積31.4㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形（径0.3～0.4m、深さ0.2～0.35m）である。中央に床面が焼かれた痕跡が残る。

南東辺中央に掘形が隅丸方形（一辺 0.7m、深さ 0.2m）の貯蔵穴を持つ。壁溝はない。

SH60(図版 4・11・85) D 区南東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH30・31 を切る。N-12°-W の傾きを持ち幅 4.4m × 4.0m、床面積 17.6 m²である。主柱穴は 4 本であるが、南辺の 2 箇所主柱穴は掘り替えられている。掘形は円形（径 0.3～0.45m、深さ 0.25～0.35m）である。中央には床面が焼かれた痕跡が残る。東壁中央やや南寄りに掘形が矩形（幅 0.6m × 1.0m、深さ 0.2m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面 U 字形（幅 0.15～0.25m、深さ 0.1m）の壁溝が巡る。

SH61(図版 4・11・85) D 区北東部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。SB89 に切られる。N-20°-W の傾きを持ち、幅 4.9m × 5.0m、床面積 24.5 m²である。主柱穴は 4 本で、掘形は円形（径 0.4～0.45m、深さ 0.3～0.4m）である。中央に地床炉が設けられるが、造り替えられている。掘形が円形（径 0.45m、深さ 0.1～0.2m）である。南東辺中央に掘形が隅丸方形（幅 0.7m × 0.5m、深さ 0.2m）の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴の周囲に小礫が敷かれている。四壁沿いに断面 U 字形（幅 0.2～0.25m、深さ 0.1m）の壁溝が巡る。

SH62(図版 4) D 区北東部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。SH16・48 を切り、SB90 に切られる。SH48 の建て替え住居である。N-30°-W の傾きを持ち、幅 5.2m × 5.3m、床面積 27.6 m²である。主柱穴は 4 本で、掘形は円形（径 0.4～0.45m、深さ 0.4～0.45m）である。中央に掘形が円形（径 0.7m、深さ 0.15m）の地床炉がある。南東辺中央に掘形が隅丸方形（一辺 0.7m、深さ 0.25m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面 U 字形（幅 0.1～0.2m、深さ 0.1m）の壁溝が巡る。

SH63(図版 4) D 区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH44・59 を切る。N-18°-W の傾きを持ち、幅 4.7m × 5.2m、床面積 24.4 m²である。主柱穴は 4 本で、掘形が円形（径 0.3～0.5m、深さ 0.35～0.55m）である。中央に掘形が円形（径 0.4m、深さ 0.1m）の地床炉が、南東辺中央に掘形が楕円形（幅 0.55m × 0.5m、深さ 0.3m）の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面 U 字形（幅 0.2～0.25m、深さ 0.15m）の壁溝が巡る。

SH64(図版 1) D 区北西部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。SH66 を切り、SH33、SB77 に切られる。N-81°-W の傾きを持ち、幅 3.1m × 2.8m、床面積 8.7 m²である。四壁沿いに断面 U 字形（幅 0.15m、深さ 0.05m）の壁溝が巡る。主柱穴はない。

SH65(図版 1) D 区北西部で検出した、隅丸方形の竪穴住居である。建物の南隅のみの検出である。N-56°-W の傾きを持つ。詳細は不明。

SH66(図版 1) D 区北西部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH33・64、SB77 に切られる。N-66°-W の傾きを持ち、幅 5.7m × 4.8m、床面積 27.4 m²である。主柱穴は 1 箇所だけ検出した。中央に床面が焼かれた痕跡が残る。壁沿いに断面 U 字形（幅 0.15m、深さ 0.05m）の壁溝が巡る。

SH67(図版 2) D 区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。北辺は調査外のため全容は不明。また全体に削平を受けている。SH82 に切れ、SH68～70 を切る。N-15°-W の傾きを持ち、幅 6.4m × 4.0m 以上、床面積 25.6 m²以上である。主柱穴は南辺の 2 箇所だけ検出した。掘形は円形（径 0.35～0.45m、深さ 0.4～0.55m）である。南東辺中央に掘形が円形（径 0.7m、

深さ0.15m)の貯蔵穴を持つ。壁沿いに断面U字形(幅0.15～0.25m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。

SH68(図版2) D区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。全体に削平を受けている。SH67・82に切られ、SH69・70を切る。N-40°-Wの傾きを持ち、幅5.7m×5.7m、床面積32.5㎡である。支柱穴は3箇所だけ検出した。掘形は円形(径0.25～0.45m、深さ0.3～0.45m)である。中央に掘形が円形(径0.6m、深さ0.1m)の地床炉がある。壁沿いに断面U字形(幅0.1～0.15m、深さ0.15m)の壁溝が巡る。

SH69(図版2) D区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。全体に削平を受けている。SH67・68・82に切られ、SH70を切る。N-31°-Wの傾きを持ち、幅4.7m×4.5m以上、床面積21.2㎡以上である。支柱穴は3箇所だけ検出した。掘形は円形(径0.3～0.4m、深さ0.45～0.55m)である。中央に掘形が円形(径0.6m、深さ0.1m)の地床炉がある。壁沿いに断面U字形(幅0.1～0.2m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。

SH70(図版2) D区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。全体に削平を受けて、支柱穴と周溝の東隅を検出したのみである。SH67～69・82に切られる。N-30°-Wの傾きを持つ。支柱穴は3箇所だけ検出した。掘形は円形(径0.2～0.35m、深さ0.25～0.35m)である。壁溝は断面U字形(幅0.1m、深さ0.05m)である。

SH71(図版1・12・86) D区北西部で検出した方形の竪穴住居である。SH7を切る。N-10°-Wの傾きを持ち、幅5.8m×5.3m、床面積30.7㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形(径0.35～0.45m、深さ0.4～0.5m)である。北壁中央に馬蹄形のカマドが造りつけられる。南壁中央の西寄りに掘形が隅丸方形(幅0.9m×0.75m、深さ0.3m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形(幅0.15～0.2m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。

SH72(図版1・12・86) D区中央部で検出した方形の竪穴住居である。SH39を切り、SH78に切られる。N-45°-Wの傾きを持ち、幅5.2m×4.7m、床面積24.4㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形(径0.25～0.4m、深さ0.5～0.6m)である。北壁中央に馬蹄形のカマドが造りつけられる。南東壁中央の東寄りに掘形が楕円形(幅1.0m×0.55m、深さ0.3m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形(幅0.2～0.25m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。床面に焼土・炭化材が出土しており、火災にあったと思われる。

SH73(図版2) D区北東部で検出した方形の竪穴住居である。N-30°-Wの傾きを持ち、幅5.4m×5.9m、床面積31.9㎡である。支柱穴は4本で、掘形は円形(径0.35～0.45m、深さ0.5～0.65m)である。北西辺中央で、上部が削平されたカマドの基底部を検出した。壁溝・貯蔵穴はない。

SH74(図版12・86) H区で検出した方形の竪穴住居である。N-10°-Wの傾きを持ち、幅4.1m×3.9m、床面積16.0㎡である。検出した支柱穴は3本で、掘形は円形(径0.25～0.35m、深さ0.3～0.35m)である。西壁中央に馬蹄形のカマドが造りつけられる。西壁沿いかマドの南側に掘形が円形(径0.65m、深さ0.15m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形(幅0.2～0.25m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。

SH76(図版 1・12・86) D区北西部で検出した方形の竪穴住居である。SH7・52を切る。N-42°-Wの傾きを持ち、幅4.6m×3.8m、床面積17.5㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形(径0.35～0.5m、深さ0.2～0.5m)である。南西辺中央に馬蹄形のカマドが造りつけられる。四壁沿いに断面U字形(幅0.15～0.25m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。

SH78(図版 1・12・86) D区中央部で検出した方形の竪穴住居である。SH39・72を切る。N-85°-Wの傾きを持ち、幅6.8m×6.2m、床面積42.2㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形(径0.3～0.6m、深さ0.2～0.4m)である。西壁中央に馬蹄形のカマドが造りつけられる。東壁中央に掘形が楕円形(幅0.55m×0.8m、深さ0.3m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形(幅0.2～0.35m、深さ0.15m)の壁溝が巡る。

SH79(図版 3・12・83、 図 9) D区中央部で検出した方形の竪穴住居である。N-6°-Wの傾きを持ち、幅6.0m×5.6m、床面積33.6㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形(径0.4～0.5m、深さ0.35～0.5m)である。北壁中央に、煙道が残る馬蹄形のカマドが造りつけられる。南壁中央やや西寄りに掘形が隅丸方形(一辺0.8m、深さ1.2m)の貯蔵穴を持つ。四壁沿いに断面U字形(幅0.15～0.3m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。

SH80(図版 1・86) D区中央部で検出した方形の竪穴住居である。N-27°-Wの傾きを持ち、幅5.9m×5.7m、床面積33.6㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形(径0.4～0.55m、深さ0.35～0.6m)である。北西辺中央に馬蹄形のカマドが造りつけられる。壁溝・貯蔵穴はない。

SH81(図版 2) D区北東部で検出した方形の竪穴住居である。N-30°-Wの傾きを持ち、幅4.6m×4.7m、床面積21.6㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形(径0.4～0.6m、深さ0.4～0.5m)である。北西辺中央で、造りつけカマドの東の袖を検出した。南東辺中央に掘形が楕円形(幅1.1m×0.7m、深さ0.1m)の貯蔵穴がある。壁溝はない。

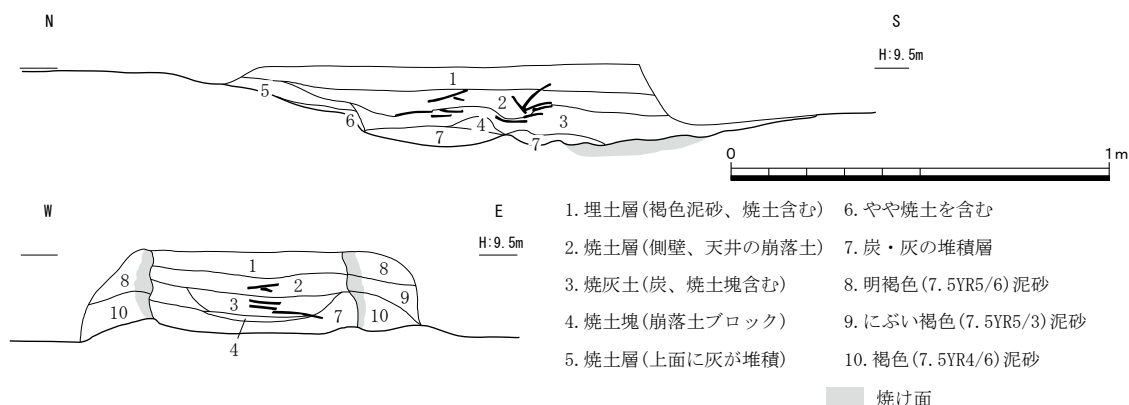


図9 SH79 カマド断面図 (1:20)

SH82(図版2) D区北東部で検出した隅丸方形の竪穴住居である。SH67～70を切る。N-30°-Wの傾きを持ち、幅6.4m×6.4m、床面積41.0㎡である。主柱穴は4本で、掘形は円形(径0.5～0.6m、深さ0.35～0.5m)である。北西辺中央に馬蹄形のカマドが造りつけられる。南東辺中央に掘形が円形(径0.9m、深さ0.2m)の貯蔵穴がある。四壁沿いに断面U字形(幅0.15～0.3m、深さ0.1m)の壁溝が巡る。

(2) 掘立柱建物

SB13(図版4・13・87) D区南東隅で検出した2間×3間の掘立柱建物である。N-28°-Wの傾きを持ち、桁行5.3m、梁間4.2m、床面積22.2㎡である。両妻の中央の柱穴は内側に入り込む。柱穴の掘形は円形(径0.4～0.7m、深さ0.2～0.4m)である。

SB25(図版5) B区で検出した2間×2間の掘立柱建物である。N-52°-Wの傾きを持ち、桁行3.0m、梁間3.0m、床面積9.0㎡である。両妻の中央の柱穴は深さ0.06mと浅く、柱当たりはない。他の柱穴の掘形は円形(径0.25～0.4m、深さ0.3～0.35m)である。

SB75(図版1・13・87) D区北西部で検出した2間×2間で中央に2本の束柱を有する掘立柱建物である。SH19・32・37・52を切る。N-31°-Wの傾きを持ち、桁行3.3m、梁行3.3m、床面積10.9㎡である。柱穴の掘形は円形(径0.5～0.8m、深さ0.25～0.4m)で、束柱はやや小さく径0.45m、深さ0.25mである。

SB77(図版1) D区北西部で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物である。SH33・64～66を切る。N-35°-Wの傾きを持ち、桁行3.3m、梁行3.3m、床面積10.9㎡である。柱穴は掘形が円形(径0.2～0.5m、深さ0.15～0.3m)である。

SB83(図版1・13・87) D区中央部で検出した1間×3間の掘立柱建物である。SH9を切る。N-39°-Wの傾きを持ち、桁行4.6m、梁間3.8m、床面積17.5㎡である。柱穴の掘形は円形(径0.45～0.6m、深さ0.45～0.6m)である。

SB84(図版3・13・87) D区中央部で検出した3間×4間の掘立柱建物である。SH11・26・56を切る。N-23°-Wの傾きを持ち、桁行5.9m、梁間4.2m、床面積24.8㎡である。柱穴の掘形は円形(径0.35～0.6m、深さ0.15～0.25m)である。

SB85(図版3・87) D区中央部で検出した2間×3間の掘立柱建物で、南から二番目の柱列の間に仕切り柱を持つ。SH36を切る。N-24°-Wの傾きを持ち、桁行4.0m、梁間3.7m、床面積14.8㎡である。柱穴の掘形は円形(径0.2～0.35m、深さ0.15～0.25m)である。

SB86(図版3) D区中央部で検出した1間×2間の掘立柱建物である。N-28°-Wの傾きを持ち、桁行3.4m、梁間1.7m、床面積5.8㎡である。柱穴の掘形は円形(径0.3～0.5m、深さ0.25～0.4m)である。

SB87(図版3) D区中央部で検出した1間×2間の掘立柱建物である。N-38°-Wの傾きを持ち、桁行3.7m、梁間3.5m、床面積13.0㎡である。柱穴の掘形は円形(径0.25～0.5m、深さ0.15～0.5m)である。

SB88(図版4) D区南東部で検出した2間×3間の掘立柱建物である。東側の桁行に比べて

西側の桁行が長くて、平面が台形を呈する。N-5°-Eの傾きを持ち、桁行4.3m、梁間3.2m、床面積12.7㎡である。柱穴の掘形は円形（径0.25～0.3m、深さ0.15～0.5m）である。

SB89(図版4・13・87) D区北東部で検出した2間×2間の掘立柱建物である。SH61を切る。N-25°-Wの傾きを持ち、桁行3.15m、梁間3.25m、床面積10.2㎡である。柱穴の掘形は隅丸方形（一辺0.4～0.5m、深さ0.25～0.4m）である。

SB90(図版4・87) D区北東部で検出した2間×3間の掘立柱建物である。SH16・48・62を切る。N-20°-Wの傾きを持ち、桁行5.0m、梁間3.5m、床面積17.5㎡である。柱穴の掘形は円形（径0.3～0.4m、深さ0.15～0.55m）である。

SB91(図版4) D区北東部で検出した2間×2間の掘立柱建物である。SH59を切る。N-23°-Wの傾きを持ち、桁行4.3m、梁間3.0m、床面積12.9㎡である。柱穴の掘形は隅丸方形（一辺0.35～0.5m、深さ0.25～0.4m）である。

SB92(図版4・13・87) D区南東部で検出した1間×2間の掘立柱建物である。N-78°-Wの傾きを持ち、桁行4.6m、梁間2.6m、床面積12.0㎡である。柱穴の掘形は円形（径0.4～0.5m、深さ0.3～0.45m）である。

SB93(図版4) D区南東部で検出した2間×3間の掘立柱建物である。N-78°-Wの傾きを持ち、桁行3.2m、梁間2.5m、床面積8.0㎡である。柱穴の掘形は円形（径0.3～0.5m、深さ0.25～0.45m）である。SB92と南・北柱筋を揃える。

(3) 井戸

SE94(図版1) D区北西部、SD122の東岸で検出した掘形が円形（径1.75～2.05m、深さ1.6m）の素掘り井戸である。

SE95(図版3・89) D区の中央部で検出した掘形が円形（径1.35～1.45m、深さ1.05m）の素掘りの井戸である。ほぼ中位の堆積層から土師器の甕・高杯が比較的まとまって出土している。

(4) 土器棺墓

SX96(巻首図版3、図版14・88) E1区、SD103とSD125に挟まれた地点で検出した、2個の壺を合わせ口に横臥させて埋納した土器棺墓である。掘形は楕円形（幅0.6m×0.45m、深さ0.2m）である。

(5) 方形周溝墓

SX97(巻首図版3、図版14・88) E1区、SX96の南に隣接して検出した。東辺と東南隅を欠いているが、断面U字形（幅0.6～0.9m、深さ0.2～0.3m）の溝が巡る。規模は東西7.8m、南北7.2mである。中央に矩形の浅い土壌を検出した。

(6) 土壌

土師器の高杯をまとめて埋納した土壌を2箇所検出した。いずれも、河川に近接した場所で検出している。

SK99(巻首図版3) E1区、SD124の西岸で検出したが、掘形が不明瞭なため、規模は不明で

ある。

SK100(図版 14・89) C1区、SD127の東岸で検出した。掘形は楕円形(幅1.7m×0.85m、深さ0.1m)である。出土した高杯は二次焼成を受けている。

(7) 溝

SD98(図版 1・89) D区北西部で、河川(SD123)の屈曲部に沿って検出した弧状の溝である。肩部は二段になり、断面U字形(幅7.0～8.0m、深さ1.5～1.7m)である。整理箱にして約400箱に及ぶ多量の土器が出土した。

SD101(図版 3) D区中央部で検出した東西に走る溝である。東端でほぼ直角に屈曲して北方にのびる。断面は逆台形(幅3.5～4.5m、深さ約1.2m)である。

SD102(図版 2・4) D区北東部の居住区の東端に沿って検出した溝である。北西から南東にのびる。断面U字形(幅0.6～1.5m、深さ0.1～0.3m)である。

SD103(巻首図版 3) D区南辺中央部からE1区の北東部で検出した溝である。SD123・125に先行する溝である。断面U字形(幅8.0～11.0m、深さ2.0～2.3m)である。

SD104(巻首図版 3) A区の北東部でほぼ南北に流れていたものが途中で、約45°屈曲し南東に流れの方向を変える。断面U字形(幅2.9～4.5m、深さ0.2～0.3m)である。

SD105(巻首図版 3) A区の中央部を北西から南東に流れる溝である。断面U字形(幅0.8～1.3m、深さ0.1m)である。

SD106(図版 5) B区の北西部から始まるものと北東から大きく湾曲したものが中央で合流して、南東にのびる溝である。断面U字形(幅3.5～9.5m、深さ1.1～1.6m)である。

SD107(巻首図版 3) C1区で検出した溝である。西肩部のみの検出で、幅は不明。深さは2.0mである。

SD108(巻首図版 3) SD125から分流した溝で、河川に沿ってE1区からC2区までのびる。断面は逆台形(幅1.5～2.5m、深さ0.4～0.6m)である。

SD109(図版 6) E2区北西部からF2区南西部にかけて検出した溝で、水田の畦畔と同じ北西から南東にのびる。断面U字形(幅1.5～3.5m、深さ0.2～0.4m)である。

SD110(図版 6) E2区の南西部からF1区の北東部にかけて検出した溝で、水田の畦畔と同じ北西から南東にのびる。断面U字形(幅3.5～4.5m、深さ0.1～0.3m)である。

SD111(図版 6) F1区・F2区・C2区の中央部をほぼ東西にのびる溝である。断面U字形(幅3.5～4.5m、深さ0.5～0.8m)である。

SD112(図版 6) F1区の西辺中央から東に流れ、途中で約45°屈曲し南東にのびる溝で、G3区の北東部まで続く。断面U字形(幅2.0～4.0m、深さ0.2～0.4m)である。

SD113(図版 6) F1区の南半で検出したほぼ東西にのびる溝である。断面U字形(幅3.5～4.5m、深さ0.5～0.8m)である。

SD114(図版 7) G3区南西部を北西から南東にのびる溝である。断面U字形(幅1.5～2.5m、深さ0.2～0.6m)である。

SD115(図版 7) G1 区南西部から G2 区北東部にかけて検出した溝で、北西から南東にのびる。断面 U 字形 (幅 1.5 ~ 2.5m、深さ 0.5m) である。

SD116(図版 7) G1 区南西部から G2 区北東部にかけて検出した溝で、北西から南東にのびる。断面 U 字形 (幅 4.0 ~ 6.0m、深さ 1.0 ~ 1.3m) である。

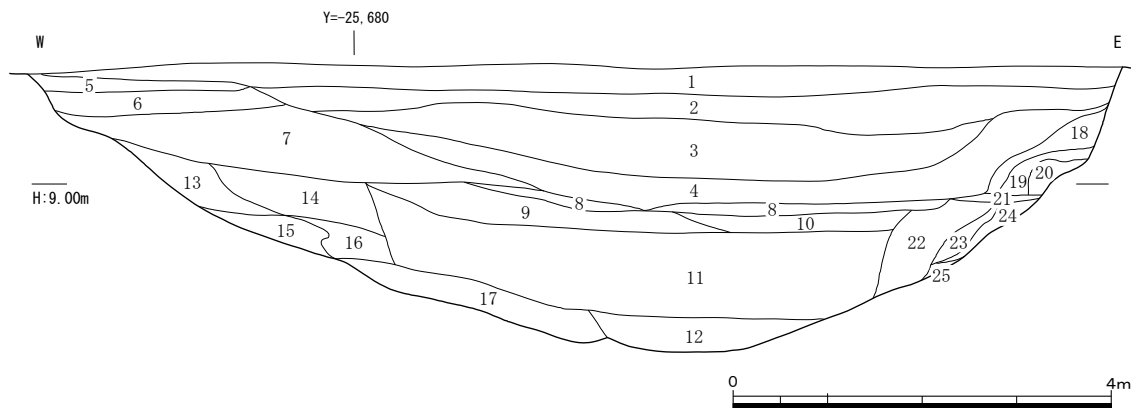
SD117(図版 7) G2 区北辺中央で検出した溝で、SD116 と合流する。断面 U 字形 (幅 2.5 ~ 5.0m、深さ 1.0m) である。

SD118(図版 7) G2 区北西隅から南東にのびる、途中で約 45° 屈曲し南に流れを変える溝である。断面 U 字形 (幅 3.5 ~ 5.0m、深さ 0.3 ~ 0.5m) である。

(8) 河 川

調査区内の北東部を蛇行しながら、北西から南東方向にのびる河川である。なお、河川は本来一本のものであるが、分流と合流を繰り返すのと、長大な流路の中で遺物出土位置を小範囲に限定するために、各区毎に遺構番号を付した。埋土の基本層序を、SD125 を例にとって説明する。1 ~ 8 層は洪水以後 7 世紀前半までの堆積層、9 ~ 12 層は砂礫を主体とした 6 世紀前半の洪水による堆積層、13 ~ 25 層は布留期から洪水までの堆積層である。

SD122(図版 1・3) D 区の西から南東に屈曲し、D 区南端で SD123 と合流する。断面 U 字形 (幅



- | | | |
|-----------------------|------------------------|--------------------|
| 1 オリーブ灰色(2.5GY5/2)泥砂 | 11 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂礫 | 21 暗青灰色(10G1/4)粘土 |
| 2 オリーブ灰色(2.5GY5/1)泥砂 | 12 褐色(10YR4/4)砂礫 | 22 暗青灰色(10BG4/1)砂泥 |
| 3 灰色(10Y5/1)泥砂 | 13 オリーブ灰色(10YR4/2)泥砂 | 23 暗灰色(7.5GY6/1)泥砂 |
| 4 暗緑色(5G4/1)粘土 | 14 灰オリーブ色(7.5Y4/2)砂 | 24 暗青灰色(5BG1/3)砂泥 |
| 5 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)泥砂 | 15 オリーブ灰色(5GY5/1)粘土 | 25 緑灰色(10GY5/1)砂泥 |
| 6 暗オリーブ灰色(5GY3/1)泥砂 | 16 暗オリーブ灰色(2.5GY5/1)泥砂 | |
| 7 暗オリーブ灰色(5GY5/1)泥砂 | 17 暗緑灰色(7.5GY4/1)粘土 | |
| 8 暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)粘土 | 18 緑灰色(10GY6/1)粘土 | |
| 9 にぶい黄色(2.5Y6/2)砂礫 | 19 暗青灰色(5BG1/4)砂泥 | |
| 10 オリーブ黄色(5Y6/3)砂礫 | 20 暗青灰色(5BG4/1)粘土 | |

図10 SD125 土層断面図(E1区北壁断面)(1:80)

11.5～15.0m、深さ2.5～4.8m)である。

SD123(図版1～4) D区の北辺から屈曲しながら南東へのび、D区南端中央でSD122と合流する。断面U字形(幅7.0～15.0m、深さ2.0～3.1m)である。

SD124(巻首図版3) E1区で検出した、SD125から分流した溝である。断面U字形(幅4.5～12.5m、深さ0.5～2.7m)である。

SD125(巻首図版3、図10) E1区で、SD122とSD123が合流し一本になる河川である。断面U字形(幅8.5～15.0m、深さ2.4～3.0m)である。

SD126(図版5) B区南半で検出した河川で、北西から南に湾曲し、C区へのびる。一部は分流して東へのびる。断面U字形(幅27m、深さ2.5～2.8m)である。

SD127(巻首図版3) C1区で検出した南へのびる河川で、断面U字形(幅14～21.5m、深さ2.5～3.0m)である。

SD128(巻首図版3) C2区で検出した河川である。南東にのびる。断面U字形(幅5.5～9.0m、深さ2.3m)である。

(9) 堰

堰はいずれも河川・溝に直交方向に造られる。堰の構造は、溝底に横木を置き、これを両側から斜めに打ち込んだ杭で固定し、その上に1～2本の丸太材を組み合わせて基礎とする。その上に木の枝・草・粘土を交互に積み重ねて造られる。

SX119(図版7・91) G2区で検出した。SD117がSD116に合流する手前に設けられた堰である。幅1.0m、長さ1.5m、高さ0.5mである。

SX120(図版7・91) G2区で検出した。SD116に設けられた堰で、幅1.5m、長さ3.0m、高さ0.6mである。

SX121(図版7) G2区で検出した。SD116の中に設けられた堰で、SX120の下流にある。幅1.5m、長さ2.5m、高さ0.6mである。

SX129(図版1・91) D区で検出した。SD122の屈曲部の手前に設けられた堰で、幅2.0m、長さ6.0m、高さ1.5mである。

SX130(巻首図版3、図版91) E1区で検出した。SD125からSD124の分岐部に設けられた堰で、SD124への水の流れを容易にしている。幅3.5m、長さ10.0m、高さ1.0mである。

SX131(巻首図版3、図版90) E1区で検出した。SD125に設けられた堰で、SD108に水を流すためのものである。幅2.0～5.0m、長さ14.0m、高さ1.0mである。

SX132(巻首図版3、図版91) C1区で検出した。SD127に設けられた堰で、幅1.5m、長さ10.0m、高さ0.9mである。

SX133(巻首図版3、図版91) C1区で検出した。SD127に設けられた堰で、幅1.5m、長さ7.0m、高さ1.0mである。

SX134(巻首図版3、図版91) C1区で検出した。SD127に設けられた堰で、幅2.5m、長さ5.5m、高さ0.9mである。

SX135(巻首図版3) C1区で検出した。SD127に設けられた堰で、幅1.5m、長さ4.5m、高さ0.8mである。

(10) 道路状遺構

SF136(巻首図版3、図版1・3) D区の北西部からC2区の南東部にかけて検出した道路状遺構である。北西から南東にのび、約340m分検出した。道路幅は7.5～7.7mで、両側に側溝を持つ。東側溝は断面U字形(幅0.3～0.6m、深さ0.1～0.3m)、西側溝は断面U字形(幅0.4～0.5m・深さ0.1～0.2m)である。

(11) 水田(図版6・7・92)

居住区の南側の標高7.8～8.5mの湿潤な地帯で、水田を上下2面検出した。

下層の水田はE1区で検出した。約3.0m間隔に東西方向に長く畦畔が設けられている。通常の畦畔は幅0.3～0.5m、高さ0.05mであるが、幅が1.0mになる大畦畔(SL137)もある。南北方向にも畦畔が設けられ小区画の水田の可能性はある。

上層の水田はE～G区で検出した。北西から南東に下がる緩傾斜地に造られている小区画水田である。傾斜方向に平行して、一定の間隔で基準になる高く太い大畦畔(SL138～145)を設け、さらに、その間を3～4本の小さい畦畔でほぼ等間隔に分割し、最後に直交する方向に畦畔を設けて水田を完成させている。大畦畔は断面台形(幅0.9～1.1m・高さ0.15m)、小畦畔も断面台形(幅0.3～0.5m、高さ0.05～0.1m)である。また、一部では横方向にも大畦畔(SL146～150)が設置されており、方形の区画が存在した可能性もある。F2区の東南隅で検出した湾曲した大畦畔(SL150)の東側では水田は検出しなかった。この畦畔は耕作地と非耕作地の境界を画している。

1筆の面積は5.0～150㎡、形状は方形、長方形、亀甲形を呈する。F区南辺のSL139・143・147・150に囲まれた水田に亀甲形が目立つ。また、E1区のSL138・139・146に3方を囲まれた地区の水田は、北に行くほど畦畔が東西方向に近い傾斜を持ち、1筆毎のバラツキも大きい。

傾斜方向に平行して水田に給排水するための溝が掘られている。E・F区のSL139の南にSD109が、G3区のSL145の南にはSD114が付属している。これらの溝から直接水田に給排水した施設は検出しなかったが、所々に水口と思われる畦畔が途切れている箇所を検出した。

南辺の低位置にある水田は洪水によって、厚さ0.05～0.1mの砂礫層に覆われている。砂礫層に覆われた水田から、大小さまざまな人の足跡を検出した。また、牛の足跡も検出しており、牛が耕作や運搬に使用されていたことがうかがえる。

(12) 小穴群(巻首図版3、図版2・4・92)

C～D区の居住区と水田地帯の間のやや乾燥した微高地沿いで小穴群を検出した。SD102の両側、SD125とSD108の西辺の長さ約350m、幅20～50mに及ぶ地帯2箇所を検出した。各小穴は不整形(径0.3～0.4m、深さ約0.1m)で底面が凸凹している。小穴群には長く線状に続くものと、短く筋状に3.0～6.0m並ぶものがある。E1区の南東では、筋状に並ぶ小穴群の間に浅い溝を検出した。

(13) 畝状遺構（巻首図版 3・図版 80-1）

C1 区北辺の SD108 と SD127 の間、C1 区南端の SD108 の西辺で畝状の遺構を検出した。畝状遺構は幅 0.5 ～ 0.7m で、断面 U 字形（長さ 2.5 ～ 13.0m、幅 0.3 ～ 0.4m、深さ 0.1m）の溝に挟まれており、等間隔に並んでいる。

4 長岡京期の遺構

(1) 道路

SF201(東二坊大路)(図版 18・19・94・95) 南北方向の道路で、E1 区・E2 区・F1 区で東側溝、G1・2 区で東・西両側溝 (SD207・206) を検出した。西側溝は七条条間小路交差点から南 115m の地点で止まり、東側溝は南 145m の地点まで検出した。路面幅は約 24m、両側溝心々距離は約 24.7m である。両側溝は断面 U 字形（幅 0.5 ～ 1.0m、深さ 0.2 ～ 0.5m）で、埋土は灰色砂泥である。東側溝は、SD285 合流部の南北では若干広い。路面上で検出した遺構には、七条三坊一町西側で遺物を包含する落込み、二町西側で土壇墓、三町西側で土壇墓・埋納遺構がある。また、G1 区では路面上に部分的に砂礫層が広がり、舗装と推定した。路面は全長 460m 検出し、北端と南端の比高差は 1.8m である。

SF202(東三坊坊間西小路)(図版 15・97) D 区・E1 区で検出した南北方向の道路である。東・西両側溝 (SD209・208) は、六条条間南小路交差点から南 55m の地点まで検出し、西側溝は六条大路北側溝交差部で止まる。路面幅は約 8.7m、両側溝心々距離は約 9.2m である。両側溝は断面 U 字形（幅 0.5 ～ 1.0m、深さ約 0.2m）で、埋土は暗灰色泥砂である。

SF203(六条条間南小路)(図版 15・16・97) D 区で検出した東西方向の道路である。南・北両側溝 (SD211・210) は、東三坊坊間西小路交差点から東 12m の地点まで検出した。路面幅は約 8.3m、両側溝心々距離は 9.0 ～ 9.5m である。両側溝は断面 U 字形（幅 0.4 ～ 1.5m、深さ約 0.2m）で、埋土は灰色粘土である。南側溝 (SD211) は四町中央部から西側は東側に比べ広い。

SF204(六条大路)(巻首図版 4・図版 98) E1・2 区で検出した東西方向の道路である。南・北両側溝 (SD213・212) は、東二坊大路交差点から東 12m の地点まで検出し、それ以东は北側溝のみで、東三坊坊間西小路交差部で止まる。路面幅は約 24m、両側溝心々距離は約 24.6m である。北側溝は、四町南西部宅地南側では断面 U 字形（幅 1.0 ～ 1.3m、深さ約 0.5m）であるが、以东は狭く浅い。埋土は黄灰色砂泥である。南側溝は断面 U 字形（幅 0.7m、深さ 0.2m）で、埋土は灰色砂泥である。

SF205(七条条間小路)(図版 19・102) G1 区で検出した東西方向の道路である。南・北両側溝 (SD215・214) は、東二坊大路交差点西側では検出したが、以东はない。路面幅は約 9.4m、両側溝心々距離は約 9.8m である。両側溝は断面 U 字形（幅 0.4m、深さ約 0.2m）で、埋土は灰色砂泥である。

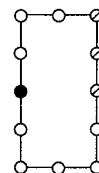
調査地区	遺構番号	棟方向	桁行間数	梁間間数	桁行総長 (m)	梁間総長 (m)	面積 (㎡)	備 考
六条三坊三町	SB216	南北	4	2	9.2	4.8	44.16	
	SB217	南北	2	2	4.3	3.6	15.48	東側拡張
	SB218	南北	2	2	4.3・4.7	4.4	19.8	間仕切りあり
六条三坊四町 北側	SB219	南北	3	2	6.0	4.1	24.6	
	SB220	東西	3	2	6.0	3.8	22.8	南1間張り出し
六条三坊四町 南側	SB221	南北	5	2	13.5	5.2	70.2	間仕切りあり
	SB222	南北	2	1	4.2	1.6	6.72	
	SB223	東西	4	2	8.7	4.5・4.8	40.46	間仕切りあり
	SB224	東西	5	2	11.5	6.7	77.05	南廂
	SB225	南北	5	2	10.9	4.2	45.78	間仕切りあり
	SB226	東西	3	2	7.1	7.8	55.38	南廂
	SB227	東西	3	2	7.0	4.7	32.9	
	SB228	南北	2	1	3.9	2.2	8.58	
	SB229	南北	1	1	3.5	2.2	7.7	
	SB230	東西	3	2	5.4	4.5	24.3	
	SB231	南北	3	1	6.6	3.0	19.8	
	SB232	南北	3	1	6.1	4.3	26.23	西廂
	SB233	南北	2	2	4.5	3.8	17.1	
	SB234	南北	2	2	4.3	3.9	16.77	
	SB235	南北	2	2	5.5	3.7	20.35	
	SB236	南北	4	2	7.0	3.6	25.2	
	SB237	東西	4	2	9.7	8.0	77.6	南廂、身舎東側甕土塀
	SB238	南北	3	2	5.0	4.8	24.0	
六条三坊五町	SB246	南北	3	2	6.6	4.8	31.68	東側拡張
七条三坊一町	SB239	東西	3	2	6.2	3.7	22.94	
	SB240	南北	3	2	6.1	3.9	23.79	
	SB241	東西	5	2	10.0	3.8	38.0	間仕切りあり
	SB242	東西	3	2	6.3・6.9	6.5	42.9	南廂、間仕切りあり
	SB243	東西	2	2	4.5	4.1	18.45	
	SB244	東西	2	2	4.3	4.2	18.06	
	SB245	南北	3	2	4.4	3.0	13.2	

表3 長岡京期掘立柱建物一覧表

(2) 掘立柱建物^{註2}

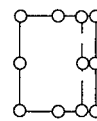
1) 六条三坊三町(D区)

SB216(図版16・96) 三町南部中央で検出した建物である。東西2間(4.8m)・南北4間(9.2m)の南北棟である。桁行方向の柱間は2.3m等間、梁間方向の柱間は2.4m等間である。身舎の柱穴掘形は、方形(一辺0.7~0.9m、深さ約0.3m)である。

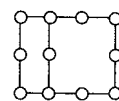


西桁行柱筋はSD208 中心から西 59.8m、北妻柱筋はSD210 中心から北 28.7m に位置する。

SB217(図版 16・96) 三町南部中央で検出した建物である。東西 2 間 (3.6m)・南北 2 間 (4.3m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.0m・2.3m、梁間方向の柱間は東から 1.5m・1.8m である。桁行東柱筋を 0.3m 東に造り替え、規模を拡大して建て替える。身舎の柱穴掘形は、不定形 (一辺約 0.4m、深さ約 0.4m) である。

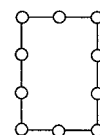


SB218(図版 16・96) 三町南部中央で検出した建物である。東西 2 間 (4.4m)・南北 2 間 (東 4.3m、西 4.7m) の東西棟である。建物の平面形は、台形を呈する。桁行方向の柱間は北から 2.1m・2.2m、梁間方向の柱間は東から 2.2m・2.2m である。間仕切り柱が梁間西 1 間のほぼ中央に並び、建物を梁間 1.5 間と 0.5 間に分ける。身舎の柱穴掘形は、不定形 (一辺 0.4～0.5m、深さ約 0.3m) で、間仕切り柱筋の柱穴掘形は (一辺約 0.3m、深さ約 0.3m) 小さい。

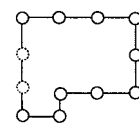


2) 六条三坊四町北西部 (D 区)

SB219(図版 16・96) 四町北西部で検出した建物である。東西 2 間 (4.1m)・南北 3 間 (6.0m) の南北棟である。桁行方向の柱間は 2.0m 等間、梁間方向の柱間は東から 2.0m・2.1m である。身舎の柱穴掘形は、方形または不定形 (一辺約 0.4m、深さ 0.2～0.4m) である。建物方位は、北で東に若干偏する。西桁行柱筋はSD208 中心から西 93.4m に位置する。



SB220(図版 16・96) 四町北西部で検出した建物である。東西 3 間 (6.0m)・南北 2 間 (3.8m) の東西棟である。南桁行西端 1 間に 1 間分の張り出しが付く。桁行方向の柱間は東から 2.1m・2.2m・1.7m、梁間方向の柱間は 1.9m 等間で、南張り出しは 0.9m である。身舎の柱穴掘形は、不定形 (一辺約 0.3m、深さ約 0.2m) である。建物方位は、SB219 と同様に北で東に若干偏する。北桁行柱筋は、SB219 北妻柱筋に揃える。



3) 六条三坊四町南西部 (E1 区)

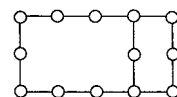
SB221(図版 17・98・99) 四町南西部西側で検出した建物である。東西 2 間 (5.2m)・南北 5 間 (13.5m) の南北棟である。桁行方向の柱間は 2.7m 等間、梁間方向の柱間は 2.6m 等間である。間仕切り柱は桁行北から 3 間目中央に立ち、桁行 3 間と 2 間に分ける。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺約 0.5m、深さ約 0.4m) である。柱穴の重複関係から、SB235 に切られる。



SB222(図版 17・98・99) 四町南西部西側で検出した建物である。東西 1 間 (1.6m)・南北 2 間 (4.2m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.0m・2.2m、梁間方向の柱間は 1.6m である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺約 0.5m、深さ約 0.4m) である。柱穴の重複関係から、SB235 に切られる。東桁行柱筋柱穴は、SB224 西妻柱筋柱穴にほぼ揃う。北妻柱筋は、SD212 中心から北 16.4m に位置する。

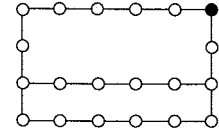


SB223(図版 17・99) 四町南西部南西隅で検出した建物である。東西 4 間 (8.7m)・南北 2 間 (西側 4.5m、東側 4.8m) の東西棟である。建物平面形は台形



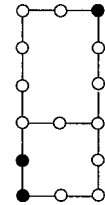
を呈する。桁行方向の柱間は東から 2.4m・2.0m・2.1m・2.2m、梁間方向の柱間は北から 2.4m 等間である。間仕切り柱が桁行西から 3 間目中央に立ち、建物を桁行 3 間と 1 間に分ける。身舎の柱穴掘形は、方形（一辺約 0.5m、深さ約 0.4m）で、間仕切り柱は方形（一辺 0.3m、深さ約 0.4m）で小さい。柱穴の重複関係から、SB236 に切られる。

SB224(図版 17・20・98・99) 四町南西部中央で検出した建物である。東西 5 間 (11.5m)・南北 2 間 (4.2m) の東西棟で、南廂が付く。桁行方向の柱間は 2.3m 等間、梁間方向の柱間は 2.1m 等間で、南廂の出は 2.5m である。

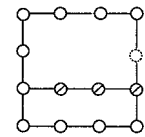


身舎の柱穴掘形は方形（一辺約 0.6m、深さ約 0.5m）で、廂の柱穴は身舎に比べやや小さい。柱穴の重複関係から、SB235 に切られる。桁行北柱筋は、SD212 中心から北 16.4m、SA250 から北 14.1m に位置する。

SB225(図版 17・98・99) 四町南西部中央で検出した建物である。東西 2 間 (4.2m)・南北 5 間 (10.9m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.3m・2.2m・2.2m・2.1m・2.1m、梁間方向の柱間は 2.1m 等間である。間仕切り柱が桁行北から 3 間目中央に立ち、建物を桁行 3 間と 2 間に分ける。身舎の柱穴掘形は、方形または不定形（一辺約 0.6m、深さ約 0.4m）である。西桁行柱筋柱穴は、SB224 東妻柱筋柱穴にほぼ揃う。柱穴の重複関係から、SB237 に切られる。

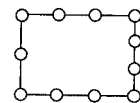


SB226(図版 17・20・100) 四町南西部東側で検出した建物である。東西 3 間 (7.1m)・南北 2 間 (4.8m) の東西棟で、南廂が付く。桁行方向の柱間は東から 2.4m・2.3m・2.4m、梁間方向の柱間は北から 2.5m・2.3m で、南廂の出は 3.0m である。



身舎の柱穴掘形は、方形または不定形（一辺約 0.6m、深さ 0.4～0.6m）で、廂の柱穴は不定形（一辺約 0.4m、深さ約 0.3m）で身舎の柱穴に比べて小さい。南入側柱筋は、SB225 桁行北から 2 筋目・SB224 北桁行柱筋・SB222 北妻柱筋にほぼ揃い、SD212 中心から北 16.4m に位置する。

SB227(図版 17・98) 四町南西部東側で検出した建物である。東西 3 間 (7.0m)・南北 2 間 (4.7m) の東西棟である。桁行方向の柱間は東から 2.6m・2.0m・2.4m、梁間方向の柱間は北から 2.3m・2.4m である。身舎の柱穴掘形は不定形（一辺 0.3～0.5m、深さ約 0.3m）である。南桁行柱筋の柱穴は、SB226 北桁行柱筋の柱穴とほぼ揃う。



SB228(図版 17・98) 四町南西部東側で検出した建物である。東西 1 間 (2.2m)・南北 2 間 (3.9m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 1.9m・2.0m、梁間方向の柱間は 2.2m である。身舎の柱穴掘形は、不定形（一辺約 0.3m、深さ約 0.2m）である。桁行中央柱筋は、SB226 妻中央柱筋とほぼ揃う。

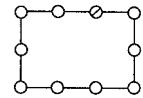


SB229(図版 17・98) 四町南西部東端で検出した建物である。東西 1 間 (2.2m)・南北 1 間 (3.5m) の南北棟である。桁行方向の柱間は 3.5m、梁間方向の柱間は 2.2m である。身舎の柱穴掘形は、方形（一辺約 0.4m、深さ約 0.3m）である。

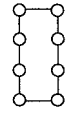


SB230(図版 17・21・98) 四町南西部北側で検出した建物である。東西 3 間 (5.4m)・南北 2

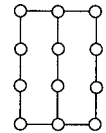
間 (4.5m) の東西棟である。桁行方向の柱間は東から 2.0m・1.7m・1.7m、梁間方向の柱間は北から 2.3m・2.2m である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺約 0.6m、深さ約 0.5m) である。建物は北で東に偏する。



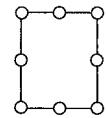
SB231(図版 17・100) 四町南西部北側で検出した建物である。東西 1 間 (3.0m)・南北 3 間 (6.6m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 1.9m・1.9m・2.8m、梁間方向の柱間は 3.0m である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺 0.5～0.7m、深さ約 0.4m) である。建物方位は北で若干東に偏する。北妻柱筋は、SD212 中心から北 47.0m に位置する。



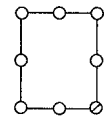
SB232(図版 17・100) 四町南西部北側で検出した建物である。東西 1 間 (2.3m)・南北 3 間 (6.1m) の南北棟で、西廂が付く。桁行方向の柱間は北から 2.0m・1.9m・2.2m、梁間方向の柱間は 2.3m で、西廂の出は 2.0m である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺約 0.5m、深さ約 0.3m) で、廂の柱穴は円形 (径約 0.3m、深さ約 0.2m) で身舎に比べ小さい。建物方位は、SB231 と同様に北で若干東に振れる。廂柱筋の柱穴は、SB231 東桁行柱筋の柱穴とほぼ揃う。北妻柱筋は、SD212 中心から北 47.0m に位置する。



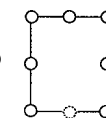
SB233(図版 17・98・99) 四町南西部西側で検出した建物である。東西 2 間 (3.8m)・南北 2 間 (4.5m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.2m・2.3m、梁間方向の柱間は東から 1.7m・2.1m である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺約 0.5m、深さ約 0.3～0.5m) である。柱穴の重複関係から、SD255 を切る。



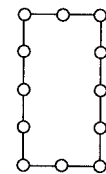
SB234(図版 17・98・99) 四町南西部西側で検出した建物である。東西 2 間 (3.9m)・南北 2 間 (4.3m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.2m・2.1m、梁間方向の柱間は東から 2.0m・1.9m である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺 0.4～0.7m、深さ約 0.3m) である。



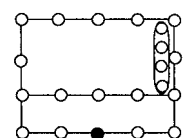
SB235(図版 17・98・99) 四町南西部西側で検出した建物である。東西 2 間 (3.7m)・南北 2 間 (5.5m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.8m・2.7m、梁間方向の柱間は東から 1.8m・1.9m である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺 0.5m、深さ約 0.3m) である。柱穴の重複関係から、SB222・224 を切る。



SB236(図版 17・98・99) 四町南西部南東隅で検出した建物である。東西 2 間 (3.6m)・南北 4 間 (7.0m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 1.8m・1.7m・1.7m・1.8m、梁間方向の柱間は 1.8m 等間である。身舎の柱穴掘形は、方形 (一辺約 0.5m、深さ約 0.4m) である。柱穴の重複関係から、SB223 を切る。SB233～236 の妻柱筋柱穴は、それぞれほぼ揃う。

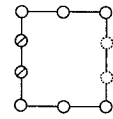


SB237(図版 17・21・98・99) 四町南西部中央で検出した建物である。東西 4 間 (9.7m)・南北 2 間 (5.0m) の東西棟で、南廂が付く。桁行方向の柱間は東から 2.4m・2.6m・2.6m・2.1m、梁間方向の柱間は 2.5m 等間で、南廂の出は 3.0m である。身舎の柱穴掘形は、方形または不定形 (一辺 0.4～0.7m、深さ約 0.5m) で、廂の柱穴は身舎よりやや小さい。身舎東端部に長方形の浅い土壌 (東西 1.0m×南北 4.6m、深さ 0.02m)



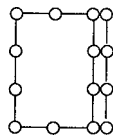
があり、中に円形土壇（径 0.8m、深さ 0.2m）が南北 4 基並ぶ。柱穴の重複関係から、SB225 を切る。南廂柱筋は SB235 桁行柱筋と揃い、SD212 中心から北 16.5m に位置する。

SB238(図版 17・99) 四町南西部南側で検出した建物である。東西 2 間 (4.8m)・南北 3 間 (5.0m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 1.4m・2.2m・1.4m、梁間方向の柱間は 2.4m 等間である。身舎の柱穴掘形は、不定形（一辺 0.4～0.7m、深さ約 0.4m）である。



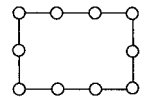
4) 六条三坊五町 (B 区)

SB246(図版 15・97) 五町中央部で検出した建物である。東西 2 間 (4.8m)・南北 3 間 (6.6m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.2m・2.1m・2.3m、梁間方向の柱間は東から 2.2m・2.6m である。桁行東柱筋を 0.5m 東に作り替え、規模を拡大して建て替える。身舎の柱穴掘形は、方形または不定形（一辺 0.5～0.7m、深さ約 0.4m）である。北妻柱筋は SD211 中心延長線上から南 62.5m に位置する。

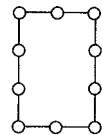


5) 七条三坊一町 (E2 区)

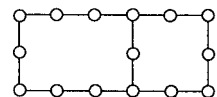
SB239(図版 18・101) 一町西部北側で検出した建物である。東西 3 間 (6.2m)・南北 2 間 (3.7m) の東西棟である。桁行方向の柱間は東から 1.9m・2.3m・2.0m、梁間方向の柱間は北から 1.9m・1.8m である。身舎の柱穴掘形は、方形（一辺約 0.4m、深さ約 0.4m）である。



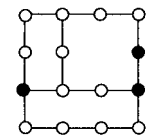
SB240(図版 18・101) 一町西部北側で検出した建物である。東西 2 間 (3.9m)・南北 3 間 (6.1m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 2.0m・2.1m・2.0m、梁間方向の柱間は東から 2.0m・1.9m である。身舎の柱穴掘形は方形（一辺約 0.5m、深さ約 0.4m）で、南妻中央柱穴は小さい。北妻柱筋は、SB239 北桁行柱筋とほぼ揃う。



SB241(図版 18・22・1019) 一町西部中央で検出した建物である。東西 5 間 (10.0m)・南北 2 間 (3.8m) の東西棟である。桁行方向の柱間は東から 1.5m・1.9m・2.3m・2.2m・2.1m、梁間方向は 1.9m 等間である。間仕切り柱が桁行西から 3 間目中央に立ち、建物を桁行 3 間と 2 間に分ける。身舎の柱穴掘形は、方形または楕円形（一辺 0.4～0.6m、深さ約 0.4m）で、間仕切り柱は方形（一辺 0.3m、深さ 0.3m）で小さい。

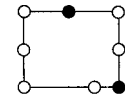


SB242(図版 18・22・101) 一町西部中央で検出した建物である。東西 3 間（北側 6.3m、南側 6.9m）・南北 2 間 (4.2m) の東西棟で、南に廂が付く。建物の平面形は台形となる。桁行方向の柱間は東から 2.2m・2.0m・2.1m、梁間方向の柱間は北から 1.9m・2.3m で、南廂の出は 2.3m である。間仕切り柱が身舎桁行西から 1 間目中央に立ち、建物を桁行 1 間と 2 間に分ける。身舎の柱穴掘形は、方形または不定形（一辺 0.5～0.8m、深さ 0.3～0.5m）で、廂の柱穴は方形（一辺 0.3～0.5m、深さ約 0.3m）で身舎に比べ小さい。身舎の柱直径 0.14m である。北桁行柱筋の柱穴は、SB241 南桁行柱筋柱穴とほぼ揃う。

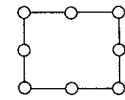


SB243(図版 18・101) 一町西部中央で検出した建物である。東西 2 間 (4.5m)・南北 2 間 (4.1m) の東西棟である。桁行方向の柱間は東から 2.2m・2.3m、梁間方向の柱間は北から 2.2m・1.9m で

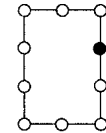
ある。身舎の柱穴掘形は、方形（一辺約 0.4m、深さ 0.4～0.6m）である。柱穴の重複関係から、SB242 を切る。



SB244(図版 18・22・101) 一町西部中央で検出した建物である。東西 2 間 (4.3m)・南北 2 間 (4.2m) の東西棟である。桁行方向の柱間は東から 2.0m・2.3m、梁間方向の柱間は北から 2.0m・2.2m である。身舎の柱穴掘形は、方形または円形（一辺約 0.4m、深さ約 0.4m）である。北東隅の柱穴から須恵器の鉄鉢 (557) が出土した。



SB245(図版 18・22・101) 一町西部中央で検出した建物である。東西 2 間 (3.0m)・南北 3 間 (4.4m) の南北棟である。桁行方向の柱間は北から 1.5m・1.5m・1.4m、梁間方向の柱間は東から 1.4m・1.6m である。身舎の柱穴掘形は、方形（一辺約 0.4m、深さ約 0.3m）である。両妻柱筋は、SB244 両妻柱筋とほぼ揃う。



(3) 柵列

1) 六条三坊四町 (E1 区)

SA247(図版 17・98・99) 四町南西部西側で検出した南北方向の柵列である。SF201 側溝に沿って位置する。検出長は 10 間分で、南端は SD212 中心から北 20m に位置する。柱間寸法は不揃いな部分もあるが、約 2.2m である。柱穴掘形は、円形（径約 0.3m、深さ約 0.3m）である。SD207 中心から 1.6m に位置する。

SA248(図版 17・98) 四町南西部中央部で検出した南北方向の柵列で、SB221 の東に位置する。SB224 の東妻柱筋とほぼ揃う。検出長は 2 間分である。柱間寸法は 2.3m 等間である。柱穴掘形は、方形（一辺 0.5m、深さ 0.3m）である。

SA249(図版 17・99) 四町南西部南側で検出した南北方向の柵列で、SB237 の南東に位置する。検出長は 4 間分である。柱間寸法は不揃いで、1.5～2.3m である。柱穴掘形は方形（一辺 0.4m、深さ 0.4m）である。

SA250(図版 17・99) 四町南西部南西隅で検出した東西方向の柵列である。SD212 に沿って位置する。検出長は 4 間分である。柱間寸法は不揃いな部分もあるが、約 1.8m である。柱穴掘形は、円形または方形（一辺 0.2～0.6m、深さ約 0.3m）である。西端柱穴は、SA247 南延長上にほぼ位置する。柱穴は SB223 南桁行柱筋の柱穴に揃える。SD212 中心から 2.2m に位置する。

2) 七条三坊一町 (E2 区)

SA251(図版 18・101) 一町西部中央で検出した南北方向の柵列で、北端が東に曲がる。SF201 東側溝の内側に沿って位置する。検出長は 11 間分である。柱間寸法は不揃いで、1.0～2.8m である。柱穴掘形は、円形（径 0.3m、深さ約 0.3m）である。柱は、直径 0.05m である。北端は SB241 桁行北筋に揃う。SD207 中心から 1.4m に位置する。

SA252(図版 18・101) 一町西部北側で検出した東西方向の柵列で、SB239 の南に位置する。SB240 南妻柱筋に揃えて、建物南西隅から西にのびる。検出長は 4 間分で、柱間寸法は不揃いで、1.8～2.3m である。柱穴掘形は、円形（径 0.3m、深さ約 0.3m）である。

SA253(図版 18・101) 一町中央部西側で検出した南北方向の柵列で、SB245 の東に位置する。

柱穴はSB245 東桁行柱筋の柱穴にほぼ揃う。検出長は4間分である。柱間寸法は不揃いで、1.2～1.8mである。柱穴掘形は、円形（径0.3m、深さ約0.25m）である。SD207 中心から13.1m、SA251 から11.7mに位置する。

(4) 溝

1) 六条三坊四町南西部 (E1 区)

SD254(図版 17・98) 四町南西部で検出した東西方向の素掘り溝である。西端はSD207に接続し、東に36.5mのびる。断面はU字形（幅0.5～0.7m、深さ0.3m）で、底は西側に傾斜する。埋土は灰色粘土である。SD212 中心から33.0mに位置する。

SD255(図版 17・98) 四町南西部で検出した逆L字形の素掘り溝である。SD254の南側を、心々距離1.2mの間隔で平行する。西端はSD207に継続し、SD207 中心から東45mの位置で南に折れ曲がり、南に20mのびる。断面はU字形（幅約0.6m、深さ0.2m）で、底は西側に傾斜する。埋土は黄灰色砂泥である。北肩はSD212 中心から北31.7m、SA250 から北29.7mに位置する。東肩はSD207 中心から東45.4mに位置する。

2) 七条三坊一町 (E2 区)

SD256(図版 18・101) 一町中央部西側で検出した東西方向の素掘り溝である。西端はSD207に接続し、東に6.5mのびる。断面は逆台形（幅約0.8m、深さ約0.2m）で、底は西側に傾斜する。遺構重複関係から、SE268に切られる。

SD257(図版 18・101) 一町中央部で検出した東西方向の素掘り溝である。西端はSD207に接続し、東に12mのびる。断面は逆台形（幅約1.2m、深さ約0.1m）で、底は西側に傾斜する。SD213 中心から南61.1mに位置する。

(5) 井戸

1) 六条三坊三町 (D 区)

SE258(図版 16) 三町南部中央で検出した井戸で、SB216の西側に位置する。掘形は楕円形（幅2.2×1.7m、深さ1.0m）で、底部は平坦である。井戸枠は残存しない。埋土は灰色泥土である。

2) 六条三坊四町北西部 (D 区)

SE259(図版 16・23・96) 四町北西部で検出した井戸で、SB219の南西に位置する。掘形は円形（径1.5m、深さ1.2m）で、底部は平坦である。底部に方形横棧（一辺0.85m）と縦板が若干残存する。横棧は角材と丸材で、目違いホゾで組む。埋土は灰色泥土である。

SE260(図版 16・23・105) 四町北西部で検出した井戸で、SB219の南に位置する。掘形は円形（径1.3m、深さ1.3m）で、底部は平坦である。底部に円形曲物（径0.65m、深さ0.55m）を井戸枠として据える。曲物は一段のみ残存した。井戸枠内埋土は灰色泥土である。

3) 六条三坊四町南西部 (E1 区)

SE261(図版 17・105) 四町南西部南側で検出した井戸で、SB221の東側に位置する。掘形は円形（径1.0m、深さ0.75m）で、底部は平坦である。底部に円形曲物（径0.55m）を井戸枠として据える。曲物は下部のみ残存した。埋土は灰色泥土である。

SE262(図版 17・98・99) 四町南西部南側で検出した井戸で、SB224・225 の南側に位置する。掘形は円形(径 1.2m、深さ 2.3m) で、底部は平坦である。上部は木枠を抜き取る際に大きく掘り込む。底部に方形横棧(一辺 1.0m) と縦板が若干残存する。埋土は黒色粘土である。

SE263(図版 17・23・104) 四町南西部北側で検出した方形縦板横棧組井戸で、SB232 の南東に位置する。掘形は隅丸方形(一辺 2.5m、深さ 2.2m) である。横棧(一辺 1.0m) は三段残存し、角材(一辺 0.05～0.1m) を目違いホゾで組む。一段目を井戸底に据え、二・三段目の隅に丸材を入れ支柱とする。縦板(幅約 0.1m、長さ 1.6m 残存) は各面に約 8 枚用い、その外側に板材を 2 重または 3 重に重ねる。底部に円形曲物(径 0.4m、深さ 0.35m) を据える。井戸枠内埋土は灰色粘土である。底部曲物内に完形の土師器杯 B(543) を伏せて据える。

SE264(図版 17・98) 四町南西部北側で検出した井戸で、SE263 と並ぶ。掘形は楕円形(幅 3.3m × 2.3m、深さ 1.2m) である。井戸枠は残存しない。埋土は灰色泥土である。

SE265(図版 17・23・105) 四町南西部南側中央で検出した井戸で、SB237 の南側に位置する。掘形は円形(径 1.2m、深さ 0.75m) で、底部は平坦で礫が堆積する。井戸枠は残存しない。埋土は灰色泥土で、中位に炭層が堆積する。

SE266(図版 17・23・104) 四町南西部南側で検出した方形縦板横棧組井戸で、SE262 と並ぶ。掘形は円形(径 2.7m、深さ 2.4m) である。横棧(一辺 0.9m) は三段残存し、角材(一辺 0.08m) を目違いホゾで組む。一段目を井戸底に据え、二・三段目の隅に丸材を入れ支柱とする。縦板(幅約 0.15m、長さ 2.2m 残存) は各面に 7 枚用い、その外側に板材をさらに重ねる。横棧にはほゾ穴を削り込んだものもあり、転用材と考えられる。井戸枠内埋土は黒色粘土である。

4) 六条三坊五町(B 区)

SE269(図版 15・97) 五町中央部で検出した井戸で、SB246 の南東部に位置する。掘形は長方形(幅 1.9m × 1.6m、深さ 1.0m) である。井戸枠は残存しない。井戸枠内埋土は黒色粘土である。

5) 七条三坊一町(E2 区)

SE267(図版 18・101) 一町西部中央北側で検出した井戸で、SB240 と SB241 の中間に位置する。掘形は円形(径 1.2m、深さ 0.7m) である。井戸枠は残存しない。埋土は灰色泥土である。

SE268(図版 18・23・105) 一町西部中央で検出した井戸で、SB244 の北西に位置する。遺構の重複関係から、SD256 が埋没した後に造られる。掘形は円形(径 1.1m、深さ 0.9m) で、底部は平坦で礫を敷く。底部に円形曲物(径 0.38m、深さ 0.45m) を据える。井戸枠内埋土は灰色泥土で、上部からは製塩土器が集中して出土した。

(6) 土壌

1) 六条三坊三町(D 区)

SK270(図版 16) 三町中央部南辺で検出した土壌で、SB216 の南側、SF203 の北側に位置する。掘形は不定形(東西 10.0m × 南北 3.0m、深さ 0.1m) で、底部は凹凸がある。埋土は灰色泥土で、底部に炭が堆積する。

2) 六条三坊四町北西部(D 区)

SK271(図版 16・24・107) 四町北西部で検出した土壌で、SB220 の南東に位置する。掘形は円形(径 0.5m、深さ 0.7m) で、底部はすぼまる。埋土は灰色泥土で、木製柄杓 1 点(934) が出土した。SD211 中心から南 15m に位置する。

3) 六条三坊四町南西部(E1 区)

SK272(図版 17・98) 四町南東部東側で検出した土壌で、SB226 の南側に位置する。掘形は長方形(東西 11.0m × 南北 6.5m、深さ 0.2m) で、底部は平坦である。埋土は灰色泥土である。

SK273(図版 17・98) 四町南東部南側で検出した土壌で、SB237 の南東側に位置する。掘形は長方形(東西 4.0m × 南北 9.0m、深さ 0.3m) で、底部は平坦である。埋土は灰色泥土である。遺構の重複関係から、SK272 が埋没した後に造られる。

4) 六条三坊五町(B 区)

SK284(図版 15) 五町中央部で検出した土壌で、SB246 の東側に位置する。掘形は円形(径 0.9m、深さ 0.35m) で、底部は平坦である。

5) 七条三坊一町(E2 区)

SK274(図版 18・101) 一町西側中央で検出した土壌で、SB245 の東側に位置する。掘形は不定形(東西 5.0m × 南北 15.0m、深さ 0.15m) である。埋土は灰色砂泥である。

6) 東二坊大路路面(G1 区)

SK282(図版 19・24・107) SF201 路面上で検出した土器埋納遺構である。SF201・SF205 交差点の北西部、SD214 東延長線上で、SX286 の南側に位置する。掘形は楕円形(幅 0.55m × 0.45m) で、上部は削平され、底部に土師器甕 A を埋納する。甕内には、中位に銭貨と横櫛を納めた小型の曲物を据える。

SK283(図版 19・24・107) SF201 路面上で検出した土器埋納遺構である。SF201 と SF205 の交差点の南側で、路面のほぼ中央に位置する。掘形は楕円形(幅 0.45m × 0.35m) で、上半部が削平され、底部に土師器甕 A を埋納する。

(7) 木棺墓

1) 六条三坊四町(D 区)

SX275(図版 15) 四町北東部で検出した木棺墓である。方向は北で東に偏する。掘形は長方形(幅 0.7m × 1.7m 以上) で、上面が削平を受け底板のみ残存する。底板(幅 0.4m、長さ 1.6m 残存) は、幅 0.05m 前後の細長い板を敷き並べる。副葬品は検出しなかった。

2) 六条三坊五町(2 トレンチ)

SX281(巻首図版 4) 五町西辺部中央西側、SD209 中で検出した木棺墓である。方向は南北方向である。掘形は不明で、上面は削平を受け、底板のみ残存する。底板(幅 0.4m、長さ 1.3m 残存) は、幅 0.05m 前後の細長い板を敷き並べる。副葬品は検出しなかった。

3) 七条三坊三町(G3 区)

SX280(図版 24・106、図 12) 三町西辺部中央部で検出した木棺墓である。SD285 右岸に隣接し、一部削られる。SD285 の流れに平行し、方向は北で西に偏する。掘形は方形(幅 0.9m × 0.7m)

で、底板（幅 1.2m、長さ 1.5m）は一枚である。側板（短辺 0.4m）を据え、蓋板を被せる。棺材は、唐櫃を転用する。副葬品としては、埋土中から銭貨 2 枚が出土した。

4) 東二坊大路路面 (F1 区・G1 区)

SX276(図版 24・106) SF201 路面上で検出した木棺墓である。七条三坊二町中央西側に位置する。方向は北で西に偏する。掘形は長方形（幅 0.5 × 1.2m 以上）である。底板（幅 0.3m、長さ 1.0m）は、幅 0.05m 前後の板を敷き並べる。蓋板（幅 0.5m、長さ 1.0m）は、3 枚である。副葬品としては、掘形南西隅で土師器椀 1 点が出土した。

SX277(図版 19・24、 図 12) SF201 路面上で検出した木棺墓である。SF201 と SF205 の交差点の SF201 中央に位置し、SD285 に隣接する。方向は北で西に偏し、SD285 の流れに平行する。掘形は長方形（0.45m × 1.1m）で、SD285 に一部削平される。底板（幅 0.35m、長さ 1.0m）は、幅 0.07m 前後の板を並べる。蓋板を両端部に置いた上に、蓋板（幅 0.07m）を数枚被せる。副葬品は検出しなかった。

SX278(図版 19・24・106) SF201 路面上で検出した木棺墓である。SF201・SF205 交差点の南側に位置し、SD285 に近接する。方向は SX277 と同様で、北で西に偏する。掘形は長方形（0.55 × 1.2m）である。底板（幅 0.28m、長さ 0.96m）は、幅 0.13m の板を中央に一枚、上に二枚並べる。底板に合わせて側板（高さ 0.15m）と小口側板（高さ 0.15m）を組み合わせる。側板上面中央両側には、蓋板を置くための割り込みがある。蓋板を置いた上に、一枚板（幅 0.32m、長さ 0.96m）の蓋板を被せる。副葬品としては、底板中央で墨挺、四方と両脇で銭貨が出土した。

(8) 土器棺墓

SX279(図版 24・107、 図 12) G3 区、SD285 内で検出した土器棺墓である。方向は北で西に偏し、SD285 の流れに平行する。掘形は楕円形（1.0m × 0.5m）で、中央に甕 C(562・563) の口縁を合わせて据え、南側甕の底部を打欠き、さらに甕 A(564) の口縁を合わせる。副葬品は検出しなかった。

(9) 河川

SD285(図版 19・95・103、 図 11・12) G1・3 区で検出した自然河川である。SF201・SF205 交差点のほぼ中央を、北西から南東方向に斜めに横切り、南にのびる。規模は、SX286 の北側で幅約 5m、深さ約 0.5m、南側で当初幅 10.0 ～ 15.0m、深さ 0.7 ～ 1.0m、後に幅が 9.0m 前後に狭まる。両岸の傾斜はなだらかで、護岸の杭が部分的に残存した。底部は凹凸があり、堰を 2ヶ所設ける。埋土は大きく 5 層に分かれ、第 1 層は暗灰黄色砂泥層、第 2 層は灰黄色砂泥層、第 3・4 層は灰色砂泥と黄色砂の互層、第 5 層は灰黄色砂泥層である。ただ、土層の状況は一定ではなく、層を越えて接合する遺物などから考え、上層（第 1・2 層）・中層（第 3・4 層）・下層（第 5 層）の 3 層にまとまる。埋土は砂泥層が多く、流れはさほど急ではないと考えられる。埋土中からは多量の遺物が出土し、中層が最も多く上層・下層は少ない。遺物は全域から出土したが、交差点の中央に位置する SX286 の上流側は少なく、下流側に多く分布する。特に SX286 から SX28 周辺までの間・SX289 周辺に集中し、下流に離れるに従い次第に少なくなる。また

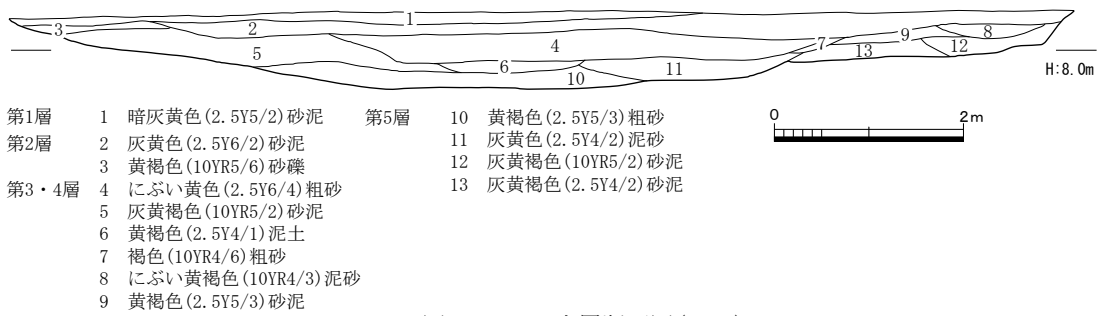


図11 SD285土層断面図(1:80)

SX286からSX289周辺までの間では、完形の土器または完形のものが多いが、それより下流域では完形品が少なく破片が多い傾向が認められる。

(10) 橋

SX286(図版19・23・102) G1区で検出した、南北方向の橋である。SF201・SF205交差点のSF201のほぼ中央に位置し、SD285に直行して架かる。規模は、南北2間(西5.8m・東5.5m)・東西2間(北5.4m・南5.0m)で、桁行方向の柱間は北から3.3m・2.5m、梁間方向の柱間は東から2.4m・3.0mである。平面形は、やや歪んだ平行四辺形を呈する。橋脚は9脚で、北側中央が失われる。柱据え付け方法は、中央柱筋は先端を尖らせた柱を打ち込んでいるのに対し、両岸柱筋は掘立柱である。柱穴掘形は、円形または楕円形(一辺約0.4m、深さ0.4m)である。脚柱は面取りを施した丸太(径約0.2m)

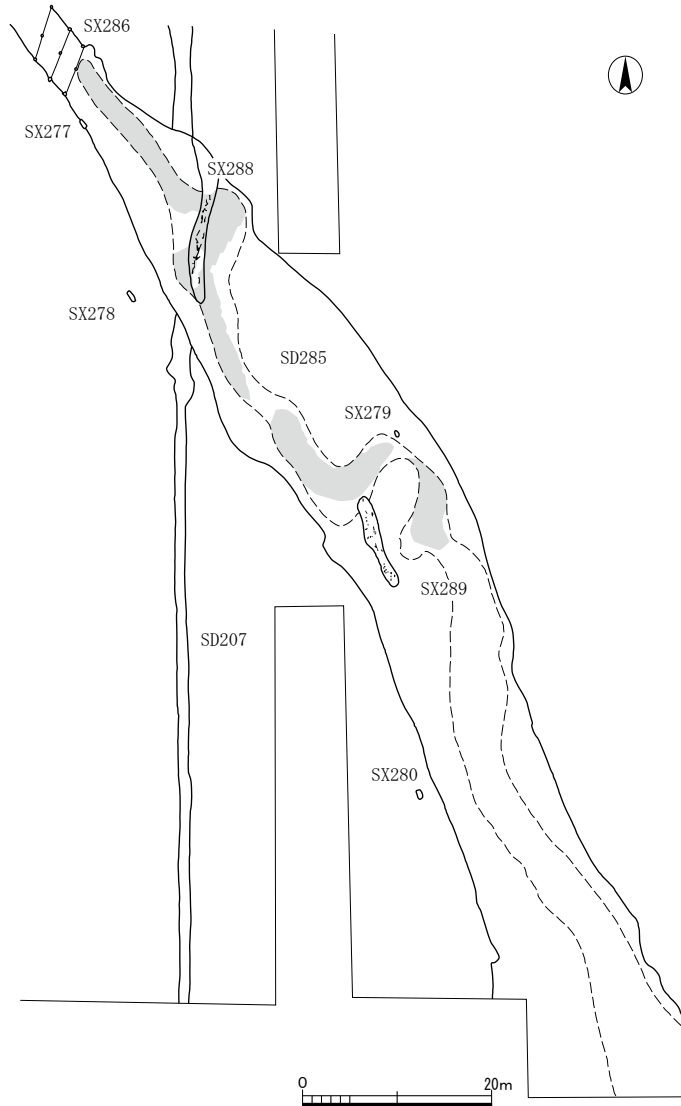


図12 SD285祭祀具出土分布図(アミ目は集中地)(1:800)

を用いるが、一部には角材も認められる。中央部で出土した部材(径約0.15m、長さ2.5m)は、橋桁材と考えられる。左岸柱筋には杭が多数打ち込まれる。

SX287(図版19・102) G1区で検出した、東西方向の橋である。SF201・SF205交差点のSF205のほぼ中央に位置し、SD206に直行して架かる。SD206両岸に幅10.0mにわたって杭を打ち込み、板の痕跡が確認できた。橋桁材は残存していない。

(11) 堰

SX288(図版 19、図 12) G1 区で検出した、南北方向の堰である。SD285 中に位置し、SD207 延長線に設置される。幅約 1.0m・高さ約 0.7m で、約 12m 検出した。堰の構築は、河川の底に長さ 1.0m 前後の杭を打ち込み、小枝を横方向に交互に編む。

SX289(図 12) G2 区で検出した、南北方向の堰である。SD285 中央に位置し、SD285 の流れに平行して設置される。幅 0.5m で、約 35m 検出した。堰の構築は、河川の底に長さ 0.5m 前後の杭を打ち込む。

5 平安時代の遺構

平安時代の遺構は大きく平安時代初期（長岡京廃絶直後）と平安時代中期に分けることができる。

(1) 平安時代初期の遺構（図 13）

この時期の遺構には調査区の北部（A・B・D・E1 区）で検出した小溝群がある。以下、各地区毎にその状況を述べる。

A 区では微高地になっている調査区の南半に小溝群が分布する。これらは幅 0.5～0.8m、深さ 0.3～0.5m のやや規模の大きい溝に区画され、区画毎に幅 0.2～0.5m、深さ 0.1～0.3m の溝が 2～3m 間隔で東西あるいは南北方向に平行に並ぶ。

B 区では A 区に続いて調査区の中央付近に小溝群が分布する。南北方向の溝が約 15m おきに掘られた東西方向の溝によって区画され、最も南側の東西溝は長岡京条坊の六条大路北側溝の位置に等しい。

D 区では、調査区のほぼ全体に小溝群が認められるが、古墳時代の河川の存在した調査区の西寄りの低地には分布しない。ここでは東三坊坊間西小路と六条条間南小路の交差点を検出しているが、小溝群はこれらに規制され、道路部分には及んでいない。溝はやや規模の大きい溝に区画され、区画毎に東西あるいは南北方向に平行して掘られている。また、東西南北の溝が格子状に重複している所や、溝の間にやや浅い溝が掘られた所などがある。これらは時期差と認められる部分もある。

E1 区では微高地になっている調査区西側に小溝群が分布しており、東側の低地には分布していない。規模の大きい溝に区画され、東西あるいは南北の溝が平行になる。ここでも南側の六条大路路面には溝は及んでいない。

これらの溝の特徴は、以下にまとめられる、まず、微高地上に分布する。素掘りの溝で断面形は U 字あるいは逆台形である。規模は幅 0.2～0.5m、深さ 0.1～0.3m で、東西あるいは南北方向に 2.0～3.0m 間隔に平行して掘られる。埋土はいずれも黄灰色粘質土からなり、包含する遺物は長岡京期のものであるが量は少ない。掘り替えや重複は少なく、比較的短期間の内に埋没する。長岡京の条坊側溝を踏襲した溝や、約 15m おきに掘られた幅 0.5～0.8m、深さ 0.3～0.5m のやや規模の大きい溝に区画される。

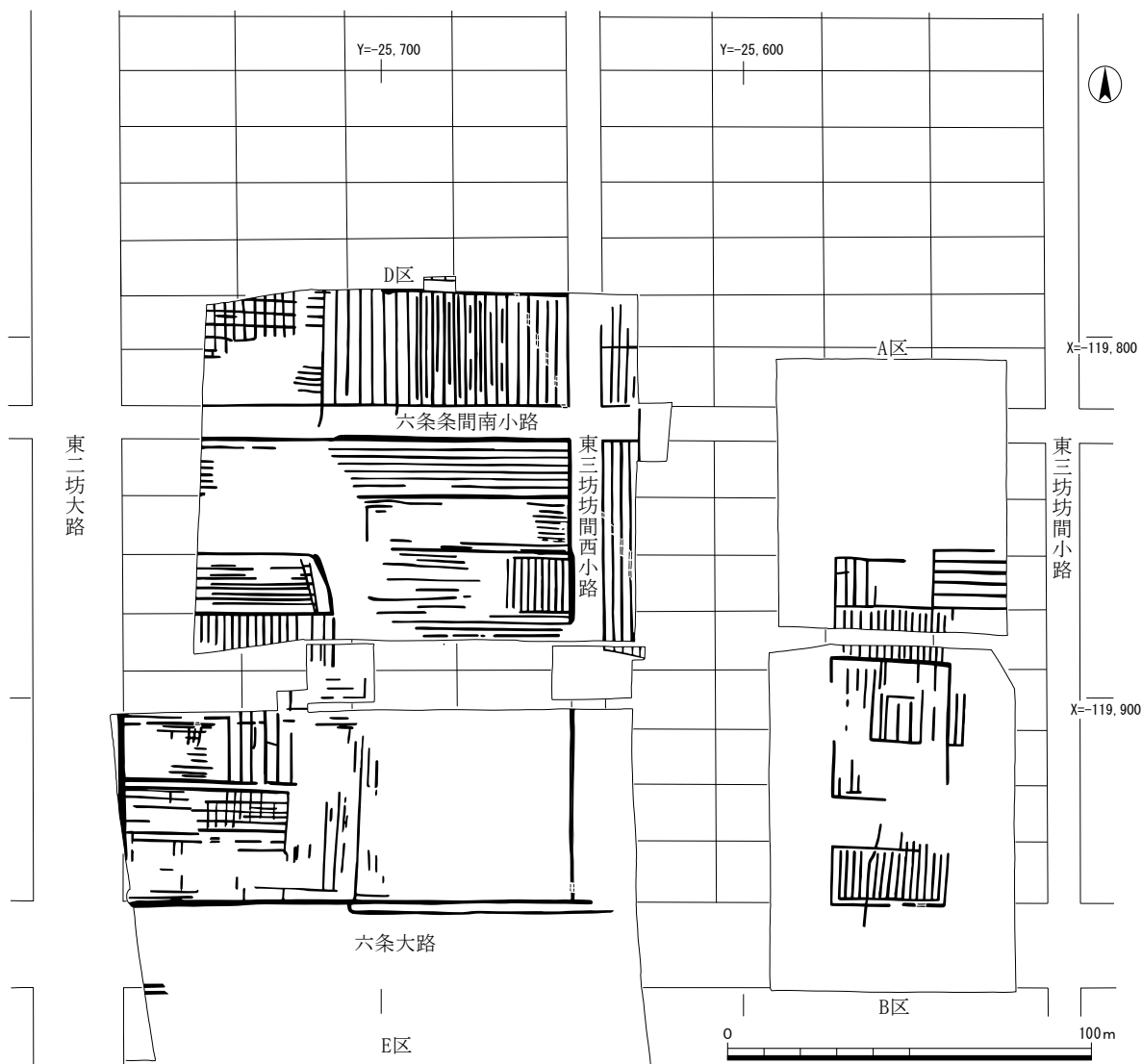


図 13 小溝群分布図 (1:2,000)

(2) 平安時代中期の遺構 (図版 108、図 14)

平安時代中期の遺構としては条里に伴う畦畔や溝を検出した。

補足調査区 3・4・5 トレンチでは、現在の五間堀川の下層で SD290 (幅約 10.0m、深さ 1.5m) を検出した。この河川はほぼ南北にのび、5 トレンチ内で東へ直角に曲がり、約 50m 東でさらに南側へ方向を変え、C1・2 区を南流する。埋土は黄褐色砂礫層で、平安時代中期の木製品 (人形) や土器類が出土した。また、C1 区と C2 区の境付近では西肩口から延喜通寶 10 枚が重なって、さらに近くから乾元大寶 12 枚がまとまって出土した。SD291 は 5 トレンチの SD290 屈曲部から分流する南北方向の溝で幅約 1.0m、深さ 0.5m である。6・7 トレンチでこれの延長を確認しており、溝の両岸には低い畦畔が認められる。

6・9・11 トレンチでは水田の畦畔の交差点を検出し、それぞれが各坪の交点にあたるものと考えられる。1・2・10・12 トレンチ、G3 区南端では坪境の畦畔や溝を、G1 区では坪の中央を南北に流れる SD292 を検出した。この他条里制とは無関係に北西から南東方向に流れる SD293 などにも検出した。これらの河川や溝もすべて黄褐色砂礫層によって埋没し、平安時代中期の遺物が出

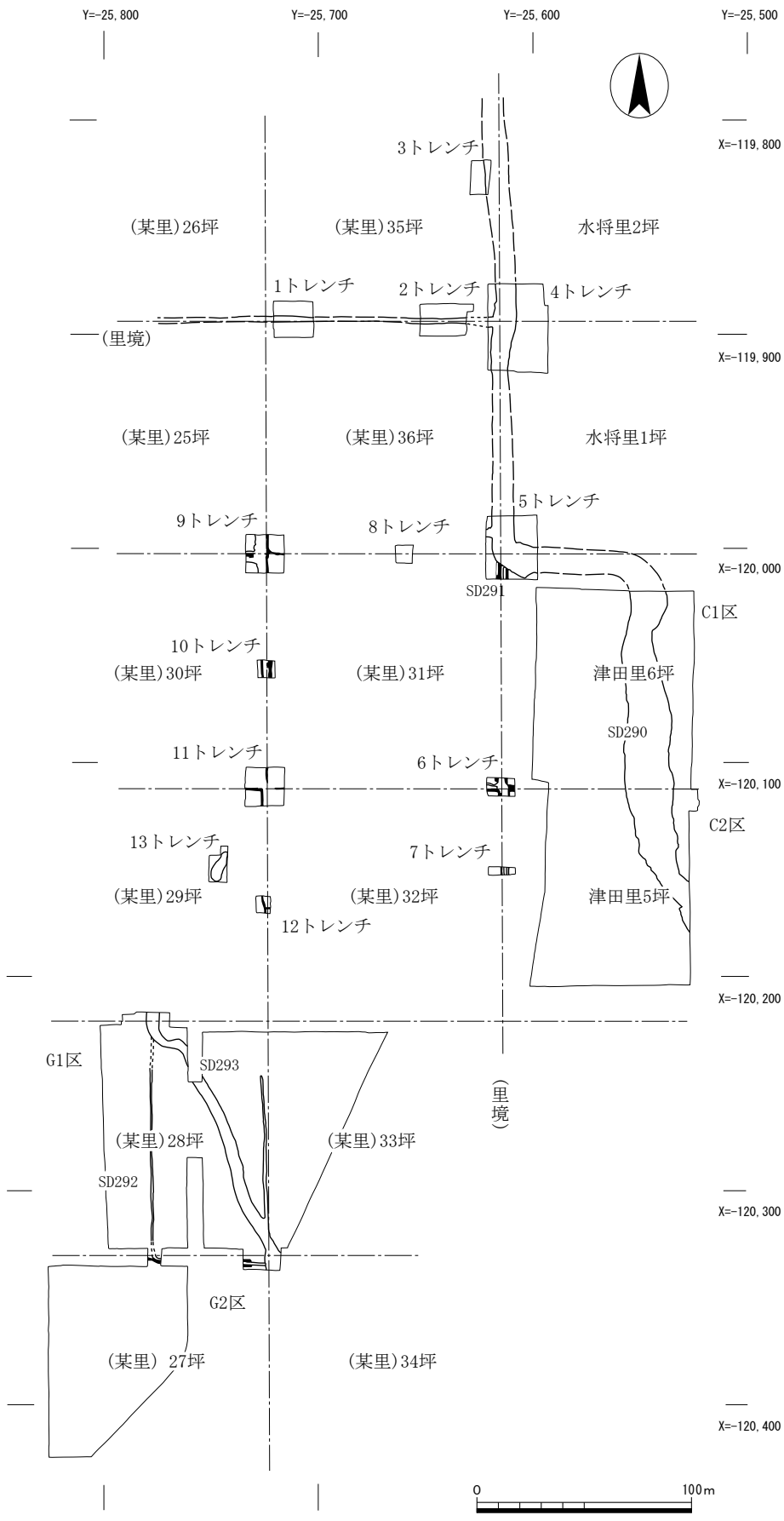


図 14 平安時代遺構平面図 (1:3,000)

土した。

6 鎌倉・室町時代の遺構（図版 25・26・109）

C1・2区で検出したSD290は、平安時代以降も窪地として残り、窪地の一部は鎌倉時代から室町時代まで存続する。C2区の北東部にはこの河川の残存部が池状遺構SG294を形成する。規模は南北約20.0m、東西10.0m、深さ1.0mで、北および東岸部には所々に護岸の木杭や径30～50cmの石が配される。埋土は灰色砂泥層で下層には砂礫が混じる。また、池の東西には条里の坪境と考えられる溝(SD297)が通じ、これには2箇所の暗渠として木樋が作られる。西側の木樋SX295は残存長2.5m、幅0.2m、高さ0.2mで、角材をコの字に刳り貫いたものを伏せた状態で据えている。東側の木樋SX296は2種類からなり、池に近い側は丸木舟を転用したもので、舟の前後を切断し伏せた状態で据える。残存長6.3m、幅0.9m、高さ0.45mである。もう一方は、側面に板材を立て、上に板材を被せて蓋にする構造のもので、長さ3.3m、幅0.3～0.4m、高さ0.3mである。

註

- 1 約106mを基準とし、それを二分、三分する位置に大畦畔を検出した。たとえば、大畦畔SL143とSL149の交点を基点とすれば以下の関係になる。

（南北方向）

SL143～SD116 約106m \div 1町、SL143～SL141 約53m \div 1/2町、SL143～SL145 約35.3m \div 1/3町

（東西方向）

SL149～SD116とSD117の合流部 約106m \div 1町、SL149～SL147 約53m \div 1/2町、SL149～SL148 約35.5m \div 1/3町

- 2 掘立柱建物模式図の記号は、●；柱根が残存する掘形、○；抜き取り痕跡あり、○；掘立柱掘形、○；推定掘形である。方位はすべて上が北。

第4章 遺物

1 遺物の概要

調査では、縄文時代から室町時代の遺物が出土しており、土器、木器、石器、金属器と、器種も豊富である。遺物の大半は土器で遺物整理箱に約 900 箱が出土しており、他に木器 800 点以上、石器約 60 点、金属器約 100 点が出土している。

遺物を時期別にみると縄文時代の遺物は前期・後期・晩期の土器が出土しているが、少量で整理箱 1 箱に満たない。

弥生時代の遺物は前期・後期の土器が整理箱で約 10 箱出土しており、この他に石器が少量出土している。

古墳時代の遺物は、土器、木器が多量に出土しており、遺物出土量の 7 割以上がこれにあたる。これらは器種、器形のバリエーションも豊富であり、大半が D 区や E1 区の集落を巡る河川から出土している。この他に石器、金属器が少量出土している。

長岡京期の遺物は古墳時代に次いで多く、土器、木器、石器、金属器が出土しており、全体の 2 割程度を占める。多くは G1 区の河川、E1・2 区、D 区の建物周辺から出土している。中でも G1 区の河川から出土した遺物は祭祀に関係したものと考えられる。

平安・鎌倉時代の遺物は土器が整理箱で約 30 箱あり、大半が C1・2 区の河川や池状の遺構から出土している。この他に木器、金属器が出土しているが、量は少ない。

調査区	土器				木器			
	時期			箱数 総計	時期			点数
	古墳時代	長岡京期	その他		古墳時代	長岡京期	その他	
G1	1	89	1	91		35		35
G2	5	3	3	11				
G3	2	18	1	21		43		43
F1	3	1	1	5	22			22
F2	5		1	6	22			22
E1	75	20		95	93	180		273
E2	5	25		30				
E3	2			2	2		1	3
D	500	20		520	311	10		321
A			2	2				
B	13	7		20				
C1	26		20	46	23		6	29
C2	15		8	23	46		42	88
H	2		1	3				
計	654	183	38	875	519	268	49	836

表 4 地区別出土遺物数

2 縄文・弥生時代の遺物

(1) 縄文時代の遺物（図版 110、図 15）

前期・後期・晩期の土器が認められる。

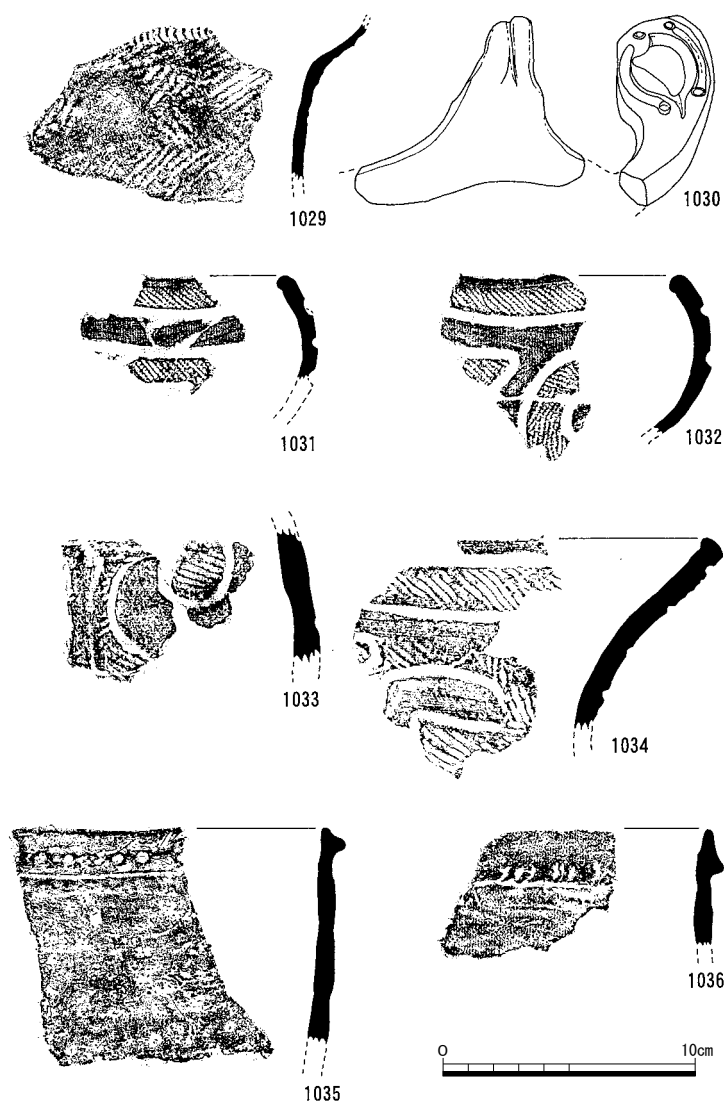


図 15 縄文土器実測図 (1:3)

1031・1032 は内側に湾曲する浅鉢口縁部の破片で、同一個体の可能性もある。また、1033・1034 は深鉢の破片である。いずれも外面に施した縄文を凹線で区画し、部分的に磨り消して文様とする磨消縄文である。中津式のものと考えられる。いずれも G3 区の SD1 から出土している。

晩期の土器 (1035・1036) 深鉢口縁部の破片である。共に口縁部よりやや下に 1 条の突帯を巡らし、突帯上に D 字形の刻目を施している。船橋式のものと考えられる。D 区 SD3 から出土している。

前期の土器 (1029) 深鉢の体部上半の破片である。全体に薄手で、上部に間隔の密接した C 字爪形文、その下方には羽状縄文を施している。北白川下層 II b 型式のものと考えられる。F 区遺物包含層より出土している。

後期の土器 (1030～1034)
1030 は大きな貫通孔を持つ橋状把手部で縁部内面にはわずかに縄文帯が認められる。把手外側には一条の沈線と同一工具による刺突が沈線両端に穿たれ、イヤリング状を呈している。また、同様の沈線、刺突は橋状部にもある。全体に磨滅が激しく型式名は断定できないが、後期前半の中津式か福田 K2 式あたりに比定できよう。F 区の水田の溝から出土している。

(2) 弥生時代の遺物

1) 土器（図版 27・110・111）

前期と後期のものがある。

前期の土器（1～8） 壺・甕がある。1は無頸壺で、平底に球形の体部が付く小型のものである。壺（2～5）は平底に球形の大きく張った体部、外上方に開く口縁部からなり、小型のもの（2・3）と大型のもの（4・5）がある。体部上半から頸部には2～3条のへら描き沈線文が2～3段施されるものが多い。また、貼付突帯を施すもの（3）、へら描きの連弧文を施すもの（5）も認められる。甕は膨らみの少ない体部に小さく外反する口縁部から成る。口縁端部に刻み、頸部にへら描き沈線文を施すもの（7・8）と無文のもの（6）がある。これらは、形状や施文の状況からいずれも前期新段階のものと考えられる。1・5・7はD区SD3から、2・3・4・6・8はD区SD4から出土している。

後期の土器（9～15） 壺・甕がある。壺（9）は平底にやや縦長の体部がつき、口縁部は外反し端部を下方に広げ面を作り出している。10は長頸壺で、平底にやや胴の張った体部が付く、口縁部はほぼ直立し、端部はやや外方に開く。肩部にはへら描きの記号が付いている。甕（11～15）はやや胴が張った体部に上外方に開く口縁部から成る。口縁端部に刻みを施すもの（11・12）がある。9～11はD区SD4から、12～15はC1区SD6から出土している。

2) 石器（図版 28・163）

石器には石包丁・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・石鎌・石剣がある。これらは、すべてF区およびE区の包含層から出土している。

石包丁（940～944） 全部で14点が出土しており、直線刃半月形態のもの（940）と直線刃長方形形態のもの（941～944）がある。直線刃半月形態のものは全体によく研磨されているが、直線刃長方形形態のものは表裏に打撃痕をとどめているものが多い。紐穴2孔をあけているもの（940・941）も認められる。すべて粘板岩系の石材を使用している。

扁平片刃石斧（945） 小型のもので刃部には使用のため刃こぼれが認められる。

太型蛤刃石斧（946） 刃部を欠損している。砂岩製である。

石鎌（947） 打製で凸基有茎式のものであるが茎部を欠損している。サヌカイト製である。

石剣（948・949） 粘板岩系の石材を使用し、表面を丁寧に研磨している。

3 古墳時代の遺物

(1) 土器

土器の出土量は非常に多いが、図示した土器はその一部に止まった。ただ、住居から出土した土器は、住居の年代ひいては集落の変遷を知る上で重要な手掛かりになるので、可能なものは極力図示した。他の遺構から出土した土器は、各器形を代表すると思われるものを中心に図示することを心掛けたが、すべてを網羅することはできなかった。土器は主な遺構毎に概略を

述べる。

個々の土器の説明については巻末の付表に示した。形態については図示されているため、特殊な例を除いて省略したものがあ

る。土師器を説明するにあたって、甕 A～H、壺 A～N、ミニチュア壺、小型丸底壺 A～C、有孔鉢 A～C、鉢 A～E、小型鉢、台付鉢 A～E、高杯 A～I、小型器台 A・B、器台 A～C、甌、鍋、杯、手焙り形土器、手捏ね土器 A～C、製塩土器、革袋形土器に分類した。(表 5) また、分類は主に口縁部と底部の形態を基準に行った。

色調に関しては、土師器は大きく黄灰色系、茶褐色系、赤褐色系、灰褐色系、灰白色系に、須恵器は青灰色系、灰白色系に分けたが、必要に応じて適宜追加した。

焼成は良好、良、不良の 3 段階に分けた。

胎土に関しては、含まれた砂粒の砂礫種を正確に識別することができないので、砂粒の含有量の多寡の表現にとどめた。ただ、石粒が熱を受けて赤くなったもの(赤色斑粒と称する)は、在地に特有な砂礫種と思われるので、含有が認められたら注記した。

なお、須恵器は田辺昭三氏の型式分類にしたがった。^{註1}

1) 建物出土土器

SH11 出土土器(図版 29・114) 埋土から庄内期の土師器の甕 A1(36) と台付鉢 D(35) が出土した。

SH12 出土土器(図版 30・113) 地床炉から庄内期の土師器の甕 A1(51) が出土した。

SB13 出土土器(図版 29・112) 西側の柱列の南から二番目の柱穴から庄内期の土師器の甕 A1(20)、鉢 A1(16)、高杯 A1(19)、高杯 H2(17・18) が出土した。

SH14 出土土器(図版 29・112) 北西隅の主柱穴の北辺の床面直上から庄内期の土師器の甕 A1(31～33)、埋土から庄内期の土師器の甕 B1(27～30)、壺 N(26)、高杯 A1(34) が出土した。

SH15 出土土器(図版 30・113) 埋土から庄内期の土師器の甕 B1(52) が出土した。

SH17 出土土器(図版 29・114) 貯蔵穴から庄内期の土師器の高杯 G(24)、埋土から庄内期の土師器の甕 B1(25)、壺 D1(23)、鉢 D(21)、小型鉢(22) が出土した。

SH18 出土土器(図版 29・114) 埋土から土師器の甕 A1(39・40)、手捏ね土器 C(37)、高杯 A1(38) が出土している。

SH20 出土土器(図版 30・113) 貯蔵穴から庄内期の土師器の壺 L(46)、台付鉢 A(49)、埋土から庄内期の土師器の壺 E3(41)、台付鉢 A(47・49)、台付鉢 B2(48)、高杯 A1(45)、高杯 H2(42)、小型器台 A3(44)、高杯 G(43)、器台 A(50) が出土した。

SH21 出土土器(図版 30) 地床炉から庄内期の土師器の手焙り形土器(61) が出土した。

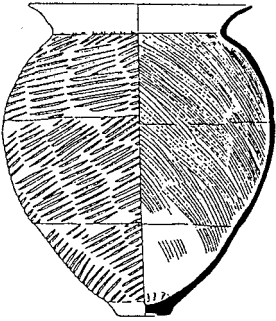
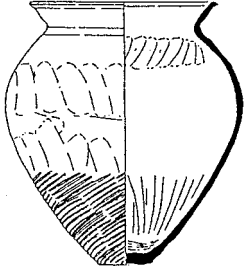
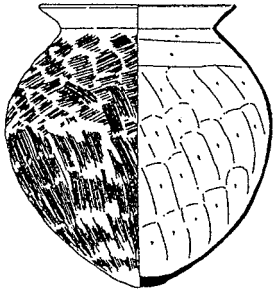
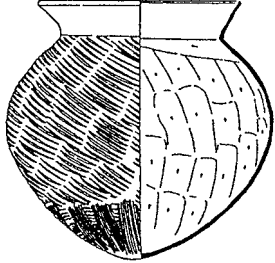
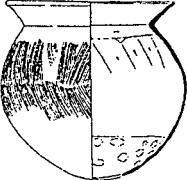
SH22 出土土器(図版 30・115) 床面直上から庄内期の土師器の甕 A1(55)、新しい貯蔵穴から庄内期の土師器壺 E1(56)、埋土から庄内期の土師器甕 A1(54)、台付鉢 E(53) が出土した。

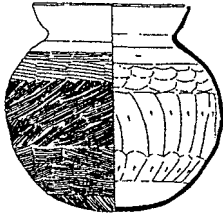
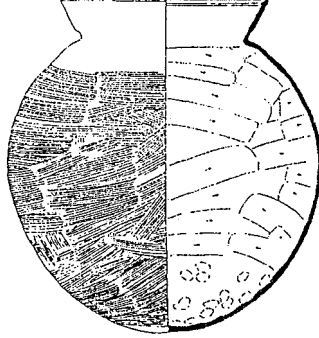
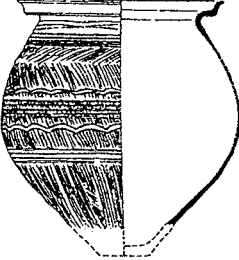
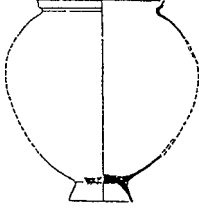
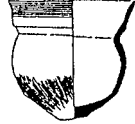
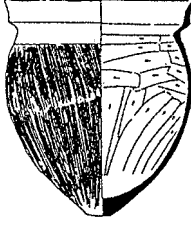
SH23 出土土器(図版 30・115) 貯蔵穴より庄内期の土師器甕 A1(57) が出土した。

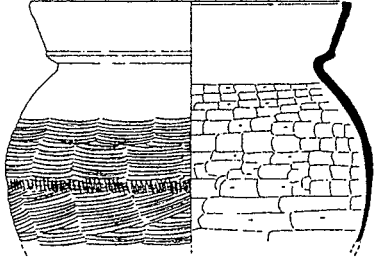
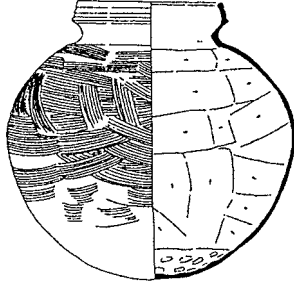
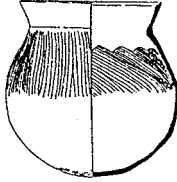
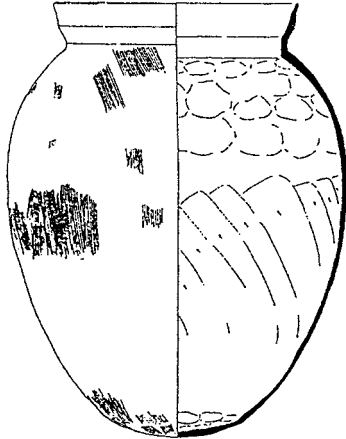
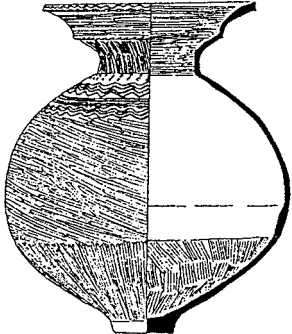
SH24 出土土器(図版 30・115) 貯蔵穴から庄内期の土師器甕 A1(58～60) が出土した。

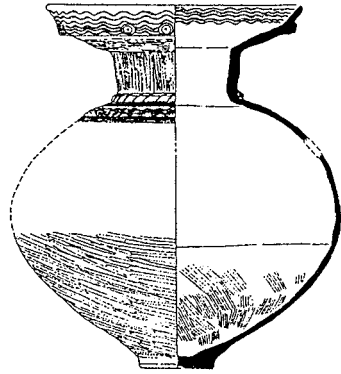
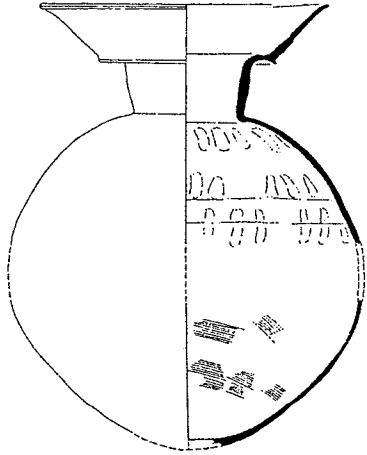
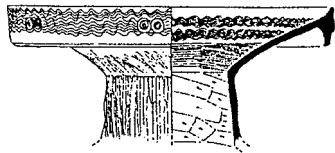
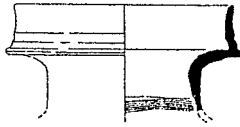
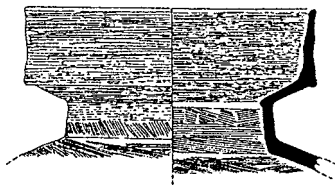
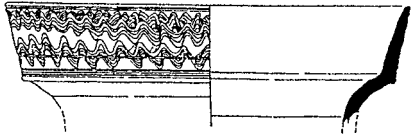
SH26 出土土器(図版 30) 埋土から庄内期の土師器甕 A1(71)、小型器台 B(69・70)、器台

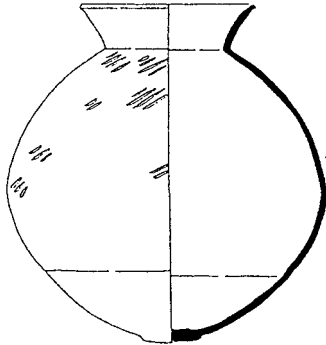
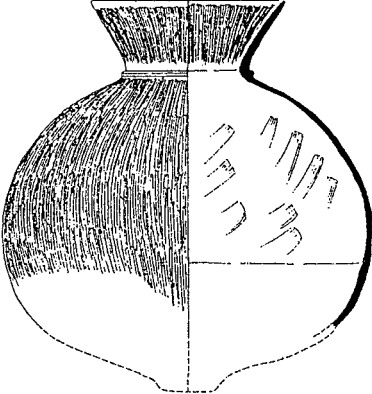
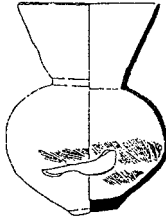
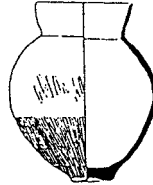
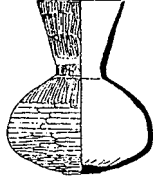

表5 水垂遺跡出土土師器分類表

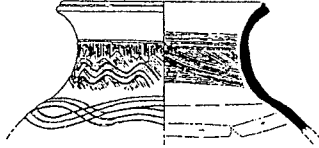
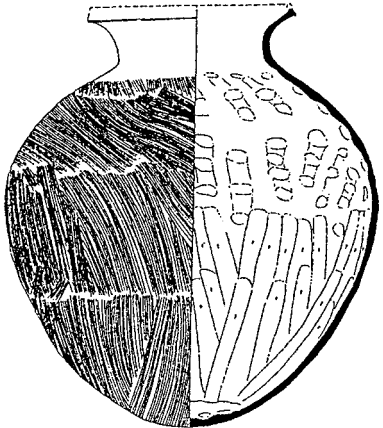
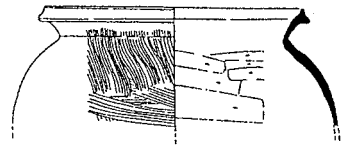
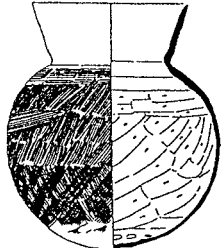
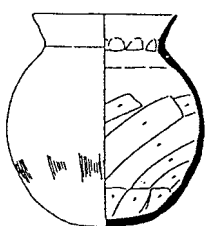
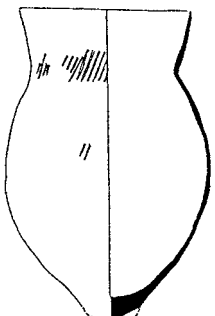
器形	形態・調整・文様の特徴		凡 例
甕 A	「く」の字口縁で、やや肩が張り、下方にすぼまる平底である。	A1 口縁端部を丸くおさめる。多くは外面右上がりのタタキ調整を施す。内面をハケ、板ナデで調整を施す。	
	A2	口縁端部は平坦な面を持つ。体部下半はタタキ、上半はハケか板ナデによる調整、内面はケズリまたは板ナデ調整を施す。	
甕 B	「く」の字口縁で、体部は丸く、底部が尖り気味である。	B1 口縁端部をつまみ上げる。外面は右上がりの細筋のタタキと縦ハケ調整。内面はケズリ調整。	
	B2	口縁端部をつまみ上げる。外面底部は横方向のタタキの後ハケ調整、体部は左上がりのやや鋭いタタキ調整を施す。内面はケズリを施す。	
甕 C	「く」の字口縁で、体部が丸く、底部が丸底である。	C1 口縁端部をつまみ上げる。外面ハケ調整、内面はハケ、またはケズリ調整を施す。	

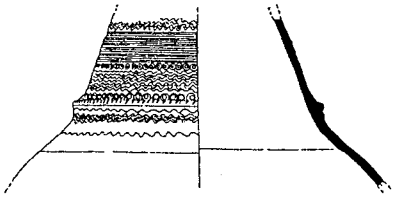

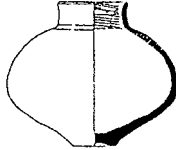
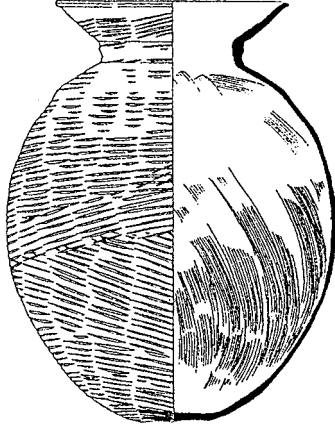

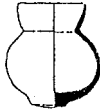



甕	C	C2	「く」の字口縁で、体部が丸く、底部が丸底である。	口縁端部が内面に肥厚して丸くなる。外面はハケ調整、内面はケズリを施す。	
		C3		口縁端部は内面に肥厚し、内傾する面を持つ。やや長めの体部を持つ。外面はハケ調整、内面はケズリを施す。	
甕	D		受口状口縁のもの。体部の最大径が中央にあり、底部は平底である。外面は鋭いハケ調整、内面はナデ調整を施す。体部に櫛描き文を施す。		
甕	E		「S」字状口縁で台付のもの。体部は丸い。外面は鋭いハケ、内面はナデ調整を施す。		
甕	F	F1	二重口縁をもつ。	口縁上半がやや外反し、端部は尖り気味である。口縁部に比して小さな体部で、小さい平底をもつ。外面はハケ、内面はケズリ調整を施す。	
		F2		口縁上半は大きく外反し、端部は丸くおさまる。肩の張りは小さく、体部は下方にすぼまり、小さな平底をもつ。外面はタテハケ、内面はハケ、またはケズリ調整を施す。	

甕 F	二重口縁を持つ。	F3	口縁上半は直線的に外上方へのび、端部は内面に肥厚する。口縁の屈曲部の稜が突出する。体部は球形で、底部は丸底である。外面はハケ、内面はケズリまたはナデ調整を施す。	
		F4	口縁が内傾し、外面に擬凹線がめぐる。球形の体部を持つ。底部は丸底である。体部外面ハケ、内面ケズリ調整を施す。	
甕 G	口縁部は外反し、端部内面に斜めの面を持つ。最大径が中央よりやや下にある。内外面ともハケ調整を施す。			
甕 H	口縁部は外上方へ小さく開き、端部内面に斜めの面を持つ。胴は長い。外面はハケ調整、内面下半はケズリ、上半は指オサエを施す。			
壺 A	二段に外反する口縁部（二重口縁）を持つ。	A1	口縁端部外面が平坦になる。底部は平底である。口縁端部・肩部などに櫛描き文・竹管文などで装飾を加える。	

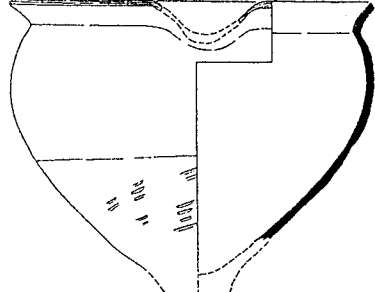
壺	二段に外反する口縁部（二重口縁）を持つ。	A2	口縁の立ち上がりが小さく、受け口状になる。体部は球形で、平底である。体部と頸部の境に凸帯が付く。縁端部・肩部などに櫛描き文・竹管文などで装飾を加える。	
		A3	口縁上半は大きく外反し、端部は丸くおさまる。体部は球形で、丸底である。装飾は施されない。	
壺 B	口縁が外方に開き、粘土帯を付加することによって端部を上下に拡張する。			
壺 C	二段に屈曲する口縁がほぼ垂直に立ち上がる。	C1	口縁上半は内湾気味に内傾し、屈曲部に稜をもつ。口縁端部は丸くおさまる口縁外面に擬凹線がめぐる。	
		C2	口縁上半はほぼ直立し、端部は丸くおさまる。口縁内外に密にミガキを施す。	
		C3	口縁上半はやや外傾し、端部は平坦になる。口縁外面を櫛描き文で装飾する。	


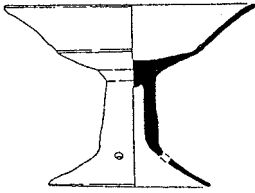
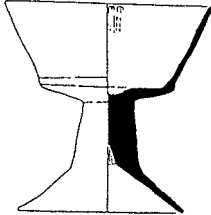
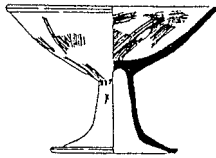

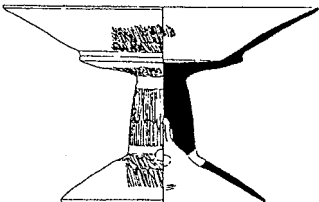
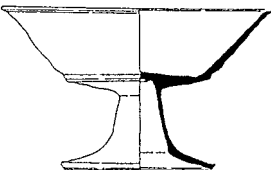

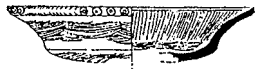
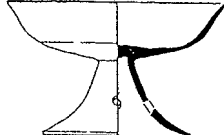
壺	D	D1	口縁の立ち上がりが短く、端部を外方につまみ出す。体部は丸く、底部は平底である。	
		D2	口縁端部は尖り気味である。口縁と体部の境に凸帯を有する。体部は丸い。	
壺	E	E1	口縁の立ち上がりが直線的である。口縁端部は丸くおさまる。体部は丸く、底部は平底である。	
		E2	口縁の立ち上がりがやや長く、端部は丸くおさまる。体部はやや長胴で、底部は平底である。	
	E3	口縁端部は尖り気味である。頸部は細い。体部は扁平で、底部は平底である。		
	E4	口縁の立ち上がりが短く、端部は丸くおさまる。体部が球形に近く、小さい平底が付く。		

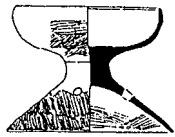
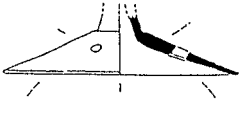
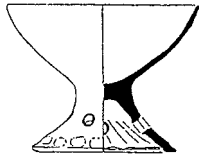

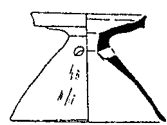
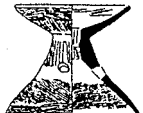
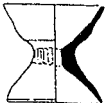
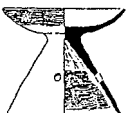
壺 F	口縁端部は外反し、端部は短く内傾する。	F1	口縁部と体部の区別があいまいである。口縁端部は面を作り、擬凹線がめぐる。体部に櫛描き文を施す。	
		F2	体部は丸く、底部は丸底である。	
壺 G	口縁部は短く外反し、肩が張る。口縁端部が内外に突出する。			
壺 H	口縁部は直線的でやや長く、端部は尖り気味である。体部は球形で、底部は丸底である。			
壺 I	口縁は短く立ち上がり、端部は丸くおさまる。体部は球形に近く、底部は平坦である。			
壺 J	口縁部が内湾気味に直立し、端部は尖る。体部は卵形で、底部は平底である。			

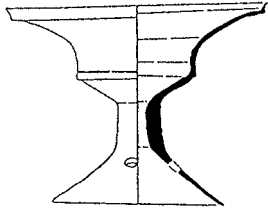
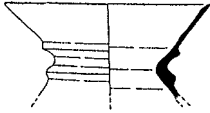
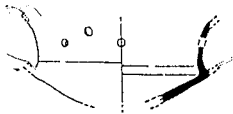
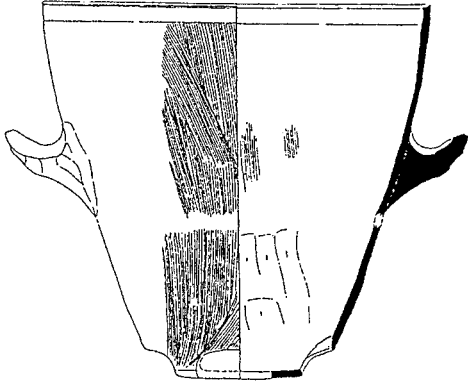

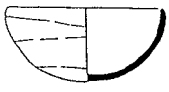
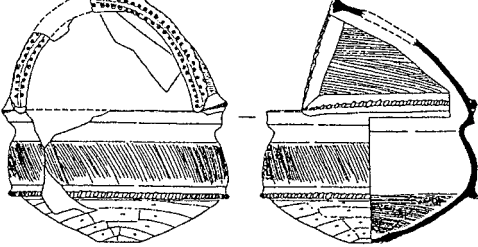



壺 K	<p>体部から上すぼまりの口縁をもつ。体部と頸部の境のやや上に凸帯が付く。</p>			
壺 L	<p>無頸壺である。底部は丸く、底部は平底である。</p>			
壺 M	<p>口縁部は短く直立し、端部は丸くおさまる。体部は偏平で、底部は平底である。</p>			
壺 N	<p>直立する短い頸部をもち、口縁が内湾気味に外上方に開く。口縁端部は丸くおさまる。体部は楕円形で、底部は平坦である。</p>			
ミニ チュ ア 壺	器高 5cm 下の ミニチュアの もの。	ミニ チュ ア 1	壺 I に類似する。	
		ミニ チュ ア 2	壺 E2 に類似する。	
		ミニ チュ ア 3	尖底で、口縁がほぼ直立する。	
小型 丸底 壺 A	口縁が「く」 の字に外反 する。	A1	口縁部が器高のほぼ 1/2 を占め、端部は尖り気味である。体部は球形である。	
		A2	口縁部は器高の 1/2 以下で、口縁端部は丸くおさまる。体部は球形である。	

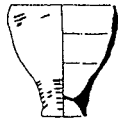
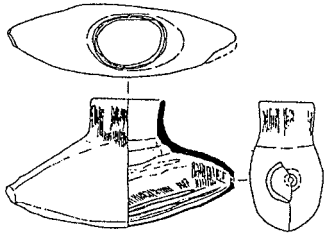
小型丸底壺 A	口縁が「く」の字に外反する。	A3	口縁の一部を打ち欠いて片口風にする。底部は平底。	
小型丸底壺 B	口縁が短く直立し、端部は外面に面を持つ。体部は球形である。			
小型丸底壺 C	明瞭な屈曲部はもたないが、二重口縁気味である。	C1	口縁部が器高のほぼ2/3を占め、端部は丸くおさまる。底部は偏平である。	
		C2	二重口縁で、端部は外方へつまみ出す。体部は球形である。	
有孔鉢 A	口縁端部は丸くおさまる。平底で、内湾気味の体部を持つ。			
有孔鉢 B	口縁部が外上方にほぼ直線的にのび、端部がやや尖り気味である。底部は尖る。			
有孔鉢 C	口縁部は内湾気味に上方にのび、わずかに「く」の字に外反し、端部は丸くおさまる。小さい平底を持つ。			
鉢 A	平底で、外上方へのびる内湾気味の体部を持つ。	A1	口縁端部が丸くおさまる。甕Aの底部に近似する。	
		A2	口縁端部が外方へ開き、丸くおさまる。	
鉢 B	広口で口縁部がわずかに外反し、端部が丸くおさまる。底部は平底である。			
鉢 C	口縁部が「く」の字に外反し、端部が丸くおさまる。体部が深く、底部は丸底である。			

鉢 D	口縁部は外反し、端部は丸くおさまる。体部は肩の張らない長い胴で、底部は平底である。		
鉢 E	口縁部は外反し、端部は外面に面を持つ。体部は下方にすぼまり、底部は平底である。片口である。		
小型鉢	「く」の字口縁で、端部は尖り気味である。体部は浅く、底部は丸底である。		
台付鉢 A	口縁端部は丸くおさまる。内湾する体部を持つ。		
台付鉢 B	B1	口縁が「く」の字に外反する。 鉢Bに台が付く。	
	B2	口縁部が大きく外方に開き、端部は丸くおさまる。小さな台が付く。	
	B3	口縁部は内湾気味で、端部は丸くおさまる。体部と口縁の境に凸帯をもつ。	
台付鉢 C	口縁端部は丸くおさまる。体部は低く、扁平である。		
台付鉢 D	受け口状の口縁で、端部は丸くおさまる。体部は長胴で、肩が張る。		

台付鉢 E	口縁端部は丸くおさまる。体部は浅い皿状である。			
高杯 A	杯部が屈曲して外上方にのびるもの。	A1	口縁部が外反し、端部は丸くおさまる。	
		A2	口縁部が直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。杯部が深い。	
		A3	杯部の屈曲部が不明瞭で、口縁端部は丸くおさまる。	
		A4	口縁端部は外反する。器壁が厚い。	
高杯 B	杯部が屈曲して外上方にのび、端部は丸くおさまる。屈曲部に明瞭な段を持つ。	B1	口縁部は直線的にのびる。	
		B2	口縁端部が外方に折れる。脚裾部が広がる。	
高杯 C	口縁部は屈曲して短く立ち上がり、端部は丸くおさまる。			
高杯 D	杯部が二段に屈曲し、口縁端部外方に面を持ち装飾を施す。			
高杯 E	杯部は、屈曲部の境が不明瞭な皿状である。口縁端部は丸くおさまる。			

高杯 F	口縁部は内湾し、端部は丸くおさまる。杯部は低くて偏平である。			
高杯 G	脚が屈曲して、裾部が大きく開く。			
高杯 H	H1	内湾する深い杯部をもつもの。口縁端部は直立し、尖り気味である。脚裾が小さく広がる。		
	H2	口縁端部は丸くおさまる。脚部は小さく、裾が広がる。		
高杯 I	杯部がほぼ直線的に外上方に開く。脚部も外方に開き、端部は下方につまみ出し、外側に面を作る。			
小型器台 A	受部と脚部が貫通する。	A1	受部が屈曲して外反し、口縁端部は丸くおさまる。	
		A2	受部端部をつまみ上げ、外側に面をつくる。	
		A3	受部が直線的に外上方へのびる。	
		A4	受部が直線的に外上方へのび、端部は丸くおさまる。	
小型器台 B	受部と脚部が貫通しない。受部は内湾して外方へ開き、端部は丸くおさまる。			

器台 A	受部が2段に屈曲し、端部を上方につまみ上げて鋭く尖る。	
器台 B	受部と脚部が対称形で中央部が強くしまる。鼓形の器台。	
器台 C	口縁部を2段につくり、上段の口縁に円形の孔を穿つ。	
甑	口縁端部は面を持つ。上開きの筒形を呈し、体部の中位よりやや上に把手が付く。底部の中央に円孔と、それを取り囲むように楕円形の孔を4箇所均等に穿つ。	
鍋	体部は扁平で、最大径のやや上に把手が付く。	
杯	口縁端部は丸くおさまる。丸底で、体部は内湾する。	
手焙り形土器	口縁部は受け口である。扁平な鉢形の器体に、半ドーム状の覆いをかぶせる。体部には突帯がめぐる。幅広の前縁部をもつ。	
手土捏器ね A	口縁部が内湾気味に外上方へのび、底部は尖り気味である。	
手土捏器ね B	体部は筒形で、底部が平坦なもの。	
手土捏器ね C	口縁は「く」の字に屈曲し、底部は平底である。	

製塩土器	体部は内湾しながら立ち上がり、外面はタタキを施す。小型で裾広がり脚台を持つ。	
革袋形土器	体部は紡錘形で、直立する口縁が付く。体部の一方の頂点に穿孔がある。	

A(72) が出土した。

SH27 出土土器 (図版 30・115) 埋土から庄内期の土師器壺 D1(64)、鉢 D(63)、高杯 A1(66)、小型器台 A3(62)、器台 A(65) が出土した。

SH29 出土土器 (図版 30) 埋土から庄内期の土師器の壺 D1(68)、小型器台 A2(67) が出土した。

SH33 出土土器 (図版 31) 埋土から布留期の土師器の高杯 A1(93・94) が出土した。

SH34 出土土器 (図版 31) 地床炉より布留期の土師器の高杯 A1(101)、埋土より布留期の土師器の小型丸底壺 A1(100) が出土した。

SH35 出土土器 (図版 31・116) 周溝南隅から布留期の土師器の甕 C3(82・83)、高杯 A1(80)、埋土から布留期の土師器の高杯 A1(81) が出土した。

SH36 出土土器 (図版 31・116) 埋土から庄内期の土師器の甕 B1(73)、壺 D1(74)、手焙り形土器(75) が出土した。

SH37 出土土器 (図版 31・116) 埋土から布留期の土師器の甕 C3(95)、甕 E(99)、壺 E1(96)、小型丸底壺 A1(98)、高杯 B2(97) が出土した。

SH39 出土土器 (図版 31) 埋土から布留期の土師器の壺 A1(84)、小型器台 B(85) が出土した。

SH45 出土土器 (図版 31・116) 床面直上から布留期の土師器の小型器台 A3(88)、埋土から布留期の土師器の甕 A(91)、甕 E(92)、壺 D1(86)、高杯 A1(89・90)、小型器台 B(87) が出土した。

SH49 出土土器 (図版 31) 埋土から布留期の土師器の小型器台 B(78) が出土した。

SH50 出土土器 (図版 31) 埋土から土師器の壺 D1(77)、鉢 D(76) が出土した。

SH51 出土土器 (図版 31) 地床炉から布留期の土師器の甕 C1(79) が出土した。

SH56 出土土器 (図版 31・116) 埋土から布留期の土師器の高杯 A3(102) が出土した。

SH71 出土土器 (図版 32・117) 貯蔵穴から土師器の甕 H(117)、MT15～TK10 型式の須恵器の杯身 (118)、カマドから土師器の甕 G(121)、MT15～TK10 型式の須恵器の杯身 (119)、高杯 (120) が出土した。

SH72 出土土器 (図版 32・117) 床面直上から土師器の杯 (105)、TK47 型式の須恵器の杯身 (103・104)・高杯 (106)、カマドから土師器の甕 H(107～109) が出土した。

SH73 出土土器 (図版 32) 埋土より土師器の甕 G(114) が出土した。

SH74 出土土器 (図版 32・117) カマドから TK47 型式の須恵器の杯身 (111・112)、埋土から土師器の甕 G(115)、甌 (116)、TK47 型式の須恵器の杯蓋 (110)、高杯 (113) が出土した。

SH76 出土土器 (図版 33・118) 埋土から土師器の甕 G(122)、TK43 型式の須恵器の杯身 (123・124) が出土した。

SH78 出土土器 (図版 33・118) 埋土から土師器の鍋 (131)、TK43 型式の須恵器の杯蓋 (128・129)、杯身 (130) が出土した。

SH79 出土土器 (図版 33・118) 床面直上から須恵器の壺 (132)、カマドから土師器の甕 G(133)、埋土から土師器の甕 G(134) が出土した。

SH80 出土土器 (図版 33・118) カマドから土師器の甕 G(126) が出土した。

SH82 出土土器 (図版 33・118) 埋土より土師器の甌 (127)、TK43 型式の須恵器の杯蓋 (125) が出土した。

2) SE95 出土土器 (図版 33)

布留期の土師器が、整理箱にして 3 箱出土した。甕 C3、壺 I、小型丸底壺 A2、高杯 A3 がある。

3) SD98 出土土器 (図版 34～39・119～125)

庄内期の土師器が、整理箱にして 417 箱出土した。復原して完形になるものが多い。土師器には甕 A・B・D・F、壺 A～F・I・J・N、高杯 A～I、器台 B、小型器台 A・B、鉢 A～C・E、台付鉢 A～E、有孔鉢 A～C、ミニチュア壺、製塩土器、革袋形土器などがあり、各器形のバリエーションは豊富である。しかし、ほとんどが甕と壺で、高杯・器台などの他の器形が出土量全体に占める比率は小さい。甕には、弥生土器の伝統をひいて在地で作られたもの、生駒西麓 (甕 B1)、大和 (甕 B2)、近江 (甕 D)、北陸 (甕 F1、壺 D5)、丹波 (甕 F2)、山陰 (甕 F3、壺 C1・3)、讃岐 (壺 C2) などの地域から搬入されたもの、もしくはその影響を受けて生産されたものがある。また、甕・壺の胴部に溝状の穿孔を有するもの (186・188 など) が多くみられる。

4) SD101 出土土器 (図版 40・41・126～128)

庄内期の土師器が、整理箱にして 55 箱出土した。甕 A～D・F、有孔鉢 A、壺 A・B・D・E、高杯 A・B・H、小型器台 A、鉢 A・D、台付鉢 B、手焙り形土器、手捏ね土器、革袋形土器がある。生駒西麓、近江、丹波、東海 (甕 E) の土器が出土している。

5) SD122 出土土器 (図版 42～45・129～132)

庄内期の土師器、布留期の土師器、須恵器が、整理箱にして 53 箱出土した。庄内期の土師器

には甕F、壺A～C・F・K、鉢Aがあり、北陸系、山陰、讃岐、播磨の土器も出土した。布留期の土師器には甕C・F、壺A・D・I、小型丸底壺A～C、高杯A・B・E・H、小型器台A、手捏ね土器Aなどがある。須恵器にはTK73型式の杯蓋・甕、TK216型式の壺・把手付鉢、TK208型式の高杯の蓋、TK47型式の杯蓋、MT15型式の杯蓋・甕がある。

6)SD102 出土土器（図版 45）

庄内期の土師器、布留期の土師器、須恵器が整理箱にして4箱出土したが、庄内期の土師器、布留期の土師器は磨滅が激しくて、二次堆積であると思われる。須恵器は、ON46型式の杯蓋・甕などがある。

7)SD123 出土土器（図版 45～47・133・134）

庄内期の土師器、布留期の土師器、須恵器が、整理箱にして62箱出土した。庄内期の土師器には甕A・D、壺A・C・D・G・M、高杯D・G、小型器台Aなどがあり、近江系、山陰系、讃岐系の土器も出土した。布留期の土師器には甕C・F、壺H、小型丸底壺A・C、鉢B、高杯A、器台B、手捏ね土器Aなどがあり、山陰系の土器（甕F4、器台B）も出土した。須恵器にはTK47型式の杯蓋・高杯、MT15型式の杯蓋・身、TK10型式の甕・杯蓋などがある。

8)SD125 出土土器（図版 48・134・135）

庄内期の土師器、布留期の土師器、須恵器が、整理箱にして38箱出土した。図示したのは庄内期の土師器壺A、布留期の土師器壺F・H、小型丸底壺B、高杯B、台付鉢E、手捏ね土器B、須恵器のON46型式の高杯、TK208型式・TK23型式の甕がある。

9)SD124 出土土器（図版 48・135）

庄内期の土師器の甕D・F、布留期の甕C、小型丸底壺Bなどが整理箱にして22箱出土した。

10)SD103 出土土器（図版 49・136）

庄内期の土器が整理箱にして27箱出土した。土師器の甕B、鉢A、高杯E、小型器台Aなどがある。

11)SD108 出土土器（図版 49・136）

整理箱にして1箱出土した。土師器の甕C、須恵器のTK47型式の有蓋高杯、MT15型式の杯蓋・甕などがある。

12)SD111 出土土器（図版 49・136）

整理箱にして3箱出土した。図示したのは土師器の鉢E、須恵器のTK217型式の杯蓋である。

13)SD116 出土土器（図版 49・136）

布留期の土器が整理箱にして8箱出土した。壺D、小型丸底壺Aなどがある。

14)SD117 出土土器（図版 49）

布留期の土器が整理箱にして4箱出土した。甕Hなどがある。

15)SD127 出土土器（図版 50・137・138）

整理箱にして20箱出土した。布留期の土師器の甕C・E、壺E、須恵器のTK43・47型式の杯蓋・杯身・甕、TK217型式の杯身などがある。

16)SD128 出土土器（図版 50・137・138）

整理箱にして 6 箱出土した。庄内期の土師器壺 B・F、器台 C、布留期以降の土師器甕 C、壺 D、杯、器台 B、韓式系土器の甕、須恵器の ON46 型式の杯蓋・壺などがある。

17)SX96 出土土器（図版 49）

布留期の壺 A が 2 個体出土したが、図示できたのは 1 点のみである。

18)SK99 出土土器（図版 48・135）

布留期の土師器の高杯 A・B のみが整理箱にして 1 箱出土した。

19)SK100 出土土器（図版 50・138）

布留期の土師器の高杯 A・B が、整理箱にして 1 箱出土した。

20) 水田上面砂層（洪水層）出土土器（図版 49・136）

整理箱にして 1 箱出土した。土師器の甕 H、須恵器の TK47 型式の高杯、MT15 型式杯蓋・身などがある。

(2) 木器

古墳時代の木器は、主として河川から約 500 点出土した。このうち加工痕のあるものを抽出し、実測図および写真を掲載する。分類すると、容器、農具、紡織具、漁撈具、服飾具、馬具、工具、雑具、建築部材、用途不明品などに分けられる^{註 2}。以下、この順で記述する。また、各木器の出土

	容 器	農 具	紡 織 具	漁 撈 具	服 飾 具	馬 具	工 具	雑 具	建築部材	用途不明
SD98	750	780		801						
SD103		758・759 762・788 790・792	796	799			811			812・814 826・829 862・863 878・882 883
SD109	751・752	761								
SD110		768								
SD111	742・747 748	756・781～ 786						836		825・830 835・869 871・877
SD113		779								
SD116										831・861 866
SD117		773・775								
SD118		774								
SX120					802					
SD122	743・746 749	767・777 787・789 793・794				805		818・822	843・846 847・852 853・858	813・827 865・870 875・876
SD123		754・755 760・764 765・769 770・778 791	795	798・800	803・804	806	809	821	837～842 844・845 859・860	823・828 832・834 867・872～ 874・879
SD124										880
SD125		772・776							850・851 854～857	815・816 833・881
SD127			797							
SD128	745・753	757・763				807・808		817・820	848・849	
SX129		771								
SX132								819		
SD133	744						810			
水田上面		766								864・868

表 6 古墳時代遺構別木器出土表

地点は表 6 に示した。

1) 容器 (図版 51・139)

盤・槽 (742 ~ 745・752・753) 平面が方形もしくは楕円形の浅い容器を盤、槽とする。盤、槽の区別は必ずしも明確ではないが、やや深めで大型のものを槽 (742) とした。これらは器壁が厚く、削り痕跡を残し、粗製品が多い。横木取りで口縁は短辺を長辺よりも厚手に仕上げる人が多い。742 は長さ 60cm、高さ 8cm である。743 は長さ 45cm、幅 21cm、高さ 8.8cm である。744 は長さ 41.8cm、現存幅 20.5cm、高 8cm である。752 は長さ 23.2cm、幅 10.3cm、高さ 3.2cm である。

曲物 (746 ~ 751) 曲物には円形 (748・749)、楕円形 (746・747・750・751) がある。側板と底板の結合方法は樹皮結合である。底板の上面周縁に溝を刻み込み側板をはめ込むもの (746)、周縁上面を切り欠いて段にし側板を当てるもの (747・748)、周縁には溝や段がなく側板を底板の上面に直接当てるもの (749) がある。

2) 農具 (図版 52・53・140・141)

泥除 (754 ~ 758) 平面形は横に長い隅丸台形あるいは隅丸方形である。断面形は周囲から中央に厚みを増し、最も上端の位置に柄孔を持つもの (754)、小さい円孔は持つが柄孔を持たないもの (756) などがある。いずれも横木取りである。

直柄横鍬 (759・760) 平面形は、長方形あるいは下方向に狭まる逆台形をなす。柄孔は中央より若干上方にあり、柄孔の周囲が隆起する。760 は隆起が刃の近くまでのび下端が尖る。いずれも横木取りである。760 は長さ 16.2cm、幅 44.3cm、厚さ 2.6cm である。

直柄広鍬 (761・762) 頭部の左右がくびれ台形で、刃の部分は長方形になる。柄孔は身の中央よりも上方にある。762 は柄孔の両側に小円孔を持つ。いずれも横木取りである。761 は幅 17.9cm、長さ 25.4cm、厚さ 3cm、柄の径 2.8cm である。

曲柄平鍬 (763) 笠の下のかくびれから刃の方に向かい徐々に幅を増し、刃部の最大幅が、中央よりも下にある。横木取りである。幅 8.8cm、現存長 50cm、厚さ 1.1cm である。

曲柄又鍬 (764 ~ 767) 刃部が二股に分かれる。笠のすぐ下から二股に分かれるもの (765) とやや距離をおいてから分かれるもの (764・766) がある。いずれも横木取りである。764 は幅 16.6cm、厚さ 1cm である。

鋤 (768) 柄の把手部分の残欠である。

木錘 (769 ~ 776) 両端近くから側面中央に向けて斜めに切り込みを入れ、側面からみて鼓形に作る。いずれも心持ち材を縦木取りする。最も小さい 774 は長さ 12cm、幅 7cm、最も大きい 773 は長さ 16.8cm、幅 7cm である。

田下駄 (777 ~ 788) 枠形田下駄の縦枠 (777 ~ 780)、板形田下駄 (781 ~ 786)、緒孔のみられない無孔式田下駄 (787、788) がある。779 には縦枠先端に上下に貫通した手綱孔がみられる。いずれも横木取りである。782 は長さ 6.5cm、幅 45.2cm、厚さ 1.5cm である。786 は長さ 31cm、幅 12.8cm、厚さ 1.8cm である。

竪杵 (789・790) 搦部は円柱形で両端が最大径をなし、握り部が最も細くなる。握り部に節帯がなく、搦部との境が不明瞭である。いずれも心持ち材を縦木取りする。789は長さ86.8cm、搦部の径12cm、握り部の径3cmである。

横杵 (791・792) 搦部が円柱形をなし握り部が細くなる。いずれも心持ち材を縦木取りする。

臼 (793・794) 794は高さ45.2cm、口径45.5cm、底径45.2cmの大型臼で、胴がくびれた鼓形の「くびれ臼」である。くびれ部のやや下方に三角形の削りを四箇所に入れて把手とする。いずれも心持ち材を縦木取りする。

3) 紡織具 (図版 54・142)

かせの支え (795・796) 795は両端に紐掛を削り出し、796は支え木がはずれないように留め孔をあける。いずれも横木取りである。795は長さ48.2cm、幅3.2cm、厚さ1.8cmである。

紡輪 (797) 中央に穿孔がある。上下の面径が違い、側面からみると台形状を呈す。横木取りである。

4) 漁撈具 (図版 54・142)

權 (798) 柄は短く、水掻きの部分は長さ45cm程度あり、横断面は紡錘形をなす。表面に一部樹皮が残る。横木取りである。長さ52.3cm、幅9.2cm、厚さ4cmである。

網杵 (799) 太めの素木の一端を削り出して、紐掛とする。柄の構造、また、部材との組み合わせは、不明である。

アカ取り (800・801) 上端面のつづきで柄がのび、チリ取り状を呈する。柄に一辺が4.5cm程の方孔を持つもの(801)もある。いずれも一木を削り抜いた横木取りである。801は長さ48cm、幅20.8cm、高さ5.2cmである。

5) 服飾具 (図版 54・142)

下駄 (803・804) 足を乗せる台と歯を一木から作り出す連歯下駄である。803は内側を直にし、外側の隅を丸く削る。804は典型的な小判形である。前緒孔は前歯より前の左側に寄せて穿つ。後緒孔は後歯より前にあける。歯の作りは両側より若干内側から削り込み、側面からみて外へ開く。横木取りで木裏を台に用いる。803は長さ22.3cm、幅9.4cm、高さ5.1cmである。

竪櫛 (802) 湾曲結歯式縦櫛と呼ばれるもので、歯部が欠損し頭部だけが残る。歯となる長い竹ひごを並べ、中央で全体をアーチ形に曲げて、頭部を樹皮で固定・結束する。頭部を漆で塗り固める。幅2.85cm、厚さ0.25cmである。

6) 馬具 (図版 54・142)

壺鐙 (805～808) 4点出土した。807はほぼ完形で、一木から削り出し、無花果形をなす。上端の吊紐の貫通孔を前後方向にあけ、踏み込み部の奥行きが浅い。貫通孔の上面に磨滅痕が認められる。いずれも心持ち材を縦木取りする。807は高さ24.8cm、幅12cmである。

7) 工具 (図版 55・143)

掛矢 (809～811) 農具の横槌に類似しているが、横槌と比べて明らかに大型である。全長46～60cmの断面が扁円形である。側面に打撃痕が認められる。心持ち材を縦木取りする。810は

長さ 59cm、径 10cm である。

8) 雑具 (図版 55・143)

腰掛 (817 ~ 820) 一木式のもの (820) と組み合わせ式のもの (817 ~ 819) がある。820 は平面が楕円形で、座板の長辺に平行に脚が付き、外側に開く。座る部分に刳り込みを入れる。組み合わせ式は平面が楕円形あるいは長方形である。座板の両端に脚を差し込む孔をあける。いずれも横木取りである。818 は現存長 42.5cm、幅 14cm、厚さ 1cm である。820 は長さ 35cm、高さ 14.1cm である。

机 (821・822) 821 は長方形で下端中央を半円形に刳り、上端の内側に溝を切る脚である。822 は長方形で両端にとってを刳り出した上板である。いずれも横木取りである。

9) 建築部材 (図版 56・144)

出土した建築材は河川の中の堰に転用されていたものである。

柱材 (846 ~ 850・852 ~ 855) 847・848・850 は枝打ちをただけの木材を使用しており、上端は軸部を削り出す。846・849・852 ~ 854 は面取りを施している。846 は全長 390cm、径 17cm で、基部の腐食具合から約 60cm 分が地中に埋められていたと思われる。また、上半 1/3 が半裁され、下端に幅約 3cm、深さ 10cm の溝を掘り込んでおり、ここに板材をはめ込んだ可能性がある。852 は長さ 430cm、径 14cm である。855 は杭に転用した柱材である。

扉 (836 ~ 843) 扉板 (837 ~ 843) と蹴放し (836) が出土した。837 は片方の長側辺にまぐさ・蹴放しに差し込む軸を削り出している。839 は扉板の中央に直径約 6cm の孔があり、引き手の可能性がある。他については扉材として掲げているが転用材としての可能性が高い。蹴放しは径 0.2m の軸受けを貫通させている。いずれも横木取りである。837 は長さ 97cm、幅 25cm、厚さ 4cm である。839 は長さ 60cm、幅 18cm、厚さ 5cm である。

梯子 (844・845) 材を削り込んで、裏を平坦に表に足掛けを作る一木の梯子が 2 点出土している。844 は足掛けの上部は直角に下部を斜めに削り出す。下端はやや丸みを持っておわり、上端については欠損しているため不明である。845 は上下を斜めに削り出している。いずれも横木取りである。844 は現存長 81cm、幅 19cm、厚さ 6.5cm である。足掛け間の距離は、844 が 39cm、845 は 33cm である。

その他の建築部材 (851・856 ~ 860) 851 は丸材を半裁したもので、先端部の裁断面にほぞ穴を刳り込んでいるが裏面まで及んでいない。856・857 は先端部の側面に切り込みを施す丸材である。857 は側面に面取りを施す。858 ~ 860 は板材である。859 は片方の小口に側面から切り込み、ホゾを作り出している。858 は、側面に弧状の刳り込みがある。

10) 用途不明木器 (812 ~ 816・823 ~ 829・831 ~ 833・861 ~ 883) (図版 55・57・143・145)

812 は角材の上端の両側端を切り欠き、そこに方形の孔を穿っている。830・834・835 は加工痕のある板材である。813 ~ 816・823 ~ 829・831 ~ 833 は農・工具などの柄の可能性ある。826 は長さ 32.2cm、幅 1.3cm である。864 は端部近く of 両側縁に三角形の切り込みを入れ、下部は約半分に幅が減じる。865 は山形の板材である。866 は槌状、867・868 は棒状で節がある、

869 は板材の中央に孔を穿ったもの、870 は把手を両端に持つ割物で、長さ 37.1cm、幅 11.8cm、厚さ 3.1cm である。871 ～ 877 は台と棒を組み合わせるものである。872 と 873、875 と 876 が組み合う。872 は長さ 23.2cm、高さ 5.8cm である。873 は長さ 41cm、幅 3.6cm である。875 は長さ 15.4cm、幅 7.8cm、高さ 2.6cm である。876 は現存長 18.1cm、幅 5cm、厚さ 1.4cm である。878 ～ 880 は棒状のものを加工したもの、881・882 は孔を持つもので、882 は武具の楯の可能性はある。

861 は先端が丸みを帯び、両側縁は平行し、下端に柄が付く。側面からみて先端から下方に 2/3 程の隙間を作る。儀式用の団扇（翳）の要の可能性はある。残存長 10cm、幅 7.2cm、厚さ 2.0cm である。

862・863・883 は四面の側面のある、一定の角度で立ち上がる「四方転び」と呼ばれる箱で、台形状の板四枚を組むもので各斜辺に孔を穿ち樹皮で結合する。長辺の長さは 10cm 前後、短辺の長さとは箱の高さは不明である。各斜辺の孔は 2 孔まで確認することができる。短底辺は欠損しているが、3 枚には中央部に孔の痕跡を認める。

(3) その他の遺物

土器・木器以外の遺物として、金属器・石器・土製品が出土している。

1) 金属器（図版 58・165）

鉄鏃(950～953) 圭頭形のもの(950)、長三角形で無柄のもの(951)、柳葉形のもの(952)、三角形で有柄のもの(953)がある。950 は鋒が円弧をなし、鏃身両側の中央がやや凹む。直線的でシャープな関を持ち、銅鏃に類似した形状を呈している。951 は鏃身に鏃があり、断面は菱形を呈する。952 は刃の内側に、やや弱い陵を持つ。茎の断面は方形である。953 は鏃身が薄く、篋被の断面は方形をなし、関には台形状の突起を持つ。953 は D 区中央部包含層、他は SD103 より出土した。

刀子(954・955) いずれも身は細く、先端は欠損している。955 は刀身の断面が二等辺三角形で、関が棟と刃の両側に付く。茎の断面は方形である。954 は断面が長円形に近い。954 は SH22、955 は SH23 の、それぞれ床面より出土した。

鉄鎌(956) 刃部が内反りして、刃先が尖る。柄部先端には柄の取付け部の巻き込みが残る。SL150 の東部から出土した。

金環(957) 銅芯に金の薄板を巻き付けたものを、C 字形に曲げている。断面は楕円形を呈する。E1 区東部包含層より出土した。

2) 石器（図版 58・59・163～165）

円礫(963) 砂岩製で、形状は扁平な球形を呈する。全体に丁寧に研磨され、一部が欠損する以外は極めて平滑で、使用痕はみられない。D 区の SD98 から出土した。

勾玉(958・959) いずれも C 字形で、958 は長さ 1.6cm で青緑色を呈し、頭部と尾部の先端はやや尖る。碧玉製で、C 区の SD127 より出土した。959 は長さ 2.5cm で黒褐色を呈し、頭部のほぼ中心に穿孔する。頭部先端には V 字形を組み合わせた線刻がある。滑石製で、E1 区の SD101

上層より出土した。

紡輪(960～962) 裁頭円錐形のもの(960)と、円盤状のもの(961・962)がある。960は側面にも面を持つタイプで、全体に丁寧に仕上げられ、平面形はほぼ正円である。側面斜面部に鋸歯文を線刻する。961は直径5cm、厚さ0.5cmで、平面・側面ともよく研磨され、平滑な面をなす。孔はほぼ中心部に、両側から穿孔している。962は厚さ約0.2cmと薄く、やはり平滑に仕上げられている。破片のため穿孔部などは不明であるが、復原径は961とほぼ同じである。いずれも滑石製で、包含層より出土した。

砥石(970～984) 25点出土した。自然石を利用したもので、大きさ、形状とも、使用状況によって多様である。いずれも使用面はよく研磨されて平滑で、内湾するものもある。970は長さ3cm程度の小型で扁平な砥石である。970～972はSH21、973はSH18、974はSH45、975はSH34、976はSH71、979・980はSH79、984はSH72から、その他はSD123などの流路から出土した。972は、SH21とSH23からそれぞれ出土した破片が接合したものであるが、研磨面も一致することから、ある程度使用された段階で破片となったと考えられる。また焼失住居であるSH72から出土した984は、表面が火を受けた影響で剥離し、板状に薄片となる。砂岩製が大半で、泥岩製のもの(978・983)もある。

3) 土製品(図版39・46・58・125・163)

土錘(964～969) 俵形のもの(965・966・969)と、円筒形のもの(964・967・968)がある。いずれも土師質で、砂粒の混入は少ない。ほぼ中心に正円の孔を持つ。969のみ大型で、他は長さがほぼ均一である。E1区のSD124・125から出土した。

へら形土製品(232・370) 両側を折り曲げた縦長のへら状部に扁平な柄が付く。全体に丁寧なへらミガキを施す。232はD区のSD98、370はD区のSD123から出土した。

4 長岡京期の遺物

(1) 土器

1) SD285 出土土器(表7)

土器には土師器・須恵器・黒色土器・製塩土器^{註3}があり、土師器・須恵器がほぼ同量で、黒色土器・製塩土器はごくわずかである。

土師器(図版60・146) 土師器には、杯A・杯B・椀A・椀C・皿A・皿C・蓋・鉢B・高杯A・壺E・甕A・甕B・鍋A・甑などがあり、杯・椀・皿などの食器類が多い。

杯には杯Aと杯Bがある。杯Aは、AI(468～473; 口径18.0cm前後)・AII(464～467; 口径15.0cm前後)に分かれる。口縁端部は、内へ肥厚するものと丸くおさまるものがある。外面の調整手法は、a手法・b手法・c手法があり、b・c手法のものが多い。c手法のものには、口縁部外面の強いヨコナデをケズリ残すものもある。口縁部・体部内面に放射暗文、底部内面に螺旋暗文を施すものもあるが少ない。杯BIは、底部に低い高台が付く。口縁部・体部内外面はヨコナデを施す。

椀には椀 A と椀 C がある。椀 A は、AI (480・481 ; 口径 13cm 前後) ・ A II (474 ~ 479 ; 口径 10cm 前後) に分かれる。口縁端部は、丸くおさまる。外面の調整手法には、a 手法と c 手法があり、c 手法のものが多く、体部・底部外面に粗いヘラミガキを施すものもある。椀 C II (482・483) は、口径 13cm 前後である。口縁端部は直立するものと外反するものがある。外面の調整手法は、E 手法である。

皿には皿 A と皿 C がある。皿 A は、AI (494 ~ 499 ; 口径 20cm 前後) ・ A II (492・493 ; 口径 15cm 前後) に分けられる。口縁端部は、丸くおさまるものと内へ肥厚するものがある。外面の調整手法は、a 手法・b 手法・c 手法があり、b・c 手法のものが多く、c 手法のものには、口縁部外面の強いヨコナデをケズリ残すものもある。体部内面に放射暗文を施すものもあるが少ない。皿 C (484 ~ 491) は、口径 9cm 前後の小型品である。口縁端部は、外反するものと丸くおさまるものがある。外面の調整手法は E 手法である。

杯・皿の蓋は、頂部は偏平で、縁部はなだらかに曲がる。つまみは、偏平でボタン状である。頂部内外面はヨコナデで、上面に粗いヘラミガキを施す。

鉢 B は、体部が開き、口縁部が直立するものである。口縁部・体部内外面はヨコナデを施す。

高杯 A III (501 ; 口径 27cm) は、杯部は小さく直線的にのび、口縁端部は外反する。成形はロクロを使用する。杯部は内外面ナデ、内面は螺旋暗文、外面は粗いヘラミガキを施す。

壺 E (500) は、口縁部は屈曲して端部は立ち上がる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面ヨコナデ後ヨコヘラミガキを施し、内面は斜方向のハケを施す。

甕には、甕 A と甕 B がある。甕 A は、A II (口径 27cm 前後) ・ A III (506 ; 口径 20cm 前後) ・ A IV (504・505 ; 口径 13cm 前後) に分けられる。体部は球形で最大径が上半部に位置するものが多い。口縁端部は、内側に巻き込むものと拡張して面を持つものがある。体部外面は、平行タタキ・ハケ調整のものがあり、内面は同心円タタキ・ナデ調整のものがある。甕 B (507) は、甕 A III の

器種	種類	器形	個体数	比率 (%)
土師器	食器	杯 A I	11	7.9
		杯 A II	15	10.8
		杯 B	3	2.1
		椀 A I	5	3.6
		椀 A II	19	13.7
		椀 C II	3	2.1
		皿 A I	14	10.1
		皿 A II	10	7.2
		皿 C	30	21.6
		蓋	2	1.4
		鉢	2	1.4
		高杯 A	1	0.7
		貯蔵器	壺 E	1
	煮沸器	甕 A II	3	2.1
		甕 A III	8	5.8
		甕 A IV	8	5.8
		甕 B	1	0.7
		甗	2	1.4
		鍋 A	1	0.7
	小計		139	
須恵器	食器	杯 A II	16	11.8
		杯 A III	28	20.6
		杯 B III	16	11.8
		杯 B IV	5	3.7
		皿 A	3	2.2
		盤 B	1	0.7
		杯蓋 I	1	0.7
		杯蓋 II	8	5.9
		杯蓋 III	6	4.4
		貯蔵器	壺 A I	3
	壺 C		1	0.7
	壺 E		1	0.7
	壺 G		4	2.9
	壺 H		2	1.4
	壺 L 大型		1	0.7
	壺 L 中型		19	13.9
	壺 M		11	8.0
	壺蓋		2	1.4
	平瓶		1	0.7
	横瓶	1	0.7	
甕 A	5	3.7		
甕 E	1	0.7		
小計		136		
黒色土器	椀 A	2		
小計		2		
計		277		

表 7 SD285 出土土器一覧表

体部に把手を貼り付ける。胴部外面はタテハケ、内面はヨコハケを施す。

鍋 A は、口径 48cm の大型品である。体部は半球状で、口縁部は外反し、端部は拡張する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ、内面は同心円タタキの後ナデを施す。

甌 (502・503) は、口径 15cm 前後の小型品である。円筒形の体部に把手を付ける。口縁端部は、内へ肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面上半タテハケ、下半は斜方向のハケ・平行タタキ、内面はナデを施す。成形・調整は大形品と同様で、平城京から出土している祭祀用の小型甌とは調整が異なる^{註4}。組み合う竈は出土していない。

須恵器 (図版 61・69・147・148) 須恵器には、杯 A・杯 B・皿 A・盤 B・杯蓋・壺 A・壺 C・壺 E・壺 G・壺 H・壺 L・壺 M・平瓶・横瓶・壺蓋・甕 A・甕 E があり、杯・皿などの食器類と貯蔵用の壺類が多い。

杯には、杯 A と杯 B がある。杯 A は、A II (511～514；口径 15cm 前後)・A III (508～510；口径 12cm 前後)に分けられる。口縁部・体部内外面は、ロクロナデを施す。底部外面は、ヘラ起こし後不調整のものとヘラケズリを施すものがある。杯 B は、B III (516～520；口径 16cm 前後)・B IV (515；口径 12cm 前後)に分けられる。高台部は直立するものと、外側に張るものがある。口縁部・体部内外面はロクロナデを施す。

皿 AI (521・522；口径 16cm 前後)は、体部が直線的にのびるものと、外反するものがある。口縁部・体部内外面はロクロナデを施し、底部外面はヘラ起こし後不調整である。

盤 B (682) は、底部が丸く、口縁部は外反する。高台部は外側に張る。口縁部・体部内外面はロクロナデを施し、底部外面は不調整である。

杯蓋は、I (径 20cm 前後)・II (525・526；径 17cm 前後)・III (523・524；13cm 前後)に分けられる。頂部が低く扁平で、縁部の屈曲が強いものと、傘形で縁部が垂下するものがある。つまみは、宝珠つまみ・宝珠で肩が張らないもの・扁平でボタン状のもの・環状のものがある。頂部・縁部内外面はロクロナデである。

壺には、壺 A・壺 C・壺 E・壺 G・壺 H・壺 L・壺 M がある。壺 A (539) は、口縁部が短く立ち上がる短頸壺である。口縁端部は、丸くおさまるものと拡張して平坦面を持つものがある。内湾する高台が付く。体部・口縁部内外面はロクロナデで、体部下半はヘラケズリを施す。壺 C (529) は、肩部がなだらかで、短い口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸くおさまる。口縁部・体部内外面はロクロナデを施す。壺 E (528) は、肩部が張り、短い口縁部が立ち上がる。口縁端部は丸くおさまる。口縁部・体部内外面はロクロナデを施す。壺 G (530・531) は、器高が高く肩が張り体部が直線的なものと、器高が低く肩が丸みを帯び体部がやや膨らむものがある。口縁部・頸部・体部内外面は、ロクロナデで凹凸が目立ち、底部外面は糸切り痕が残る。壺 H (532・533) は、肩部が鋭く張り、口縁部は外反し端部をつまみ上げる。高台が付くものと平底のものがある。口縁部・体部内外面はロクロナデである。壺 L は、大型 (535；器高 23cm)・中型 (536～538；器高 16cm 前後)に分けられる。卵形の体部で、口縁が外反し、口縁端部は、丸くおさまるものと上下に拡張するものがある。高台が付くものと平底のものがある。口縁部・

体部内外面はロクロナデで、体部下半はヘラケズリを施す。壺 M(534) は、器高 10cm 前後の小型のものである。体部は、長胴のものと卵形のものがあり、口縁部が外反する。口縁端部は、上下に拡張するものと丸くおさまるものがある。底部に高台が付くものと平底のものがある。口縁部・体部内外面はロクロナデを施す。

壺蓋は、頂部が平坦で縁部は垂下する。つまみは宝珠つまみのものと、偏平なものがある。頂部・縁部内外面はロクロナデである。

平瓶 (527) は、頂部がなだらかで、口縁部と把手が付く。底部に外に張る高台が付く。口縁部・体部内外面はロクロナデである。

横瓶は、口縁部と肩の一部が出土している。頸部は短く直立し、端部は上下に拡張する。

甕には甕 A と甕 E がある。甕 A は、中型 (541 ; 口径 22cm) ・小型 (口径 10cm 前後) に分けられる。体部は卵形で、口縁部は外反する。口縁端部は、丸くおさまるものと上下に拡張するものがある。口縁部内外面はロクロナデ、体部内面は同心円タタキ、外面は平行・格子タタキである。甕 E(540) は、甕 A 中型の肩部に沈線を 2 条ヘラ描きし、把手を貼り付ける。体部下半は、内面は同心円タタキ、外面は平行・格子タタキである。

黒色土器 黒色土器は、破片が少量出土した。椀 A と、甕か壺になると思われる破片が出土している。椀 A は内面のみ黒色化した A 類である。

製塩土器 製塩土器は、破片が少量出土した。ほとんどが細片であり、形態がわかるものはない。

2)SD207 出土土器 (図版 62)

全体の出土量は少ないが、六条三坊四町南西部宅地の西側、七条三坊一町中央西部宅地の西側、七条三坊三町西側河川合流部南側では、集中して出土した。

四町の西側では、土師器・須恵器が出土した。土師器には杯・椀・皿 A・甕 A などがあり、須恵器には杯 A・杯 B・壺 L・壺 M・甕がある。

一町の西側では、土師器・須恵器が出土し、製塩土器も少量みられる。土師器には、杯 A・杯 B・皿 A・皿 B・椀 A・盤 B(544)・甕 A などがある。須恵器には、杯 A・杯 B・蓋 B・壺 L・壺 M・壺蓋・甕 A がある。544 は、杯部が丸みを帯び、底部に高い高台が付く。杯部・高台部内外面はヨコナデを施す。

三町の西側では、土師器・須恵器が出土した。土師器には杯 A・椀・皿 A・鉢・甕などがあり、須恵器には杯 A・杯 B・蓋・甕がある。

3)SD211 出土土器

土師器・須恵器があり、出土量は少ない。土師器には杯・椀・甕などがあり、須恵器には杯 A・杯 B などがある。

4)SD212 出土土器 (図版 62)

土師器・須恵器があり、出土量は少ない。土師器には、杯 A・椀・皿 A・甕 A などがある。須恵器には、杯 A・杯 B・壺 H(555)・壺 L・壺 M・甕がある。555 は小型で広口の壺 H である。口縁

部は外反し、端部は直立する。口縁部・体部内外面はロクロナデで、底部外面はヘラ起こし後不調整である。

5)SK270 出土土器

土師器・須恵器があり、出土量は少ない。土師器には杯・椀・高杯などがあり、須恵器には杯A・杯B・蓋などがある。

6)SD254 出土土器

土師器・須恵器があり、出土量は少ないが、中央部の幅が広がる付近では比較的多い。土師器には杯・椀・皿A・甕Aなどがあり、須恵器には杯A・杯B・壺M・甕などがある。

7)SD255 出土土器

土師器・須恵器があり、出土量は少ない。土師器には杯A・杯B I (542)・椀・皿・甕などがあり、須恵器には杯・壺・甕などがある。

8)SD257 出土土器 (図版 62・149)

土師器・須恵器があり、出土量は少ない。土師器には杯・椀・皿・甕などがあり、須恵器には杯・壺・鉢E(561)・甕などがある。561は片口の鉢Eで、平底で体部は直線的にのびる。体部・口縁部内外面はロクロナデを施し、底部外面はナデを施す。

9)SE259 出土土器

土師器・須恵器があり、井戸枠内の出土量は少ない。土師器には杯・椀・皿などがあり、須恵器には杯A・杯B・蓋・壺Lなどがある。

10)SE260 出土土器

土師器・須恵器があり、井戸枠内の出土量は少ない。土師器には杯・椀A・皿A・甕Aなどがあり、須恵器には杯A・杯B・蓋・壺G・壺M・甕などがある。

11)SE263 出土土器 (図版 62・149)

土師器・須恵器があり、井戸枠内の出土量は少ない。土師器には杯B I (543)・椀・皿・甕などがあり、須恵器には杯・蓋・壺・甕などがある。543は、平底で体部は内湾し、口縁端部は内へ肥厚する。高台は立ち上がる。口縁部・体部内面はヨコナデ、体部外面は上部までヘラケズリで粗いヘラミガキを施す。

12)SE266 出土土器

土師器・須恵器があり、井戸枠内の出土量は少ない。土師器には杯・椀・皿A・皿B・甕Aなどがあり、須恵器には杯・壺Gなどがある。

13)SE268 出土土器 (図版 62)

土師器・須恵器・製塩土器があり、井戸枠内の出土量は少ない。土師器には杯・椀・甕Aなどがあり、須恵器には杯A・杯B・蓋・壺E(553)・甕などがある。

14)SK272・273 出土土器

土師器・須恵器があり、出土量はやや多い。土師器には、杯A・杯B・皿A・皿C・椀A・椀C・高杯A・甕Aなどがある。須恵器には、杯A・杯B・蓋A・壺A・壺G・壺H・壺L・平瓶・甕A

がある。

15)SK274 出土土器 (図版 62・149)

土師器・須恵器・灰釉陶器があり、製塩土器が少量出土する。出土量はやや多い。土師器には、杯 A・椀 A・皿 A・鉢・高杯・甕 A などがある。須恵器には、杯 A・杯 B(552)・杯蓋(548)・壺 L・壺 M・壺 G・壺蓋(551)・甕・円面硯がある。灰釉陶器には、壺 K・平瓶がある。

16)SX279 出土土器 (図版 62・149)

土師器甕 C(562・563) は、体部がやや長めで、最大径が体部中位にある。口縁部は外傾し、端部は面を持つ。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケを施し、内面は同心円タタキが残る。甕 A(564) は、体部が球形である。口縁部は外反し、端部は内側に肥厚する。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ、内面ナデを施す。いずれも土器棺として使用されている。

他の土器は包含層から出土したもので、土師器の皿 B(545)・高杯(547)、須恵器の鉢(554・556)・壺(560)・壺蓋(549・550)、灰釉陶器の壺(558・559)がある。

(2) 祭祀用土器・土製品

1)SD285 出土祭祀用土器・土製品 (図版 63～68・150～155)

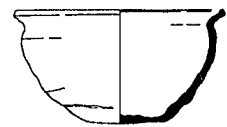
土器には、人面墨描土器(以下、人面土器と略す)壺 B・壺 C・甕 A があり、土製品には、土馬・ミニチュア甗・ミニチュア甑、ミニチュア壺がある。

壺 B(565～630) 壺 B は、B I (629・630; 口径 24cm 前後)・B II (565～628; 口径 16cm 前後)に分けられる。口縁と胴部の形態から、a 類(565・566・630 など; 小さな平底で、胴部はやや丸く頸部がしまって肩が張り、口縁部が外反するもの)、b 類(568・629 など; 小さな平底で、胴部はやや直線的に外に開き肩の張りが弱く、口縁部が外反するもの)、c 類(585・627; 平底で胴部は丸く、口縁部が外反するもの)、d 類(618; 平底で胴部は直線的に外に開き、口縁部が外反するもの)に分けられる。a 類・b 類が多く、c 類・d 類はごくわずかである。口縁端部は、つまみ上げるもの・上下に拡張するもの・丸くおさまるものがある。肩部の対称位置に、退化した把手状の粘土塊を貼り付けるものも多数ある。

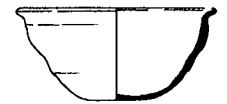
粘上紐を巻き上げて成形する。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ、胴部・底部内面はナデ・ハケを施し平滑にする。胴部・底部外面は不調整で、粘土紐の継ぎ目が明瞭に残り、大半のものには胴部下外面に段がある。段は、強く幅があるもの(565・567 など)と、弱いもの(568・586 など)がある。段がギザギザとなるもの(573・578 など)もある。

壺 B には、胴部外面に墨で顔が描かれたものと、描かれないものがある。顔の有無によって、形態や製作技法の差は認められない。

壺 C(631～640) 壺 C は、口径 10cm 前後の小型品である。口縁部・胴部の形態から、a 類(633



B-a 類



B-b 類



B-c 類



B-d 類

など；小さな平底で、胴部はやや丸く、頸部がしまつて肩が張り、口縁部は外反するもの）、b類（634 など；底部・胴部はやや丸く、肩の張りが弱く口縁部は外反するもの）、c類（631・635；器高がやや高く、丸底で胴部は丸く、口縁部は外反し、端部は内湾するものもある）に分けられる。a類・b類が多く、c類はごくわずかである。口縁端部は、つまみ上げるものと、丸くおさまるものがある。



C-a類



C-b類



C-c類

成形・調整は壺Bと同じく、粘土紐を巻き上げて成形する。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ、体部・底部内面はナデ・ハケを施し平滑にする。体部・底部外面は不調整で粘上紐の継ぎ目が明瞭に残るが、壺Bのような段はない。

壺Cには、胴部外面に墨で顔が描かれたものと、描かれないものがある。顔の有無によって、形態や製作技法の差は認められない。

壺B・C共に全体に磨滅や擦痕は認められない。壺内面に漆が塗られたものが数点ある。

甕A(641～646) 甕Aは、AⅡ（645・646；口径26cm前後）・AⅢ（641～643；口径20cm前後）・AⅥ（644；口径13cm前後）に分けられる。成形・調整は、一般的に出土する甕Aと同じで、体部外面に墨で顔が描かれ、祭祀用として転用する。641は南河内系の甕で、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はユビオサエを施す。色調は暗褐色を呈する。

土馬(647～653) 土馬は、大和型と呼ぶ形態のもの1種である。大きさは差が少なく、ほぼ揃う。粘土板から頸部・尾部・四肢をつまみ出し、折り曲げて成形する。粘土円盤を折り曲げて頸部を挟み、頭部とする。頭部正面に竹管を押しつけ、目を表現する。墨で目の輪郭・手綱が描かれたもの（652）、鞍・たてがみが描かれたもの（653）が1点ずつある。

ミニチュア竈(654～661) 竈を小型化したもので、形態は焚口周囲に廂を持つもの1種である。大きさは、やや大型のⅠ類（654；口径7cm前後）と、小型のⅡ類（655～661；口径5cm前後）に分けられる。粘土紐を3～4段巻き上げて成形する。体部上端部内外面はヨコナデ、体部外面不調整で粘土紐痕跡が残り、内面はナデ調整を施し、底面をヘラで切る。前面に廂の粘土を貼り付けまわりを強くナデ、廂内をヘラで逆U字形に切りとり焚口とする。

ミニチュア甕(662～669) 甕を小型化したもので、形態は逆円錐形のもの1種である。大きさは差が少なく、ほぼ揃う。底部は、尖底のもの（662～666・668・669）・丸いもの（667）がある。口縁端部は、外反するもの・丸く収めるもの・上につまみ上げるものがある。底部に穿孔したものの（669）が1点ある。粘土紐を巻き上げて成形し、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面不調整で粘土紐痕跡が残り、内面はナデを施す。

ミニチュア壺(670) 壺Bを小型化したものである。胴部は球形で、口縁部は外反する。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面不調整で粘土紐痕跡が残り、内面ナデを施す。

2)SD207 出土祭祀用土器・土製品

七条三坊一町西側では土器・土製品が出土し、出土量は少ない。人面土器には、壺BⅡ・壺C・甕AⅡがある。土製品には、土馬・ミニチュア甕がある。壺BⅡ・壺Cは、いずれも顔が描かれ

ていない。

七条三坊三町の西側では土器・土製品が出土し、出土量はやや多い。人面土器には、壺 C があ
る。土製品には、土馬・ミニチュア甗がある。壺 C は顔が描かれていない。

3) SD206 出土祭祀用土製品

六条二坊十四町の東側では、ミニチュア甗が少量出土した。

4) SD208 出土祭祀用土器

南端で、人面土器壺 B II が少量出土した。壺 B は、顔が描かれていない。

5) SD211 出土祭祀用土器

東端で、人面土器壺 B II が 1 点出土した。壺 B は、顔が描かれていない。

6) SK272 出土祭祀用土製品

土馬が少量出土した。

7) 六条三坊四町南西宅地周辺包含層出土祭祀用土製品

土馬が少量出土した。

8) SE268 出土祭祀用土製品


ミニチュア甗・甗が少量出土した。

9) SK274 出土祭祀用土製品


土馬・ミニチュア甗・甗が少量出土した。

(3) 墨書・線刻土器、漆紙文書（図版 69・156、図 16）

墨書土器 (671 ~ 695) SD285 を中心として、溝・井戸・土壇などから 35 点出土した^{註6}。文字と
考えたもの 16 点、記号と考えたもの 11 点、文字か記号か不明なもの 7 点、模様と考えたもの 1
点である。文字は 1 字のことが多い。記号は同一のものはなく、すべて異なる。器種は、土師器・
須恵器の食器類である。特に記述のないものは、SD285 から出土した。


「」(671) 記号であろう。土師器杯 A 底部外面中央に描かれる。

「」(672) 文字と考えるが、判読不明である。土師器皿 A 底部外面中央に書かれる。


「」(673) 記号か文字か不明である。土師器杯 A 底部外面中央に描かれる。


「カ」(674) カの文字か記号か不明である。土師器皿 A 底部外面に描かれる。


「戸」(675) 文字と考えるが、判読不明である。土師器椀 A 底部外面中央に書かれる。

「」(676) 記号であろう。土師器皿 A 底部外面中央に描かれる。

「世福」(677) 世福の文字を墨書する。吉祥句と考えられる。土師器皿 A 底部外面に書かれる。

「」(678) 文字と考えるが、判読不明である。土師器皿 A 底部外面に書かれる。

「」(679) 呪語である。線は縦 4 本、横 4 本である。須恵器杯蓋頂部外面に描かれる。

「」(680) 記号であろう。須恵器杯 A 底部外面中央に描かれる。

「祀」(681) 祀の文字を墨書する。祀の異体字で、吉祥句または呪語と考えられる。須恵器杯
A 底部外面に書かれる。

「井」(682) 井の文字か記号か不明である。須恵器盤 B 底部外面に描かれる。

「大」(683) 大の文字を墨書する。須恵器杯 A 底部外面に書かれる。

「×」(684) 文字か記号か不明である。須恵器杯 B 底部外面に描かれる。

「太」(685) 太の文字を墨書する。大の異体字、または太である。須恵器杯 B 底部外面中央に書かれる。

「福満」(686・687) 福満の文字を墨書する。吉祥句と考えられる。須恵器杯蓋頂部外面・須恵器杯 B 底部外面に書かれる。両者の墨書は、筆跡が類似する。

「㊦」(688) 記号であろう。須恵器杯 A 底部外面中央に描かれる。七条三坊一町宅地側 SF201 路面上落込みから出土した。

「㊦」(689) 輪の中に秦の文字を墨書する。土師器杯 A 底部外面に書かれる。SK274 周辺包含層から出土した^{註7}。

「大」(690) 大の文字を墨書する。須恵器杯蓋頂部外面に書かれる。七条三坊一町宅地包含層から出土した。

「王」(691) 王の文字を墨書する。氏名か人名かは不詳である。土師器杯 A 底部外面中央に書かれる。SK274 から出土した^{註8}。

「✱」(692) 記号であろう。須恵器杯 A 底部外面中央に描かれる。SK274 から出土した。

「×」(693) 文字か記号か不明である。須恵器杯蓋頂部内面に描かれる。SB237 身舎東側土壇から出土した。

「丸」(694) 和爾を表す省略文字である。須恵器杯 A 底部外面に書かれる。SK274 周辺包含層から出土した。

「㊦」(695) 文様であろう。須恵器杯蓋頂部外面に描かれる。SK274 から出土した。

線刻土器 (696 ~ 699) SD285 を中心として 4 点出土した。土器の底部に、焼成後刀子などの、鋭利な器具で刻んだものである。器形は、土師器杯 B・椀 A・皿 A である。直線などを組み合わせ

たもの (696 ~ 698)、文字の可能性のあるもの (699) がある。

696・697 は SD285 から、698 は SK274、699 は SE268 からそれぞれ出土した。

漆紙文書 漆紙は SD285 から出土した土師器椀 A(477) 内面に貼り付く。2 行 5 文字が確認できる。

右・・・・□□

□□

(4) 木器

木器は、主として SD285 から出土したが、

895・914 は SE263、934 は SK271、930 は SK282 から出土した。

分類すると、木簡、祭祀具、雑具、漁撈具、紡織具、服飾具、容器などがある。以下この順で



図 16 漆紙文書

記述する。^{註9}

1) 木簡 (図版 158、図 17)

「・」は積文の表裏を示し、右端の数字は法量 (長さ×幅×厚み) と木簡の形式番号を表す。^{註10}

木簡はSD285 から6点出土した。そのうち判読可能なものは以下の4点である。その内容は、習書2点 (1037・1041)、付札・荷札が2点 (1038・1040) である。1039・1042は、墨痕は認められるが判読は不能である。

1037 ・ [] 蟹擁劍擁劍螺鯨蛤甲羸沙魚□ (313) × 30 × 2.5 081
 ・ □□□□半臂□ [] □襖子袍帽子□

習書木簡である。表面は水産物、裏面には服飾関係の品名が列記される。

1038 「嘉麻郡米五斗□
 知宮守倉主」 141 × 35 × 4 032

嘉麻郡は筑前国で、現在の福岡県嘉穂郡飯塚市・山田市にあたる。

1040 ・ 「<□□□□□黒米五斗」 142 × 21 × 2.5 033
 ・ 「<□延暦十年三月十六日」

荷札木簡である。表面には、荷の内容と量が書かれ、裏面には日付が記される。延暦十年 (791) は長岡京期の後半である。

1041 [七] [七] 卅^(三) 九九八十一 八九十三 九十六□□ (238) × 35 × 3 081
 九九を記した木簡である。

2) 祭祀具 (図版 70・157)

人形 (884～894) 短冊状の板を切り欠いて作る扁平な人形が12点出土した。いずれも肩が張るB類で、大きさにより、大型のもの (B I類; 78cm以上) 4点・やや大型のもの (B II類; 45～50cm前後) 2点、中型のもの (B III類; 20～25cm) 2点・小型のもの (B IV類; 19cm以下) 4点に分けられる。^{註11}

B I類: 887 (残存長 72cm、幅 13.6cm、厚さ 0.8cm) は、正面全身人形で、頭部を切り欠いて被りものをあらわす。被りもの・耳・眉・眼・鼻・口・顎、そして胸部に乳房を墨描し、腕の切り込みは深い。884 (残存長 19.2cm、幅 14.8cm、厚さ 0.6cm) は、顔面を表現する顔形の可能性もあるが、正

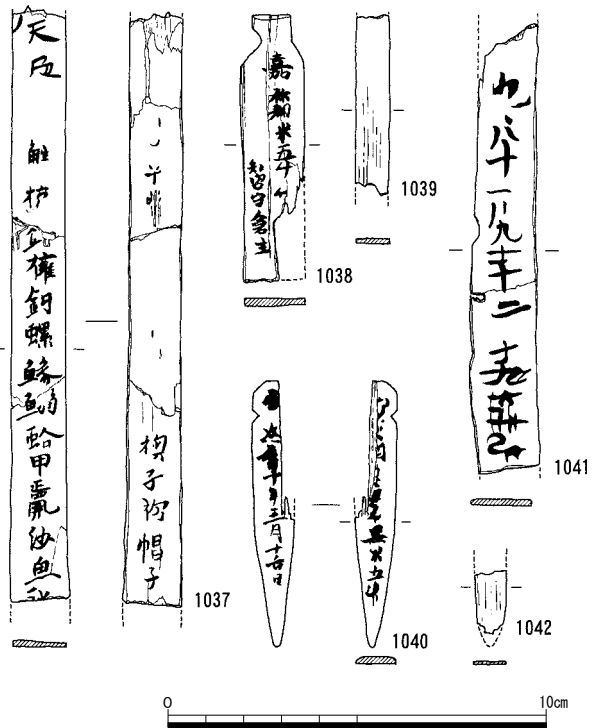


図 17 木簡実測図 (1:2)

面全身人形の断片である。頭部を丸くかたどり、髪・眉・眼・鼻・髭・口・耳・鬚を墨描する。885(残存長27.0cm、残存幅11.2cm、厚さ0.8cm)は、顔面を表現する顔形の可能性もあるが、正面全身人形の断片である。頭部を丸くかたどり、髪・眉・眼・鼻・髭・口・耳・鬚を墨描する。

B II類:886(残存長32.2cm、幅3.1cm、厚さ0.6cm)は、頭部を丸くかたどり、腕は切り込みが浅く、ほぼ全身に黒点を墨描する。888(残存長20.6cm、残存幅4.5cm、厚さ0.6cm)は、頭部を台形にかたどり、墨描きはない。889(残存長26.3cm、残存幅3.4cm、厚さ0.8cm)は、被りものをかたどり、墨描はない。

B III類:894(残存長15.5cm、幅4.4cm、厚さ0.6cm)は、頭部を山形にかたどる。墨描はない。

B IV類:890(長さ10.4cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm)は、頭部を山形にかたどり、切り抜きを入れ、上半身と下半身を区別し、脚は短い。墨描はない。891(残存長3.9cm、残存幅0.9cm、厚さ0.2cm)は、頭部が直線で、髪・眉・眼・鼻・髭・口を墨描する。892(残存長13.4cm、残存幅1.0cm、厚さ0.2cm)は、頭部を山形にかたどり、腕の切り込み痕がわかる。髪・眉・眼を墨描する。893(長さ14.4cm、幅2.4cm、厚み0.4cm)は頭部を丸くかたどり、切り込み、切り抜きを入れ、腕、脚を表す。眉・眼・鼻・口を墨描する。

斎串(895～897) 4点出土した。895(長さ31.3cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm)は上端が台形状をなし、両側縁に三角形の切り抜きを入れる。896(残存長10.8cm、幅2.0cm、厚さ0.15cm)は、圭頭状をなし、上端近くの両側縁2箇所に入り込みを入れる。897(残存長13.1cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm)は、圭頭状をなし、上端近くの両側縁2箇所に三角形の切り抜きを入れる。

形代(898～905) 898(残存長10.3cm、幅2.6cm、厚さ0.5cm)は上端を加工し、螺旋を墨描する。899(残存長11.9cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm)は上端を三角形に切り、側縁に入り込みを入れる。動物形の可能性がある。900(長さ24.8cm、幅5.2cm、厚さ2.0cm)は舟形である。小角材を削り抜き、舟槽を表す。舟首と舟尾を舟体より幅を狭く削る。901(長さ14.8cm、幅2.8cm、厚さ1.6cm)は、小角材を削り貫き舟槽を表す。舟首と舟尾を側面からみると逆台形に削る、舟形である。902(長さ14.5cm、幅0.9cm、厚さ0.7cm)は、先端が尖り下端に茎を削り出す、鏃形である。903(残存長16.4cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm)は、先端が丸くなる、剣形である。905(残存長18.4cm、幅1.4cm、厚さ0.3cm)は、先端が尖り両側縁を削り刃部とする剣形である。904(現存長15.6cm、幅1.2cm、厚さ0.8cm)は、刃部を削り出し、刀身と柄の区別がわかる、刀子形である。

3) 雑具(図版71・72・158・159)

杓子形木器(906～908) 906(長さ24.8cm、幅不明、厚さ0.4cm)は小型で身と柄を平らに削る。907(残存長14.1cm、幅4.9cm、厚さ0.4cm)は、大型で身の先端を丸く、薄く削る。908(残存長11.8cm、幅2.9cm、厚さ0.2cm)は、小型で身の先端を方形に、薄く削る。

火鑽臼(909) 切り抜き数箇所と臼の部分1箇所を確認した。残存長9.3cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmである。

籠編物(915) 細い棒状の木を重ね合わせ、樺皮紐で3～4箇所固定した籠編物の芯の部分である。径約17.5cmである。

柄状木器 (933) 握り部を藤巻きにして漆を塗る。鞭の可能性ある。残存長 28cm、幅 2.0cm、厚さ 1.5cm である。

4) 漁撈具 (図版 71・158)

浮子 (916・917) 916(長さ 8.0cm、幅 4.8cm) は、紡錘形で、両端を尖り気味に加工する。917(長さ 7.2cm、幅 3.2cm) は、円筒形に加工する。いずれも紐を通す孔がつけられている。

5) 紡織具 (図版 71・158)

糸巻 (918) 中型糸巻の柞木で内側を弧状に削る。残存長 9.3cm、幅 1.9cm、厚さ 1.3cm である。

6) 服飾具 (図版 72・159)

木杵 (923～925) 923(残存長 28.7cm、残存幅 3.6cm、厚さ 1.1cm) は、爪先が反り、歯のあるもので、底部は磨滅している。924(残存長 23.6cm、残存幅 11.1cm、厚さ 1.5cm) は、爪先が反り、歯のあるもので、底部は磨滅し、痕跡だけが残る。925(残存長 6.4cm、残存幅 8.2cm、厚さ 2.3cm) は、踵の部分である。いずれも板目材を削り抜いたものであり、左右の区別は付かない。

桧扇 (927) 薄板の扇骨 8 枚を綴じ合わせて扇にしたものである。残存状態が悪く末は不明である。本は両側縁を削って幅を縮め、本の中央に孔を穿つ。残存長 18.2～21.6cm、残存幅 2.4cm、厚さ 0.1～0.15cm である。

櫛 (928～931) 928・930・931 は、櫛の挽きだし位置を示す切り通し線が、背の上縁に平行して直線をなす。929 は、櫛の挽きだし位置を示す切り通し線が、背の上縁に平行して曲線をなす。いずれも櫛歯数は 9～10 条/cm である。928 は残存幅 7.1cm、高さ 4.6cm、厚さ 0.8cm、929 は残存幅 6.9cm、高さ 4.1cm、厚さ 0.8cm、930 は幅 7.2cm、高さ 2.9cm、厚さ 0.35cm、931 は残存幅 5.1cm、高さ 4.1cm、厚さ 0.7cm である。

7) 容器 (図版 71～73・158～160)

皿 (911～913) 911(口径 21.2cm、高さ 2.0cm) は、轆轤によって成形した挽ものである。912(口径 18.8cm、高さ 1.6cm) は、轆轤成形された生地全面に漆を施す。913(復元口径 17.1cm、復元高 1.6cm) は、轆轤によって成形した挽ものである。いずれも横木取りである。

曲物柄杓 (934) 身の側板の綴じあわせは 1 箇所、側板重ね合わせ部分の中央上寄りに 1.2cm の方孔をあけ柄の孔とし、対応位置のほぼ中位に 0.4cm の円孔を貫通させる。身の径が 14.0cm、同高さ 7.2cm、柄の長さ 47.2cm、同幅 1.4cm、同厚さ 1.2cm である。

曲物 (914・919～922・935～939) 長方形曲物 (935・936) と円形曲物 (914・919～922・937～939) に分かれる。936(長さ 32.0cm、幅 25.6cm、高さ 3.2cm) は、四隅を丸く切り落とした長方形の底板に低い側板を結合した折敷・折櫃と呼ばれるもので、側板も残りほぼ完形である。側板は底板の周縁の内側にあり、樺皮紐で結合し底板の長辺に各 2 箇所、短辺に各 1 箇所の結合穴が開く。また側板の内面四隅に縦平行線のけびきが入る。

円形曲物は多くは側板が分解しているが、937(口径 19.6cm) は蓋板で 4 箇所に樺皮紐結合法を用いる。938(口径 8.6cm、高さ 2.7cm) は、底板を側板の内面にはめ、側板の上から木釘を打ち込んだ釘結合曲物で、2 箇所確認できる。側板の内側に縦平行線のけびきを入れる。

939(口径42cm、高さ32cm)は、側板を樺皮紐結合で合わせ、側板と底板は釘結合で留める。側板には斜格子のけびきが入る。側板の側面に「角萬福」と墨書されたほぼ完形の曲物である。墨書については吉祥句と考えられる。

8) 用途不明木器(910・926・932)(図版71・72)

910は、板状で一端に6個の突起が付く。中央部が高くなり断面が山形を呈する。長さ19.9cm、幅4.4cm、厚さ0.8cmである。926は角材を加工したもの、932は角材の上端を切り欠き、方形の突起を作り出したものである。

(5) その他の遺物

1) 金属器(図版74・161・165、図18)

金属器には、銭貨・^{註12}銚具・刀子・鉄鎌・鉄釘などがある。

銭貨(985～1004) 20点出土した。内訳は、和同開珎4枚、萬年通寶7枚、神功開寶9枚で、すべて銅銭である。遺構別には、SX278から和同開祢1枚、萬年通寶1枚、神功開寶4枚、SK282からは和同開珎・萬年通寶・神功開寶が各1枚、SX280からは萬年通寶・神功開寶各1枚、SD285から和同開祢1枚、萬年通寶3枚、神功開寶3枚、SD207からは、萬年通寶1枚が出土している。その他、包含層より和同開珎1枚が出土した。

銚具(1048) SD285上層から出土した。ほぼ方形で、一辺約2.5cm、厚さ0.1cmの銅製である。表面はよく研磨され、光沢が残る。孔は一辺の中央に一つだけ穿たれる。形状から巡方の裏金具と考えられる。

刀子(1044・1045) SD285から出土した。いずれも刀身は細く断面は二等辺三角形で、棟と刃の両側に鬘がある。茎の断面は逆台形である。1044は刃の先端を欠損しているが、茎の長さはほぼ同じである。

鉄鎌(1046・1047) SD285から出土した。刃が内湾するもの(1047)と、直線的なもの(1046)がある。1047は刃の中央部がやや幅広くなる。1046は短冊形である。2点とも柄の取付け部の巻き込みが残る。

鉄釘(1043) SD285から1点が出土した。断面方形で、長さ13.6cmである。

2) 石器(図版165、図18)

銚具と砥石がある。

銚具(1051・1052) 1051は粘板岩製の蛇尾で、黒褐色を呈する。表面・側面ともよく研磨され、平滑である。側面は表面に向かってやや斜めに成形され、裏面側を面取りする。裏面には3箇所、断面V字形になるように穿孔して取付け用の孔とし、そのうちの2箇所には銅線が残存する。SD212から出土した。1052は小破片のため、蛇尾か巡方かは不明だが、裏面には取付け用の孔が認められる。白色で、大理石製と推定できる。SK274から出土した。

砥石(1049・1050) 1050は方形で、両面から研磨され、断面が斧状を呈する。1049は長軸方向の端面以外の四面が使用され、中凹みになる面もある。2点とも砂岩製で、SD285から出土した。

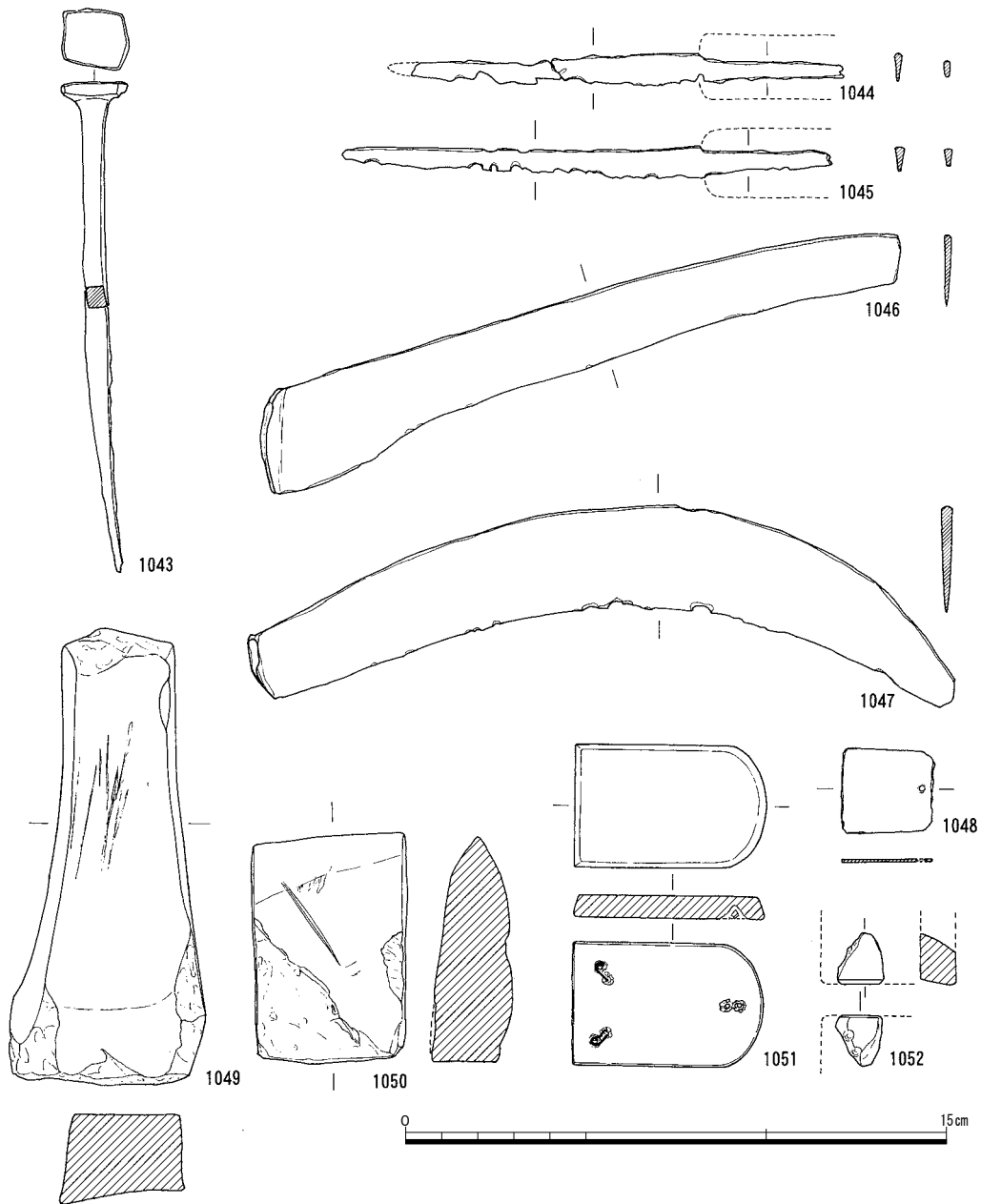


図 18 金属器・石器実測図（長岡京期）(1:2)

5 平安・鎌倉時代の遺物

(1) 土器・軒瓦（図版 75・162）

1) SD290 出土土器・軒瓦

土師器 (700・701・708・709・713～715・722) 700・713～715 は皿である。700 は口縁部が屈曲しながら外反し、器壁が薄い特徴を持つ。713～715 は口縁部がほぼ直線的に外上方へ開き、端部は尖り気味におさまる。701・709 は杯である。701 は口縁部が屈曲し外反する。709 は斜め上方に延び、端部は尖り気味におさまる。ともにオサエとナデで仕上げられているが、709 の内面には調整時のハケの痕跡が残る。708・722 は羽釜である。708 は外傾する口縁と、斜め外上方

にのびる鏝部を持つ。722 は内傾する口縁に短い鏝を貼り付ける。体部内面はナデ調整、外面は縦方向のハケを施す。

須恵器(702・721) 702 は平坦な天井部で、中央部に宝珠つまみが付く蓋である。721 は須恵器壺。底部は平坦で広く、体部は中位で膨らみ、丸い肩を持つ。底部外面は糸切りで未調整であり、他はナデ調整。外面はほぼ全体に炭素が付着し、黒色を呈する。焼成はややあまく、胎土は瓦質である。

黒色土器(703) 黒色土器B類の椀である。丸みを持つ底部に断面方形の高台が付く。体部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部内面には沈線が巡る。内・外面ともに横方向にミガキを密に施す。

緑釉陶器(704～706) 704・705 は皿である。704 は体部がやや直線的に開き、口縁部はやや外反し端部は丸く収める。口縁部に輪花が施されている。高台はともに細く外方に踏ん張り、内端に浅い凹みを有する貼り付けの輪高台である。釉調は704 が暗緑色、705 は淡緑色を呈する。706 は椀である。外部は内湾気味に立ち上がり、高台の幅は狭く断面が長方形に近い貼り付けの輪高台である。釉調は暗緑色を呈する。

輸入磁器(707・712・716) 707 は白磁の段皿である。内面の底部と体部の境目には段を持つ。高台の幅はやや広く、断面は逆台形を呈する。釉は内側全面と外面の底部近くまで施される。釉調は乳白色を呈する。712 は白磁椀。玉縁口縁で、内面全面と外面の体部上半まで施釉される。釉調は灰白色を呈する。716 は青磁椀。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや屈曲しながら斜め上方に延びる。釉は内側全面と高台底部を除く外面に施される。釉調は暗緑灰色を呈する。

瓦器(710・711・717～719) いずれも椀である。710 の体部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は端部を尖り気味に収め、口縁端部内面には沈線が巡る。体部・底部の器壁はやや厚い。体部内面のヘラミガキは密、外面は体部中位までしか施されていない。高台は断面方形状で外方に踏ん張る。711 の体部は斜め上方に延び、口縁端部は丸く収め、口縁端部内面には沈線が巡る。体部内面のヘラミガキは密、外部は粗い。717～719 の体部は斜め上方にやや内湾しながら延び、口縁端部は尖り気味に収める。体部内面のヘラミガキは粗い。底部内面にはジグザグ状の簡易な暗文を施す。高台は低く断面三角形で形骸化している。

瓦質土器(720) 瓦質土器の羽釜である。内傾する口縁と短い鏝部をもつ。内面はナデ、鏝部はヨコナデで、以下の面はオサエで調整している。

軒瓦(741) 直線顎の唐草文軒平瓦である。

土器の時期は、702 は平安時代前期、700・701・703～708・721・722 は平安時代中期の10世紀後半～11世紀前半に、709～712 は平安時代後期の11世紀末～12世紀代に、713～720 は鎌倉時代後期の13世紀後半～14世紀代に比定できる。

2) SX296 出土土器

土師器(723～725) いずれも皿である。723・724 の口縁部はほぼ直線形に外上方に開き、端部はやや尖り気味である。725 の口縁はほぼ真上に立ち上がり、端部はやや外反し尖り気味であ

る。いずれも口縁部外面はナデを施す。

瓦器 (726・727) いずれも椀である。体部は斜め上方にやや内湾しながら延び、口縁端部は尖り気味に収まる。体部内面のヘラミガキの隙間は大きい。底部内面には連結輪状の退化した暗文を施す。高台は断面三角形で低い。

土師器、瓦器ともに鎌倉時代中期の13世紀中葉頃に比定できる。

3) SD297 出土土器

土師器 (728～730) 皿が3点出土した。728・729の口縁部は斜め外上方に延び、端部は尖り気味になる。730の口縁部はほぼ直立し、端部は尖り気味に収める。いずれも口縁部外面はナデを施す。

瓦器 (731) 椀である。体部は斜め上方にやや内湾しながら開く。口縁部は上方に延び、端部は尖り気味に収める。体部内外面のヘラミガキは粗い。

土師器、瓦器ともに鎌倉時代後期の13世紀後半～14世紀前半に比定できる。

4) SG294 出土土器

土師器 (732～736) 皿が5点出土した。732の口縁はほぼ直立し、端部はやや尖り気味に収める。733・734の口縁部は斜め上方に延び、端部は尖る。ともに器壁は極めて薄い。735・736の口縁部はやや屈曲しながら斜め上方に延び、端部は丸くおさまる。いずれも口縁部外面はナデを施す。

瓦器 (737～740) 738～740は椀である。いずれも体部は斜め上方に内湾気味に開く。738の口縁部は斜め上方に延び、端部は尖り気味に収める。739・740の口縁部はやや内傾し、上方に延び、端部は尖り気味に収める。いずれも体部内面のヘラミガキは粗く、底部内面の暗文は簡略なジグザグ状である。737は皿で、口縁部はほぼ直立し、端部はやや角張る。口縁部・底部内面はナデ調整、底部外面は不調整。

土師器、瓦器ともに鎌倉時代後期の13世紀後半～14世紀前半に比定できる。

(2) 木器 (図19・20)

平安時代の木器はSD290、SD292から若干出土した。

下駄 (1053・1054) 一木作りの下駄である。1053は下駄歯が磨滅しておりかなり使用されたものと思われる。1054は台下面に面取りがある。足の左右も確認できる。長さ19.2cm、18.8cm、幅7.2cm、7.6cm、厚さ2.4cm、2.8cmを測る。

紡輪 (1059) 円形で中央に孔を穿つ。口径8.4cm、厚さ0.5cmである。

斎串 (1056) 両側に三角形の切り抜きを入れている。切り抜きは4箇所確認できる。

人形 (1057) 目と眉を墨描きしている。

加工木 (1055・1058) 1055は上端を丸く削りその下で両サイドを切り欠いている。

丸木舟 (図20) SX296で検出した。これは、舟首上半と舟尾を切り欠き、木樋として転用されていたもので、残存長630cm、幅80cm、高さ45cmである。舟体はモミの一木を削り貫いて造られており、内外には所々に手斧による調整痕が観察できる。舟首から舟尾まではほぼ同じ幅で、

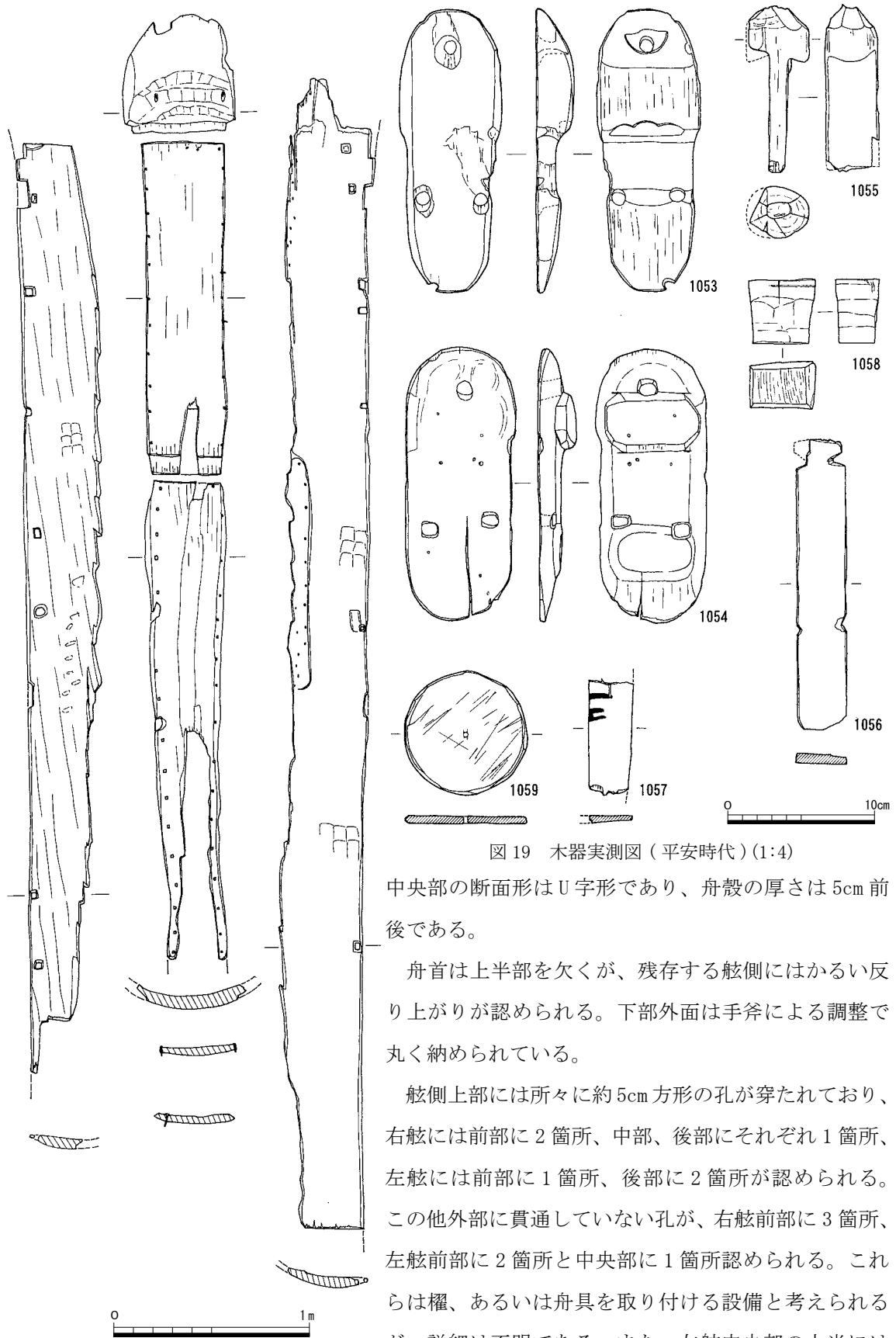


図19 木器実測図(平安時代)(1:4)

中央部の断面形はU字形であり、舟殻の厚さは5cm前後である。

舟首は上半部を欠くが、残存する舷側にはかるい反り上がりが見られる。下部外面は手斧による調整で丸く納められている。

舷側上部には所々に約5cm方形の孔が穿たれており、右舷には前部に2箇所、中部、後部にそれぞれ1箇所、左舷には前部に1箇所、後部に2箇所が認められる。この他外部に貫通していない孔が、右舷前部に3箇所、左舷前部に2箇所と中央部に1箇所認められる。これらは櫂、あるいは舟具を取り付ける設備と考えられるが、詳細は不明である。また、左舷中央部の上半には直径8cm、高さ3cm、右舷中央部の下半には船内に長さ120cm、幅10cmにわたって高さ約3cmの出っ張りがある。

図20 丸木舟実測図(1:30)
(上から見た展開図として復元した)

るが、これも性格は不明である。その他に木樋に転用された際の切り欠きが、前部と中央部の両舷上端に認められる。

舟体の下部は、直径5mm程度の小穴が無数に開いている^{註14}。このため舟材の痛みが激しく、中央部は腐食して欠損している。ここには補修と考えられる板材が舟体内部から釘で打ちつけられている。板材は前後2枚あり、前部は長さ170cm、幅40cm、厚さ5cmで、後部は長さ250cm、幅35～40cm、厚さ5cmである。いずれも板の両側は舟体の丸みに合わせて面取りが施してある。また、補修板の接合部は、それぞれ上下に幅10cm、厚さ2cm前後の切り込みを入れてほぞを作り出し、これを重ね合わせて密着させている。釘は長さ7cm前後の鉄製角釘で、10～15cmおきに打ち込まれている。補修板材と舟体の間には防水用の木の皮（まきはだ）などは認められない。

(3) その他の遺物（図版74・161・165、図21）

その他の遺物として、銭貨・鉄鏃が出土した。

銭貨(1005～1028) 皇朝十二銭では、饒益神寶(1005)・貞観永寶(1006)・延喜通寶(1007～1016)・乾元大寶(1017～1028)が出土している。延喜通寶は、SD290の西側肩口から10枚が重なった状態で出土した。掘形などは確認できなかったが、出土の状況から、何らかの遺構にともなって埋納された状況が推定される。また、乾元大寶もSD290から12枚がまとまって出土した。渡来銭としては元豊通寶・元祐通寶・天聖元豊・治平元寶・紹聖元寶・淳熙元寶・皇宋通寶・至和元寶・淳化元寶・景德元寶・祥符通寶・永樂通寶などがある。永樂通寶のみ明銭で、他はすべて宋銭である。

鉄鏃(1060・1061) SX295より2点出土した。1060は刃先が欠損しているが、鏃身の断面は長方形を呈し、先端に向かってほぼ同じ幅を保つことから、平根式と思われる。茎も断面方形で、先端は渦巻き状に曲がっており、転用されるために二次的に加工された可能性がある。

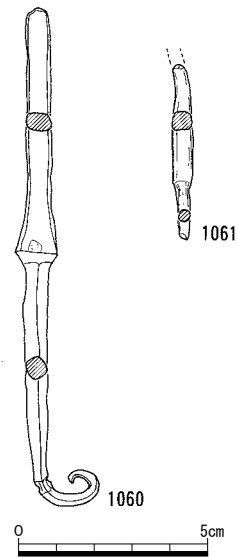


図21 鉄鏃実測図(1:2)

註

- 1 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 2 木器の分類は、奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿原始編』に準拠した。
- 3 土器の記述は、奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』で使用されている用例に準拠し、一部改変した。
- 4 平城京右京八条一坊十一坪で出土した小型甕(Fig19-16・17)は、体部外面が壺B・壺Cと同様に不調整で粘土紐痕跡が残り、祭祀用土器と推定されている。本調査出土甕とは、成形手法が異なる。奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書』同研究所 1984年
- 5 祭祀専用に製作した土器・土製品・木器は、祭祀用土器・祭祀用土製品・祭祀用木器と略し、総称して祭祀具と呼ぶ。

- 6 墨書土器の解読には清水みき氏のご教授を得た。
- 7 左京三条三坊八町（大政官御厨屋推定地）から、「秦」の墨書土器（土師器）が出土している。
向日市教育委員会編「左京第13次、同第22-1・2次、同第51次調査区」『長岡京木簡一』向日市教育委員会 1984年
- 8 左京五条三坊一町から「王」の墨書土器が10点まとめて出土した。
長宗繁一・鈴木廣司「長岡京左京四条二・三坊」『昭和60年度・京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所 1988年
- 9 木器の分類は、奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿古代編』に準拠した。
- 10 積文の記述については、木簡学会『木簡研究』に準拠した。
- 11 人形の分類は次の文献で使用された用例に準拠した。
山中 章「長岡京跡左京第51次～左京二条二坊六町～（木製品）」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第7集 向日市教育委員会 1981年
- 12 銚具の名称については次の文献を参照した。
木村泰彦「長岡京の銚具」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会編 1992年
- 13 丸木舟の構造については松木 哲氏に御教授いただいた。
- 14 この小穴はフナクイムシによるものと考えられ、この舟が海で使用されていたことを示している。

第5章 ま と め

今回の調査によって、明らかになったことをまとめ、以下時代毎に述べる。

1 縄文・弥生時代

今回検出した遺構は河川や溝で、大半が自然の流路である。しかし、C1区西端で検出したSD6は幅や深さが一定で流れの方向も不自然であり、人工的に開削された可能性が高い。これが事実であれば、周辺の開発が溝の作られた時期まで遡る可能性を考えることもできよう。

この時期の遺物として土器・石器などが出土したが、時期的に継続するものではなく、散発的である。また、大半が河川や溝・包含層からの出土であり、少量で磨滅を受けたものが多い。こうした状況から、これらの遺物は上流の雲宮遺跡との関連が考えられる。ただ、弥生時代の石包丁についてはかなりの数が出土し、古墳時代の下層に弥生時代の水田が存在する可能性を示したもののといえよう。

2 古墳時代

(1) 遺構

1) 水田について

水田を上下2面検出した。とくに上面の水田は、太くて高い大畦畔が北西から南東の方向に築かれている。また、これに直交する大畦畔も検出した。大畦畔は水路とともに一定の間隔で配置され、水田を造るにあたって、あらかじめ大きな区画が設けられていた可能性がある。一辺約106mの区画が想定され、その中をさらに二分、三分する位置にも大型の畦畔が設けられている場所もある。このような区画は「代」制地割と関連があるのではないかと考えた。^{註1}京田辺市の興戸遺跡でも、直交する2本の大畦畔によって区画された水田が検出されている。^{註2}

2) 小穴群・畝状遺構について

水田と建物群の間で検出した小穴群は、小さくて浅い小穴が筋状にならぶものである。柵列にしては掘形が浅く底部の凹凸が激しいこと、柱当たりに対応するものが検出されないこと、小穴と小穴の間が接近しすぎていることなどからみて、柱が立てられたり、杭が打たれた痕跡ではないと思われる。河川・溝に沿うように営まれていること、小穴列の間に畝間の跡だと考えられる浅い筋状の溝がみられることから、この小穴群は畑作に関連するものと考えられる。また、畝状遺構も立地は小穴群と同じで、これも畑の遺構と考えられる。花粉分析、プラント・オパール^{註3}の分析を実施したが、具体的な作物の種類は判明しなかった。同様な遺構が岡山県百間川原尾島遺跡^{註4}、香川県下川津遺跡^{註5}、大阪市長原遺跡^{註5}でも調査されている。

3) SD98 について

SD98 から出土した土器の量は整理箱にして約 400 箱に及ぶ。これらの土器は磨滅が少なくまたほぼ完形に復原できるものが多い。こうした状況から、上流から流れてきた土器が偶然堆積したのではなく、この場で投棄されたものと思われる。また、体部下半に意識的に穿孔した土器が多く見られ、革袋形土器やへら形土製品、表面を研磨した円礫などの遺物が出土している。これらの遺物は日常品ではなく、祭祀品として使用されたものであろう。したがって、この付近で集落の祭祀が行われたと考えられる。

4) 道路状遺構について

道路状遺構 (SF136) は、側溝などからの遺物の出土がなく時期の決め手がない。しかし、7 期の掘立柱建物 (SB83・84) を切っているが、他の掘立柱建物と傾きが揃うので、ほぼ同期には存在したと考えられる。また、長岡京市で検出された神田古道の南東の延長線上にほぼ位置し、神田古道との関連が考えられる^{註6}。

(2) 集落の変遷

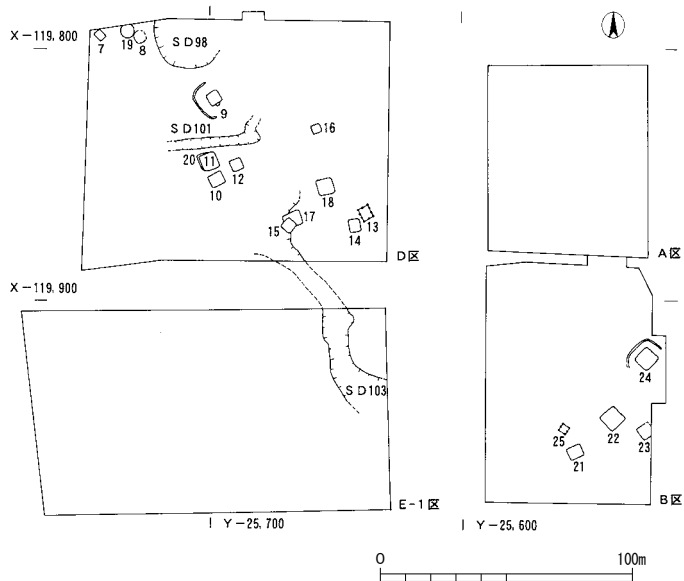
1) 建物の時期区分

古墳時代の建物は、まず竪穴住居がカマドを有するかどうかで大きく二分することができる。カマドをもたない竪穴住居は、庄内期の土器が出土したものと、布留期の土器が出土したものに分かれる。また、両時期の建物はさらに切り合い関係・出土遺物の観察からそれぞれ 2 期に区分することができる。カマドを有する竪穴住居は、MT15～TK10 型式の須恵器が出土したものと、TK43 型式の須恵器が出土したものに二分できる。最後に小型の掘立柱建物のみで形成される時期がある。以上、建物は全体に 7 期に区分することができる。

2) 集落の変遷 (図 22～28)

7 期に分けた建物と並行関係にある遺構を比定し、集落全体の変遷について述べる。

1 期の集落 1 期の集落は東西 2 つの単位に分かれ、西の単位は竪穴住居 13 棟、掘立柱建物 1



棟、東の単位は竪穴住居 4 棟、掘立柱建物 1 棟からなっている。西の単位はさらに東西方向の溝 (SD101) によって南北に二分される。さらに、2～3 棟の竪穴住居で小さな単位を形成している。東西の単位にはそれぞれの単位を代表する周溝を有する大型の竪穴住居 (SH9・24) がある。周溝を持つ住居の周囲には竪穴住居は造られず、比較的独立性を保っている。東の単位の竪穴住居 4 棟の内 3 棟までが火災に遭っている。

図 22 集落変遷図・1 期 (1:3,000)

祭祀場 (SD98) が設けられ、土器を多量に一括投棄している。

2期の集落 2期の建物数は激減し、竪穴住居7棟になる。掘立柱建物は検出していない。また、東の単位は消滅し、これ以後は西半にのみ居住区が営まれるようになる。2～3棟で形成される小さな単位が2つ抽出される。

祭祀場は、この時期でも継続して使用されている。

3期の集落 2期との間には若干の時間的空白が存在する。3期になると竪穴住居は21棟で、D区の北西部、SD122とSD123に囲まれた挟まれた地点、SD123の東岸、D区南東部の4箇所に分かれる。竪穴住居の基本構造は2期と大きな変化はないが、全体的に小型化する。

この時期の水田を住居の南辺の湿潤な場所で検出している。この時期の水田は、ほぼ東西方向に畦畔が設けられている。本来は南辺全域に広がっていたと思われたが、5期の水田に覆われていない北部のみの検出にとどまった。

住居のすぐ南側に方形周溝墓 (SX97) と土器棺墓 (SX96) が各1基造営されている。

4期の集落 4期は竪穴住居を18棟検出しており、3期に引き続き集落が栄えた時期である。建て替えを含めた住居の重複する所が増える。竪穴住居の基本構造は変わらないが小型化が定着し、ベッド状遺構が付

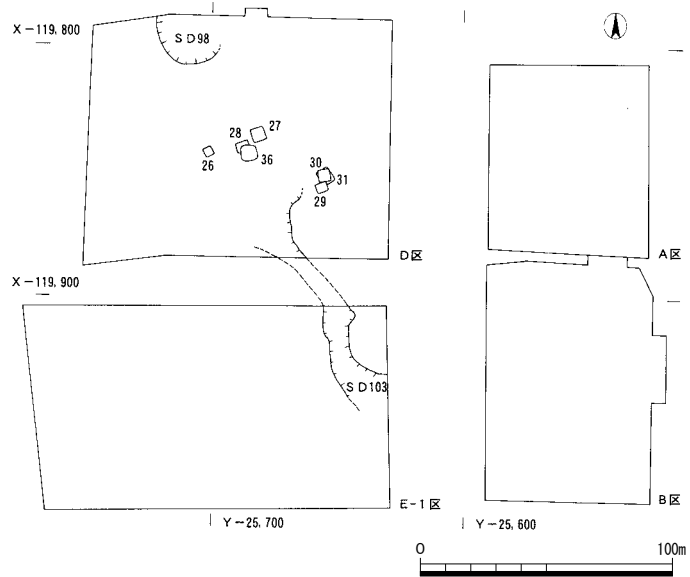


図23 集落変遷図・2期 (1:3,000)

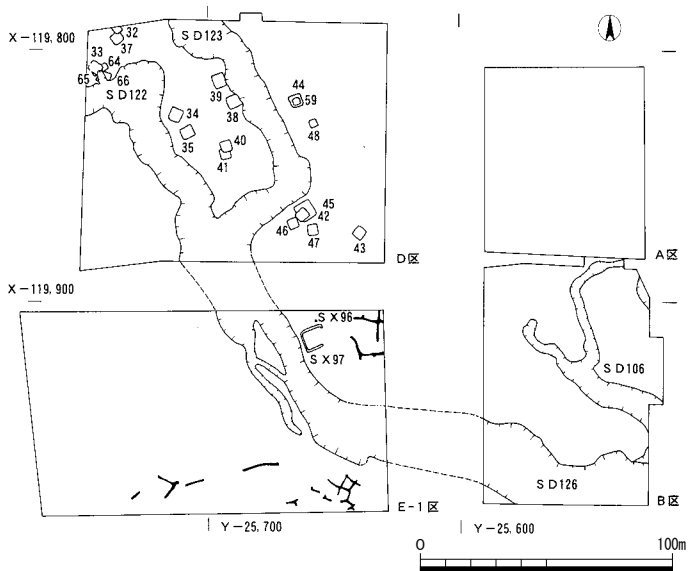


図24 集落変遷図・3期 (1:3,000)

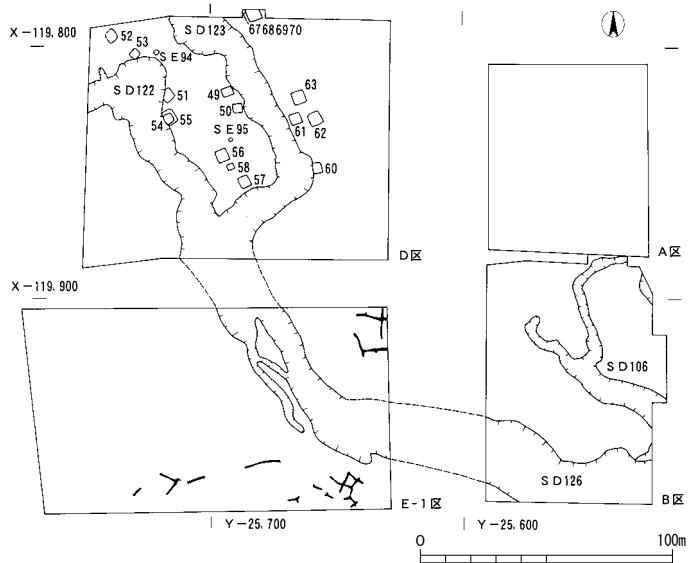


図25 集落変遷図・4期 (1:3,000)

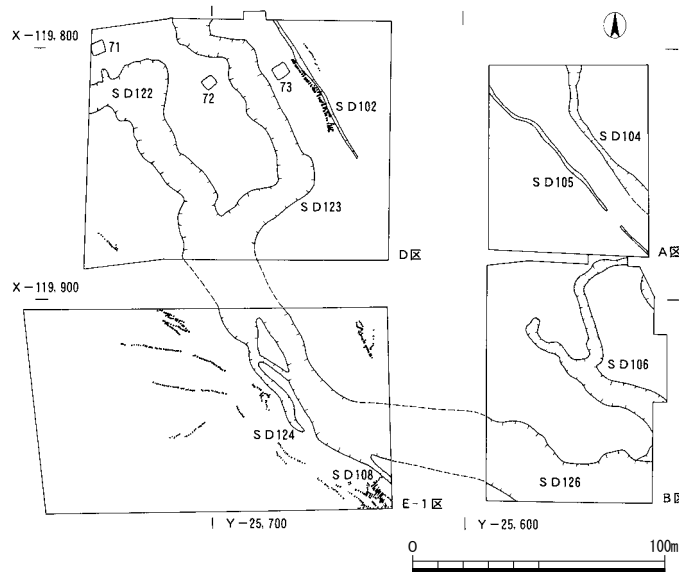


図26 集落変遷図・5期 (1:3,000)

穴住居は4棟と激減する。この時期に洪水がおこったと思われる。流路に沿って砂礫流がいつきに流れ込んで、流路を大きく削り込んでいる。

調査区の北西端の高所に竪穴住居3棟が分散して検出された。居住区全体が北東の高所に移動し、その南端の竪穴住居が検出された可能性も考えられる。また、居住区の東を限る溝 (SD102) を検出した。SH71 は調査区の北西隅、SH72 は2本の河川に挟まれた中央の台地、SH73 はSD102と東側の河川の間位置している。SH74 はこれらの竪穴住居の南東約800mの地点 (H区) に築かれている。おそらく同一の微高地の延長上に営まれていると思われるが、別の集落の住居の可能性もある。

4期に引き続いて水田が経営されるが、調査区の西半に偏っている。F2区の東南隅で検出した湾曲した大型の畦畔 (SL150) は耕作地と非耕作地の境をなしている。SD109・110・114・115・118は、水田に付属する用排水路である。

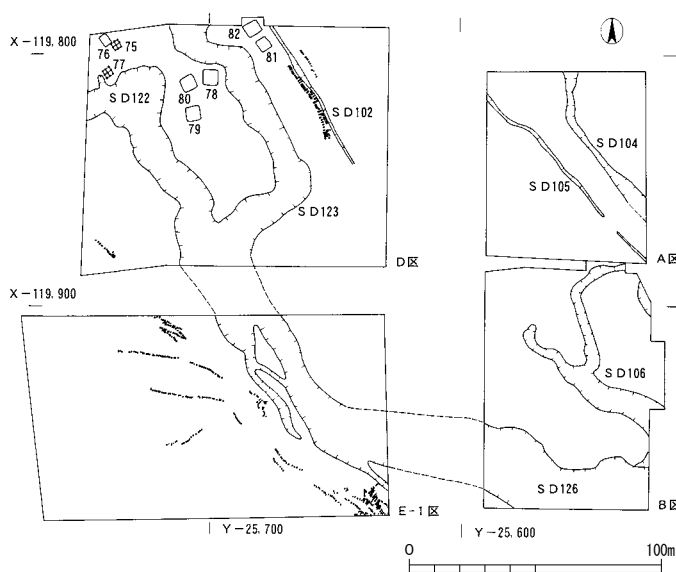


図27 集落変遷図・6期 (1:3,000)

属する大型の竪穴住居は消滅してしまう。居住区の中に素掘りの井戸が2基造られる。

この時期にも住居の南辺で水田耕作が行われていたと思われる。また、土師器の高杯だけをまとめて埋納する祭祀に利用したと考えられる土壌を2箇所 (SK99・100) 検出した。いずれも、河川に近接した場所で検出している。

5期の集落 4期と5期の間にも時間的空白が存在する。5期の竪

居住区と水田地帯の間のやや乾燥した微高地沿いに畑が営まれる。SD108・124は畑に水を灌漑するための水路である。

6期の集落 建物の分布は5期の住居の位置を踏襲しており、3つの単位に分かれる。北西隅の単位は竪穴住居1棟 (SH76) と掘立柱建物2棟 (SB75・77)、中央の単位は竪穴住居3棟 (SH78～80)、東の単位は竪穴住居2棟 (SH81・82) で構成されている。

この時期にも、いぜん水田経営と畑作を行っていたと考えられるが、南端部の水田は洪水砂層に埋まったまま、使用されていない可能性がある。

7期の集落 この時期になると、堅穴住居は姿を消し、小型の掘立柱建物に変わる。大きく3つの単位に分かれる。2条の河川に挟まれた地点に5棟、河川の東側に4棟、南側に2棟分布する。

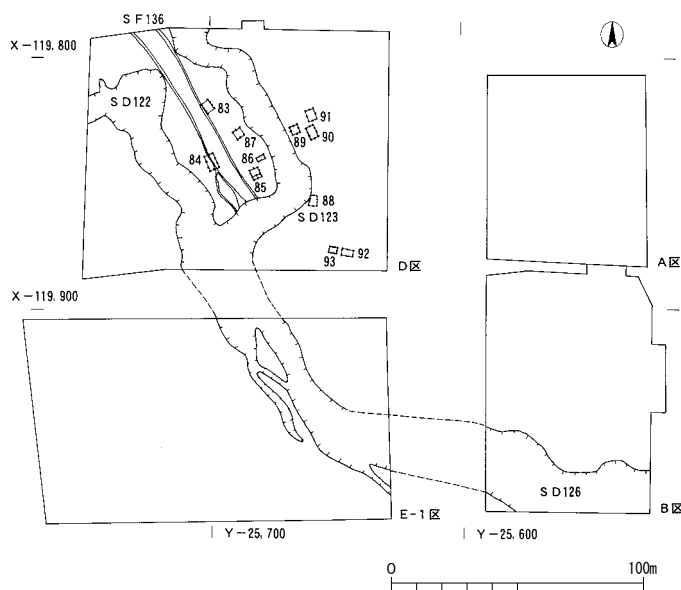


図28 集落変遷図・7期 (1:3,000)

(3) 遺物

古墳時代の土器についてまとめる。

庄内期の土器は、SH11・12・14・15・17・18・20～24・26・27・29・36、SB13、SD98、SD101、SD103、などから出土しており、甕A・B・D、壺A・D～F、高杯A・F、器台B～E・G、鉢A・D・E、台付鉢A～D、手捏ね土器、手焙り形土器などがある。弥生土器の伝統を引き継いでいわゆる在地（乙訓地域）で生産されたもの以外に、東海・近江・北陸・山陰・丹波・河内（生駒西麓）・大和・山陽・讃岐などの各地から搬入されたか影響を受けた土器がみられる。その内、生駒西麓系の土器の割合が大半を占め、東海・近江・北陸・山陰・丹波系の土器がこれに次ぎ、大和・山陽・讃岐系の土器は少ない。

布留期の土器は、SH33～35・37・39・45・49・51・56、SK99・100、SX96、SE94・95、河川などから出土しており、甕B・D、壺A・D、小型丸底壺A、高杯A～C、器台C・D、手焙り形土器などがある。全体に布留式でも新しい様相を示し、いわゆる布留の小型精製三種土器のうち小型鉢はあまりみられない。布留期も、各地から搬入されたか、影響を受けた土器が出土している。山陰系土器の出土量が比較的目立つ。

初期須恵器の出土量は比較的多く、TK73・TK216・ON46型式のものが出土している。器形には、杯身・杯蓋・高杯・甕・把手付鉢・甕などがある。共伴する土師器の甕は、体部が長胴化し口縁端部が内側に肥厚して斜めの面をもつ。いずれも河川からの出土である。

古墳時代後期の土器には、土師器の甕・壺・甑・高杯、須恵器はTK47・MT15・TK10・TK43型式の甕・杯蓋・杯身・高杯・壺などがある。また、韓式土器が数点出土している。SH71～74・76・78～80・82、河川、SD108などから出土した。

(4) 水垂遺跡の特徴

今回の調査では、生産域（水田・畑）、居住域（堅穴住居・掘立柱建物・井戸）、墓域（土器棺墓・方形周溝墓）、祭祀域（祭祀場・埋納遺構）、溝・河川などで構成される集落跡を検出した。水垂遺跡は庄内期に集落が形成され、7世紀の前半まで存続した。集落の変遷を7期に分けて、

その歴史を明らかにし、古墳時代の乙訓地域を考えるうえで貴重な資料を提供した。以下、水垂遺跡の特徴について述べる。

水垂遺跡が立地するのは、京都盆地を流れる桂川、鴨川、宇治川、木津川などの河川が合流して淀川となる地点のすぐ北側である。これらの河川の合流点は巨椋池と言う巨大な低湿地帯を形成しており、水垂という名が示すように本遺跡は比較的湿潤な地帯に営まれている。

乙訓地域の古墳時代の集落は、古墳時代を通じて営まれたものは少ない。また、氾濫原などの湿潤な土地から低位段丘上などの高燥な土地に移っていく傾向が高く、布留期の他の集落では停滞期のような様相をみせる。水垂遺跡は、古墳時代中・後期の拠点的な集落である長岡京市の今里遺跡^{註7}などと比べれば、決して大規模な集落ではない。しかし、水垂遺跡は消長を繰り返しながらも、ほぼ古墳時代を通じて比較的湿潤な地帯に継続して営まれた集落で、布留期は建物の数が最も多い時期である。また、河川などから各地域から搬入されたか影響を受けた土器が出土した。これらのことは、水垂遺跡の立地と密接に係わっている。柱川を遡れば丹波・丹後・北陸・山陰へ通じ、宇治川を遡れば近江・北陸に通じ、木津川を遡れば大和・東海に通じる。また、淀川を下れば河内平野・瀬戸内沿岸に抜けられる交通の要地である。各地から土器を含めた物とそれらを移動させた人の交流・集積の重要な接点になる位置に集落が立地している。長岡京期にも、近接地に与等（淀）の津が設けられ、物資の集積・中継地として重要な役割をはたしている。それゆえ、古墳時代を通じて継続して集落が維持され、各地の土器が搬入されたのであろう。

3 長岡京期

(1) 条坊

1) 条坊道路の規模

調査では、東二坊大路 (SF201) と東三坊坊間西小路 (SF202) の 2 本の南北条坊道路、六条条間南小路 (SF203) と六条大路 (SF204) ・七条条間小路 (SF205) の 3 本の東西条坊道路を検出した。検出した各大路・小路の路面幅と側溝心々距離は、東二坊大路が 23.4m と 24.71m、六条大路が 22.8m と 24.62m、東三坊坊間西小路が 8.7m と 9.2m、六条条間南小路が 8.4m と 9.4m、七条条間小路が 9.0m と 9.8m である。

条坊道路の計画寸法^{註8}は、既往の調査によって以下のように推定される。大路推定寸法は、築地心々距離が 100 尺、路面幅 78 尺 (23.088m)、側溝心々幅 83 尺 (24.568m)、側溝幅 5 尺、築地半と犬行各 3 尺である。小路推定寸法は、築地心々距離が 40 尺、路面幅 27 尺 (7.992m)、側溝心々幅 31 尺 (9.176m)、側溝幅 4 尺、築地半と犬行を併せ 2.5 尺^{註9}である。これと今回検出した道路側溝心々距離を比較すると、七条条間小路が約 0.6m 幅広く、他の大路・小路も 0.2m 前後の差がみられる。差は 3 尺以内であり、道路はほぼ計画通りに施工されたと推定できる。

東二坊大路は、既往の調査によって、北一条大路から七条条間小路までの間で計 17 箇所確認されている。各検出地点で側溝心々距離をみると、最も広いのは四条大路付近で 25.6m、最も狭

いのは二条条間小路付近で 24.0m であり、約 1.6m の差がある。各地点によって狭広の差が生じている。

2) 条坊道路の方位

調査で検出した東二坊大路の東側溝は、六条三坊四町西側から七条三坊四町西側までの間は直線で、方位は $N-0^{\circ}3'24''-W$ である。長岡京全体の造営方位は、既往の調査によって $N-0^{\circ}3'30''-E$ と推定される^{註10}。これと比較すると、今回の東側溝の方位は逆に偏る。

東二坊大路各検出地点間での偏度を見ると、西側溝は一条大路から二条大路間では西に偏り、二条大路から六条条間北小路間では東に偏り、六条条間北小路から七条条間小路間では西に偏る。東側溝は、一条条間大路から一条大路間では東に偏り、一条大路から二条条間大路間では西に偏り、六条条間北小路から七条条間小路間では西に偏る。このように、各地点間の偏度は微妙に異なる。南一条条間大路交差点と七条条間小路交差点との各側溝を単純に結んで方位を測ると、西側溝が $N-0^{\circ}4'23''-E$ 、道路心が $N-0^{\circ}6'47''-E$ 、東側溝が $N-0^{\circ}3'21''-E$ となり、西側溝と東側溝の偏度が異なる。東側溝の数値は、推定造営方位と近似するが、本来の東二坊大路の計画方位は不明。

平城京や平安京では、小路のような下位の道路においては条坊道路の偏りや道路幅員の差が大きいが、大路のような上位の道路ではその差異は小さいことが確認されている。長岡京東二坊大

No.	測定地点	X座標値	Y座標値	備考
1	東二坊大路・六条大路交差点 北東隅側溝心	-119,956.12	-25,771.60	六条大路側溝心々 24.62m、 路面標高 9.08m
2	六条大路南側溝心	-119,980.74	-25,765.00	
3	東二坊大路・七条条間小路交差点 北西隅側溝心	-120,232.70	-25,795.80	七条条間小路側溝心々 9.80m、 路面標高 8.50m
4	東二坊大路・七条条間小路交差点 南西隅側溝心	-120,242.50	-25,795.80	
5	東二坊大路西側溝南端心	-120,359.69	-25,795.60	東二坊大路側溝心々 24.71m、 路面標高 8.26m
6	東二坊大路東側溝南端心	-120,388.66	-25,771.30	
7	東三坊坊間西小路・六条条間 南小路交差点北西隅側溝心	-119,819.50	-25,647.70	東三坊坊間西小路 9.20m、 路面標高 9.30m
8	東三坊坊間西小路・六条条間 南小路交差点北東隅側溝心	-119,819.50	-25,638.50	
9	東三坊坊間西小路・六条条間 南小路交差点南西隅側溝心	-119,828.90	-25,647.70	六条条間南小路側溝心々 9.40m、 路面標高 9.30m
10	東三坊坊間西小路・六条条間 南小路交差点南東隅側溝心	-119,828.90	-25,638.30	
11	東三坊坊間西小路・六条大路 交差点北西隅側溝心	-119,955.90	-25,647.75	

表 8 道路遺構座標値一覧表

調査 次数	測定地点	西側溝心		道路中心		東側溝心		溝心々 間距離 (m)	文献(※)
		X座標値	Y座標値	X座標値	Y座標値	X座標値	Y座標値		
L160	一条条間大路 交差点付近					-117,040.00	-25,769.90		府23冊
L285	一条大路 交差点					-117,255.00	-25,767.15		向日市36集
L89	同上					-117,330.00	-25,766.90		向日市13集
L169	二条条間北小 路交差点付近	-117,377.70							向日市30集
L100	二条条間大路 交差点					-117,536.00	-25,766.20		向日市11集
L218	同上	-177,581.00	-25,791.00						都城2
L248	二条条間南小 路交差点					-117,647.50	-25,766.50		向日市37集
L290	二条大路交差 点付近	-177,757.96	-25,790.86	-117,757.96	-25,778.87	-117,758.22	-25,766.86	24.00	向日市38集
L162	二条大路 交差点	-177,807.30	-25,790.25						向日市27集
L196	三条条間小路 交差点	-118,056.00	-25,791.10	-118,056.00	-25,779.10	-118,056.40	-25,766.80	24.30	向日市34集
L221	三条条間南小 路交差点付近					-118,250.00	-25,767.50		都城2
L144	三条大路 交差点	-118,341.00	-25,791.65						向日市22集
L241	四条条間北 小路交差点					-118,395.00	-25,768.50		府47冊
L164	四条大路 交差点周辺	-118,908.00	-25,795.90	-118,908.00	-25,783.65	-118,908.00	-25,771.40	24.50	京都市S61年
L279	同上	-118,945.00	-25,797.40	-118,945.00	-25,784.60	-118,940.00	-25,771.80	25.50	京都市H3年
L87	六条条間北小 路交差点付近	-119,591.00	-25,796.83	-119,591.00	-25,784.58	-119,591.00	-25,772.33	24.50	長岡第1集
L107	同上	-119,597.00	-25,797.00						長岡京市58年
L288	六条大路 交差点付近					-119,905.00	-25,771.78		本報告
L270	七条条間北小 路交差点付近					-120,027.72	-25,771.51		本報告
L251	七条条間小路 交差点付近	-120,280.00	-25,796.20	-120,280.00	-25,783.85	-120,280.00	-25,771.50	24.70	本報告

(※) 府：京都府遺跡調査概報 向日市：向日市埋蔵文化財調査報告書 京都市：京都市埋蔵文化財調査概要
 都城：向日市埋蔵文化財センター年報 長岡：長岡京市埋蔵文化財調査報告書
 長岡京市：長岡京市埋蔵文化財センター年報

表9 東二坊大路座標値一覧表

路は、他の南北大路と共に通行が最優先された主要幹線道路と位置づけられるが、推定計画ライ
註13
 ンと発掘調査成果との間に誤差が生じている。

3) 町域の規模

六条三坊四町は、東二坊大路・六条大路・六条条間南小路・東三坊坊間西小路に面し、側
 溝心々距離は、東西123.85m(推定築地心々距離120.002m)、南北127.00m(推定築地心々距離
 123.152m)である。六条大路南側溝心から七条条間小路北側溝心までの距離は251.96mで、こ
 の間に七条条間北小路を設定すると、七条三坊一町の南北側溝心々距離は121.984m(推定築地
 心々距離118.136m)・二町の南北側溝心々距離は120.800m(推定築地心々距離118.136m)と復
 原できる。

二条大路以南・東一坊大路以東の左京街区の1町域の計画寸法は、既往の調査によって40丈(118.4m)四方と推定される^{註14}。これと比較すると、四町の東西幅は1.602m、南北幅は4.752m広い。四町の計画寸法は、本来40丈四方ではなく、東西40丈・南北約42丈として計画・施工されたと推定できる。七条三坊一町・二町の南北幅は0.264m狭いが、南北40丈で計画されたと推定できる。

さらに、今回の座標値を含めて北一条大路から六条大路までの各条の南北距離は、図6に示した。これによると、最小で539.8m・最大で552.1mであり、最大で12.3mの差があり、規模は一定していない。

以上のように、条坊道路の方位は各地点によって差が認められ、町域規模については1丈以上の差が認められる。つまり、従来設定されている整然とした推定条坊計画とは、異なる部分があることが明らかとなった。これは、大路が直線上に計画されずに、途中のある部分で筋替えられていた、または直線で計画されたが、微妙に折れ曲がって施工されたと考えられる。

4) 条坊の施工

調査地内での道路検出状況は以下の通りである。東二坊大路は、七条条間南小路推定地の南側で西側溝は消滅する。東三坊坊間西小路は、六条条間南小路交差点南側までは両側溝共に造られるが、それ以南では西側溝のみとなり、六条大路交差部以南は消滅する。六条条間南小路は、東三坊坊間西小路交差点までは造られるが、それより東では消滅する。六条大路は、東二坊大路交差点までは両側溝共に造られるが、それより東は北溝のみとなり、東三坊坊間西小路交差部の東で消滅する。七条条間小路は、東二坊大路交差点まで造られるが、それより東では消滅する。また、七条条間南小路は調査地内では検出していない。

道路検出地点の標高と、それに連続する東側あるいは南側の道路推定地を比べると、自然傾斜程度の高低差は認められるが、ほぼ同標高である。したがって、道路未検出部分は後世の削平などによって消滅したのではなく、京域造営当初から施工されていないことが明確となった。

調査地に条坊が施工されていない理由として、条坊道路は造営当初から計画が無く施工もされなかった、計画は立案されたが施工されなかった、計画は立案されたが施工できなかったなどの考えが提示できるが、現状では判断できない。

(2) 宅地

1) 宅地の利用

調査した町域の内、宅地として利用された町は、六条三坊三町・四町・五町、七条三坊一町である。七条三坊二町・三町・七町・八町では広範囲に調査を行ったが、当該期の建物等の遺構は検出していない。

建物などの未検出町域の標高は、検出地域とほぼ同様である。したがって、未検出地域は後世の削平などによって遺構が消滅したのではなく、長岡京期を通じて宅地として未使用であったことが明確である。さらに、建物などを検出した4町分においても、周囲に道路が施工されて宅地が設定されているにもかかわらず、大部分が宅地として利用されていないことが明らかとなった。

したがって、宅地に隣接する条坊側溝では土器類が集中して出土するが、宅地が検出されない地域の条坊側溝から土器類はほとんど出土しない。

2) 各町における宅地割り

町域内では、柵列・溝などの施設を設けて区画を行い、井戸・土壇・埋納遺構などによってその範囲を明示し、一つのまとまりを持った宅地と理解できる。

今回の調査では、町域外周を囲う築地は未検出で、町域外周に柵列を設ける例も少ないことから、町域四周の正確な位置は明らかではない。そこで、築地心から条坊側溝中心との距離を参考にして推定築地ラインを仮定し、宅地の分割方法を検討する。

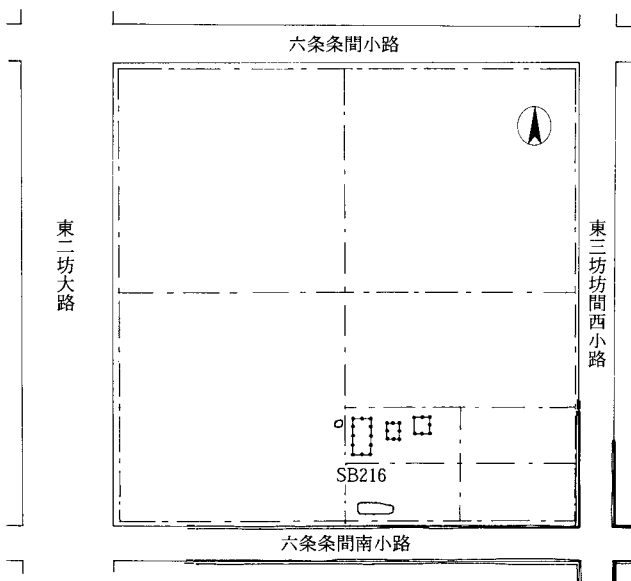


図 29 左京六条三坊三町遺構配置図

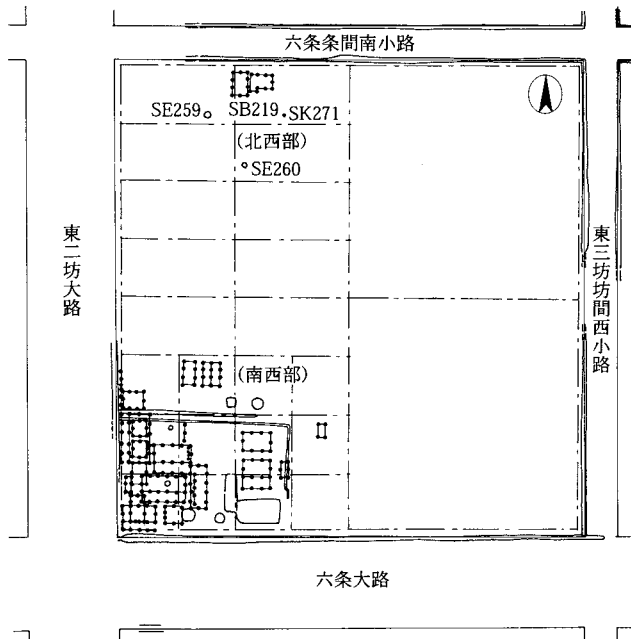


図 30 左京六条三坊四町遺構配置図

六条三坊三町 宅地は、三町域東西中央部に設定される。SB216 西柱筋は、推定東辺築地から 197.5 尺に位置する。この位置は、町域の東西 2 分割線にきわめて近い。SB216 北妻柱筋は、推定南辺築地から北 92.5 尺に当たる。このことから、南北宅地割りは 10 丈を単位として計画されたと推定したが、東西の宅地割りは不明である。

宅地範囲は建物検出地の北側が不明のため明らかではない。

六条三坊四町北西部 宅地は、四町北西部に設定される。SB219 西柱筋は推定東辺築地から西 311.0 尺に位置する。SK271 は推定東辺築地から西 255.7 尺に当たる。この位置は、推定西辺築地からほぼ 15 丈に相当する。SE259・SK271 は推定北辺築地から南 46.9 尺に、宅地の南を限る SE260 は南 91.5 尺に当たる。このことから、南北宅地割りは 5 丈を単位として計画されたと推定した。

宅地範囲は、SE260 以南に遺構が検出されないことから、東西 15 丈・南北 10 丈と推定でき、宅地の形は横長である。宅地面積は、1 町を 32 等分する分割方法の約 3 区画分に相当する。

六条三坊四町南西部 宅地は、四町

の南西部に設定される。建物など相互の重複関係から、大きく2期に分けられる。

1期：宅地の北側を区画するSD255北肩部は、SA250から北100.34尺に位置する。この位置は、町域南北幅の3/4にきわめて近い。宅地の東辺を限るSD255東肩部は、推定西辺築地から東145.9尺に当たる。また、SB222北妻柱筋・SB224桁行北柱筋・SB225桁行北から2筋目・SB226南入側柱筋は推定南辺築地から北へ46.9尺にあたる。このことから、宅地割りは5丈を単位として計画されたと推定した。

宅地範囲は、東西15丈・南北10丈と推定でき、宅地の形は横長である。面積は、1町の32等分の約3区画分に相当する。

2期：建物北限であるSB231・SB232北妻柱筋は、推定南辺築地から北150.3尺に位置する。推定南辺築地からSD254は北102.9尺、SB235桁行中央柱筋・SB237南廂柱筋は47.2尺に当たる。宅地東辺を限るSE263・266は、SA247から東98.6尺に当たる。これらのことから、宅地割りは東西10丈・南北5丈で計画されたと推定した。

宅地範囲は東西10丈・南北15丈と推定でき、宅地の形は縦長である。面積は、1町の32等分の約3区画分に相当する。

以上のように、四町南西部では、1期と2期の宅地面積はほぼ同一で

地区	遺構	時期	
		1期	2期
南西地区	溝	SD255	→ SD254
	建物	SB224	→ SB237
	建物	SB221	→ SB233・SB234
	建物	SB222	→ SB235
	建物	SB223	→ SB236
	建物	SB225	→ SB238
	井戸	SE261	→ SE265
	井戸	SE262	→ SE266
東地区と北地区	土壌	SK272	→ SK273
	建物	SB226	SB232
	建物	SB227	SB231
	建物	SB230	
	建物	SB228	
	建物	SB229	
	井戸		SE264・SE263

表10 左京六条三坊四町南西宅地遺構変遷表

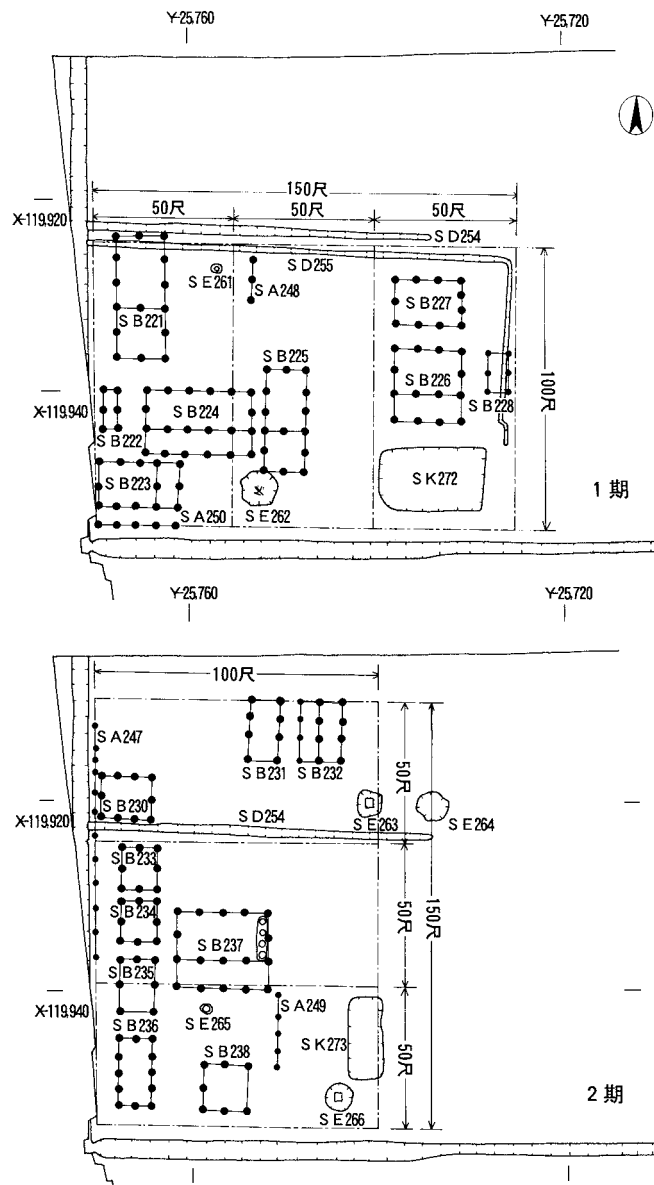


図31 左京六条三坊四町南西宅地遺構変遷図

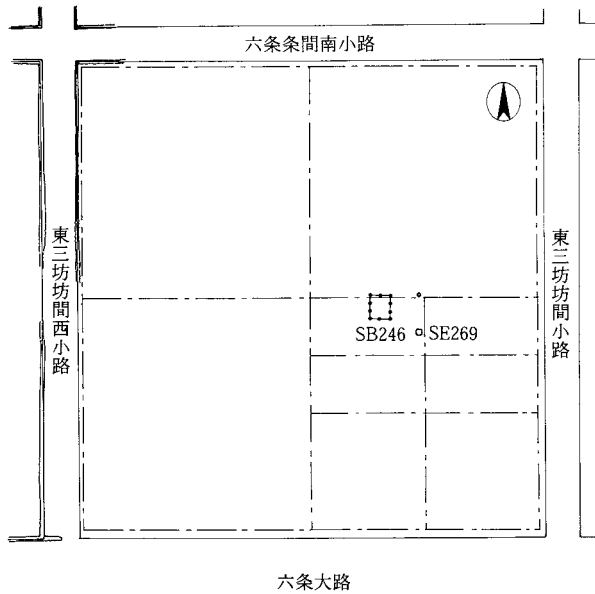


図 32 左京六条三坊五町遺構配置図

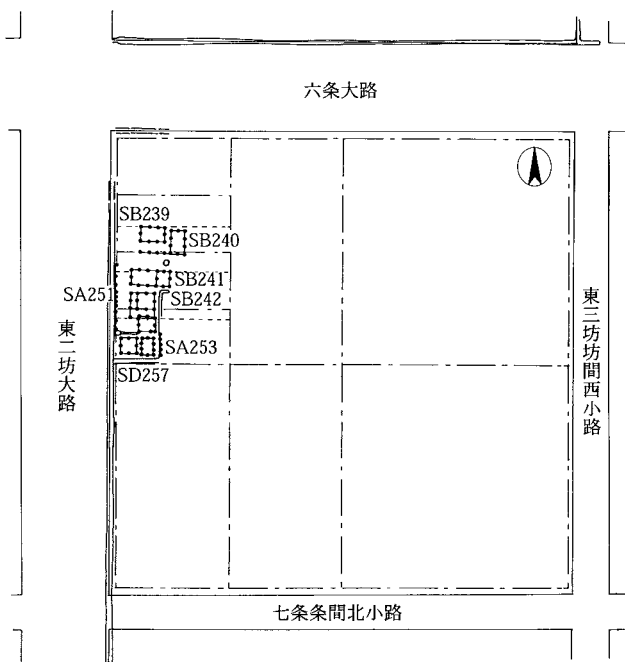


図 33 左京七条三坊一町遺構変遷図

推定でき、宅地の形は縦長である。宅地面積は、1町の約32等分の1.5区画分に相当する。

3) 宅地の分割と規模

六条三坊五町・七条三坊一町では、町域の南北2分割線をまず設定し、その後5丈ないし4丈を単位として割り付けたと推定できる。六条三坊三町・六条三坊四町北西部・同南西部側では、町域各辺の築地推定ラインから5丈を単位として割り付けたと推定した。

宅地の内、六条三坊四町南西部2期の宅地は、1町を東西に4分割(10丈等間)、南北に8分割(5丈尺等間)する後の四行八門制(戸主制)の割付方法と、規模と形が合致する。四行八門制とすれば、西一行の北六門・七門・八門の3区画(3戸主)分を占めたことになる。つまり六条三坊

あるが宅地の形が異なっており、1期東側が2期北側に移動した可能性が強い。

六条三坊五町 宅地は中央部に設定し、他の地域は空地である。SB246の北妻柱筋は、推定北辺築地から206.64尺に位置する。この位置は、町域南北2分割線にほぼ相当する。宅地の南東隅と考えられるSE269は、SB246の桁行西柱筋から44.6尺に、北妻柱筋から32.8尺に当たる。このことから、宅地割りは5丈を単位として計画されたと推定した。宅地範囲は不明である。

七条三坊一町 宅地は西側中央部に設定し、六条大路との間に空地がある。宅地南限のSD257は推定北限築地から197.9尺に位置する。この位置は町域南北2等分線にほぼ相当する。この溝が宅地分割の基準になったと推定できる。SD257からSB242南入側柱筋が38.9尺、SB241桁行北柱筋が80.4尺、宅地北限のSB239桁行北柱筋が119.3尺に当たる。SA251からSA253間は39.5尺、宅地東限のSB240桁行東柱筋間は61.1尺である。このことから、南北宅地割りは4丈を単位として計画されたと推定したが、東西宅地割りの単位は不明である。

宅地範囲は、東西6丈・南北12丈と

四町南西部では、1期と2期の宅地面積はほぼ同一であるが、当初5丈で割り付け、改修後は四行八門制で割り付けたと理解できる。

既往の調査では、左京七条一坊九町などで5丈単位の宅地割り付けが推定され、左京二条三坊七町・左京六条一坊十一町・左京六条二坊十五町などでは四行八門制の宅地割り付けが推定されている。^{註15}

以上のことから、宅地を設定するにあたり、町域四周の有効長（推定築地心々幅）を基準として、一定の寸法で計画的に宅地割り付けが行われたことが確認できた。ただ、その宅地の分割方法は、四行八門に合ったものとそうでない両者が存在し、宅地割り付けの推移を考える上で貴重な例となった。

宅地の規模は、六条三坊四町北西部・同南西部が3/32町、七条三坊一町が1.5/32町の規模と推定でき、宅地の単位が1町を32等分する分割方法を基準として計画されたと理解できる。

ただ、宅地区画の柵列・溝などは、おおむね分割線上に位置するが、微妙にずれるところが多く見られる。そのため各宅地の面積には広狭が生じ、正確に等分にはなっていない。これは、宅地四周の区画施設が無いこととも関連すると考えられる。宅地の形は、縦長のものと横長のものがあり一定していない。

京域では、宮域に近いほど宅地の規模が大きく、離れるに従って小規模な宅地が多くなる傾向が指摘されている。^{註16} 今回検出した宅地は小規模であり、これと合致している。

4) 宅地内の様相

建物配置と規模 調査で確認した宅地の内、やや大きな宅地はいくつかに区画され、区画ごとに井戸が1基又は2基あり、建物群もこの単位で一定のまとまりを持つ。宅地内の建物棟数は、1棟～9棟である。その構成は、区画のほぼ中央に主屋が位置し、その周りに2・3の付属屋があり、さらに周辺に数棟の雑舎がある。建物配置に統一性はみられないが、主屋はいずれも東西棟である。

建物規模は、桁行間数が1間のもの1棟、2間のもの9棟、3間のもの13棟、4間のもの4棟、5間のもの4棟で、3間以下が7割を占める。個々の建物の柱間寸法は1.5～2mと狭く、そのほとんどが桁行7尺、梁間6尺程度で、かつ定数値を取らない不揃いなものが多い。建物の床面積は、大きいもので76㎡、小さいもので7.3㎡ほどである。廂付き建物は、6棟である。また、総柱建物は検出していない。

宅地内の施設 宅地を区画する施設としては、六条三坊四町南西部西側・南側と、七条三坊一町東西両側に柵列が作られるが、部分的なものにとどまり、全体を囲う柵列などの施設はない。町の周囲にも築地の痕跡などは確認できず、造られなかったと推定できる。

井戸は、方形縦板横棧組のものと、曲物を井戸枠として使用するものがあり、曲物のものが多い。方形の井戸は、大半が一辺1m以下の小規模なものである。やや大きい区画では、方形の井戸と曲物の井戸が中央部と周辺部に位置し、区画内で使い分けられたと推定できる。

六条三坊三町・六条三坊四町南西部・七条三坊一町では、土壌が造られる。三町では建物群の

南側、他は建物群の南東部に位置する。いずれもゴミ捨て用の穴と考えられる。

六条三坊四町の宅地内には、埋納遺構が造られる。宅地東辺中央に位置し、宅地範囲を明示すると共に、宅地内での祭祀が想定できる。

宅地の性格 今回の調査で確認した宅地の特徴は、宅地規模が1/32町～3/32町と狭い。宅地内の建物は9棟以下と少なく、さらに各建物規模が小さい。また、町域や宅地の周囲に築地・柵列などの閉塞施設が巡らないなどが上げられる。このような宅地の状況は、調査地周辺の左京六条二坊十五町などの宅地でも見ることができ、この地域の特徴といえよう。^{註17}

調査で検出した宅地は、長岡宮から遠距離に位置することや、建物規模や棟数などから考え、下級役人あるいは庶民が居住していたと想定できる。調査地より南東側に道路が造られない部分があることと考え合わせ、京城の南東端における宅地利用の実態を明らかにできたことは、本調査の中でも最も特筆すべき成果といえよう。

5) 墓と埋納遺構

調査地内で、町域内で1基、推定町域内で1基、条坊側溝内で1基、東二坊大路路面上で3基の木棺墓と、河川内で1基の土器棺墓を検出した。いずれも単独墓であるが、4基は河川(SD285)に近接して位置する。また、SD285では人の頭骨が数点出土しており、死体を遺棄した可能性もある。

これらの墓の内、木棺の長さが1.5m前後のものは成人埋葬と考えられるが、木棺の長さが1m前後のものと土器棺墓は小児埋葬と推定できる。

律令(『令義解』「喪葬令」皇都条)では、京内に墓を営むことを禁止しており、検出した墓はこれに反していると理解できる。ただ、小児埋葬のものについては、小児はいまだ人として認められていないので、京内埋葬の禁令に触れていないとの考えもある。^{註18}

東二坊大路路面上で土器埋納遺構を2基検出した。1基は、七条条間小路交差点の北側溝延長線上に位置し、1基は交差点の南側大路東西中央に位置する。

いずれも道路の要点に設置されたことから、道路に関連した祭祀のための施設と推定できるが、具体的な内容は不明である。

以上述べた、道路の施工状況や宅地のあり方、本来京城内では禁止された墓が営まれていることは、周辺で大規模な祭祀が行われたことと合わせ、京城南東端の実態を示すものといえる。つまり、この辺りが長岡京左京の実質的な外れであると理解できる。

(3) 祭祀

1) 人面土器について^{註19}

形態と製作手法 壺B・壺Cは、図34に示したように口径・器高がおおむね揃う。形態を詳細に見ると、壺Bは4種、壺Cは3種類に分けられるが、各形態の差は小さい。また、壺B・壺Cともに成形や調整手法が似通っており、外面不調整であることが特徴である。

このように、壺B・壺Cは各々法量・形態や調整手法がよく揃い、規格性が高い土器といえる。^{註20}

顔の数 壺BⅡ・壺Cは、墨で顔が描かれたものと描かれないものがある。描かれたものは、

壺BⅡで343点中226点、
壺Cで76点中34点
ある。

顔の数は、1面・2面・
3面・4面・全面に連続
するものがある。顔の
位置は、1面のみのもの・
対称位置に2面あるも
の・3面を均等に配置
するもの・対称位置に
2面で間に1面を配し3
面とするもの・各対称
位置に4面あるもの・連
続するものがある。内側にあるものも少量みられる。

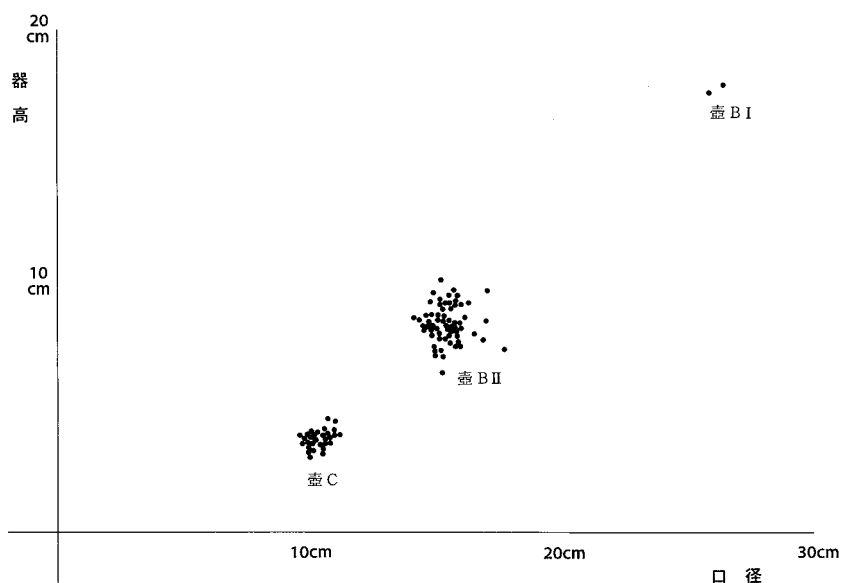


図34 人面土器法量分布図

壺BⅠ・Ⅱで顔が描かれたものは231点あり、その内2面のもの(566・568・629など)が最も多く、次いで1面のもの(575・586・630など)、3面のもの(570・571など)・間に1面入れて3面にするもの(569など)・4面のもの(565・567など)・連続するもの(618など)は少ない。

壺Cで顔が描かれたものは34点あり、2面のもの(633・634など)が最も多く、次いで1面のもの、4面のは少ない。

出土遺構	器形	個体数													
		顔面数						顔容貌					把手		計
		無し	1面	2面	3面	4面	連続	1類	2類	3類	4類	不明	有り	無し	
SD285	壺BⅠ	0	2	3	0	0	0	0	2	0	0	3	0	5	5
	壺BⅡ	112	50	148	13	10	5	78	78	13	15	42	107	231	338
	壺C	39	10	22	0	2	0	7	19	5	1	2	—	—	73
	甕AⅡ	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	—	—	2
	甕AⅢ	—	0	2	0	1	0	1	1	0	1	0	—	—	3
	甕AⅥ	—	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	—	—	1
	小計	151	62	177	14	13	5	88	101	18	17	47	107	236	422
七条三坊一町西側 SD207	壺BⅡ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
	壺C	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	—	2
	甕AⅡ	—	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	—	—	1
七条三坊三町西側 SD207	壺C	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—	—	1
SD208	壺BⅡ	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
SD211	壺BⅡ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
計		159	62	178	14	13	5	88	102	18	17	47	107	240	431

表11 人面土器一覧表

甕Aでは、2面のもの(641・643・644)が多く、3面のもの(645)・4面のもの(642)は少ない。一つの土器に複数の顔が描かれる場合、各顔が同趣のものとそうでないものがあり、大半は同趣のものである。別個体で顔が類似し、同一筆者と推定できるもの(601と602・616と617)もある。

容貌 顔のパーツはおおまかに分けると、髪の毛・眉毛・目・目玉・鼻・口・耳・ひげ類(口髭・顎髭・頬髭など)などがある。その他には、顔の輪郭を表すもの(596・597・634)、口縁部に横線を入れて頭を表すもの、頭髪を表すものなどもあるがいずれも少ない。把手を鼻に見立てたもの(577など)、耳に見立てたもの(581など)も少量ある。顔ではなく、文字と考えられるもの(623)もある。

容貌は、1類(565・568など;主要パーツがほとんど揃って、整った顔のもの)、2類(567・598など;髭などが省略されるもの)、3類(619・620など;鼻などが省略され、目・口などだけのもの)、4類(616・618など;円や弧線などを描くもの)に大きく分けられる。壺B I・IIでは、1・2類が多く、3・4類は少ない。壺Cでは、2類が多く、1・3・4類はいずれも少ない。甕Aでは、1・2・4類がある。

以上のように、容貌はおおまかに分けることができるが、その中での個体差が大きく各々特徴がみられる。全体的にみて、規格性が欠如していると理解できる。

2) 木製祭祀具について

人形 人形は12点出土し、木製品の中では多い。

大きさにより、大型、中型、小型のものに分けられる。大型のものがやや多く、使い分けられたと考えられる。

顔を墨で描くものが約半数みられる。886は、全身の表裏に黒点を描き、疱瘡に罹患した患者を表した可能性がある。

斎串 全体的に少ない。頭部を圭頭状にした一般的なものの他に、片側に切り込みを入れたものもみられる。墨で記号などを描いたものはみられない。

形代 全体的に少ない。舟形、鏃形、剣形、刀子形など多種類のものがある。

3) SD285 出土祭祀具と祭祀の復原

祭祀具の構成 SD285 出土祭祀具には、人面土器、土製品(土馬、ミニチュア竈、ミニチュア甕、ミニチュア壺)、木器(人形、斎串、舟形、鏃形、剣形、刀子形)がある。人面土器が422点と最も多く、次いで土製品が103点、木器は21点と非常に少ない。

人面土器では壺Bが343点と最も多く、次いで壺Cが73点である。甕は6点とごくわずかである。壺Bは大半がII類で、大型のI類は5点と少ない。壺Bと壺Cとの数量には大きな差があり、セットで使用したとは考えられず、使い分けられたと理解できる。層位別では中層に集中し、壺B I、甕Aは上・下層ではみられない。



1類



2類



3類



4類

土製品ではミニチュア竈が40点、ミニチュア甗が46点とほぼ同数で、これらがセットで使用されたと推定できる。土馬は15点と少なく、ミニチュア壺は2点とごくわずかである。層位別には中層に集中し、土馬は下層ではみられない。

木器は全体に少ないが、人形類が12点と最も多く、その他の斎串、舟形、刀子形など形代類は各数点と少ない。層位別には中層に集中し、上層は特に少ない。

伴出遺物 祭祀具の伴出遺物には、土器類と木器、銭貨、骨などがある。土師器では、杯、椀、皿などの食器類が約8割を占め、特に皿Cの量が多い。甕などの煮炊具は少ない。須恵器では、杯・皿などの食器類が約5割を占め、次いで貯蔵用の大小各種の壺類がある。甕類は少ない。このような器種構成は、調査地内六条三坊四町土壙(SK272・273)・七条三坊一町土壙(SK274)出土土器や、一般的な京域宅地内での遺構の出土傾向とは異なる。また、出土土器類は使用痕跡が認められず、完形品が多い。さらに、「福満」・「祀」などの吉祥句を書いた墨書土器がみられることも特徴である。

木器では、曲物・折敷類がやや多い。一般宅地では出土例の少ない木沓、桧扇などもみられる。銭貨もある程度出土する。

骨には、馬骨・馬歯などがある。

祭祀の復原 祭祀が実施された場所は、その痕跡が残存していないために確定できない。しかし、これだけ多量の祭祀具と伴出遺物が他所から運ばれたとは考えにくいことなどから、祭祀は交差点周辺で行われたと想定できる。

出土遺構	器種	器形	個 体 数				
			上層	中層	下層	不明	計
SD285	土師器	壺 B I	0	2	0	3	5
		壺 B II	16	266	15	41	338
		壺 C	4	57	4	8	73
		甕 A II	0	1	0	1	2
		甕 A III	0	3	0	0	3
		甕 A VI	0	1	0	0	1
	小計	20	330	19	53	422	
	土製品	土馬	2	12	0	1	15
		ミニチュア竈	1	35	1	3	40
		ミニチュア甗	1	39	3	3	46
		ミニチュア壺	0	0	0	2	2
	小計	4	86	4	9	103	
	木器	人形	0	4	3	4	12
		斎串	1	3	0	0	5
		船形	0	1	1	0	2
		刀子形	0	0	0	4	4
	小計	1	8	4	8	21	
	計		25	424	27	70	548
	七条三坊一町西側 SD207	土師器	壺 B II				2
壺 C						2	
甕 A II						1	
土製品		土馬				3	
		ミニチュア甗				2	
計					10		
七条二坊一四町西側 SD206	土製品	ミニチュア甗				1	
		小計				1	
七条三坊三町西側 SD207	土師器	壺 C				1	
	土製品	土馬				1	
		ミニチュア竈				2	
	計					4	
SD208	土師器	壺 B II				2	
		小計				2	
SD211	土師器	壺 B II				1	
		計				1	
SE263	木器	斎串				1	
	計					1	
SK272	土製品	土馬				3	
	計					3	
六条三坊四町南宅地周辺包含層	土製品	土馬				2	
	計					2	
SE268	土製品	ミニチュア竈				2	
		ミニチュア甗				3	
		小計				5	
SK274	土製品	土馬				1	
		ミニチュア竈				2	
		ミニチュア甗				1	
	計					4	

表 12 祭祀具一覧表

祭祀は、人面土器が主体であることが最も大きな特徴である。さらに、祭祀具の出土量は、他の京域内の祭祀具出土遺構の中と比べて格段に多い。ミニチュア竈・ミニチュア甑・土馬は、補助的に用いられるが少ない。木製の形代や斎串も少量しか用いられず、これも特徴のひとつといえる。祭祀具の他に、土師器、須恵器の食器類や須恵器の壺類、木製の食器や供膳具、銭貨なども使用されたと理解できる。土師器の小型甑は祭祀専用具ではないが、祭祀に直接使用された可能性もある。

祭祀具及び関連道具は、祭祀の終了時に交差点周辺から河川に投棄されたと推測できる。土馬は一部を欠き、他のものはそのままの状態で見捨てられている。

祭祀の回数は、祭祀具の出土層位から考え3回程度と推定でき、そのつど河川に投棄されたと理解できる。この場所では、多量の祭祀具を用いる祭祀が数回行われており、京内の祭祀場として認知されていたと想定できる。祭祀の実施年月は明確ではないが、延暦十年銘木簡が中層から出土し、その年代の一端を示す。

祭祀の場所は、交差点であること、かつ京域の東南端を選んでいることは、注目できる。調査地の西側、京域西端にある西山田遺跡でも、河川周辺で大規模な祭祀が行われ、京域境界で行われた祭祀としてその関連が注目できる。

4) 河川以外の出土祭祀具と祭祀

道路端の祭祀 東三坊坊間西小路と六条条間南小路交差点周辺、東三坊坊間西小路と六条大路交差点周辺の2箇所の道路側溝から祭祀具が出土した。祭祀具は、人面土器のみで他の伴出遺物は無い。出土した人面土器は、いずれも顔が描かれていない。

出土地点はいずれも交差点周辺で、道路が途切れている場所である。祭祀は、SD285と同様で、京域端の交差点で行われ、終了時に周辺の側溝に投棄されたと推定できる。

宅地内の祭祀 六条三坊四町宅地内の井戸(SE263)・土壙(SK272・273)及び建物周辺の包含層からは土馬と斎串が、七条三坊一町宅地内の井戸(SE268)・土壙(SK274)からは、ミニチュア竈・甑が出土した。祭祀具の他に特別な伴出遺物は無い。また、七条三坊一町宅地西側の道路側溝からは、土馬が出土した。出土地点西側の道路路面上の落込からは、祭祀具が出土しないことから、祭祀具は宅地内から投棄されたと推定できる。

これらの祭祀は、いずれも宅地内で行われ、祭祀終了時に宅地内の井戸や土壙または、隣接した側溝に投棄されたと推定できる。

4 平安時代以降

平安時代前期の小溝群については、分布の範囲が六条大路以北の条坊宅地内にほぼ納まり、規模の大きい区画溝が四行八門制の区画とよく一致する。したがってこれらを長岡京期のものと考えられることもできる。しかし、いずれも宅地内の建物が廃絶した後に作られている状況を示すことから、長岡京廃絶直後で条坊の区画が未だ残存していた時期の遺構としておきたい。遺構の性格は水田あるいは畑作など、耕作関連のものとして推測されるが、詳細は不明である。

平安時代に検出した条里遺構は乙訓郡の条里にあてはめると、5 トレンチで検出した SD290 の屈曲部を中心に、北東部は六条水将里、その南側は七条津田里、西側は名称不明の二里に相当すると考えられる。^{註23} これらの畦や溝は平安時代中期の遺物を含む砂礫層によって埋没しており、この時期に大規模な洪水によって一時的に埋没したことがうかがえる。また、C 区の SD290 からは延喜通寶や乾元大寶などの錢貨がまとまって出土した。さらに、人形なども出土していることから、何らかの祭祀が行われていた可能性がある。

鎌倉時代から室町時代の遺構である SG294 は、汀部分に石を配置したり杭で護岸を施すなど丁寧な造作である。また、導水や排水部に木樋が使われるなど園池とも考えられる状況を示している。しかし、導排水の溝が条里の坪境にあたるなどの状況から、ここでは遺構の性格を用水池と考えておきたい。

検出した遺構によって当地の長岡京以降の土地利用状況をまとめると、京廢絶直後には条坊区画を残したまま宅地の一部が耕地として利用された。その後、条里制の水田や溝が平安時代中期の洪水によって埋没していることが確認できることから、平安時代の比較的早い時期に、この付近に条里制が施行されたものと考えられる。さらにその後、当地の水田は何度か洪水によって埋没を繰り返しながらも、条里制の区画を踏襲しつつ、現在に至っていると考えられる。

註

- 1 長宗繁一「代制地割の水田跡 - 古墳時代水田跡の地割について -」『条里制研究』第 8 号条里制研究会 1992 年
- 2 伊野近富「興戸遺跡第 11 次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第 47 冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992 年
- 3 岡山県文化財保護協会『百間川原尾島遺跡 2- 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 56-』1984 年
- 4 香川県教育委員会ほか「下川津遺跡第 2 分冊」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 VII』1990 年
- 5 大阪市文化財協会の京嶋覚氏の御教示による。
- 6 山本輝雄「左京第 116 次 (7ANMKD 地区) 調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和 59 年度財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1985 年
中島皆夫「左京第 235 次 (7ANLRB-2 地区) 調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成元年度財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1991 年
- 7 中島皆夫「古墳時代のくらし」『長岡京市市史』本文編一 長岡京市役所 1996 年
- 8 これまでの調査で、造営尺は 1 尺 =29.6cm であることが確認されている。本報告では 1 尺 =29.6cm とし、メートル法換算値を求めた。
- 9 辻 純一「長岡京条坊復原における一考察」『研究紀要』第 1 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994 年
- 10 9 に同じ。同論文で、辻 純一は東二坊大路については一条大路以北と三条大路以南では道路心が 1

丈分西にあり、ある位置から北と南で道路位置がずれていると指摘している。

- 11 奈良国立文化財研究所編『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』同研究所 1989年
- 12 辻 純一「条坊制とその復元」『平安京提要』角川書店 1994年
- 13 山中 章「古代都城の交通－交差点から見た条坊の機能－」『考古学研究』第37巻第1号 考古学研究会 1990年
- 14 山中 章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号 考古学研究会 1992年
- 15 木村泰彦・小田桐淳「長岡京時代」『長岡京市史』資料編一 長岡京市役所 1991年
- 16 山中 章「長岡京と古代宮都」『長岡京市史』本文編一 長岡京市役所 1996年
- 17 15と同じ。
- 18 小林茂文『周縁の古代市－王権と性・子ども・境界』有精堂出版 1994年
- 19 個体数の算出は、人面土器壺B・壺Cではほぼ1/2程度以上残存したもの、土馬では胴部が残存したもの、ミニチュア竈では廂中央部が残存したもの、ミニチュア甑では口縁部の1/3程度残存したものを、それぞれ1個体と認定した。
- 20 上村和直「人面土器製作技術の検討」『長岡京古文化論叢Ⅱ』中山修一先生喜寿記念事業会 1992年
- 21 山本輝雄・岩崎誠「長岡京右京第104次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第1集 財団法人長岡京市埋蔵文化財センター 1984年
- 22 吉崎 伸「長岡京地の土地利用－水垂地区の小溝群について－」『文化財学論集』文化財学論集刊行会 1994年
- 23 百瀬ちどり「乙訓郡条里についての一考察」『長岡京市文化財調査報告書』第12冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1984年

付章 自然科学分析

1 調査の目的と方法

水垂遺跡で大規模な古墳時代の水田と考えられる遺構を検出した。稲作の科学的検証と経営期間の推定およびその周辺を含めた古環境の復原を目的としてF1区、F2区でプラント・オパール分析を行った。

またD区において長岡京廃絶直後と考えられる小溝群、E1区で古墳時代の小穴群を検出し、その性格や古環境を推定するためにプラント・オパール分析と花粉分析を行った。

なお、サンプルの採集・分析は古環境研究所に依託して実施した。

2 分析結果

プラント・オパール分析は稲作跡の検証および探査であるため、同定と定量をイネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤ等を含む）、キビ族（ヒエ等を含む）の主要な5分類群に限定した。花粉分析では花粉、胞子は樹木花粉25、草本花粉27、樹木と草本を含む分類群1、シダ植物孢子2形態の計55分類群を検出した。結果は花粉総数を基本数とする百分率を求めて花粉組成図を示した。花粉総数100個未満のものは出現のみ示した。

以下、主な調査地点ごとに分析結果の概要を述べ、文末に図と表を示した。

F1・2区水田跡（古墳時代） すべての地点からイネのプラント・オパールが検出された。平均約14,000個/gと非常に高い値であり、稲作の可能性は極めて高く、これらの遺構は水田であると考えられる。水田面ばかりでなく大畦畔からも検出された。

また、調査区の北側では水田遺構は検出されていないが、平均9,000個/gと高い数値を示し

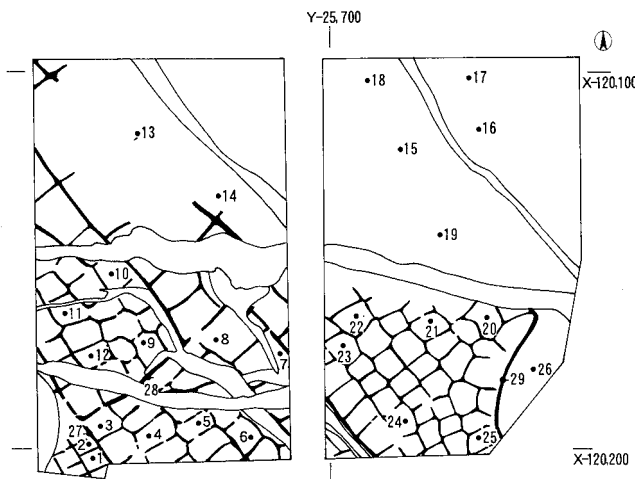


図 35 F 区水田試料採集位置図

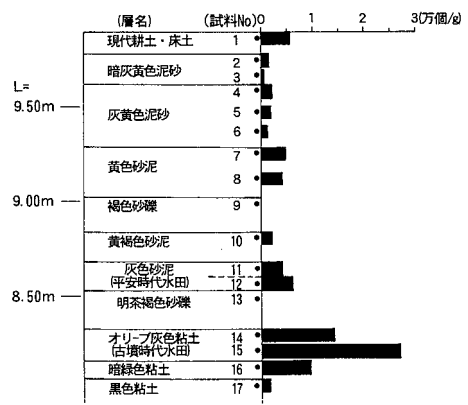


図 36 F1 区南壁イネのプラント・オパール検出状況

ており、この地点でも稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。さらにF1区南壁地点では、古墳時代の水田の下層である暗緑色粘土層と黒色粘土層もそれぞれ9,600個/g、1,700個/gと高い数値を示しており、下層にも水田があったと考えられる。

密度は調査地点によって違いが認められる。F1区では密度が平均18,600個/gであるのに対し、F2区では8,500個/gと半分以下となっている。この原因として、遺構の残存状態や層厚に目立った違いが認められないことから、稲作が行われた期間が異なることが考えられる。そこで、生産された稲籾の総量(単位; t/10a)を算出してみるとF1区で平均33.1t、F2区では平均13.7tと推定された。当時の稲籾の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稲藁がすべて水田に還元されたと仮定すると、稲作が営まれた期間はF1区で約330年間、F2区では約140年間と推定され、いずれも比較的長期間であったと考えられる。また、当時の古環境を推定するとF1区南壁の12層ではヨシ属が卓越しているが、11層ではイネの増加に伴ってヨシは減少している。このことからヨシの繁茂する湿地が開墾され水田化された様子がうかがえる。

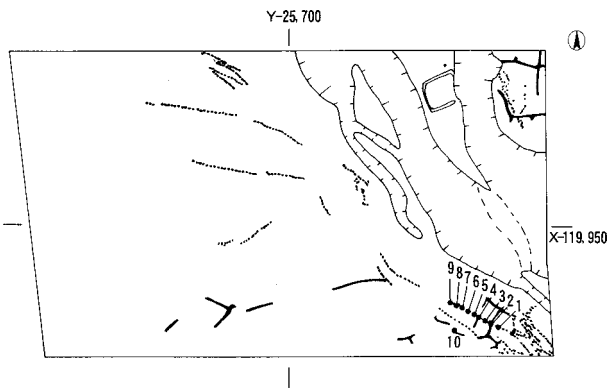


図37 E1区小穴群試料採集位置図

にあり、これらの水湿地草本が生育していたと推定される。周辺環境は近くにコナラ属、アカガシ亜属、シイ属等の照葉樹林が分布し、周辺はイネ科とヨモギ属が生育するやや乾燥した環境で

E1区小穴群(古墳時代) プラント・オパール分析ではすべての試料からイネを平均3,950個/gと比較的高い値で検出した。したがってこの地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。一方、花粉分析によると草本花粉としてオモダカ属、ミズアオイ属、イボクサ等の水湿地性の水田雑草が他より多く出現する傾向

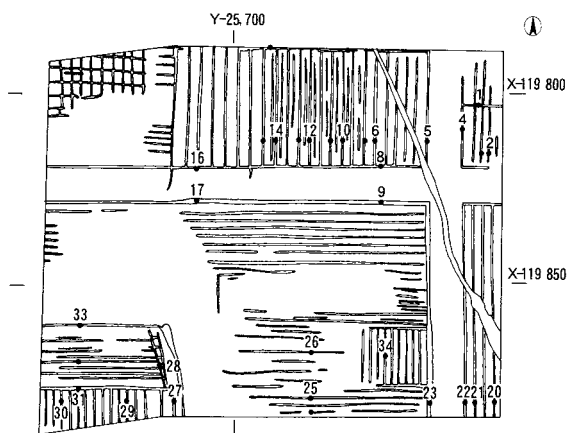


図38 D区小穴群試料採集位置図

ことから、小溝内に古墳時代のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。このほかに栽培植物としてはキビ族を検出している。属にはキビ族(アワ、ヒエ、キビ)、オオムギ属(ムギ)、

D区小溝群(長岡京廃絶直後) プラント・オパール分析では全ての試料からイネが検出された。密度平均は2,200個/gで比較的低い値であるが、調査区全域で検出されることや約5,000個/gと高密度のところもみられるなどから、この地点、または近辺での稲作の可能性が考えられる。しかし、小溝群が掘り込まれている古墳時代の土層からも3,500~3,900個/gの高い値が検出されていること

オヒシバ属（シコクビエ）、トウモロコシ属、ジュズダマ属（ハトムギ）などが含まれるが、イヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを識別するには至っておらず、検出量も微量なため、ヒエ、アワ等の栽培の可能性は考えにくい。

花粉分析では草本花粉としてイネ科とヨモギ属が優先し、タツナミソウ属、キク亜科、セリ科、オダカモ属、ミズアオイ属などが検出されている。しかし、イネ以外の栽培植物は同定できなかった。

周辺環境はプラント・オパール分析でネザサ節型（おもにメダケ属、ネザサ節）を比較的多量に検出し、ヨシ属やウシクサ族（ススキ属やチガヤ属等）、クマザサ属型なども少量検出した。また、花粉分析でイネ、ヨモギ属、セリ科などの花粉を検出したことから、ヨシ属やセリ科が生育するような比較的湿潤な土壤条件で周辺にはネザサ節やススキ属が生育するような比較的開かれた環境であったものと推定される。

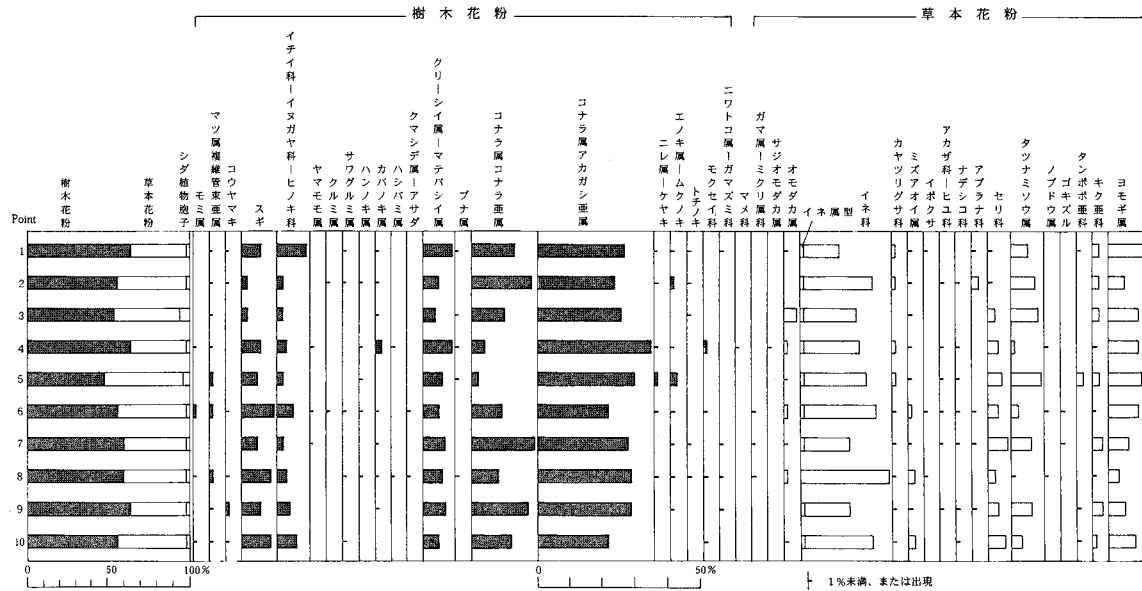


図 39 E1 区小穴群花粉組成図

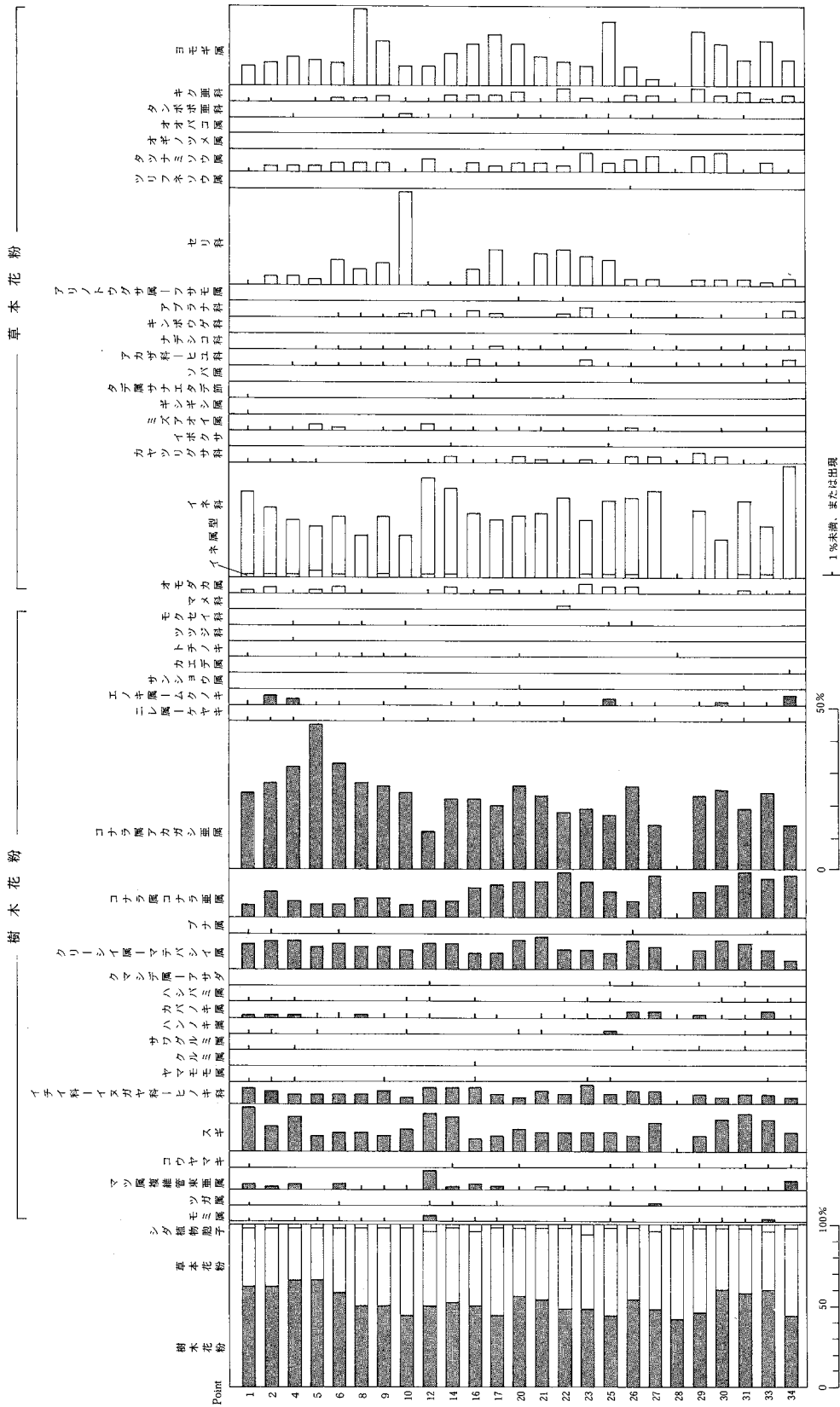


図 40 E1 区小穴群花粉組成図

採集地点	深さ (cm)	層厚 (cm)	仮比重	イネ (個/g)	籾総量 (t/10a)	ヨシ属 (個/g)	タケ亜科 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	キビ族 (個/g)
No. 1	0	15	1.10	27,900	47.28	1,900	15,400	900	0
No. 2	0	12	1.10	27,300	37.08	900	16,900	1,800	0
No. 3	0	14	1.10	18,500	29.27	900	19,500	0	0
No. 4	0	15	1.10	18,300	31.05	1,800	9,100	0	0
No. 5	0	12	1.10	19,400	26.33	900	17,500	900	0
No. 6	0	15	1.10	11,200	19.00	2,800	15,900	1,800	0
No. 7	0	20	1.10	14,700	33.17	900	19,300	900	0
No. 8	0	12	1.10	22,300	30.28	1,900	11,600	900	0
No. 9	0	12	1.10	18,500	25.09	1,800	15,700	900	0
No. 10	0	16	1.10	28,200	51.09	1,000	8,000	2,000	0
No. 11	0	13	1.10	32,700	48.07	3,000	19,400	2,000	0
No. 12	0	13	1.10	19,900	29.19	900	19,900	0	0
No. 13	0	11	1.10	800	0.91	800	13,700	800	0
No. 14	0	15	1.10	17,400	29.51	2,900	16,500	900	0
No. 15	0	10	1.00	15,500	15.97	900	8,700	0	0
No. 16	0	10	1.00	18,300	18.85	800	13,100	1,700	0
No. 17	0	10	1.00	8,300	8.55	1,800	12,000	0	0
No. 18	0	10	1.00	5,600	5.77	900	12,200	900	0
No. 19	0	10	1.00	12,400	12.77	700	10,900	0	0
No. 20	0	10	1.00	10,300	10.61	900	21,500	0	0
No. 21	0	15	1.00	15,400	23.79	1,800	14,500	900	0
No. 22	0	12	1.00	10,400	12.85	800	13,900	800	0
No. 23	0	9	1.00	16,100	14.92	2,500	12,700	800	0
No. 24	0	12	1.00	12,700	15.07	0	18,200	900	0
No. 25	0	10	1.00	8,000	8.24	1,000	15,100	0	0
No. 26	0	16	1.00	4,600	12.52	900	13,300	0	0
No. 27	0	-	1.00	10,400	-	1,800	18,900	2,800	0
No. 28	0	-	1.00	11,500	-	900	23,900	900	0
No. 29	0	-	1.00	7,200	-	900	17,100	0	0

表 13 F 区（古墳時代水田面）プラント・オパール分析結果

採集地点	深さ (cm)	層厚 (cm)	仮比重	イネ (個/g)	籾総量 (t/10a)	ヨシ属 (個/g)	タケ亜科 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	キビ族 (個/g)
1	0	12	1.25	5,500	8.40	0	8,200	900	0
2	12	8	1.25	1,600	1.65	0	3,300	0	0
3	20	8	1.25	600	0.58	600	2,500	0	0
4	28	11	1.26	2,100	2.95	0	3,500	0	0
5	39	11	1.26	1,900	2.61	0	4,800	900	0
6	50	12	1.26	1,200	1.85	0	2,400	0	0
7	62	14	1.25	4,800	8.65	0	7,500	0	0
8	76	14	1.25	3,800	6.78	0	7,700	0	0
9	90	18	1.48	0	0.00	0	1,000	0	0
10	108	16	1.45	1,700	3.96	0	8,900	0	0
11	124	8	1.17	3,900	3.71	0	9,500	700	0
12	132	8	1.28	5,900	6.18	0	12,900	900	0
13	140	20	1.48	0	0.00	0	2,800	0	0
14	160	9	1.10	14,200	14.46	1,700	17,700	0	0
15	169	9	1.10	27,100	27.62	4,500	7,200	0	0
16	178	10	1.10	9,600	10.82	2,800	10,600	0	0
17	188	-	1.15	1,700	-	32,400	6,100	800	0

表 14 F1 区（南壁）プラント・オパール分析結果

採集地点	分類群				採集地点	分類群			
	イネ (×100個/g)	ヨシ属 (×100個/g)	ウシクサ族 (ススキ属など) (×100個/g)	タケ亜科 (主にネザサ節) (×100個/g)		イネ (×100個/g)	ヨシ属 (×100個/g)	ウシクサ族 (ススキ属など) (×100個/g)	タケ亜科 (主にネザサ節) (×100個/g)
1	20	10	10	170	17	28	19	9	285
2	18	9	9	75	18	19	9	9	242
3	9	9	9	48	19	19	9	9	127
4	9	19	9	48	20	15	7	7	131
5	8	8	8	50	21	19	9	9	182
6	25	8	8	120	22	40	8	8	146
7	8	8	8	141	24	9	9	9	216
8	40	10	10	321	25	40	10	10	211
9	33	8	8	275	26	9	9	9	155
10	6	6	6	134	27	27	9	9	137
11	8	8	8	224	28	18	9	9	127
12	31	7	7	264	29	7	21	7	142
13	23	7	7	245	30	17	8	8	87
14	44	8	8	331	31	37	9	9	56
15	20	10	10	290	32	36	9	9	45
16	6	6	6	168	33	48	9	9	87

表 15 D区(長岡京廃絶直後)プラント・オパール分析結果

採集地点	分類群			
	イネ (×100個/g)	ヨシ属 (×100個/g)	ウシクサ族 (ススキ属など) (×100個/g)	タケ亜科 (主にネザサ節) (×100個/g)
1	44	8	10	203
2	37	9	9	179
3	19	-	9	154
4	36	9	9	100
5	30	10	8	100
6	27	6	8	197
7	63	-	8	118
8	60	10	10	220
9	34	6	8	104
10	50	10	6	101

表 16 E1区(古墳時代)プラント・オパール分析結果

付表 古墳時代遺物観察表

SH11 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A1	36	分割成形を行う	黄灰色	良好	砂粒が多い	弥生土器の伝統を直接引く土器
	台付鉢 D	35	比較的高い台をもつ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	

SH12 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A1	51	小型の甕	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	

SB13 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A1	20	頸部の下部は、タタキののち縦方向のハケ調整を施す	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	弥生土器の伝統を直接引く土器
	高杯 A1	19	脚裾部に3孔が穿たれる柱状部は中空	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
	高杯 H2	17・18	杯部外面縦方向に密なミガキを施す	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	鉢 A1	16	大型の鉢	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	

SH14 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A1	31～33	口縁端部は丸味をおびる	黄灰色	良(31・32) 良好(33)	赤色斑粒を含む	
	甕 B1	27～29		茶褐色	良好	雲母、角閃石を含む	生駒西麓の土器
		30	口縁端部がつまみ上げられ、尖る	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	生駒西麓の土器を模倣し、在地で作られた土器
	壺 N	26	全体にナデによる調整	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	高杯 A1	34		赤褐色	良好	砂粒を含むが少ない	

SH15 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 B1	52		茶褐色	良好	雲母、角閃石を含む	生駒西麓の土器

SH17 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 B1	25		茶褐色	良好	雲母、角閃石を含む	生駒西麓の土器
	壺 D1	23	口縁端部は丸味をおびる	淡赤褐色	良	赤色斑粒を含む	
	高杯 G	24	ナデによる調整を施す	黄灰色	良	砂粒をほとんど含まない	
	鉢 D	21	ナデによる調整を施す	灰白色	良	砂粒を多く含む	
	小型鉢	22	ナデによる調整を施す	赤褐色	良好	砂粒をほとんど含まない	

SH18 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土 師 器	甕 A1	39・40	口縁端部がつまみ上げられ、尖る	黄灰色 (39) 赤褐色 (40)	良 (40) 良好 (39)	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	生駒西麓の土器を模倣し、在地で作られた土器
	高杯 A1	38	脚裾部に3孔が穿たれ、柱状部は中空	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	手捏ね土器 C	37		黄灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	

SH20 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土 師 器	壺 E3	41	櫛描きの凹線、列点文を施す	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	東海の土器
	壺 L	46	口縁が内にすぼまる、無頸壺	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	高杯 A1	45	脚裾部に3孔が穿たれ、柱状部は中空	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
	高杯 H2	42	ナデによる調整	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	高杯 G	43	ナデによる調整を施す	黄灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	
	小型器台 A3	44	脚部はナデ調整	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	
	器台 A	50	ナデによる調整を施す	黄灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	
	台付鉢 A	47・49	47は、台部を指オサエ調整する	黄灰色	良好	細かい砂粒を多く含む	
	台付鉢 B2	48	台部を指オサエ調整、他はナデを施す	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	

SH21 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	手焙り形土器	61	装飾を施さない	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	

SH22 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土 師 器	甕 A1	54・55		黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
	壺 E1	56	口縁端部は丸味をおびる	淡赤褐色	良	砂粒を含むが少ない	
	台付鉢 E	53	台部を指オサエ調整、他はナデを施す	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	

SH23 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A1	57	口縁端部は丸味をおびる	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	

SH24 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A1	60	口縁端部は丸味をおびる	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
		58・59	小型の土器	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	

SH26 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A1	71	低くて、偏平な平底を持つ	灰褐色	良好	細かい砂粒を多く含む	
	小型器台 B	69・70		黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	器台 A	72		黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	

SH27 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	壺 D1	64	端部内面が窪む	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
	高杯 A1	66	脚部は明確な柱状部をもたず、裾部は外下方にのびる	赤褐色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	小型器台 A3	62	受部と脚部が貫通する	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	器台 A	65	高杯 B と形態が似、口縁端部外面が平坦になる	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	鉢 D	63	ナデによる調整を施す	灰褐色	良好	赤色斑粒を含む	

SH29 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	壺 D1	68		黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
	小型器台 A2	67		灰褐色	良好	赤色斑粒を含む	

SH33 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	高杯 A1	93・94	93 は、杯部がほぼ直線的にのびる	赤褐色 (93) 黄灰色 (94)	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	

SH34 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	小型丸底壺 A1	100		黄灰色	良好	砂粒を多く含む	
	高杯 A1	101		赤褐色	良好	砂粒を多く含む	

SH35 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 C2	82・83	口縁端部は内面に肥厚し斜めの面を持ち、内面は口縁の屈曲部よりやや下の部分からケズリを施す	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
	高杯 A1	80・81	81 は杯部がほぼ直線的にのびる	黄灰色	良好	81 は赤色斑粒などの砂粒を多く含む	

SH36 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 B1	73	端部はつまみあげられる	灰褐色	良好	雲母、角閃石を含む	生駒西麓の土器
	壺 D1	74	外上方にのびる短い口縁がつく	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	手焙り形土器	75	幅広の前縁部に4条の疑似凹線を円弧状にめぐらす天井部外面に2列の綾杉文を施す	灰白色	良	砂粒をほとんど含まない	

SH37 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 C3	95	口縁端部は内面に肥厚し斜めの面を持ち、内面は口縁の屈曲部よりやや下の部分からケズリを施す	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	甕 E	99	端部が丸くおさまる外方に踏ん張る低い台を持ち、体部外面縦方向に粗いハケを施す	黄灰色	良好	細かい砂粒を多く含む	東海の土器
	壺 E1	96	外上方にのびる短い口縁が付く	赤褐色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	小型丸底壺 A1	98	底部穿孔される	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	高杯 B2	97	杯底部に中心から放射線状にハケ調整を行う	黄灰色	良好	細かい砂粒を多く含む	

SH39 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	壺 A1	84	口縁の段部に竹管文を施す	黄灰色	良	砂粒をほとんど含まない	
	小型器台 B	85	受部と脚部は貫通しない	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	

SH45 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 A	91	口縁端部は丸くおさまる	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	甕 E	92	端部が丸くおさまる外方に踏ん張る低い台を持ち、体部外面縦方向に粗いハケを施す	灰白色	良好	細かい砂粒を多く含む	東海の土器

土師器	壺 D1	86	外上方にのびる短い口縁が付く	灰白色	良	砂粒を含むが少ない	
	高杯 A1	89・90		赤褐色 (89) 灰白色 (90)	良好	砂粒を多く含む	
	小型器台 A3	88	裾部に3孔を穿つ	赤褐色	良好	赤色斑粒を含む	
	小型器台 B	87		黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	

SH49 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	小型器台 B	78	受部と脚部は貫通しない	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	

SH50 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	鉢 D	76	口縁端部は尖り気味	黄灰色	良	砂粒をほとんど含まない	
	壺 D1	77	体部のみだが外上方にのびる短い口縁が付くと思われる	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	

SH51 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 C1	79	球形の体部を持つ小型の甕 口縁端部は尖る	赤褐色	良好	砂粒をほとんど含まない	

SH56 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	高杯 A3	102	脚部と杯部の接合部の外面にハケ調整を施す	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	

SH71 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 G	121	球形の体部を持つ口縁端部は内面に斜めの面を持つ	赤褐色	良好	細かい砂粒を多く含む	二次焼成をうける
	甕 H	117	口縁端部は内傾する内外面ともハケ調整	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
須恵器	杯身	118・119	口径が大きくて偏平ロクロの回転方向は、逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	MT15～TK10型式
	有蓋高杯	120	脚部に矩形の透かし孔を穿つロクロの回転方向は、時計まわり	灰白色	良	砂粒をほとんど含まない	MT15～TK10型式

SH72 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕H	107～109	体部外面はハケ調整し、内面は口縁の屈曲部から下方は指オサエ、以下はケズリを施す 109は内底面を指オサエ	黄灰色	良好	砂粒を多く含む	
	杯	105	口縁は底部から立ち上がり、端部は内側につまみ上げられて尖る	黄灰色	良好	砂粒を多く含む	
須恵器	杯身	103・104	口径が小さくて体部が深く、ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK47 型式
	有蓋高杯	106	外方に踏ん張る台を持ち、ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK47 型式

SH73 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕G	114	偏平な球形の体部を持ち、口縁端部は内面に斜めの面を持つ	赤褐色	良好	細かい砂粒を多く含む	二次焼成をうける

SH74 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕G	115	体部外面はハケ調整し、内面は口縁の屈曲部から下方に1～3段指オサエ、以下はケズリを施す	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	甌	116	体部の中位よりやや上に把手が付き、外面はハケ調整、内面の下部はケズリ、上半はハケ調整	赤褐色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
須恵器	杯身	111・112	口径が小さくて体部が深く、ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK47 型式
	有蓋高杯 杯蓋	110	天井部のほぼ中心に中くぼみのつまみが付き、ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK47 型式
	無蓋高杯	113	杯部の中央に稜を持ち、稜と凹線の間に波状文を施す、ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK47 型式

SH76 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕G	122	端部の内面に斜めの面を持つ	赤褐色	良好	砂粒を多く含む	二次焼成を受ける
須恵器	杯身	123・124	たちあがりは低く内傾し、ロクロの回転方向は逆時計まわり	灰白色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK43 型式

SH78 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	鍋	131	体部径最大部のやや上に把手が付き、内外面ともにハケ調整	黄灰色	良好	砂粒を多く含む	
須恵器	杯蓋	128・129	ロクロの回転方向は逆時計まわり	灰白色	良好	砂粒を多く含む	TK43 型式
	杯身	130	たちあがりは低く内傾し、ロクロの回転方向は逆時計まわり	灰白色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK43 型式

SH79 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 G	133	端部の内面に斜めの面を持つ	赤褐色	良好	砂粒を含むが少ない	二次焼成を受ける
		134	端部は丸みを帯びる	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
須恵器	壺	132	口縁部はわずかに外傾し、上方にのびる 体部の最大径より下はケズリ、のちに回転を利用したナデ調整をする	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	韓式土器か？

SH80 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 G	126	端部は丸味をおびる	赤褐色	良好	赤色斑粒を含む	二次焼成を受ける

SH82 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甌	127	体部の中位よりやや上に把手が付き、内面上半はハケ調整	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
須恵器	杯蓋	125	ロクロの回転方向は逆時計まわり	灰白色	良好	砂粒を多く含む	TK43 型式

SE95 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 C3	137～141	口縁端部は内面に肥厚し斜めの面をもつ 内面は口縁の屈曲部よりやや下の部分からケズリを施す外面はハケ、139の体部はやや長胴だが他は球形である	黄灰色	140は良 他は良好	砂粒は少ないが、赤色斑粒を含む	
	壺 H	136	平底で体部の肩がはる 体部下半と底部は軽いオサエ、他はナデによる調整をする	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	
	小型丸底壺 A2	135		黄灰色	良	砂粒は少ないが、赤色斑粒を含む	
	高杯 A3	142～145	142は杯底部外面ケズリ	黄灰色(142、143、145) 灰白色(144)	良	砂粒を含むが少ない	

SD98 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土	甕 A1	146～153 156	体部は分割して成形する 146 は外面ミガキ 147 は体部下半をタタキ、 のちにハケ調整 148 は体部下半タタキ、体 部上半はハケ調整 153 は口縁をタタキ出す 他は体部外面タタキ、内面 はハケと板ナデを施す	黄灰色 (146～152 156) 灰白色 (153)	良好	赤色斑粒を含む (146)、砂礫が 少ない (152)、 他は砂粒が多い	弥生土器の伝統をひ き、在地で生産され たもの
	甕 A2	154・155	体部外面下半はタタキ、上 半はハケを施す	灰褐色 (154) 黄灰色 (155)	良好	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む	山城地域に特徴的な 土器
		157	体部外面ハケ、内面はケズ リ、わずかに平底を残す	灰褐色	良好	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む	SD98 の土器群のな かでは新しい
	甕 B1	158～160	158 は体部をハケ調整 159、160 は体部を細筋のタ タキ、のちに下半をハケ調 整	茶褐色	良好	雲母、角閃石を 含む	生駒西麓の土器
	甕 B2	161	体部左上がりの鋭いタタ キ、内面はケズリ	褐灰色	良好	砂粒少なくて密	大和の土器
	甕 D	164・165	体部外面は鋭く粗いハケ	黄灰色 (165) 赤褐色 (164)	良好	砂粒が多い	近江の土器
	甕 F1	162	外面縦方向のハケ調整、内 面はケズリを施す	黄灰色	良好	砂粒が多い	北陸の土器
	甕 F2	163・167	163 は体部外面ハケ調整、 内面はケズリを施す	黄灰色	良好	砂粒が多い	163 は丹波の土器
	甕 F3	166・168	口縁端部は内面に斜めの面 を持つ	黄灰色	良好	砂粒が多い	山陰の土器
		169～171	口縁の屈曲部に明瞭な段を 持つ	黄灰色	良	砂粒が多い	山陰の土器
師	壺 A1	172・173	口縁、頸部、体部上半に櫛 描き文、竹管文、円形浮 文などの装飾を施す 173 は分割成形を行う	黄灰色	良好	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む	
	壺 A2	178	分割成形を行う	黄灰色	良好	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む	
	壺 A3	174～176	装飾が施されない	黄灰色	良好	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む	
	壺 B	177	口縁内外面に波状文、口縁 外面に2個1単位の円形浮 文をつける	黄灰色	良好	砂粒が多い	
	壺 C1	179	口縁外面に擬凹線を持つ	茶褐色	良好	雲母、角閃石を 含む	山陰の土器
		180	立ち上がりは短い 口縁外面に擬凹線を持つ	灰白色	良	砂粒は少ない	山陰の土器
	壺 C2	181	口縁内外面にミガキを密に 施す	茶褐色	良好	雲母、角閃石を 含む	讃岐の土器
	壺 C3	182	口縁外面に櫛描き波状文を 施す	黄灰色	良	砂粒が多い	山陰の土器
	壺 D1	192	口縁の立ち上がりは短い	茶褐色	良	砂粒を含むが少 ない	
		193	頸部の下の部分から細かい 櫛描き文を施す	灰白色	良好	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む	
194		絵画風の櫛描き文を施す	黄灰色	良好	砂粒が多い		
壺 D2	189・190	頸部と胴部の境に突帯を持 つ	赤褐色 (189) 黄灰色 (190)	良好	189 は砂が少ない 190 は砂が多い		

土	壺 E1	186	口縁が直線的に長くのびる		良	砂粒を含むが少ない	体部に穿孔している 赤色顔料を塗る
		187	体部外面、口縁部に丁寧な ミガキを施す	黄灰色	良好	砂粒は少ない	
	壺 E2	185	口縁のたちあがりは短い		良	砂粒を含むが少ない	
	壺 F1	191	体部と頸部の境があいまい である 体部と頸部にヘ ラ描きの文様を施す	茶褐色	良好	雲母を含む	北陸の土器
	壺 I	188	外面にハケによる調整を施 す	黄灰色	良好	砂粒は少ない	体部に穿孔している
	壺 J	195	卵形の体部に直立する口縁 を持つ	黄灰色	良好	砂粒が少ない	二次焼成を受ける
	壺 N	196	直立する短い頸部から口縁 が内湾気味に外上方に開く	黄灰色	良好	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む	
	ミニチュ ア壺 1	183	直立する短い口縁の小型の 壺		良	砂粒を含むが少ない	
	ミニチュ ア壺 2	184	口縁のたちあがりは短い		良	砂粒を含むが少ない	
	高杯 A3	201	ナデによる調整	黄灰色	良	砂粒が少ない	
高杯 B1	198	杯部、脚部外面はミガキ裾 部に4孔を穿つ	黄灰色	良	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む		
高杯 C	204	屈曲した口縁のたちあがり が短い 口縁外面はナデ、他はミガ キによる調整を施す	灰白色	良	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む		
高杯 D	197	杯部内面に放射線状のミガ キを施す 口縁端部に綾杉文を施し、 4個1単位の円形浮文を貼 り付ける	黄灰色	良好	砂粒が少ない		
高杯 E	199	ナデによる調整、裾部に4 孔を穿つ	灰白色	不良	砂粒が少ない		
高杯 F	202	杯部、裾部外面にミガキを 密に施す		良	砂粒を含むが少ない		
高杯 G	210	脚部に上下2孔の透かし穴 を、3箇所を穿つ	赤褐色	良	雲母、赤色斑粒 などの砂粒を多 く含む		
高杯 H1	203	口縁外面に擬凹線を施す	黄灰色	良	砂粒が多い		
高杯 I	200	杯部、脚部外面はミガキ 脚部に7孔を穿つ	灰白色	良好	赤色斑粒を含む		
器台 B	211		灰白色	良	砂粒が多い	山陰の土器	
小型器台 A1	205	脚部に3孔を穿つ 裾部下半にハケが残る	灰白色	良	砂粒が多い		
小型器台 A2	208	脚部に3孔を穿つ 脚部にミガキの痕跡をわず かに残す	黄灰色	良	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む		
小型器台 A3	206	脚部に3孔を穿つ 脚部上半ケズリ、他はミガ キを施す	灰白色	良好	砂粒が多い		
小型器台 A4	209	屈曲部ケズリ、他は磨滅	黄灰色	不良	赤色斑粒などの 砂粒を多く含む		
小型器台 B	207	脚部に3孔を穿つ 受部外面ミガキ、脚部内面 ハケ調整を施す 他は磨滅により観察不可	灰白色	良	砂粒が少ない		

土	鉢 A1	212・213	体部外面はタタキ、内面はへら状の工具でオサエまたはナデを施す	灰褐色 (212) 黄灰色 (213)	良好	砂粒が多い	
	鉢 B	214・215	全体に丁寧なミガキを施す	灰白色 (214) 黄灰色 (215)	良 (214) 良好 (215)	砂粒が多い	
	鉢 C	216	体部の最大径の部分のみハケ、体部下半はナデ調整	灰白色	良好	赤色斑粒を含む	
	鉢 E	217	片口を有する	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	台付鉢 A	220	体部外面ハケによる調整を施す 脚部は指オサエ	黄灰色	良好	砂粒が多い	
	台付鉢 B1	221	全体に丁寧なミガキを施す	黄灰色	良	赤色斑粒を含む	
	台付鉢 B3	223	体部上半、口縁は横方向のミガキ、頸部に刻み目を施した突帯をめぐらす 台の柱状部は、棒状のもので穿孔	黄灰色	良好	砂粒多く、赤色斑粒を含む	
	台付鉢 C	218	小さく偏平な体部に直線的に外上方にのびる口縁がつく	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	台付鉢 D	222	口縁内部ハケ調整、体部外面ハケ調整、のちナデ調整を施す	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	台付鉢 E	219	ナデによる調整	黄灰色	良好	赤色斑粒を含む	
	有孔鉢 A	224	外面にタタキを施す 底部内面はオサエ	黄灰色	良好	砂粒が多い	鉢 A に穿孔したもの
	器	有孔鉢 B	226	外面はハケ調整、内面へら状のものでナデ	赤褐色	良好だが軟質	赤色斑粒を含む
有孔鉢 C		225	体部外面はへら状のものでナデ	黄灰色	良	砂粒が多い	
製塩土器		227~230	小型で裾広がりの脚台を持つ 反鈎鐘状の体部を持つ 外面はタタキ	黄灰色 (228,230) 暗褐色 (227,229)	良	砂粒が多い	二次焼成を受ける
革袋形土器		231	ラグビーボール状の体部に直立する口縁がつく 体部の一方の頂点に注ぎ口状の穿孔がある	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	

SD101 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土	甕 A1	235・236 238・243	分割成形をする 236の体部中央の内面は磨滅が激しく調整は不明	黄灰色	良好	236・243は赤色斑粒などの砂粒を多く含む 235、238は砂粒が多い	243は底部を穿孔する
		239	偏平な体部をもつ 体部はタタキ、のちにナデ消し	黄灰色	良好	砂粒が多い	
		237	体部内外面ともハケ調整	黄灰色	良好	砂粒が多い	
器	甕 B1	233・234	体部外面はタタキ、のちにハケ調整、体部内面上半部は横方向のケズリ、下半は縦方向にケズリを施す	茶褐色	良好	雲母、角閃石を多く含む	生駒西麓の土器
	甕 C1	248	球形に近い底部をもつ 底部内面は指オサエを加える	黄灰色	良好	雲母、赤色斑粒などの砂粒を含む	底部に焼成後、円形の穴を開ける

甕 D	241	体部径最大部付近は横方向のハケ、他は左上がりのハケ調整を施し、内面はナデ調整	黄灰色	良好	砂粒が多い	近江の土器
	242	体部にヘラ描き直線文、波状文を施し、内面はナデ調整	黄灰色	良好	砂粒が多い	近江の土器
甕 F2	240	外面縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整を施す	黄灰色	良好	砂粒が多い	丹波の土器
有孔鉢 A	244~246	244、245 は外面タタキ、246 はハケ調整を施す	黄灰色 (244,245) 灰白色 (246)	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
革袋形土器	247	ラグビーボール状の体部に直立する口縁が付く 体部の一方の頂点に注ぎ口状の穿孔がある	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
壺 A1	252	口縁内外面に楡描き文、屈曲部に竹管文を2列施す	赤褐色	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
壺 B	251	口縁部に凹線を施し、2個1単位の縦長の棒条浮文を4箇所配する 口縁内部には綾杉文を施す	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を含む	東海の土器
壺 D1	249・256	口縁部外面ミガキ	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を含む	
	255	磨滅が激しい	灰白色	不良	砂粒を含むが少ない	
	257	体部中央に穿孔する 体部は球形を呈する	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を含む	
壺 E2	254	体部下半ミガキ、上半は磨滅が激しく観察はできない	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を含む	
壺 E3	253	体部上半と口縁部に、縦方向のミガキを施す 体部下半は横方向のケズリを施す	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
壺 E4	258	短く外上方にのびる口縁を持つ	黄灰色	不良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
手捏ね土器 B	250		黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
高杯 A1	261	全体、ナデによる調整か?	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
高杯 A2	259	深い杯部をもつ杯部内面ミガキか?	黄灰色	良好	砂粒が多い	
高杯 B1	262	内外面とも密なミガキを施す	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
高杯 H2	260	脚細部に指オサエを施す 脚部に不均等に4孔を穿つ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
小型器台 A3	265・266	受部、脚部外面に丁寧なミガキを施す 265は端部が丸く、266は端部の外面に平坦面をもつ	黄灰色 (266) 赤褐色 (265)	良好	砂粒を含むが少ない	
小型器台 A4	264	外面に密なミガキを施す	黄灰色	良好	細かい砂粒が多い	
台付鉢 B2	263	磨滅が激しく観察できないが、内外面ともミガキと思われる	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
鉢 A	271・272	271の外面はハケ調整を施し、所々ナデ消す	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	

土 師	鉢 D	268・269	外面タタキ、内面はハケ調整を施す	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
		270	片口を有する 外面タタキ、内面はハケ調整を施す	黄灰色	良好	細かい砂粒が多い	
器	手焙り形土器	267	幅広の前縁部の中央が帯状に突起し、両側に竹管文をめぐらす	黄灰色	良好	砂粒が多い	

SD122 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土 師 器 (庄 内 期)	甕 F1	273	口縁端部内面に1条の沈線がめぐる	黄灰色	良	砂粒が多い	北陸の土器
	甕 F4	274	口縁は内傾し、端部は丸味をおびる	黄灰色	良好	細かい砂粒が多い	山陰の土器
	鉢 A	275	内外面ともナデ調整	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
		276	外面タタキ、内面はナデ調整を施す	黄灰色	良好	砂粒が多い	
	壺 A1	288	口縁の屈曲部に刺突文をめぐらす	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	壺 A3	289・290	口縁の屈曲部に明確な稜を持つ 内外面ともナデによる調整	灰白色 (289) 黄灰色 (290)	良 (289) 良好 (290)	砂粒を含むが少ない	
	壺 B	286	3個1単位の円形浮文を8箇所配する	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を含む	
	壺 C1	283	口縁は内傾する	灰褐色	良	砂粒が多い	
		284・285	284は口縁外面に擬凹線をめぐらす 285は口縁端部が外方に肥厚し、丸味をおびる	黄灰色	良	砂粒が多い	山陰の土器
	壺 C2	282	口縁端部内面に平坦面をもつ内外面ともミガキを施す	淡赤褐色	良好	砂粒を含むが少ない	讃岐の土器
壺 F	287	口縁端部の外側に平坦面を持ち、そこに連続した刻み目を施文する	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない		
壺 K	291	体部から上すばまりの口縁を持つ 頸部に櫛描きの直線文・波状文、竹管文を施す	黄灰色	不良	砂粒が多い	播磨の土器	
土 師 器 (布 留 期 以 降)	甕 C3	278・279 281	口縁端部は内面に肥厚し内傾する 内面は口縁の屈曲部よりやや下の部分からケズリを施す(新しくなるほど、屈曲部とケズリの始まりとの間が大きくなる) 281の肩部外面に、棒状器具による刺突を加える	黄灰色 (278、279) 灰白色 (281)	良好	砂粒が多い (281) 砂粒を含むが少ない (278、279)	
		277・280	口縁端部は内方に肥厚する 280は外面タタキ、のち横方向の粗いハケ調整	黄灰色 (277) 灰白色 (280)	良好	砂粒を含むが少ない	山陰の土器
	壺 A3	297	口縁の屈曲部に明確な稜をもつ 口縁端部は内外面に斜めの面をもつ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	壺 C2	293・298	293は体部内面上半は横方向、下半は斜方向のケズリ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	

土 師 器 (布留期以降)	壺 D1	292	肩部外面に櫛描き波状文を施す	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
		293~296 299	外面はハケ、内面はケズリによる調整を施す 295は、粗いハケ調整を縦方向に施す	黄灰色	良好	砂粒が多い (294,296) 砂粒を含むが少ない (295,299)	
	壺 I	300	口縁部は長く、わずかに外方にひらく 体部最大径が口縁部径よりわずかに大きい	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
		301・337	体部外面上半、オサエか無文のタタキを施す 体部外面下半は301がハケ調整、337はタタキ調整を施す 体部内面は指で下から搔き上げる	灰褐色	良	砂粒が多い	
		333~336	333は口縁端部が内側に肥厚する 334、335は外面ハケ調整、内面ケズリを施す 336は外面を板状のものでオサエ、内面はケズリ	黄灰色	良好	砂粒が多い (334,336) 砂粒を含むが少ない (333,335)	
	手捏ね土器 A	302~304	303は口縁が「く」の字にまがる	黄灰色(302,303) 灰白色(304)	良好	砂粒を含むが少ない	
	小型丸底壺 A2	305・315	305は体部下半と内面ケズリ、口縁内部は縦方向にナデあげる 315は体部外面はハケ、内面はケズリ、のちオサエ調整を施す	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
		306~310 314	体部下半のみハケ調整するもの(308,310) 体部全体をハケ調整するもの(309) 体部中央部ナデ、口縁下半と肩部をハケ調整し、底部はケズるもの(306) 体部をナデ調整するもの(307・314)	黄灰色(306,308~310,314) 灰白色(307)	307は良、他は良好	砂粒が多い (310) 砂粒を含むが少ない (306~309,314)	
		312	肩部に円形の孔を穿つ	灰褐色	良好	砂粒が多い	須恵器のハソウを模倣したものか?
		313	口縁部はわずかに外にひらく 体部最大径が口縁部径よりわずかに大きい	赤褐色	良	砂粒を含むが少ない	
		316~318	317は体部全体にハケ調整 318は焼成後底部に穿孔する	黄灰色	良(316) 良好(317・318)	砂粒を含むが少ない	
		小型丸底壺 B	311	直立する短い口縁を持つ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない
	小型丸底壺 C2	319	口縁下半に突帯がめぐる		良好	砂粒を含むが少ない	
		320	二重口縁を持つ 内面の体部下半は下方向にナデ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	高杯 A1	324	内外面ともミガキ、口縁端部は外反して丸味をおびる	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
325		外面縦方向の深くて粗いハケ調整、杯部内面は横方向に深く粗いハケ調整	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない		

土 師 器 (布留期以降)	高杯 A1	326	口径 30cm をこえる大型の杯を持つ 杯部内面ミガキ	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	
	高杯 A3	331・332	331 は深めの杯部を持つ 脚部内面、横方向のケズリ	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	
	高杯 B1	327	杯部はハケ調整 脚の柱状部の外面は下方方向にケズリ、内面は横方向のケズリ	黄灰色	良好	砂粒が多い	
		328	内外面とも放射線状にミガキ	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	
	高杯 B2	330	杯部内面ナデ、他はケズリ 裾部内面にヘラ記号を持つ	灰白色	良	砂粒が多い	
	高杯 E	329	ナデによる調整	灰白色	良好	砂粒が多い	
	高杯 H2	321	内弯する深い受部と、小さい裾広がりの脚部を持つ	黄灰色	良好	赤色斑粒を少量含む	
	小型器台 A2	322	口縁端部を上下につまみ、 外側に平坦面をつくる 口縁の平坦部に櫛で波状文を施し、その上に 2 個 1 単位の竹管文を 12 箇所配する	黄灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	
	小型器台 A3	323	受部、脚部外面に丁寧なミガキを施す 脚部に 4 孔を穿つ	黄灰色	良好	砂粒が多い	
須 恵 器	高杯蓋	338	天井部に中凹みのつまみをもつ 乳白色の自然釉が天井部にかかる ロクロの回転方向は、逆時計まわり	灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	TK208 型式
	杯蓋	339	口縁端部は外側に開く ロクロの回転方向は、逆時計まわり	灰色	良	砂粒を含むが少ない	TK73 型式
		341	扁平な天井部を持つ ロクロの回転方向は、時計まわり	青灰色	良好	砂粒が多い	MT15 型式
		340	天井部は丸味をおびる ロクロの回転方向は、時計まわり	灰白色	良	砂粒を含むが少ない	TK47 型式
	甕	344・345	口縁端部外面に斜めの面をもつ 口縁端部近くに断面三角形の突帯をめぐらす	紫灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK73 型式
	壺	346	肩部にヘラで線刻を描く 口縁端部は外反し、丸味をおびる	青灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK216 型式?
	把手付鉢	342	口縁端部は外反する 体部を 3 分する位置に凹線をめぐらす	暗灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK216 型式
	甕	343	頸部上半に波状文をめぐらす	青灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	MT15 型式

SD102 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
須恵器	杯蓋	347	口縁端部平坦になる	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	ON46 型式
	甕	348	口縁端部内側に肥厚し、端面は平坦になる	青灰色	良好	砂粒が多い	ON46 型式?

SD123 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土 師 器 (庄内期)	甕 A1	356	体部内面はナデ調整	黄灰色	良好	砂粒が多い	
	甕 D	357	口縁外面と体部の肩部に櫛描き列点文を施す	黄灰色	良好	砂粒が多い	近江の土器
	壺 A1	358	頸部はほぼ垂直にたちあがる	灰褐色	良好	砂粒を含むが少ない	
	壺 C1	359~361	360、361 は口縁がほぼ直立するが、359 は内傾する	黄灰色 (360、361) 淡茶褐色 (359)	良好	雲母などの砂粒を含むが少ない (359、361) 砂粒が多い	山陰の土器
	壺 C2	371	ハケ調整を施す		良好	雲母、角閃石などの砂粒を多く含む	讃岐の土器
	壺 D1	363	口縁端部は外側に斜めの面を持つ 体部内面下半はハケ、上半はナデ調整	黄灰色	良好	砂粒が多い	
	壺 G	362	口縁端部は内傾する	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	壺 M	364	口縁が短く直立する	茶褐色	良	砂粒が多い	
	高杯 B1	365	ナデによる調整	灰褐色	良	砂粒を含むが少ない	
	高杯 G	369	裾部に線刻画を描く	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	
	小型器台 A1	367	脚部に3孔を穿つ 裾部下半にハケメが残る	灰白色	良	砂粒が多い	
	小型器台 A3	368	脚部に3孔を穿つ	黄灰色	不良	砂粒が多い	
	小型器台 A4	366	脚部外面はケズリ、のち下半部はミガキ	灰白色	良	砂粒を含むが少ない	
土 師 器 (布留期以降)	甕 C1	372	口縁端部は内面に肥厚する	黄灰色	良好	砂粒が多い	
	甕 C2	375	口縁端部は内面に肥厚する球形の体部を持つ	灰褐色	良好	赤色斑粒などの砂粒を含む	
	甕 C3	373	口縁端部は内面に肥厚し斜めの面をもつ やや長胴の体部を持つ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
		374	口縁端部は内面に肥厚し斜めの面を持つ 球形の体部を持つ	灰褐色	良好	砂粒を含むが少ない	
	甕 F3	376	口縁端部は内面に肥厚する	黄灰色	良好	砂粒が多い	山陰の土器
	甕 F4	377	口縁が内傾し、外面に擬凹線がめぐる	茶褐色	良好	砂粒が多い	山陰の土器
	壺 H	391・392	口縁端部は丸味をおびる	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を含む	
	小型丸底壺 A1	385	体部上半はミガキ、下半はケズリ	灰褐色	良好	砂粒を含むが少ない	
	小型丸底壺 A2	382~384	382 は体部外面ミガキ	灰褐色	382 は良他は良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む(383) 砂粒を含むが少ない(382・384)	
		386・387	386 は体部下半と口縁部内面にミガキを施す 387 は体部内面をナデ、他はケズリ	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む(387) 砂粒を含むが少ない(386)	
小型丸底壺 C1	381	浅い体部に外上方に開く口縁を持つ 器壁が厚い	灰白色	良	砂粒が多い		

土師器 (布留期以降)	手捏ね土器 A	378		黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	
	鉢 B	379	オサエ調整を施す	灰褐色	良	砂粒を含むが少ない	
		380	体部下半タタキ	黄灰色	良	赤色斑粒などの砂粒を含む	
	高杯 A3	388・389	388 は深めの杯部を持つ脚部内面、横方向のケズリ	黄灰色	良	砂粒を含むが少ない	
	器台 B	390	脚部内面ケズリ	黄灰色	良	砂粒が多い	山陰の土器
須恵器	甕	349	口頸部に逆「へ」のヘラ記号	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	TK10 型式
	杯蓋	350	つまみは天井部の中心からずれて付く ロクロの回転方向は時計まわり	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	TK10 型式
		352	ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK47 型式
		351・353	ロクロの回転方向は時計まわり	灰白色	良 (351)	砂粒を含むが少ない	MT15 型式
	杯身	355	ロクロの回転方向は時計まわり	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	MT15 型式
	高杯	354	脚部に透かしを三方に穿つ ロクロの回転方向は逆時計まわり	紫灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK47 型式

SD125 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	壺 A1	397	口縁外面に線鋸歯文と竹管文を施す ミガキ調整	灰褐色	良好	砂粒が多い	東部瀬戸内の土器
	壺 F2	398	口縁端部を内側につまみ上げ、外側に斜めの面を持つ 体部内面上半は指オサエ、下半はケズリ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	壺 H	396	体部外面はハケ調整 体部内面上半は斜め方向に強い指オサエ、下半はケズリ	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	小型丸底壺 A2	394・395	口縁端部は丸味をおびる	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	手捏ね土器 B	393	口縁は若干外方にひらく	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	高杯 B1	399	柱状部内面は、横方向にケズリ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	台付鉢 E	400	鉢部外面ミガキ、内面はケズリ	灰褐色	良好	雲母などの砂粒を含むが少ない	
須恵器	高杯	401	脚部に断面三角形の突帯がめぐる	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	ON46 型式
	臚	402・403	402 は体部の肩が張り、体部の中央より上に円孔を穿つ 403 は、体部のもっとも張り出したところに文様帯があり、ここに円孔を穿つ	青灰色 (402) 灰白色 (403)	良好	砂粒が多い (402) 砂粒を含むが少ない (403)	TK23 型式 (402) TK208 型式 (403)

SX99 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	高杯 A3	404	杯と脚の接合部をハケ調整	黄灰色	不良	砂粒を含むが少ない	
	高杯 B2	405	表面の磨滅が激しく、調整は不明	黄灰色	不良	赤色斑粒などの砂粒を含む	

SD124 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土	甕 C1	408	口縁が外上方にのび、端部は丸味をおびる	茶褐色	良	雲母を多く含む	
		409	口縁端部を内側につまみあげる	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
		412	体部は卵形を呈する	黄灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	
師	甕 C2	411	口縁端部は内面に肥厚する	灰褐色	良好	赤色斑粒などの砂粒を含む	
	甕 D	407	肩部にヘラ描き横線文、波状文を施す	灰白色	良好	砂粒が多い	近江の土器
器	甕 F2	406	口縁端部が外方に肥厚し、丸味をおびる	灰白色	良	砂粒を含むが少ない	山陰の土器
	小型丸底壺 A1	410	口径が体部径よりも大きい底部穿孔している	黄灰色	良好	雲母などの砂粒を含むが少ない	

SD103 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土	甕 B1	413・414	口縁端部が外下方に垂れ下がる	茶褐色	良好	角閃石などの砂粒を多く含む	生駒山麓の土器
	鉢 A2	415～417	417の口縁外部に沈線が1条めぐる	灰白色	良(415、417) 良好(416)	砂粒を含むが少ない(415) 砂粒が多い(416、417)	
器	高杯 E	418	脚部に3孔を穿つ	赤褐色	良好	砂粒を含むが少ない	
	小型器台 A2	419	脚部に3孔を穿つ	赤褐色	良好	砂粒を含むが少ない	

SX96 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	壺 A3	420	口縁端部は外方へひらく	灰白色	不良	砂粒が多い	土器棺として使用される

SD108 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 C1	425・426	425の体部内面はケズリ 426の体部内面上半はハケ、下半はナデ調整を施す	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を含む(426) 砂粒が多い(425)	
須恵器	杯蓋	423	ロクロの回転方向は時計まわり	灰白色	良好	砂粒が多い	MT15 型式
	有蓋高杯	421・422	蓋は天井部中央に中くぼみのつまみを持つ 脚は短く、外方へひらく	暗青灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK47 型式
	甕	424	口縁端部に2条の凹線をめぐらす	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	MT15 型式

水田上面砂層出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 G	431	口縁端部は外側に肥厚する	黄灰色	良好	砂粒が多い	
須恵器	杯蓋	427・428	427 は天井部が平坦になる ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良	砂粒を含むが少ない	MT15 型式
	杯身	429	ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒が多い	MT15 型式
	有蓋高杯	430	ロクロの回転方向は逆時計まわり 脚部に長方形の透かし穴を3孔穿つ	青灰色	良好	砂粒が多い	TK47 型式

SD111 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	鉢 E	433	体部下半は指オサエ、他はナデ調整	灰白色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
須恵器	杯蓋	432	器高は低く、天井部と口縁部の境は不明瞭 ロクロの回転方向は時計まわり	青灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK217 型式

SD117 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 H	434	長胴の甕 外面ハケ調整	灰白色	良	砂粒を含むが少ない	

SD116 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	小型丸底壺 A3	435	口縁の一部を打ち欠いて片口風にする	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	壺 D1	436	口縁端部は丸味をおびる 体部内面の 3/4 以下をケズリ	灰白色	良好	砂粒が多い	

SD127 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土師器	甕 C2	448	口縁端部内側に肥厚する	灰白色	良	砂粒が多い	
	甕 C3	449	口縁端部内側に肥厚する	灰白色	良	砂粒が多い	
	壺 E	446	体部の中央はミガキ	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	甕 E	447	口縁が外に引き出される 体部は粗くて深いハケで調整を施す	茶褐色	良好	砂粒が多い	

須 恵 器	杯蓋	437～440	ロクロの回転方向は時計まわり (437) ロクロの回転方向は逆時計まわり (438～440)	青灰色 (437、439) 灰白色 (438、440)	良好	砂粒を含むが少ない (437、439、440) 砂粒が多い (438)	TK47 型式
	杯身	441	ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒を含むが少ない	TK47 型式
		442	ロクロの回転方向は逆時計まわり	灰白色	良好	砂粒が多い	TK43 型式
		443	口縁端部内側につまみだされ、上端は平坦になる ロクロの回転方向は逆時計まわり	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	TK217 型式
	甕	444	頸部に波状文を描く	灰白色	良好	砂粒を含むが少ない	TK47 型式
	壺	445	口縁端部は内側に肥厚し、上端は平坦になる	青灰色	良好	砂粒が多い	TK47 型式

SD128 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土 師 器	杯	452	底部から内湾して外上方にのびる	黄灰色	良好	赤色斑粒などの砂粒を多く含む	
	壺 B1	453	体部は球形で、ミガキ調整 体部下半に線刻画	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	壺 F	457	体部上半 2/3 はタタキ、のちナゲ調整	黄灰色	良好	砂粒を含むが少ない	
	ミニチュア壺 3	454		黄灰色	良好	雲母などの砂粒を含むが少ない	
	甕 C2	455	口縁は体部からわずかに屈曲し上方にのびる 体部に格子目タタキを施す	黄橙色	良	砂粒を多く含む	韓式系の土器
		456	口縁端部内側に肥厚する	黄灰色	良好	砂粒が多い	
	器台 B	459	受部内面ケズリ	灰白色	良	砂粒が多い	山陰の土器
器台 C	458	受部に円形の透かし穴を穿つ	黄橙色	良	砂粒を含むが少ない	北陸の土器	
須 恵 器	杯蓋	450	ロクロの回転方向は逆時計まわり	青灰色	良好	砂粒を含むが少ない	ON46 型式
	壺	451	肩に自然釉がかかる	灰色	良好	砂粒をほとんど含まない	ON46 型式

SX100 出土土器

器種	器形	土器No.	特徴	色調	焼成	胎土	備考
土 師 器	高杯 A3	460・461	ハケ調整	茶褐色	良	砂粒が多い	二次焼成を受ける
	高杯 B2	462・463	柱状部内面ケズリ	茶褐色	良	砂粒が多い	

EXCAVATION REPORT
MIZUTARE SITE
AND
NAGAOKA CAPITAL, EAST THIRD WARD
ON SIXTH AND SEVENTH STREETS

English Summary

Kyoto City Archaeological Research Institute

[Kyōtoshi Maizōbunkazai Kenkyūsho]

1997

Summary

This report summarizes the results of archaeological excavations at the Mizutare site and Nagaoka Capital, east, third ward on Sixth and Seventh streets, located in the southernmost part of the city of Kyoto. From the modern administrative point of view, these areas are known as Yodo Hizume-chō and Yodo Mizutare-chō.

The Mizutare site was a settlement during the Kofun period (ca. 300 ~ 700 A.D.).

The Nagaoka Capital (also referred to as the *Nagaokakyō*), was the capital for only 10 years while the seat of government was there. During this period, in 784, Emperor Kanmu moved from *Heijōkyō* to *Nagaokakyō* for a period of 10 years, ending his stay with a move to *Heiankyō* in 794. In the southern part of this site, three big rivers, the Katsura, Uji, and Kizu rivers, meet and form the Yodo river. As it was, this site is a strategic point for traffic from the north, south, east and west.

The Kyoto City Sanitation Bureau planned an expansion of its landfill site. Prior to this expansion, an archaeological impact study had to be carried out by the Kyoto City Archaeological Research Institute. This archaeological fieldwork included trial trenching carried out over 5 years and 4 months and covered an area of 100,000 m². The results of these excavations clarified the archaeological features of the Jōmon, Yayoi, Kofun, Nagaokakyō, Heian and Kamakura periods which existed in the area to be covered by the planned expansion.

Mizutare Site

We discovered a Kofun period settlement which included a production area (wet-rice field, cultivated field), dwelling area (pit house, building with pillars embedded directly into the ground, wells), grave area (tombs with ceramic coffins, square-shaped moated burial precinct), cultural rites area (ritual place, buried funerary equipment pit), gutters, and a river. This settlement continued until the first half of the 7th century from the early 4th century. We discovered the structural remains of 72 pit houses and 15 buildings with pillars. The major parts of the pit houses are square-shaped with round corners, which measured from 3 m to more than 7 m (but almost all are about 5 m in length). Every pit house had fire pits or a raised hearth. Almost all houses had storage pits. Some had features such as raised floors resembling beds. Most artifacts consist of pottery shards and wooden implements recovered from the river.

Nagaoka Capital

The investigation revealed 5 streets including *Higashi-nibō-ōji* and *Rokujō-ōji*, 31 buildings with pillars, 7 fences, 12 wells, 5 pits, 7 graves, 1 river and 2 bridges. However, these features are distributed randomly, with some sites having no streets or building lots. We clarified that there were no streets from the southern part from *Rokujō-ōji* and no streets in the eastern part from *Higashi-nibō-ōji*. Also, *Higashi-nibō-ōji* did not continue south from *Nanajō-jōkan-kōji*. Also, we discovered building lots chosen as suitable places for living because of their elevation. At the northwest-southeast river crossing of *Higashi-nibō-ōji* and *Nanajō-jōkan-kōji*, we discovered an abundance of ritual objects, for example, pottery with a human face in black ink, a ceramic horse figurine, a miniature raised hearth, a miniature steaming vessel, a human-shaped substitutional object made of wood, and an object used in rituals as a god substitute. These artifacts lead us to believe that the excavation area was used for large scale ritual ceremonies. The excavation and investigations have revealed to us the extent the Nagaoka Capital's boundaries had reached in 10 years and what this city was like. We believe that this area was in reality the outer limits of the Capital, due to the discovery of many ritual objects and graves with wooden coffins.

Post-Nagaoka Capital

This investigation revealed the changes this area underwent after the capital moved to *Heiankyō*. After the abandonment of this capital, the street plan remained, utilized for arable land. By the middle of the Heian period the *jōrisei* system (land boundaries system) had been introduced, and then it was repeatedly buried by floods which resulted in moved boundaries. Today we still follow the *jōrisei* system in wet-rice field agriculture.